

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

鳥取県東伯郡琴浦町

八 幡 遺 跡

2 0 0 5

財 団 法 人 鳥取県教育文化財団

国土交通省 倉吉河川国道事務所



八幡遺跡全景（調査後、南東から）



八幡遺跡（調査前、俯瞰）

巻頭図版 2



1区・拡張区全景（南から）



3区全景（俯瞰）



1区SK3遺物出土状況（東から）



1区SK3完掘状況（北から）

巻頭図版 4



1区完掘状況（南東から）



3区SD12完掘状況（北から）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところではありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、琴浦町にある八幡遺跡では、奈良時代の墨書土器、転用硯、赤彩暗文土師器が出土するなど、官衙関連遺跡としての性格が考えられ、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取一島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡中山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「上伊勢第1遺跡」、「三保第1遺跡」、「久蔵谷遺跡」、「化粧川遺跡」、「八幡遺跡」、「中道東山西山遺跡」、「福留遺跡」、「湯坂遺跡」、「南原千軒遺跡」の9遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「八幡遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いです。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉 本 昭 夫

例 言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成16年度に行った八幡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地、調査面積は以下の通りである
八幡遺跡：鳥取県東伯郡琴浦町大字八幡字八幡ノ後口1230—1他、字西仲田1217—1他、
字大神ノ上1202—1他、字清元田1149
調査面積：11,929m²
3. 本報告書における方位は公共座標北を示す。X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。また、標高は4級基準点H10-2-7(X：-54394.7036、Y：-64168.7414)を基点とする標高値を使用した。
4. 本報告書に掲載した地図は国土地理院発行の1/50,000地形図「大山・赤碕」、赤碕町地形図1/5,000「赤碕町都市計画図1」を使用した。
5. 本報告における出土石器の石材鑑定を鳥取大学名誉教授の赤木三郎氏にお願いした。また、出土石器の胎土分析を岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に、碧玉の産地同定を京都大学原子炉実験所藁科哲男氏に依頼し、玉稿を賜った。記して深謝いたします。
6. 本報告にあたり八幡遺跡の基準点測量、方眼測量、調査前航空写真、調査後航空写真、出土石製品の産地同定、出土石器・鉄器の一部の実測・浄書を業者に委託した。
7. 本報告にあたり使用した実測・浄書は、業者委託した分を除き、当財団埋蔵文化財センター、及び東伯調査事務所で行った。
8. 本報告書に使用した遺構・遺物写真は文化財主事・調査員が撮影した。
9. 本報告書の執筆は、野口良也、濱本利幸、阪上志緒里が分担し、目次に文責を記した。編集は野口が担当した。
10. 出土遺物や図面、写真などの記録は鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
11. 出土遺物の調査指導及び報告書作成にあたり下記の方々にご指導、ご協力いただいた。
穴澤義功、林部均、金田明大

(順不同敬称略)

凡 例

- 八幡遺跡では出土遺物の注記に「ヤワタ」の略号を用いた。
- 本報告書で用いた遺構の略号は以下の通りである。
SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土壙・土坑 SD：溝状遺構 P：柱穴・ピット
- 遺構・遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下の通りである。
竪穴住居跡・掘立柱建物跡：1/80 土壙・土坑・溝状遺構：1/40、1/100、1/200、1/400
土器：1/4 石器・石製品：1/1、1/2、1/8 鉄製品：1/2 鉄滓：1/4
- 遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーン及び記号は、特に説明がない限り以下の通りである。また、遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示した。

 S：石器・石製品 F：鉄製品・鉄滓 ●：土器 □：石器・石製品 ▲鉄製品・鉄滓
- 法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
- 八幡遺跡では発掘調査時において各調査区を単位に遺構番号を付していたため、報告書では以下のように変更した。また、調査中に付していた3区SD4～10、14～18は、攪乱であることが明らかとなったため抹消した。

発掘時の遺構名	変更後
拡張区SI1	SI5
拡張区SB1	SB10
3区SB1	SB11
3区SB2	SB12
3区SB3	SB13
3区SB4	SB14
2区SK1	SK8
2区SK2	SK9
3区SK1	SK10
3区SK2	SK11
3区SK3	SK12
3区SK4	SK13
3区SK5	SK14
3区SK6	SK15

発掘時の遺構名	変更後
3区SK7	SK16
3区SK8	SK17
拡張区SD1	SD5
拡張区SD2	SD6
拡張区SD3	SD7
拡張区SD4	SD8
拡張区SD5	SD9
3区SD1	SD10
3区SD2	SD11
3区SD3	SD12
3区SD11	SD13
3区SD12	SD14
3区SD13	SD15
3区SD19	SD16

- 土器の年代観は以下の文献に拠る。
 弥生土器：清水真一 1992「因幡・伯耆」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編』木耳社 政岡睦夫・松本岩雄編
 土 師 器：巽 淳一郎 1983「古代窯業生産の展開—西日本を中心に—」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
 巽 淳一郎他 1979『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』倉吉市教育委員会 本書第5章第1節
 須 恵 器：足立克己・丹羽野裕 1984「第6章まとめ(3)遺物」『高広遺跡発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
 角田徳幸 2003「第5章まとめ第3節奈良・平安時代の施設群」『史跡出雲国府跡—1—』鳥根県教育委員会
 坪井清足・町田 章 1971『出雲国庁発掘調査概報』松江市教育委員会
 萩本 勝・佐古和枝 1984「須恵器について」『陰田』建設省・米子市教育委員会

目 次

序
序文
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯	(野口)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の方法と経過		2
(1) 調査の方法		2
(2) 調査の経過		2
第3節 調査体制		4
第2章 位置と環境		5
第1節 地理的環境	(牧本・野口)	5
第2節 歴史的環境	(牧本)	6
第3章 八幡遺跡の調査		9
第1節 遺跡の立地と層序	(野口)	9
第2節 1区の調査	(野口)	10
(1) 調査の概要		10
(2) 竪穴住居跡		13
(3) 掘立柱建物跡		19
(4) 土坑		27
(5) 溝状遺構		34
(6) 包含層出土遺物		36
(7) 表土出土遺物		37
第3節 拡張区の調査	(野口)	40
(1) 調査の概要		40
(2) 竪穴住居跡		40
(3) 掘立柱建物跡		43
(4) 溝状遺構		44
(5) 遺構外出土遺物		44
第4節 2区の調査	(阪上)	45
(1) 調査の概要		45
(2) 土坑		46

(3) 表土出土遺物	46
第5節 3区の調査	47
(1) 調査の概要	(阪上) 47
(2) 掘立柱建物跡	(阪上) 47
(3) 土坑	(濱本) 52
(4) 溝状遺構	(野口・阪上) 54
(5) 表土出土遺物	(阪上) 59
第4章 自然科学分析の成果	61
第1節 八幡遺跡出土玉材の産地分析	(藁科哲男) 61
第2節 八幡遺跡出土土器の胎土分析	(白石 純) 75
第5章 まとめ	80
第1節 飛鳥・奈良時代の土器について	(野口) 80
第2節 飛鳥・奈良時代の遺構について	(野口) 82
第3節 SD12出土玉関連遺物について	(阪上・濱本) 84

挿 図 目 次

第1図 八幡遺跡位置図	1	第21図 SB3出土土器	20
第2図 琴浦町位置図	5	第22図 SB3実測図	21
第3図 琴浦町主要遺跡位置図	7	第23図 SB4実測図	22
第4図 調査区位置図	9	第24図 SB5実測図	22
第5図 基本層序	9	第25図 SB6～9平面図	23
第6図 1区第1遺構面遺構配置図	11	第26図 SB6～9出土土器	23
第7図 1区第2遺構面遺構配置図	12	第27図 SB6実測図	23
第8図 SI1実測図	13	第28図 SB7実測図	24
第9図 SI1出土土器	14	第29図 SB8実測図	24
第10図 SI1出土石器	14	第30図 SB9実測図	25
第11図 SI2実測図	15	第31図 SK1実測図	26
第12図 SI2出土土器	15	第32図 SK1遺物出土状況図	26
第13図 SI3実測図	16	第33図 SK1出土遺物	27
第14図 SI3出土土器	16	第34図 SK2実測図・遺物出土状況図	28
第15図 SI4実測図	17	第35図 SK2出土遺物	28
第16図 SI4出土土器	17	第36図 SK3実測図	29
第17図 SB1実測図	18	第37図 SK3出土遺物	29
第18図 SB1出土土器	19	第38図 SK3遺物出土状況図	30
第19図 SB2出土土器	19	第39図 SK4実測図	31
第20図 SB2実測図	20	第40図 SK4出土鉄製品	31

第41図	SK4出土土器	32	第83図	SK16実測図	53
第42図	SK5実測図	32	第84図	SK17実測図	53
第43図	SK5出土遺物	32	第85図	SK15出土磁器	54
第44図	SK6実測図	33	第86図	SD10実測図	54
第45図	SK6出土土器	33	第87図	SD11土層断面図	55
第46図	SK7実測図	33	第88図	SD12実測図	56
第47図	SK7出土土器	33	第89図	SD12底面礫出土状況図	57
第48図	SD1実測図	35	第90図	SD12出土遺物	58
第49図	SD1出土土器	36	第91図	SD14出土遺物	59
第50図	SD2実測図	36	第92図	3区表土出土石器	59
第51図	SD3実測図	36	第93図	SD14実測図	60
第52図	SD4実測図	36	第94図	SD13実測図	60
第53図	SD3出土土器	36	第95図	SD15実測図	60
第54図	1区包含層出土遺物	37	第96図	SD16実測図	60
第55図	1区表土出土遺物	38	第97図	花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル	62
第56図	1区表土出土鉄関連遺物	39	第98図	弥生(続縄文)時代の碧玉製、緑色凝灰岩製玉類の原材使用分布圏及び碧玉・碧玉様岩の原産地	63
第57図	拡張区第1遺構面遺構配置図	40	第99図—(1)	八幡遺跡出土玉材S14(94476)の蛍光X線スペクトル	68
第58図	拡張区第2遺構面遺構配置図	40	第99図—(2)	八幡遺跡出土玉材S13(94477)の蛍光X線スペクトル	68
第59図	SI5実測図	41	第99図—(3)	八幡遺跡出土玉材S16(94478)の蛍光X線スペクトル	68
第60図	SI5出土土器	41	第99図—(4)	八幡遺跡出土玉材S17(94479)の蛍光X線スペクトル	69
第61図	SI5出土石器	42	第99図—(5)	八幡遺跡出土玉材S18(94480)の蛍光X線スペクトル	69
第62図	SI5鉄関連遺物	42	第99図—(6)	八幡遺跡出土玉材S15(94481)の蛍光X線スペクトル	69
第63図	SB10実測図	42	第100図	碧玉原石のESRスペクトル(花仙山、玉谷、猿八、土岐)	71
第64図	SD5~9実測図	43	第101図—(1)	碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	71
第65図	SD9出土土器	44	第101図—(2)	碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	71
第66図	拡張区包含層出土遺物	44	第101図—(3)	碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	71
第67図	拡張区表土出土遺物	44	第101図—(4)	碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	71
第68図	2区遺構配置図	45	第102図	碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	71
第69図	SK8実測図	46	第103図	器種別による土師器の胎土比較(K-Ca)	76
第70図	SK9実測図	46	第104図	器種別による土師器の胎土比較(Rb-Sr)	76
第71図	2区表土出土鉄製品	46	第105図	須恵器の産地推定(K-Ca)	77
第72図	3区遺構配置図	48	第106図	須恵器の産地推定(Rb-Sr)	77
第73図	SB11実測図	49	第107図	鉄関連遺物構成図	92
第74図	SB12実測図	49			
第75図	SB13実測図	50			
第76図	SB14実測図	50			
第77図	SK10実測図	52			
第78図	SK11実測図	52			
第79図	SK12実測図	52			
第80図	SK13実測図	53			
第81図	SK14実測図	53			
第82図	SK15実測図	53			

挿表目次

表1	1区第1遺構面ピット表	10	表8	八幡遺跡出土玉材の原材産地分析結果	70
表2	1区第2遺構面ピット表	12	表9	八幡遺跡出土土器分析値一覧表	79
表3	拡張区第2遺構面ピット表	44	表10	土師器・須恵器分類表	81
表4	3区ピット表	59	表11	土師器・須恵器分類の併行関係	81
表5	各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	64	表12	飛鳥・奈良時代遺構変遷表	83
表6	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	64	表13	土器観察表	85
表7	八幡遺跡出土玉材の分析結果	67	表14	石器・石製品観察表	91
			表15	鉄関連遺物観察表	92

図版目次

巻頭図版1	八幡遺跡全景（調査後、南東から） 八幡遺跡（調査前、俯瞰）	PL. 13	SD12土層断面、SD12南側、SD13～15完掘状況
巻頭図版2	1区、拡張区全景（南から） 3区全景（俯瞰）	PL. 14	SI1、SI2出土土器
巻頭図版3	1区SK3遺物出土状況（東から） 1区SK3完掘状況（北から）	PL. 15	SI3、SI4出土土器
巻頭図版4	1区完掘状況（南東から） 3区SD12完掘状況（北から）	PL. 16	SI4、SB1～3、6・8・9出土土器
PL. 1	SI1～3完掘状況	PL. 17	SK1出土土師器（外面・内面）
PL. 2	SI4、SB1、SB2完掘状況	PL. 18	SK1出土須恵器、SK2出土土器
PL. 3	SB3、SB4・5、SB6～9完掘状況	PL. 19	SK3出土土器
PL. 4	SK1～3遺物出土状況、SK1、2完掘状況、SK3礫除去後	PL. 20	SK4出土土器
PL. 5	SK4遺物出土状況、SK4～7、SD2完掘状況	PL. 21	SK4、SK5出土土器、SK5墨書土器、SK5漆附着土器
PL. 6	SD1、3、4完掘状況	PL. 22	SK5～7、SD1出土土器
PL. 7	SI5遺物出土状況、SI5、SB10完掘状況	PL. 23	SD3、1区包含層、1区表土出土土器
PL. 8	SD5～9、SK8、SK9完掘状況	PL. 24	1区表土出土土器
PL. 9	3区西側、SB11完掘状況	PL. 25	1区表土出土土器
PL. 10	SB12～14完掘状況	PL. 26	SI1出土砥石、SI5出土台石、SI5出土土器
PL. 11	SK10～15完掘状況	PL. 27	SD9、SD12、拡張区包含層、拡張区表土出土土器
PL. 12	SD10、11検出状況、SK16、17、SD10、11完掘状況	PL. 28	SK15・SD14出土遺物（外面、内面）
		PL. 29	SD12出土碧玉
		PL. 30	石器・石製品、鉄関連遺物

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道9号東伯中山道路の改築に伴い、東伯郡琴浦町八幡地内の工事予定地に存在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である八幡遺跡の記録保存を目的としたものである。当該地は、旧東伯郡赤碕町に所在するが、平成16年9月1日に東隣の旧東伯町と合併し、琴浦町となった。

さて、山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画地内のうち、旧赤碕町地内では^{べっしょなかみね}別所中峯遺跡、^{まつたになかみね}松谷中峰遺跡、^{けしやうがわ}化粧川遺跡、^{ふくどめ}福留遺跡、^{やわた}八幡遺跡、^{なんばらせんげん}南原千軒遺跡、^{ゆざか}湯坂遺跡、^{ながたに}長谷城跡、^{のつうぼがたに}窺津乳母ヶ谷遺跡、^{うめだ}中山町域と跨る梅田^{かやうね}萱峯遺跡などの多数の遺跡があり、建設に先立ち計画地内の遺跡及び遺構の広がりを確認する必要性が生じた。このため、赤碕町及び中山町教育委員会が平成11年度から15年度にかけて、国庫補助事業として断続的に試掘調査を行った。当該地の試掘調査は、平成14・15年度にわたって行われた。

この結果を受け、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、平成16年度に埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。本発掘の調査面積は11,929m²である。



第1図 八幡遺跡位置図

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

八幡遺跡の調査区の設定は、試掘調査の結果及び現況の地形から、調査範囲の西側から1～3区とした。また、試掘調査の結果、1区に関しては遺構確認面が2面確認され、1面目と2面目の間には遺物包含層が認められていたことから、1区は2面の遺構確認面、及び遺物包含層の調査とした。さらに、1区の表土剥ぎの結果、遺構及び遺物包含層の存在が調査区外にのびる可能性が予想されたため、1区の東側に拡張区を新たに設定し、調査にあたった。この拡張区においても1区と同様、2面の遺構確認面、及び遺物包含層の調査とした。以下、本文中にある調査区名の記述はこれに基づくものである。

表土剥ぎは重機によって行い、表土剥ぎ終了後、公共座標第V系に基づく10m間隔の基準杭を設定した。これらの杭は、東西軸に算用数字、南北軸にアルファベットを付し、「A1杭」のように呼称した。また、これらの杭によって10m四方に区画された地区は、その北東隅の杭をもって区画名とした。

検出した遺構・遺物の記録には平板及び光波トランシット、自動レベルを用いた。調査地での写真撮影には35mm判と6×7判を使用した。遺物写真撮影は6×7判と4×5判カメラを用い、いずれも白黒ネガフィルムならびにカラーポジフィルムを使用した。

(2) 調査の経過

八幡遺跡では、調査に先立ち平成16年3月4日に調査前航空写真撮影の委託契約を行った。また、3月9日から重機による表土剥ぎを行い、4月9日に基準杭を設置した。調査は4月9日から作業員を稼動して、1区から開始した。4月15日には、1区の表土剥ぎの結果から、遺構及び遺物包含層の存在が調査区外にのびる可能性が予想されたため、拡張区の調査範囲を設定し、表土剥ぎを1区の遺構検出作業と併行して行った。

1区の調査は遺構検出とともに、埋め戻されていた旧赤碕町試掘トレンチの確認作業から行った。その結果、2面目とされた層位で確認されていた土坑は風倒木痕であり、その風倒木痕が確認される層位も2面目とされる層位よりも上の層位から認められるものであった。このことから当初計画の調査対象である2面目の存在が疑われたが、風倒木痕が確認された層位から縄文土器の細片が認められたことにより、2面目の層位を変更し、当初の計画通り2面調査とした。

また、1区の第1遺構面の調査は、遺構検出面である土と遺構埋土の土質が近似し、判別が困難であった。このため、第1遺構面検出の縦穴住居跡3棟、掘立柱建物跡2棟、土坑2基、溝状遺構1条の調査終了をもって、6月14日から遺物包含層、及び第2遺構面の調査に着手したが、この掘り下げ作業中に第1遺構面検出漏れの遺構を多く確認することとなった。

拡張区の調査は、1区で確認された遺構面ならびに遺物包含層の範囲までを調査範囲とした。調査区に設定した東端には近年に築かれた石組みの暗渠排水施設が存在し、これよりも東側においては近年の開削を受けており、遺構面ならびに遺物包含層は削平されている状況であった。また、拡張区の調査も1区と同様に、遺物包含層、及び第2遺構面の調査時に第1遺構面に帰属する遺構を確認することとなった。

2区での遺構検出作業は、1区、及び拡張区と併行し、5月7日より開始した。調査区の半分程度

の遺構検出作業を行った段階で、大雨のため、調査区脇を流れる用水が決壊し、調査区が水没してしまふ被害に見舞われたが、その後は順調に調査が進行した。確認された遺構は、落とし穴2基のみで、遺構検出面で認められた無数のピット状の痕跡も調査したものはすべて根攪乱によることが確認されたため、すべてのものは調査対象とはしなかった。

3区の調査は7月1日より開始した。3区は試掘調査の結果、一面調査とし、ソフトローム層を遺構検出面として調査を行ったが、調査区東側部分に一部残存した表土下の黒褐色土下層上面で溝状遺構が2条（SD10・11）確認された。このことから調査は、一部残存した遺構の記録から行った。なお、この溝状遺構が確認された黒褐色土層は遺存状況が良くなかったことから、この層位での等高線図の作成を行うことはできなかった。

八幡遺跡では、8月7日に南原千軒遺跡において、パネル・遺物展示による説明会を行い、80人を超える見学者を迎えた。また、8月10日に調査後航空写真撮影を業者委託により行い、8月17日に現場器材の撤去等、すべての作業を終え、調査を終了した。

16年3月4日	調査前空撮（業者委託）	10日	1区SD1の検出
9日	表土剥ぎ	14日	1区第2遺構面への掘り下げ
4月8日	調査前方眼杭設置（業者委託）	17日	1区SK3（土壌）の検出
9日	作業開始	7月1日	3区の調査開始
13日	1区の遺構検出開始	20日	拡張区調査終了
15日	拡張区の表土剥ぎ	28日	3区SD12、SB11の検出
5月6日	1区SK1・2、SB1、拡張区SD5 ～7を検出	29日	3区SB12～14の検出
7日	2区遺構検出作業開始	8月6日	1区SI4、SB3～9の完掘、1 区の調査終了
14日	拡張区SD8・9検出	7日	南原千軒遺跡において、八幡遺 跡のパネル・遺物展示解説
17日	1区でSI1の検出	9日	3区SD12の完掘
19日	2区で落とし穴検出	10日	八幡遺跡調査後空撮
6月3日	2区調査終了	17日	調査終了
4日	1区SB2検出		
9日	拡張区SI5の検出		

第3節 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局 長 中村 登

埋蔵文化財センター

所 長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次 長（事務） 竹内 茂

次 長（専門） 加藤 隆昭

調 査 課

課長（兼次長） 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶 務 課

課長（兼次長） 竹内 茂

主 幹 福田 高之

事務職員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

○調査担当 東伯調査事務所

所 長 佐治 孝弼

班 長 牧本 哲雄

文化財主事 家塚 英詞、小山 浩和（福留遺跡・湯坂遺跡担当）

君嶋 俊行（南原千軒遺跡担当）

高尾 浩司、小口英一郎（中道東山西山遺跡担当）

野口 良也、濱本 利幸（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

玉木 秀幸、浅田 康行（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

恩田 智則、小谷 郁夫（化粧川遺跡・中道東山西山遺跡担当）

調 査 員 西川 雄大（南原千軒遺跡担当）

岩井 美枝、福井 流星（中道東山西山遺跡担当）

前島 ちか（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

阪上志緒里（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

調査補助員 野 浩一、山根 雅美、吉田由香里、山根 航、石水 健一

事務補助員 真山 葉子

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

○調査協力 琴浦町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

八幡遺跡が所在する琴浦町は、平成16年9月1日に旧東伯町と旧赤碕町が合併して誕生した、新しい町である。この町名は、かつてこの地域の海岸一帯が「琴ノ浦」と呼ばれていたことに由来する。当町は鳥取県中部、東伯郡の西側を占める位置にあり、町域は、大山連峰の烏ヶ山（1,381m）から船上山（615m）を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km²を測り、人口は約20,500人（平成16年末）である。

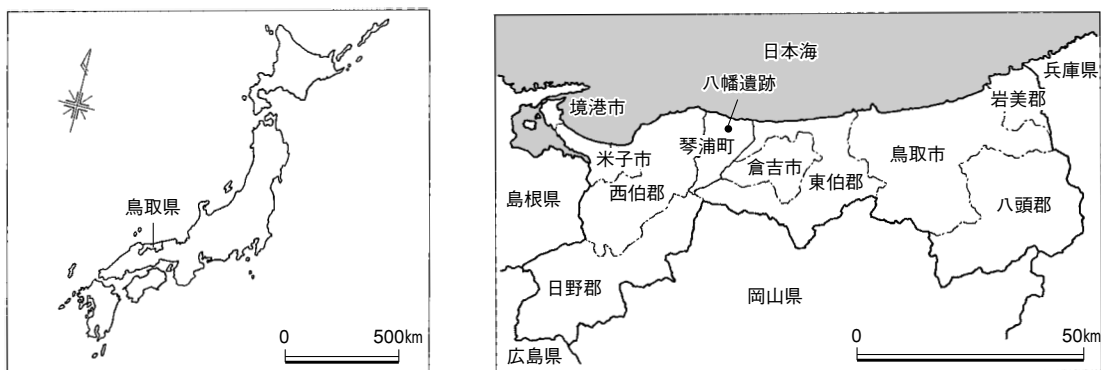
本町の地勢は、大山（1,729m）山系から手指状に派生する急峻な丘陵地、加勢蛇川・洗川及び勝田川・黒川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で細かな起伏が認められる。丘陵地は、火山灰土の堆積した溶岩台地状地形が海岸線付近までのびている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計8本の川が日本海に注いでいる。

当町の北側は、国道9号線沿線で弱電、酒造、食品製造などの商工業地域が形成されている。特に、八橋地区は、古代から伯耆の東西をつなぐ交通、交流及び戦略的活動の要衝として栄え、古代山陰道の清水駅、中世以降は八橋城が築かれた場所でもある。赤碕港は、主に沿岸漁業が盛んである。町中部域は、県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、丘陵上では昭和20年代から二十世紀梨栽培が行われ、北米や香港・シンガポールなどにも輸出されるなど本県湯梨浜町に次ぐ生産量を誇るが、現在では農家の高齢化、後継者不足による廃園が目立つようになった。また、平野部においては水稲とともにかつては国内でも有数の芝栽培の他、ブロイラー、乳牛、和牛などの畜産も盛んに行われている。町域南側は、国立公園の一部の大山滝、伯耆大シイ、船上山などが知られ、風光明媚な自然・景勝地を求めて観光客が訪れる地域となっている。

町内の遺跡は、加勢蛇川下流域右岸の低丘陵地と、加勢蛇・洗川左岸の丘陵台地とその山裾付近、勝田川流域及び黒川左岸丘陵上に集まっている。加勢蛇・洗川両河川に挟まれた平野部には、律令時代の条里制の名残が旧地名や地割りに残る地域もあるが、概ね残りが良いとは言えない。

八幡遺跡は、JR赤碕駅の西南西約1km、標高約26mの地点に立地し、調査地のすぐ西側には勝田川が流れている。調査地内に礫層が形成されており、かつてはこの勝田川の氾濫原であったことが窺われる。また、調査地の北西側には、遺跡名の由来にもなっている八幡神社が鎮座している。

（牧本・野口）



第2図 琴浦町位置図

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代 鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていない。当町でも松ヶ丘、槻下で尖頭器が数点、三林遺跡（6）でサイドスクレーパー、笠見第3遺跡（7）で舟形細石刃石核が見つかったが、層的にはいずれも確認されていない。

縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ない。早期から前期では大栄町西高尾谷奥遺跡（41）で押型文土器とともに住居跡の可能性のある竪穴状遺構、松ヶ丘遺跡（68）、森藤第1・2遺跡（39）、上伊勢第1遺跡（2）などで土器片が出土している。中期では、井岡地中ソネ遺跡（5）、井岡地頭遺跡（4）など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第2遺跡では中央に石囲い炉を持つ竪穴住居が精製・粗製土器、土器片錘、土偶とともに検出されている。また、勝田川左岸の南原千軒遺跡（19）では、中津式併行期の竪穴住居跡の他、今朝平タイプに類似した土偶が出土している。その他、この時代と考えられる落とし穴が福留遺跡（17）、化粧川遺跡（16）、笠見第3遺跡、中尾第1遺跡（1）など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代 弥生時代に入り本格的に稲作が始まると、それを機軸とした社会が形成される。前期に米子市目久美遺跡で水田が確認されているが、県中部では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期の集落も見つかっていないが、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡（3）、井岡地頭遺跡などで土器が出土している。中尾第1遺跡では、前期後葉の配石墓・土壙墓が集中している他、三保第1遺跡でも集石遺構が見つかった。中期の遺跡は、中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡で竪穴住居が検出されている他、墓ノ上遺跡（67）、別所女夫岩峯遺跡（63）で木棺墓が検出されている程度である。

中期後葉から古墳時代初頭にかけて、丘陵上を中心に集落遺跡が大幅に増加する。森藤第1・2遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡（30）、大峰遺跡（40）、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡（51）、笠見第3遺跡、三林遺跡、久蔵峰北遺跡（10）、福留遺跡などがある。これらの遺跡の中には、集落内に玉作り工房を持つ遺跡がある。大栄町西高江遺跡は、中期の工房跡で水晶の剥片とともに鉄製工具等が出土している。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡は、後期の工房跡で碧玉・緑色凝灰岩製の管玉未製品や剥片が多数出土しており、製作にあたっては鉄器が使用されている。

湯坂遺跡（20）では、小型の墳丘墓が築造されているほか、井岡地中ソネ遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の溝で区画された土壙墓群が見つかった。

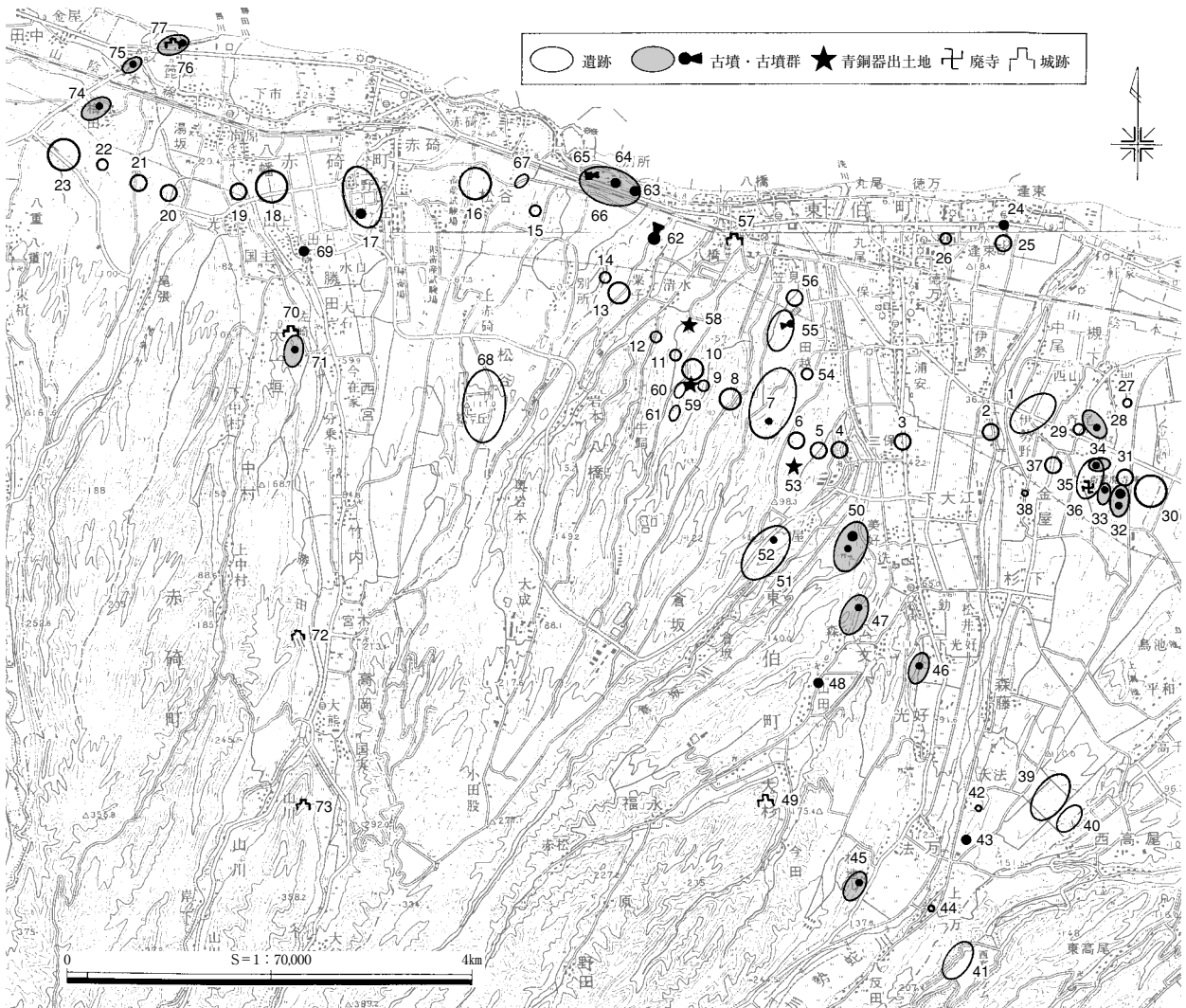
また、弥生時代の祭祀に特徴的な銅鐸が、県中部では6遺跡で計7口見つかった。当該地域では、八橋南方丘陵上（58）で銅鐸（扁平鈕Ⅰ式）が1口見つかった。また、田越南方丘陵上（53）では、出土状況は明らかではないが、箱式石棺の下から中細形銅剣が4口、久蔵峰（59）で銅矛が1口出土している。八橋地区を中心とする地域は、銅剣・銅矛・銅鐸が揃って出土しており、鳥根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成であることから、共通した祭祀形態があったものとして興味深い。

古墳時代 古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所1号墳（笠取塚古墳）（65）は、撥型に開く前方部等の特徴から前期に遡る可能性がある。中期から後期になって前方後円墳が築造され、八橋狐塚古墳（62）、笠見1号墳（55）、竜ヶ崎3号墳（50）がある。

中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになり、大高野古墳群（32）、塚本古墳群（33）、斎尾古墳群（34）、公文古墳群（47）、竜ヶ崎古墳群、別所古墳群（66）、窺津古墳群（76）、坂ノ上古墳群（75）、梅田古墳群（74）などがある。また、後期以降、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法3号墳（43）や三保6号墳（52）、大栄町上種東3、

上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性がある。槻下古墳群(28)、塚本古墳群、大高野古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから、加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。大高野3号墳では金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下5号墳(代々1号墳)では金環・鉄刀などが副葬されていた。山田1号墳(48)や出上岩屋古墳(69)は切石積石室で、終末期の様相を示す。

この時代の集落は、丘陵上に営まれる三保遺跡、井岡地中ソネ遺跡、笠見第3遺跡、八橋第8・9遺跡(13)、松谷中峰遺跡(15)、別所中峯遺跡(14)などの他、低地部分でも小規模ながら中尾第1



第3図 琴浦町主要遺跡位置図

1. 中尾第1遺跡、2. 上伊勢第1遺跡、3. 三保第1遺跡、4. 井岡地頭遺跡、5. 井岡地中ソネ遺跡、
6. 三林遺跡、7. 笠見第3遺跡、8. 中道東山西山遺跡、9. 久蔵谷遺跡、10. 久蔵峰北遺跡、11. 蛭谷遺跡、12. 岩本遺跡、13. 八橋第8・9遺跡、14. 別所中峯遺跡、
15. 松谷中峰遺跡、16. 化粧川遺跡、17. 福留遺跡、18. 八幡遺跡、19. 南原千軒遺跡、20. 湯坂遺跡、21. 笹津乳母ヶ谷第2遺跡、22. 梅田所在遺跡、23. 梅田萱峰遺跡、
24. 逢束双子塚古墳、25. 逢束遺跡、26. 逢束第2遺跡、27. 槻下豪族居館跡、28. 槻下古墳群、29. 下斎尾2号遺跡、30. 水溜り・駕籠据場遺跡、31. 大高野遺跡、
32. 大高野古墳群、33. 塚本古墳群、34. 斎尾古墳群、35. 下斎尾1号遺跡、36. 斎尾廃寺、37. 伊勢野遺跡、38. 金屋経塚、39. 森藤第1・2遺跡、40. 大峰遺跡、
41. 西高尾谷奥遺跡、42. 大法古瓦出土地、43. 大法3号墳、44. 上法万経塚、45. 杉地古墳群、46. 下光好古墳群、47. 公文古墳群、48. 山田1号墳、49. 妙見山城跡、
50. 竜ヶ崎古墳群、51. 三保遺跡、52. 三保6号墳、53. 田越銅剣出土地、54. 田越第4遺跡、55. 笠見第2遺跡、56. 笠見第1遺跡、57. 八橋銅鐸出土地、
59. 久蔵峰銅鈴出土地、60. 八橋第2遺跡、61. 八橋第4遺跡、62. 八橋狐塚古墳、63. 別所女男峯遺跡、64. 別所2号墳(別所尻古墳)、65. 別所1号墳(笠取塚古墳)、
66. 別所古墳群、67. 墓ノ上遺跡、68. 松ヶ丘遺跡、69. 出上岩屋古墳、70. 太一垣城跡、71. 太一垣古墳群、72. 大仏山城跡、73. 山川城跡、74. 梅田古墳群、
75. 坂ノ上古墳群、76. 笹津古墳群、77. 笹津城跡

遺跡、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡、逢東第2遺跡(26)等がある。

古代 日本で最初に仏教寺院が建立されてから約1世紀後の7世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22カ所の古代寺院が見つまっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残し、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている斎尾廃寺(36)は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採っている。塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦の他、創建期の軒丸瓦には紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統のものが出土し、山陰・山陽では数少ない瓦当文様をもち、畿内と結びつきの深い有力豪族が斎尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。大高野遺跡(31)では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉と考えられ、郡衙推定地もその周辺に比定されている。その周辺の伊勢野遺跡(37)、水溜り・駕籠据場遺跡、森藤遺跡群では、掘立柱建物を中心とする集落が見つまっている他、大法に古瓦出土地(42)がある。加勢蛇川下流右岸域は、伯耆国八橋郡に属し、当郡の中心地であったと推察される。その他、八幡遺跡(18)では、掘立柱建物、赤彩土師器が多数確認されている。

平安時代では、上伊勢第1遺跡で、規格性のある大規模な畠跡がみつまっている他、中道東山西山遺跡(8)では小規模な鍛冶施設があり、農耕、集落内鉄器生産の様相を窺うことができる。笠見第3遺跡、三林遺跡では、専用器を用いた火葬墓が検出されている他、当該期末になると末法思想が広まり、金屋(38)と法万(44)でも経塚が作られ、金屋では銅経筒が出土している。

中世 律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。井岡地頭遺跡では、平安時代末頃の「コ」字状の方形区画溝があり、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。また、『伯耆民談記』に「岩野弾正坊居す」と記された、槻下館跡(27)がある。台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、1つには周囲に高さ2mの土塁が築かれている。南原千軒遺跡では、大規模な溝内から大量の鉄滓が出土している他、整然と並ぶ掘立柱建物や和鏡を副葬した土壇墓が検出されており、公の施設の可能性がある。その他、町域西側海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の「赤碕塔」が、6基確認されている。

船上山には、鎌倉時代末の戦乱期に、後醍醐天皇が隠岐諸島から逃れる際に立て籠もった国史跡行宮跡がある。その他中世城館が各地に見られ、南北朝時代には、行松氏によって築造されのちに尼子・毛利氏の支配下となり、伯耆方面の経営拠点となった八橋城跡がある。また大杉には南条氏の出城である妙見山城跡(49)、笠津には、土塁と堀を持つ笠津城(楨城)(77)がある。1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城(70)、大仏山城(72)、山川城跡(73)などがあり、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城攻撃に参与した城と考えられている。

近世 江戸時代前期、寛永14年(1637年)の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」の文字がみられることから、逢東はこの時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれ、現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。(牧本)

【参考文献】

赤碕町編 1974『赤碕町誌』

東伯町編 1968『東伯町誌』

鳥取県教育委員会 2003『弥生時代からのメッセージ』鳥取県教育委員会

鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター

内藤正中・真田廣幸・日置左エ門著 1997『県史31 鳥取県の歴史』(株)山川出版社

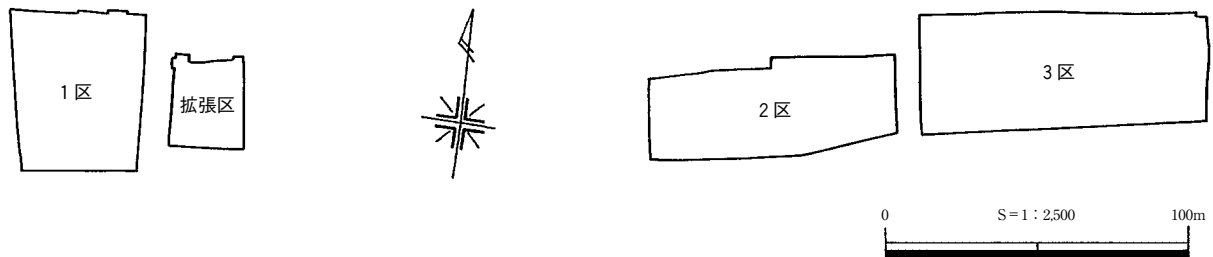
坂詰秀一編 2003『仏教考古学辞典』(株)雄山閣

発掘調査報告書類については割愛させていただいた。

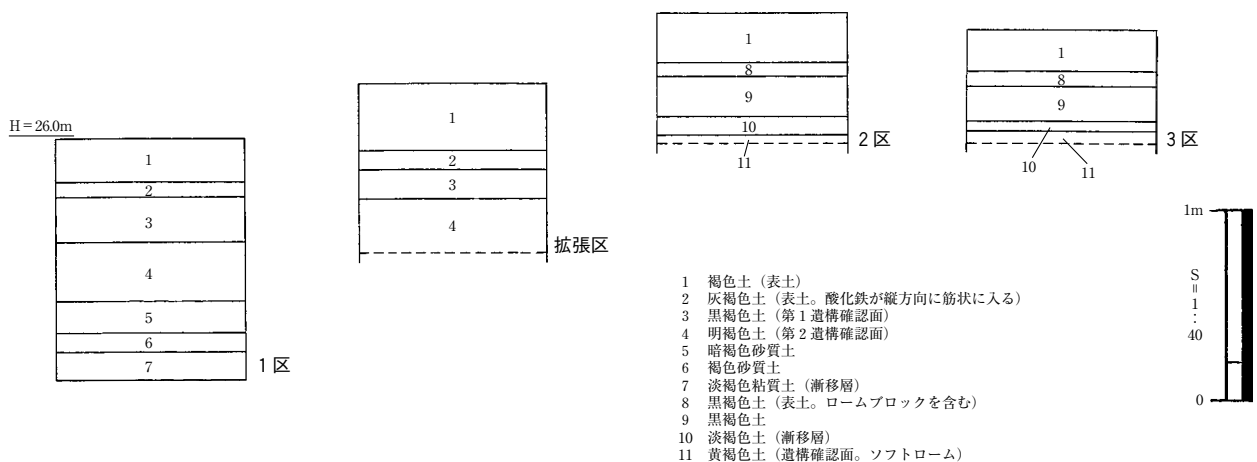
第3章 八幡遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序

八幡遺跡は、大山山麓に端を発す勝田川流域に形成された沖積地にあたり、標高およそ26mの地点に位置する。調査前の状況は、圃場整備等の造成が行われており、調査地周辺には水田や耕作地が広がっている。八幡遺跡の調査区は、東西に約370mと長く（第4図）、調査区によって埋土の堆積状況が異なる。遺跡の西側に位置する1区・拡張区の埋土の状況は、上から褐色土が堆積し、その下には植物に起因する酸化鉄を含む灰褐色土が認められる。拡張区においてこの灰褐色土を除去したところ、近年の石組みによる暗渠排水施設が確認されたことから、この層までを表土として扱った。表土下には、黒褐色土（第1遺構面）、明褐色土（第2遺構面）、暗褐色砂質土、褐色砂質土、淡褐色粘質土（漸移層）、ソフトロームの順に堆積する。また1区西側では、表土下に礫層が形成される。土層断面では礫層は、明褐色土層を削って堆積し、黒褐色土に覆われる堆積状況が観察された。このことから1区西側においては、明褐色土の形成以降から、黒褐色土の形成以前までに、遺跡の西側に隣接する勝田川の氾濫原であったことが窺われる。遺跡の東側に位置する2区・3区では、上層に近年の造成土である褐色土が認められ、その下に黒褐色土、淡褐色土（漸移層）、ソフトロームが堆積する。黒褐色土は、混入するロームブロックの有無により、2層に分層が行えた。八幡遺跡2区・3区では試掘調査の結果から、淡褐色土、ソフトローム層を遺構確認面としたが、3区調査区壁で遺構の土層断面が確認できた遺構は、この黒褐色土下層から掘り込まれていることから、本調査で確認した遺構に関しては、この黒褐色土下層が遺構確認面であったと思われる。また、黒色土上層から掘り込まれたものについてはビニール製品などが含まれたことから、攪乱として扱った。



第4図 調査区位置図



第5図 基本層序

第2節 1区の調査

(1) 調査の概要

1区は八幡遺跡調査地の西側に位置する、南北約52m、東西約38～45mの台形状の調査区である。本調査区の西約30mには勝田川が流れる。本調査区の土層は前節で述べた通りであり、標高約24.8mに認められる淡褐色粘質土層（漸移層）よりも上位の土層は、この勝田川による沖積作用により形成されたものである。

本調査区第1遺構面は、表土下30～70cmほどの深さにある。地形は南から北へ緩やかに傾斜し、標高はおよそ25.0～26.0mの高さである。1区の第1遺構面の調査では、検出された遺構はピット1基を除き、調査区の東側で確認された。このことは調査区西側に形成される礫層の存在によるためと思われる。確認された遺構は、竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡7棟、土坑7基、溝状遺構4条、ピット7基である。このうち掘立柱建物跡の調査では、遺構確認面である黒褐色土と遺構埋土の土色、土質が近似し、遺構検出が困難であったことから、掘立柱建物跡を構成するピットの多くが第2遺構面での確認となってしまった。第2遺構面は、第1遺構面下約10～40cmほどの深さにある。地形は第1遺構面同様、南から北へ緩やかに傾斜し、標高はおよそ24.9～25.6mの高さにある。調査区西側においては、前節で触れたように、礫層により第2遺構面が削平されている状況から、遺構が遺存している可能性は低いと判断された。このことから、グリッド杭を結んだサブトレンチによる遺構検出を行ったが遺構は認められなかった。検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、ピット100基である。しかし、掘立柱建物跡2棟（SB4・5）に関しては、調査の状況から本来は第1遺構面に帰属するものと思われる。また、ピットも本来は第1遺構面に伴うものが多かったと思われる。この第2遺構面の時期であるが、遺構に伴わないが、遺構面直上から磨消縄文が施された縄文土器の細片がわずかに認められたことから、縄文時代後期ころの可能性が高い。

また、試掘調査によると第1遺構面である黒褐色土層は遺物包含層とされていたが、第2遺構面直上の縄文土器や石鏃を除き、遺物の包含は黒褐色土層中の上位に限られ、まばらであった。

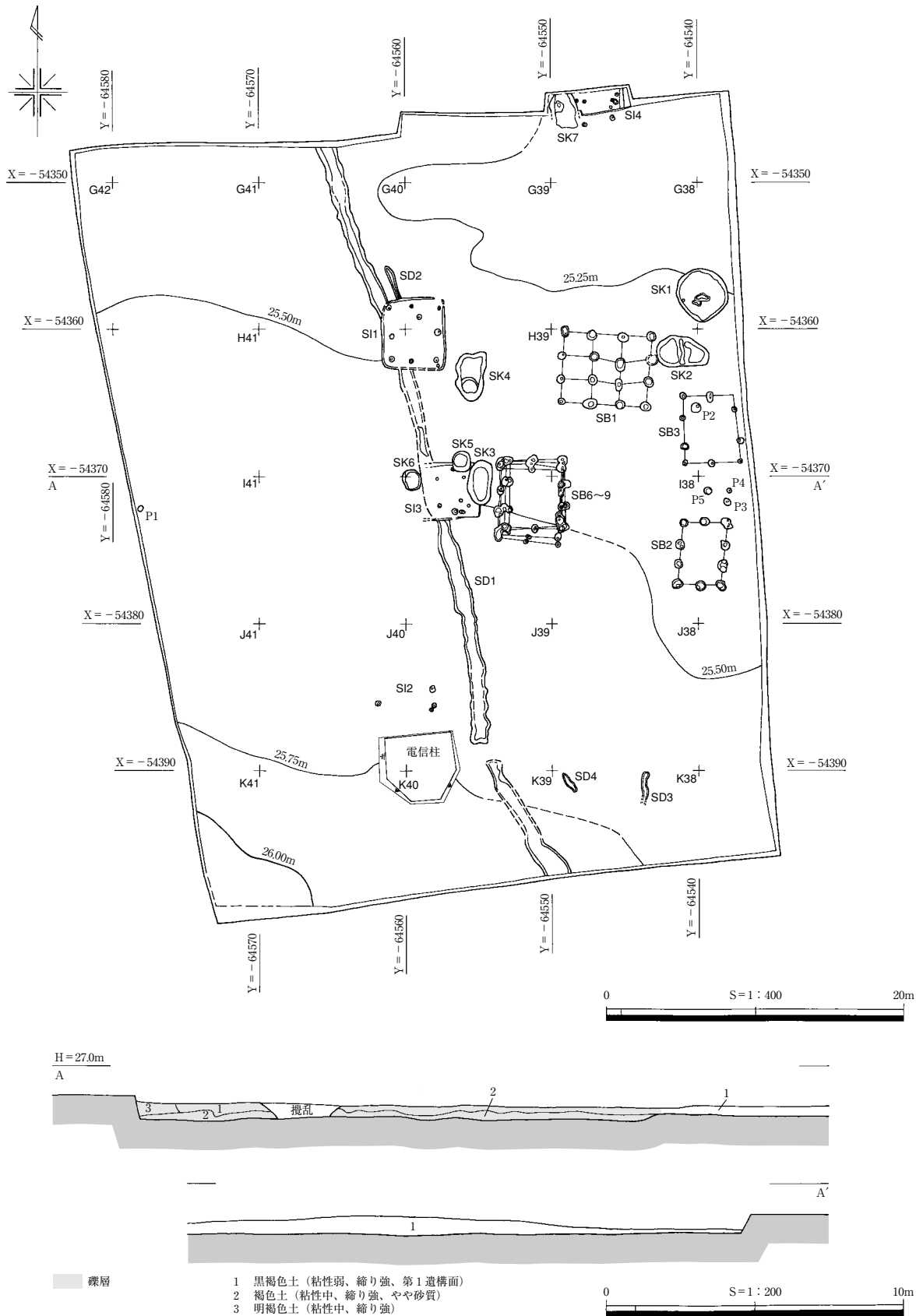
遺構の時期であるが、確認できたものは弥生時代、飛鳥・奈良時代に属する。弥生時代の遺構は、調査区の中央を南から北に向かってのびる溝状遺構（SD1）である。この溝状遺構は、H40グリッド付近から北側において、調査区西側に形成された礫層を掘り込んでいるが、ほぼ黒褐色土層と礫層の境に掘り込まれており、埋土中からは弥生時代後期後葉の土器が出土している。また、出土遺物は認められなかったが、SD1に平行して見られるSD2もこの時期のものと思われる。飛鳥・奈良時代に属する遺構は、竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡9棟、土坑7基、溝状遺構1条と考えられる。このうちSB6～9は主軸を北に向けながらほぼ同位置に建替えられたものである。またSB1とSB4・SB5、SI3とSB6～9・SK3・SK5に関しては、遺構の切り合い関係や近接した位置関係から同時併存していた可能性は低い。このうち時期的な変遷を遺構の切り合い関係や出土遺物から窺えるSI3・SB6～9・

SK3・5では、SI3を掘り込むSK3・5が新しい。

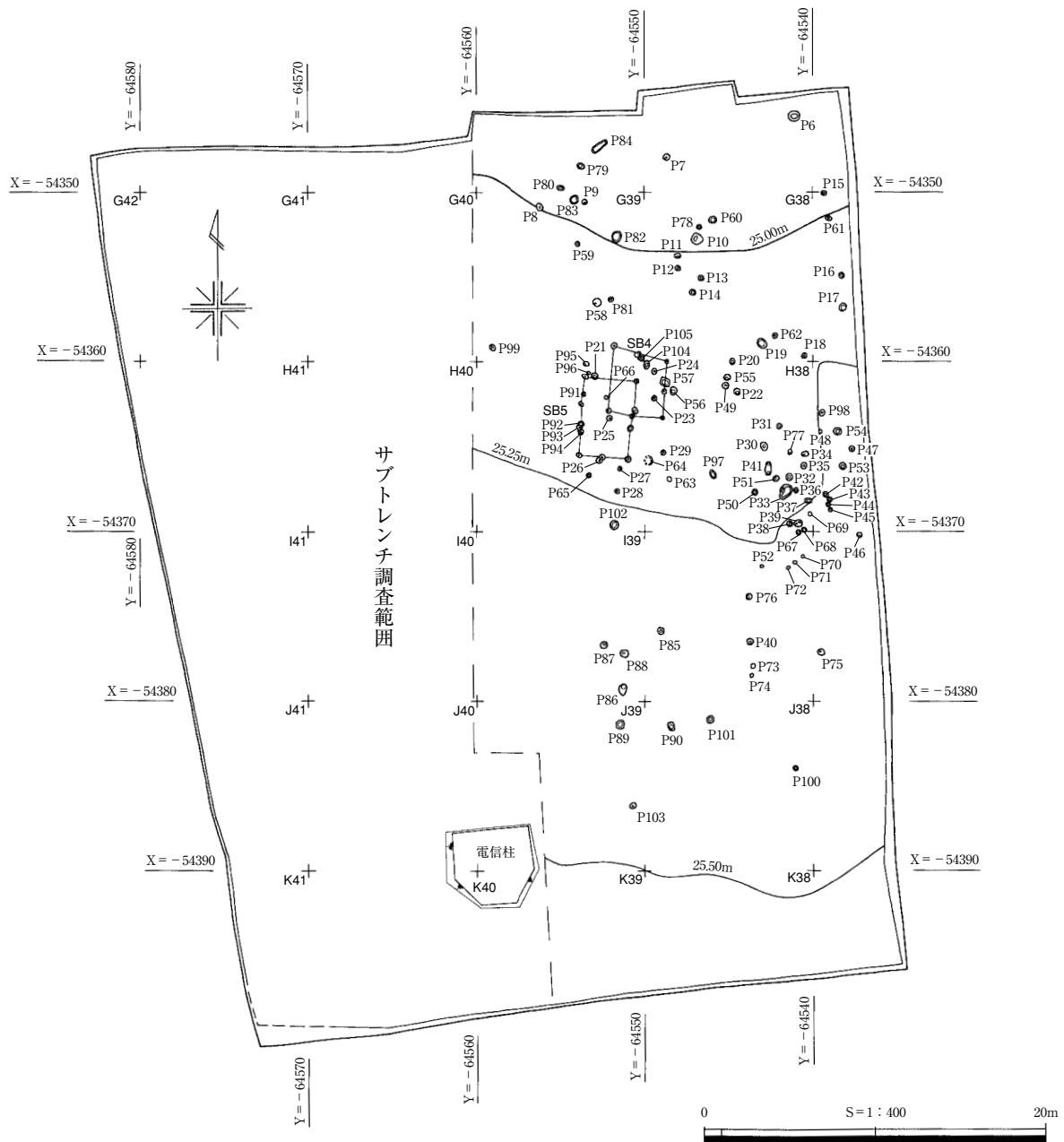
このうちSK3からは7世紀末頃と思われる赤彩土師器の鉢などが出土していることから、SI3はそれ以前の時期が考えられる。また、SB6～9やSK5からは7世紀末～8世紀初頭頃と思われる土師器が出土している。

表1 1区第1遺構面ピット表(計測単位はcm)

Pit番号	長径	短径	深さ	埋土色調	備考
1	45	35	—	不明	
2	72	67	51	暗褐色	
3	52	41	46	黒褐色・暗褐色	2層
4	34	32	45	不明	
5	52	49	45	暗褐色	



第6図 1区第1遺構面遺構配置図



第7図 1区第2遺構面遺構配置図

表2 1区第2遺構面ピット表 (計測単位はcm)

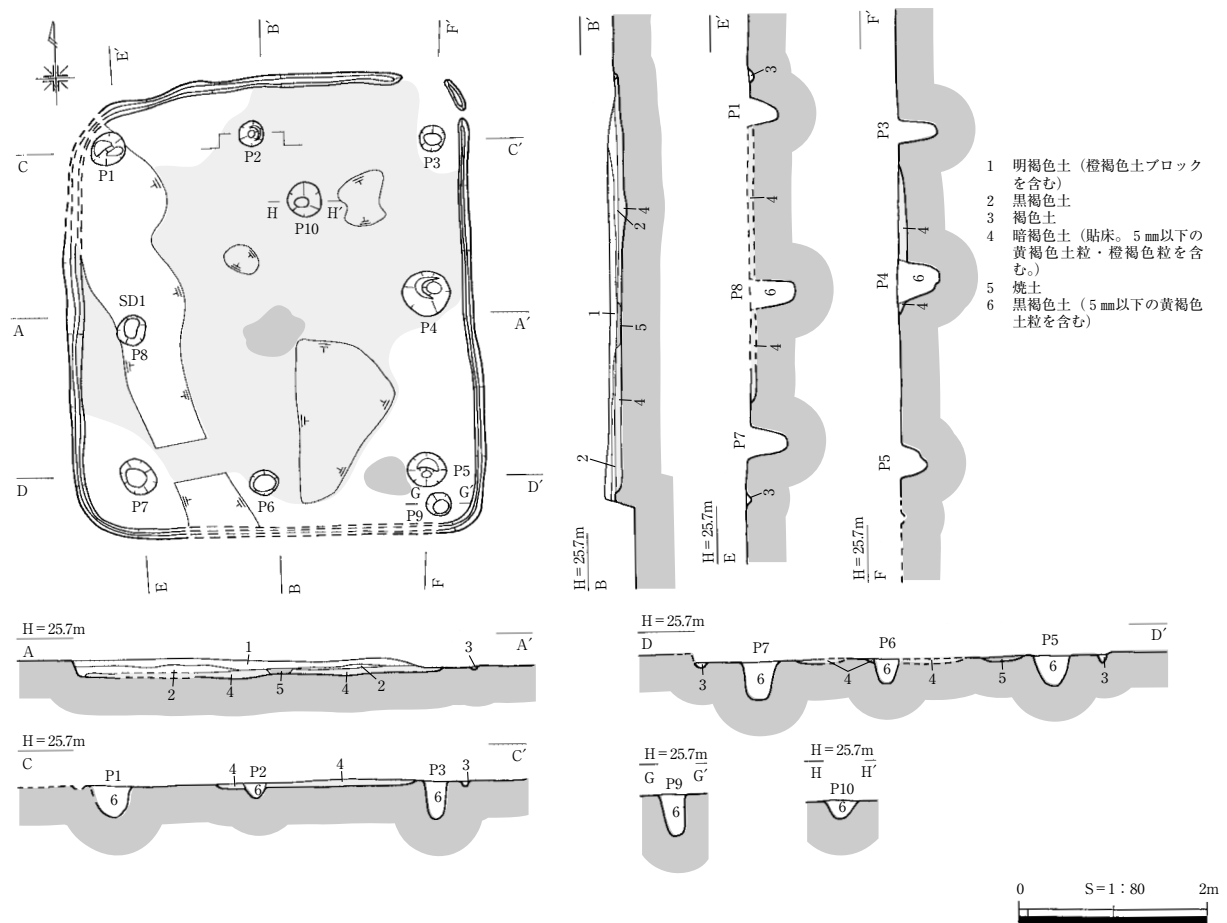
Pit番号	長径	短径	深さ	埋土色調	備考	Pit番号	長径	短径	深さ	埋土色調	備考	Pit番号	長径	短径	深さ	埋土色調	備考	Pit番号	長径	短径	深さ	埋土色調	備考
6	60	60	18	暗褐色		29	28	28	12	暗褐色		52	26	20	24	暗褐色		85	45	40	22	褐色	
7	35	33	20	暗褐色		30	50	45	20	暗褐色		53	39	39	10	暗褐色		86	69	43	25	褐色	
8	42	38	20	暗褐色		31	36	35	34	暗褐色		64	52	45	11	暗褐色		87	36	34	24	褐色	
9	30	28	12	暗褐色		32	40	35	31	暗褐色		65	29	29	8	暗褐色		88	50	42	28	暗褐色	
10	67	65	21	暗褐色		33	95	68	28	暗褐色		66	27	25	7	暗褐色		89	55	43	20	黒褐色	
11	35	25	25	暗褐色		34	40	29	24	暗褐色		67	29	29	11	暗褐色		90	52	34	22	暗褐色	
12	28	25	24	暗褐色		35	33	33	36	暗褐色		68	35	31	17	暗褐色		91	28	22	5	暗褐色	
13	25	25	37	暗褐色		36	35	29	46	暗褐色		69	27	25	24	暗褐色		92	33	29	24	褐色	
14	35	35	32	暗褐色		37	22	14	23	黒褐色		70	25	23	18	暗褐色		93	23	12	13	暗褐色	
15	25	25	17	暗褐色		38	18	16	29	暗褐色		71	25	21	19	暗褐色		94	30	27	17	褐色	
16	35	30	21	黒褐色		39	50	35	24	暗褐色		72	21	20	8	暗褐色		95	38	27	22	褐色	
17	43	43	18	黒褐色		40	38	38	43	暗褐色		73	25	25	22	暗褐色		96	24	23	53	暗褐色	
18	28	28	13	暗褐色		41	80	32	22	暗褐色		74	25	20	8	暗褐色		97	49	37	12	褐色	
19	56	55	35	明褐色		42	28	28	10	暗褐色		75	40	35	23	暗褐色		98	40	32	46	暗褐色	
20	33	27	9	暗褐色		43	35	35	31	暗褐色		76	35	35	25	暗褐色		99	37	32	15	暗褐色	
21	38	35	25	黒褐色		44	25	25	11	暗褐色		77	38	28	15	暗褐色		100	30	28	24	黒褐色	
22	32	32	20	暗褐色		45	35	30	15	暗褐色		78	25	25	7	暗褐色		101	45	40	55	黒褐色	
23	32	29	27	暗褐色		46	32	30	22	暗褐色		79	45	34	15	黒褐色						暗褐色	
24	34	31	26	暗褐色		47	36	31	29	暗褐色		80	35	27	6	黒褐色		102	52	50	14	暗褐色	3層
25	35	29	36	黒褐色		48	27	21	24	暗褐色		81	35	29	7	暗褐色						明褐色	
26	33	31	29	黒褐色		49	35	35	27	暗褐色		82	60	50	5	不明		103	38	31	28	黒褐色	
27	27	25	22	黒褐色		50	32	31	13	暗褐色		83	54	48	5	不明		104	45	35	14	暗褐色	
28	35	30	29	暗褐色		51	37	30	32	暗褐色		84	108	37	10	不明		105	30	30	15	暗褐色	

(2) 竪穴住居跡

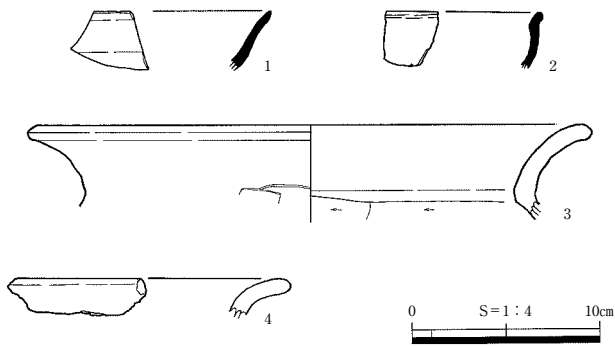
SI1 (第8図、PL.1)

H40グリッド杭の位置に、標高25.3mの高さで確認した。SI1は、検出面から床面までの深さは残りの良い西壁部分でも12cm、東壁部分に関しては壁の遺存はなく、周壁溝のみの確認である。上記の通り遺存状況が悪く、また遺構検出面と貼床を施さない住居床面の土が同じ黒褐色土であったため、調査当初は竪穴住居跡として認識はできず、住居南側の貼床の部分を遺構として誤認し、掘り込んでしまった。住居西側にあたる部分も弥生時代の遺構であるSD1の上面に貼床を施して床面としていたと考えられるが、SD1埋土中の礫が一部床面よりも高い位置に突き出して認められたことから、SI1との前後関係を誤認してしまい、SI1よりも古い時期のSD1の調査を一部先行してしまった。また、住居南壁の中央部分は、試掘トレンチにあたる。

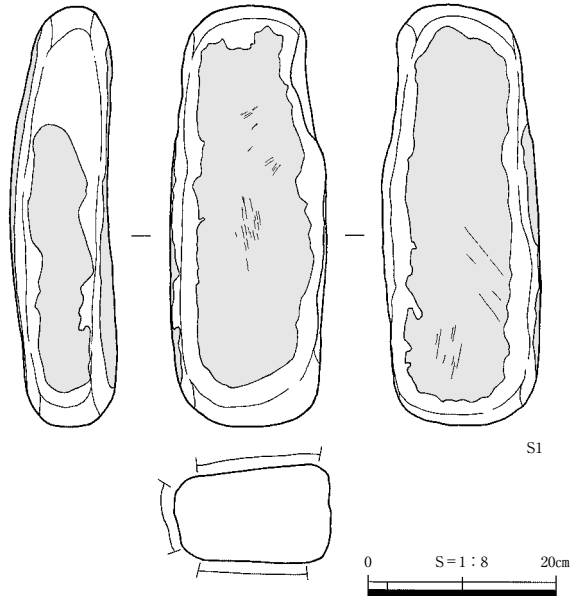
本住居跡は主軸を南北にし、規模は検出面で南北4.8m、東西4.3mを測る。平面形は四隅が丸くなった方形を呈する。深さは先述の通り、最も残りの良い部分でも12cmと遺存状況は良くなく、認められる埋土は明褐色土と黒褐色土、褐色土のわずかな堆積のみである。床面は南壁と北壁付近で一部地山である黒褐色土を床面とするほかは貼床を施す。床面及び、貼床下からはピットを10基確認した。このうち本住居の主柱穴と考えられるものは、P1・3・5・7で、柱間距離は南北3.4m、東西は北側で3.4m、南側で3mを測る。P2・4・6・8は支柱穴と考えられ、それぞれ主柱穴間の中心よりも若干寄った位置に認められる。また、床面には中央部分と南東部分に焼土面が2カ所確認された。周壁溝は北東部分で一部途切れるところが認められるほかは深さ4～10cmのものがめぐる。



第8図 SI1実測図



第9図 SI1出土土器



第10図 SI1出土石器

出土遺物であるが、多くは細片で、その特徴を窺えるものはわずかししか認められなかった。1はP7の埋土中から出土した須恵器坏、もしくは高台坏の口縁部の破片である。復元による傾きではあるが、口縁部は外反し、やや開き気味の器形になる。口唇部は丸みを持たず、鋭く作られている。2も須恵器坏口縁部の破片である。口縁部下端を「く」の字状に括れさせた形状を呈する。3・4は土師器甕口縁部の破片である。S1はP7の南側に置かれていた砥石である。使用面は3面認められるが、上面が最もよく使用されている。また、風化により明瞭ではないが、礫の角にあたる部分は自然面でないことから、敲打などにより形が整えられたと考えられる。

本竪穴住居跡の時期は、2の口縁部下端を括れさせる坏は、山陰地方で7世紀後葉以降に認められるものである。8世紀後半にはこの括れは不明瞭になるが、2の括れは明瞭に認められることから、7世紀後葉～8世紀前半頃の年代が考えられる。

SI2 (第11図、PL.1)

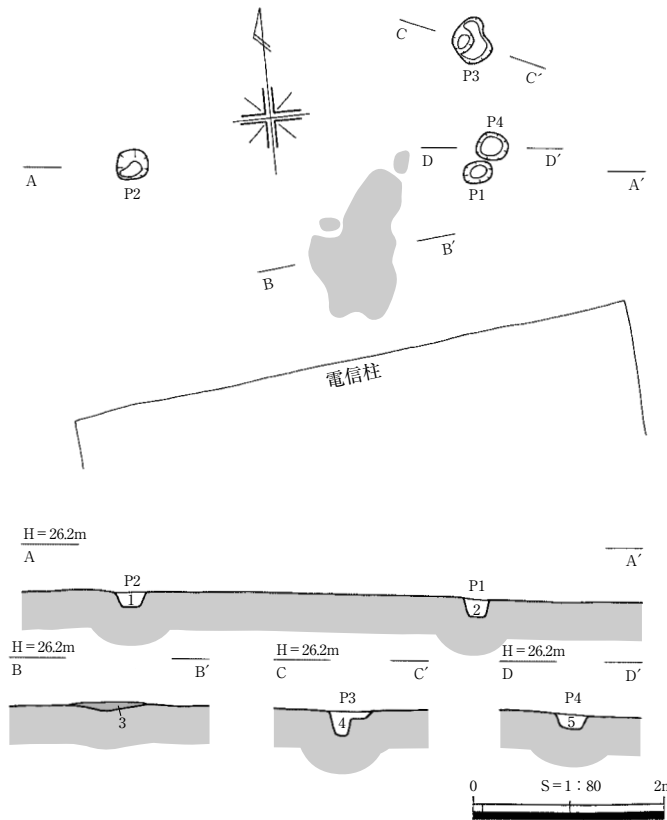
J40グリッドに位置する。本遺構は近年の削平により、竪穴住居跡として認められる平面形を遺構から確認することはできなかったが、焼土面やその付近に柱穴の可能性のあるピットが認められたことから竪穴住居跡として報告する。また、本住居跡の南側には電信柱が位置していたため、本遺構が展開するであろう南側部分の調査は行えなかった。

本住居跡の規模であるが、上記のような遺構の遺存状況であることや、周壁溝などの施設も認められなかったため不明である。周壁溝が認められないことは、本住居跡においては床面も削平された可能性もあるが、確認された焼土上面に5・6・7の土器片が認められたことから、大きくは削平されていないと思われ、現存の標高25.7mを床面の高さにする竪穴住居跡であったと思われる。

SI2として確認された遺構は、焼土とピットである。焼土は長軸156cm、短軸96cmの範囲で確認された。厚さは10cmとやや厚めである。ピットは4基検出した。北西隅の柱穴に対応する北東隅の柱穴がP1・3・4のいずれになるかは不明であるが、深さ18～26cmを測る。

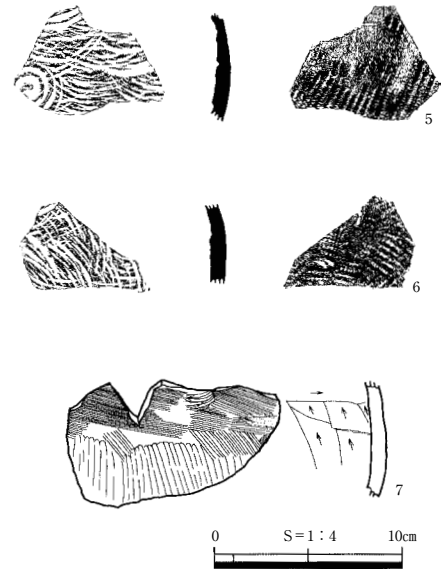
出土遺物は、遺構埋土も削平されていたことからわずかであった。5・6は須恵器甕の胴部片、7は土師器甕胴部片である。

本住居跡の時期は出土遺物からは詳細にできないが、土師器や須恵器が認められることや、1区への他の遺構や出土遺物の状況から飛鳥・奈良時代の時期が考えられる。



第11図 SI2実測図

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 (小礫を含む)
- 3 焼土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土 (4層に比べ、粘性強)



第12図 SI2出土土器

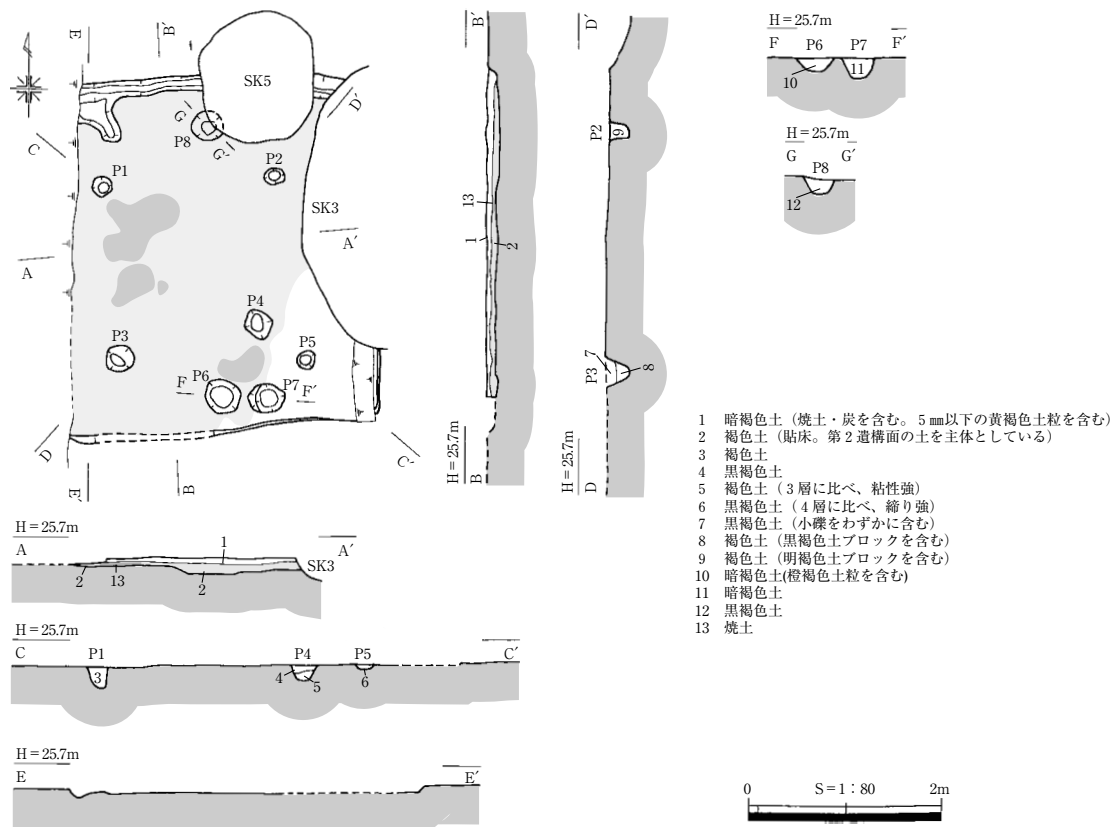
SI3 (第13図、PL.1)

I 39グリッド北西側に位置する。本住居跡は、西壁部分に位置する試掘トレンチでは確認されおらず、また遺構検出時においても確認することはできなかった。本住居跡は南西部分を通るSD1の調査時に確認するに至ったが、東壁の一部をSK3、北壁の一部をSK5によって壊されていることから遺存状況は良くない。

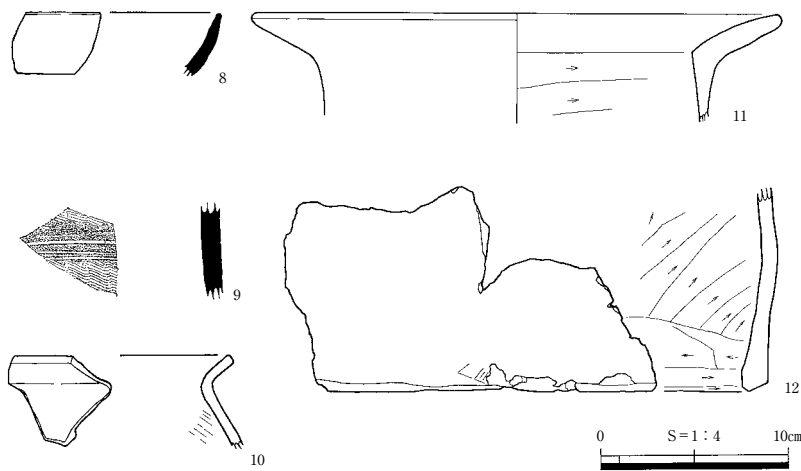
本住居跡の規模は、南北で3.8m、東西では残存する範囲で3.3mを測る。西壁部分はまったく残存しないが、平面方形であったと思われる。検出面から床面までの深さは10cmと浅く、焼土、もしくはロームと思われる黄褐色土、炭化物を含んだ暗褐色土を埋土とする。床面は南東部を残し、第2遺構面の土である明褐色土を主体とする褐色土により貼床が施され、北西部分では歪な高まりが作られる。床面では焼土面4面、ピット7基が確認された。3つの焼土面は住居のほぼ中央付近に、1つは住居南側に位置する。確認されたピットのうち支柱穴と考えられるものはP1~4である。柱の配置としては南東部のP4が住居中央に寄ってしまうことから、P5の方が適切な位置と思われるが、P5は床面からの深さが6cmと浅い。また、住居北側のP8は貼床除去後に確認されたピットである。

出土遺物では、須恵器坏口縁部8は、開き気味の器形で、わずかに内湾する。須恵器甕9は、頸部の破片で沈線間には波状文が施されている。10は清水編年Ⅲ期(中期中葉)頃の弥生土器と思われる。11は土師器甕口縁部の破片、12はカマドの底部で外面ナデ、内面ヘラケズリの調整が施される。

本遺構の時期は、出土遺物が細片であったため、具体的にすることはできないが、須恵器坏口縁部8に受け部が認められないことから7世紀以降の年代が考えられる。また、本遺構東側は7世紀末頃のSK3に掘り込まれていることから、それ以前のものである。このことから7世紀前半から末までの時期が考えられる。



第13図 SI3実測図



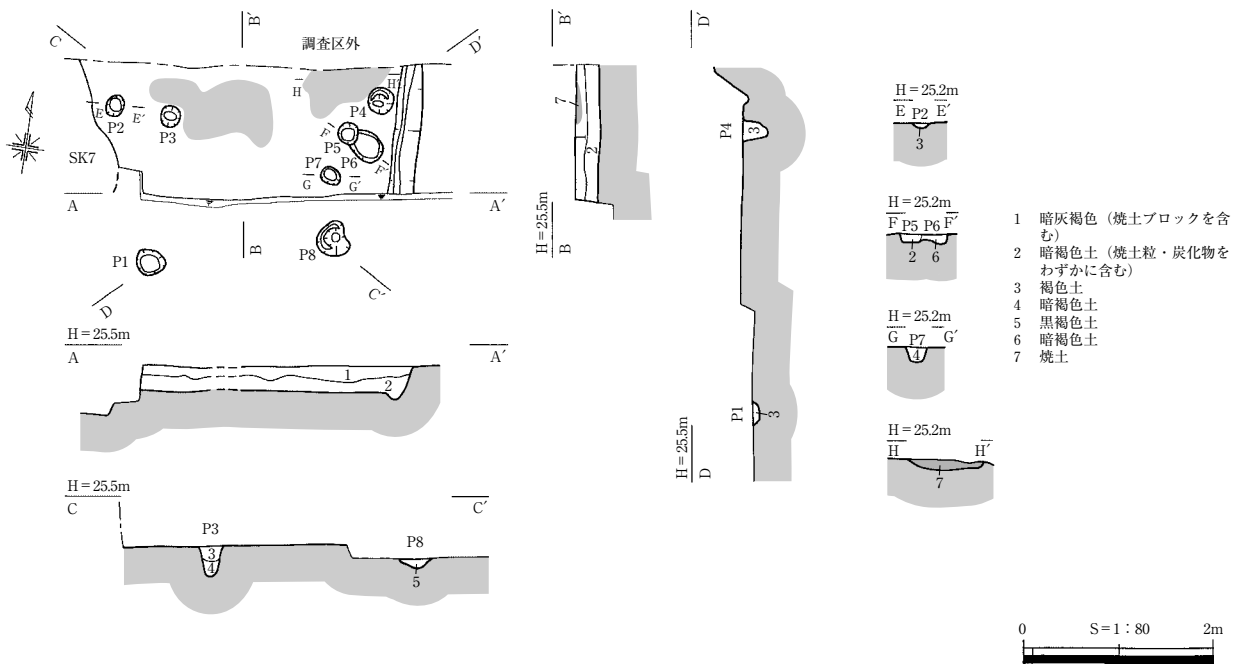
第14図 SI3出土土器

SI4 (第15図、PL. 2)

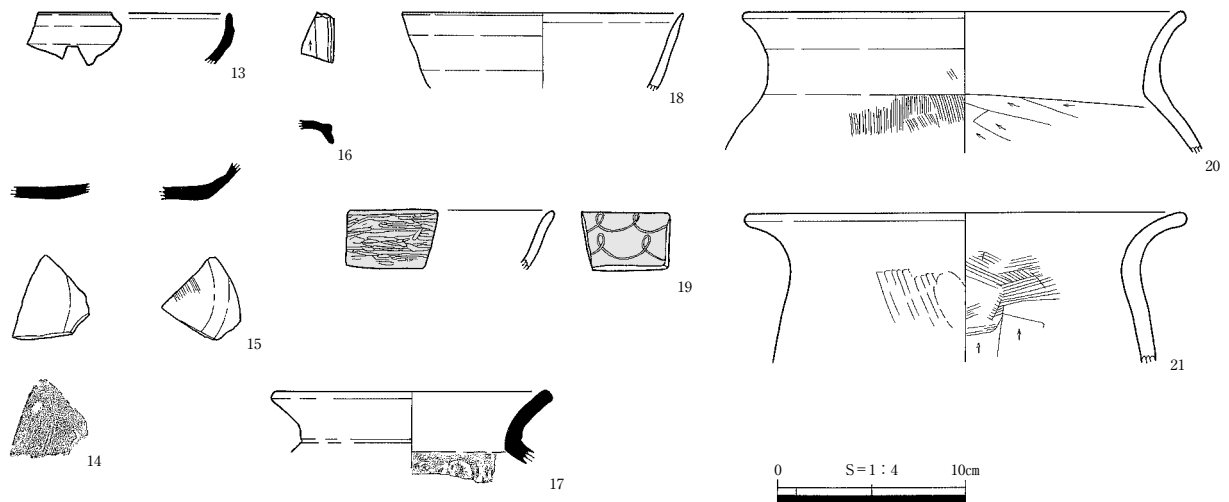
F38グリッドの西側に位置する。本住居跡は、その南半部を試掘トレンチや本調査第1遺構面調査時の範囲に含む遺構であったが、検出はできず、確認は第2遺構面調査時、調査区壁に竪穴住居跡の断面が認められたことによる。以上のことから、SI4の南半部については調査を行えず破壊してしまった。

北側部分においても調査区を一部北側に拡張し、その範囲の確認に努めたが調査区外にのびる。また、西側部分はSK7によって壊される。

本住居跡の規模であるが、上記のようにその範囲は明らかにできない。残存する範囲で東西3.65m、南北1.40mを測る。平面形は後述する支柱穴と考えられるピットの配置から方形の可能性が高い。現存の掘り込み面の標高は25.3mで、床面までの深さは30cmである。床面では焼土面2面、ピット6基、周壁溝を検出した。また、未調査のまま破壊してしまった南半部においても柱穴底部と思われるピット2基を確認した。本住居跡の支柱穴は、底面の深さや位置等からP1・3・4・8と考えられる。しかし、P4の位置は東壁に寄り、矩形を呈することから、北側部分のものについては調査区外に適当なものが位置する可能性もある。周壁溝は幅16cm、深さ8cm、断面半円形を呈する。



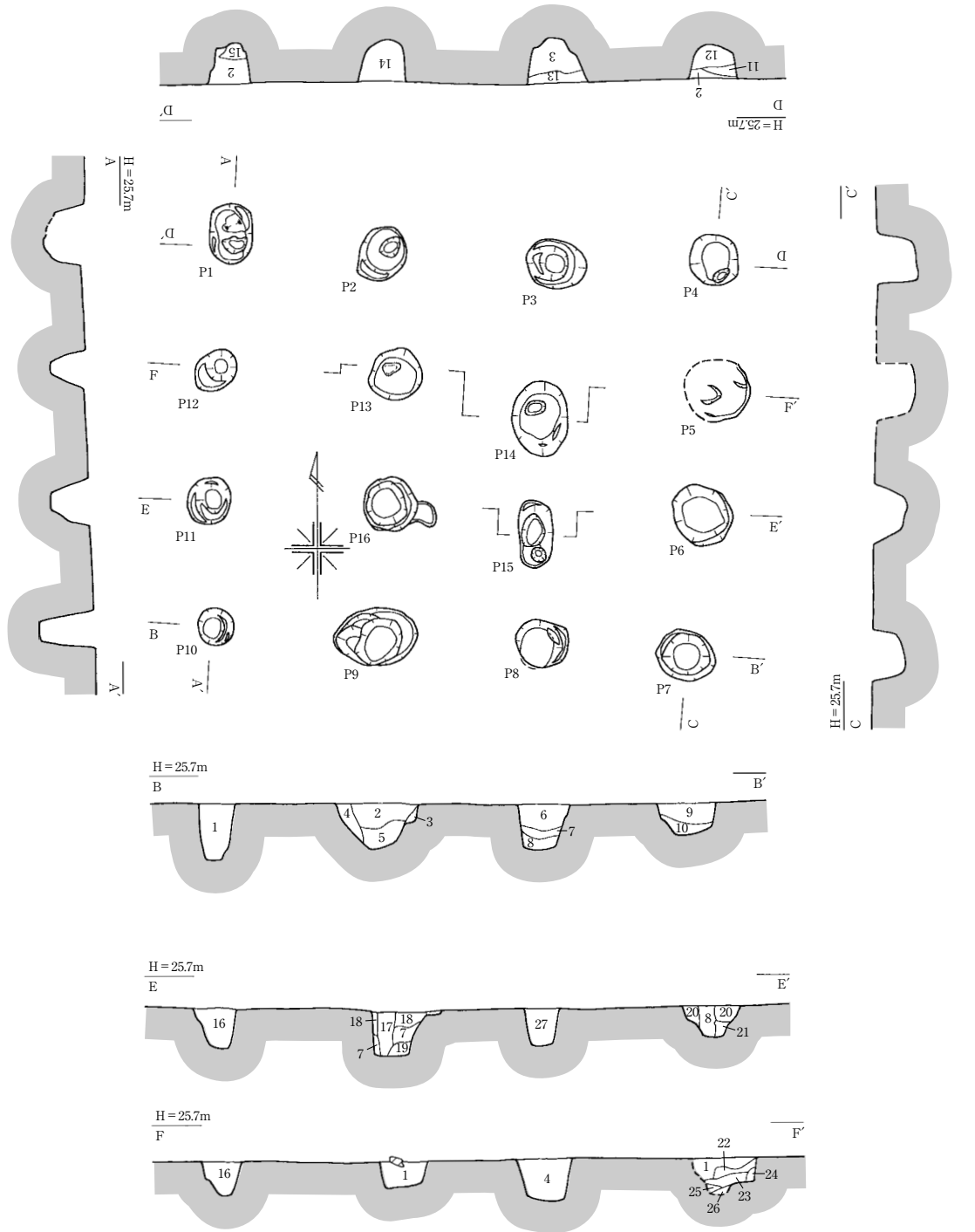
第15図 S14実測図



第16図 S14出土土器

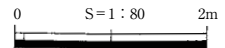
出土遺物には13～17の須恵器、18～21の土師器がみられる。13は坏口縁部で、口縁部下端は強めのナデにより、括れた形状を呈する。14・15は坏底部で、底部外面には静止糸切り痕がナデ消されながらもわずかに残る。16は坏蓋口縁端部の破片である。口縁端部の高さは1cmを測り、立ち上がりはしっかりと作り出されている。18は坏口縁部の破片で、立ち上がりはわずかに外反する。19は内外面が赤彩された坏口縁部で、内面及び外面上半はヨコナデ、下半はヘラケズリを施す。その後、外面は丁寧な横方向のヘラミガキが、内面には逆時計回りの2段の螺旋暗文が施される。17、20、21は甕の口縁部～頸部にかけての破片である。

本遺構の時期は、13の坏口縁部下端の括れの形状や16の坏蓋口縁端部の高さが明瞭に作り出されていること、坏底部糸切り痕が静止糸切りであることから8世紀前半頃の時期が考えられる。



- 1 暗褐色土 (粘性中、縮り強)
- 2 暗褐色土 (粘性中、縮り中)
- 3 暗褐色土 (粘性強、縮り弱)
- 4 褐色土 (粘性強、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 5 暗褐色土 (粘性強、縮り弱、やや暗め)
- 6 暗褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 7 黒褐色土 (粘性強、縮り弱)
- 8 暗褐色土 (粘性弱、縮り中)
- 9 暗褐色土 (粘性中、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 10 黒褐色土 (粘性強、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 11 褐色土 (粘性弱、縮り強)
- 12 暗褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 13 黒褐色土 (粘性中、縮り中)
- 14 暗褐色土 (粘性中、縮り強、黄褐色土粒を含む)
- 15 褐色土 (粘性強、縮り強)
- 16 褐色土 (粘性中、縮り強)
- 17 暗褐色土 (粘性弱、縮り弱)
- 18 淡褐色土 (粘性弱、縮り強、黄褐色土ブロックを含む)

- 19 暗褐色土 (粘性強、縮り弱)
- 20 暗褐色土 (粘性強、縮り強、黄褐色土ブロックを含む)
- 21 褐色土 (粘性中、縮り中)
- 22 褐色土 (粘性強、縮り弱、ロームブロックを多く含む)
- 23 暗褐色土 (粘性強、縮り中、ロームブロックを含む)
- 24 暗褐色土 (粘性強、縮り中)
- 25 黄褐色土
- 26 褐色土
- 27 褐色土 (粘性弱、縮り強)



第17図 SBI実測図

(3) 掘立柱建物跡

SB1 (第17図、PL. 2)

H38グリッドの北西部に位置する桁行3間、梁行3間の総柱建物跡である。主軸は平側を正面としてN-2°-E、規模は桁行5.8m、梁行4.8mで、桁行の柱穴間は心々で約2.0m、梁行の柱穴間は心々で約1.6mを測る。また、外回りの柱穴と内部の柱穴の大きさは、

ほぼ同規模であり、深さも32~68cmとする。柱痕跡が確認されたP6、P16でも、径18cm程度の柱材の大きさであったことから、外回りの柱と内部の柱で大きさに差はなかったと考えられる。しかし、内部柱穴であるP13では底面から24cm高い地点で礫が1点確認された。他のピットでは認められないことから、この礫は本遺構に伴わない可能性が高い。伴うとすれば本遺構の調査の状況から、礎石や根石としての機能は考えられず、根巻き石のようなものであったであろうか。

SB1の上部構造であるが、上記のように外回りと内部の柱穴(柱)との間に特に大きな差が認められなかったことから、「側通柱式」構造よりも「束柱式」構造であった可能性の方が高い。機能としては高床建物であり、高床倉庫等の性格が考えられる。

出土遺物には、ピット内出土の須恵器、土師器がある。22は須恵器坏口縁部の破片であるが、体部から口縁部に向かって内湾し、口縁端部ではほぼ垂直に立ち上がる。器高もやや高かったと思われ、塀とした方が良いかもしれない。器面の調整は、内外面ともロクロナデの後、外面は上半を丁寧なナデ、下半はやや雑なナデで仕上げる。内面は口縁端部より1cm下に沈線を入れる。23は須恵器塀で、内湾した口縁部を持ち、内外面ロクロナデ調整である。24は土師器坏口縁部破片で、体部から口縁部に向かって内湾して立ち上がる。また体部から底部にかけての湾曲からは、浅い器形を呈したと思われる。内面はヨコナデ後ヘラミガキ、外面は上半にヨコナデ後雑なヘラミガキ、下半にヘラケズリ後ナデの調整を施す。

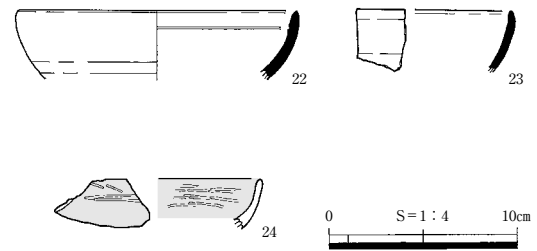
SB1の時期であるが、24の土師器坏の内外面ヘラミガキ調整が雑になりながらも認められることから8世紀前半頃の年代と思われる。

SB2 (第20図、PL. 2)

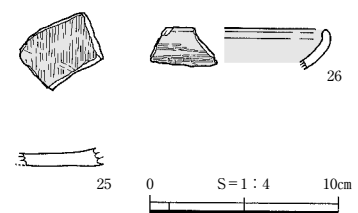
I37グリッドの西側に位置する。桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、主軸をN-6°-Eにする。規模は桁行4.3m、梁行3mで、桁行の柱穴間は心々で約1.4m、梁行の柱穴間は心々で約1.5mを測る。柱穴掘りかたの形状は、平面形を直径約60cmの円形とし、断面が逆台形状になるものが多い。柱痕は確認することはできなかった。深さは四隅のものが底面の標高を24.9mに揃え、他のものはそれよりも10~30cmほど高くする。

出土遺物には、ピット内出土の25、26の赤彩土師器の破片が見られる。25は坏底部の破片で、外面はナデ、内面はハケ後雑なナデを施す。26は皿口縁部で、内面はヨコナデ、外面はヨコナデ後雑なヘラミガキが施される。

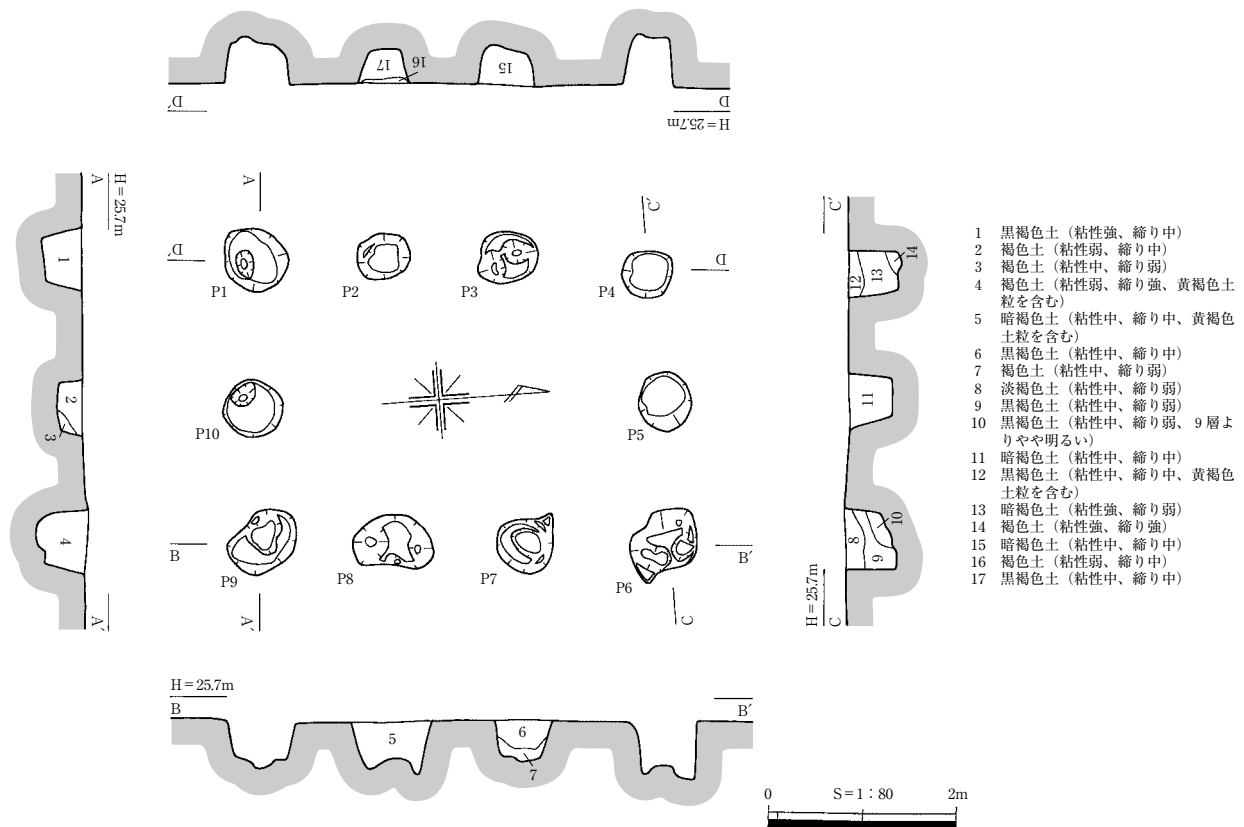
本遺構の時期は、26外面のヘラミガキ、25内面のナデが雑になってることなどから8世紀中頃から後半と思われる。



第18図 SB1出土土器



第19図 SB2出土土器

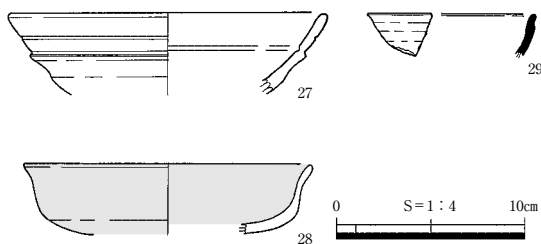


第20図 SB2実測図

SB3 (第22図、PL. 3)

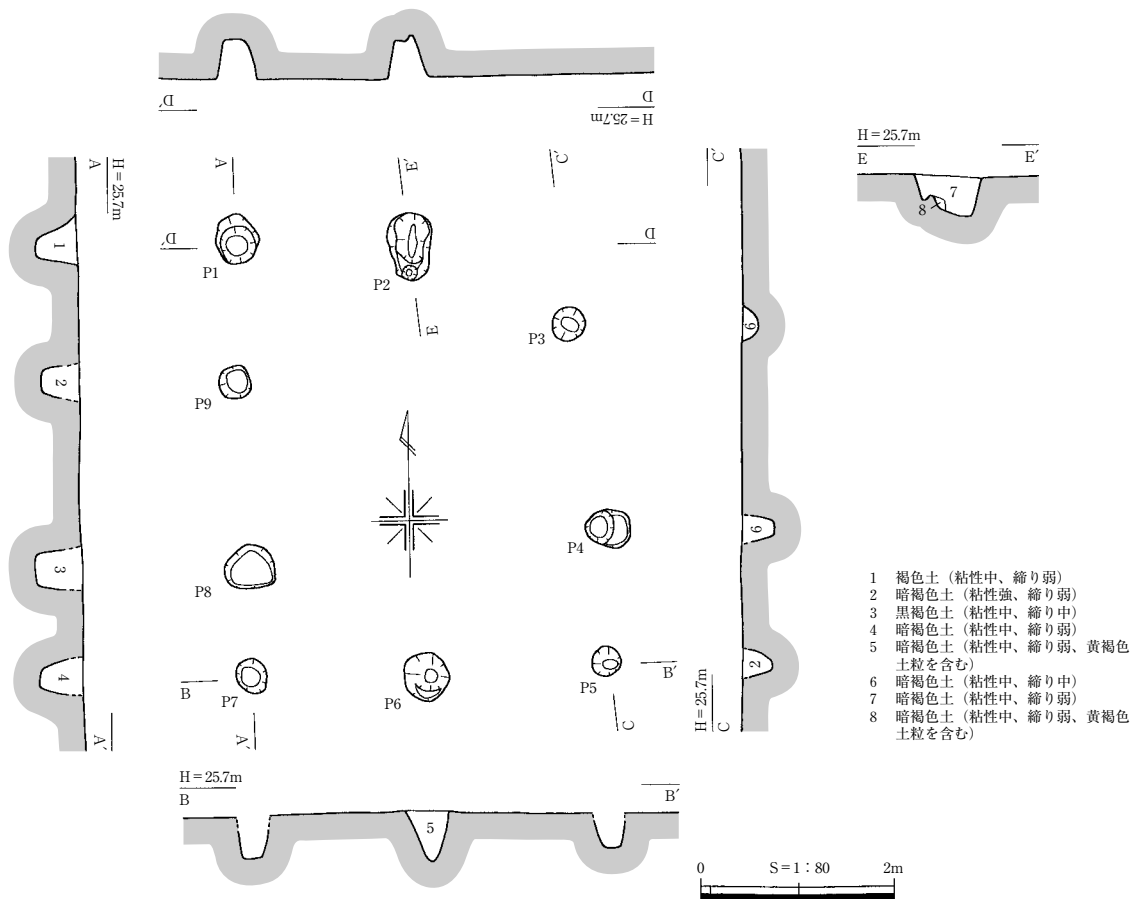
H37グリッドの西側に位置する。主軸をN-2°-Wとする桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。しかし、北東隅の柱穴が確認できなかったこと、後述するように東側の柱穴としたピットの深さが他のものより浅いこと、調査区際に位置したため、東側においてはSB3に関連する遺構の有無の確認ができなかったことを勘案すると、梁、桁の方向を変え、調査区東側にのびる建物になる可能性もある。確認した範囲での規模は桁行4.6m、梁行3.8mである。桁行の柱穴間は心々でP9-1間、P7-8間が約1.2m、P8-9間が2.0m、梁行の柱穴間は心々で約1.9mを測る。柱穴掘りかたの形状は、平面円形で、断面はやや丸みを持った逆台形状を呈するものが多い。柱痕は確認することは出来なかった。深さはP1・2、6～9までが底面の標高を24.9～25.0mの高さにし、P3～5が25.0～25.2mとするなど掘り込みは浅い。

出土遺物には、27・28の土師器、29の須恵器がある。27は坏口縁部から底部にかけての破片で、口縁部中位には内外面ともに沈線が入られる。28は内外面赤彩の坏である。口縁部は内外面ヨコナデ、底部内面はナデ、外面はヘラケズリ後ナデを施す。ヘラミガキは見られない。29の須恵器坏は口唇部下端を強めにナデやや括れさせるが、口唇端部の稜はにぶい。



第21図 SB3出土土器

時期は、出土遺物から8世紀中頃から後半と考えられる。



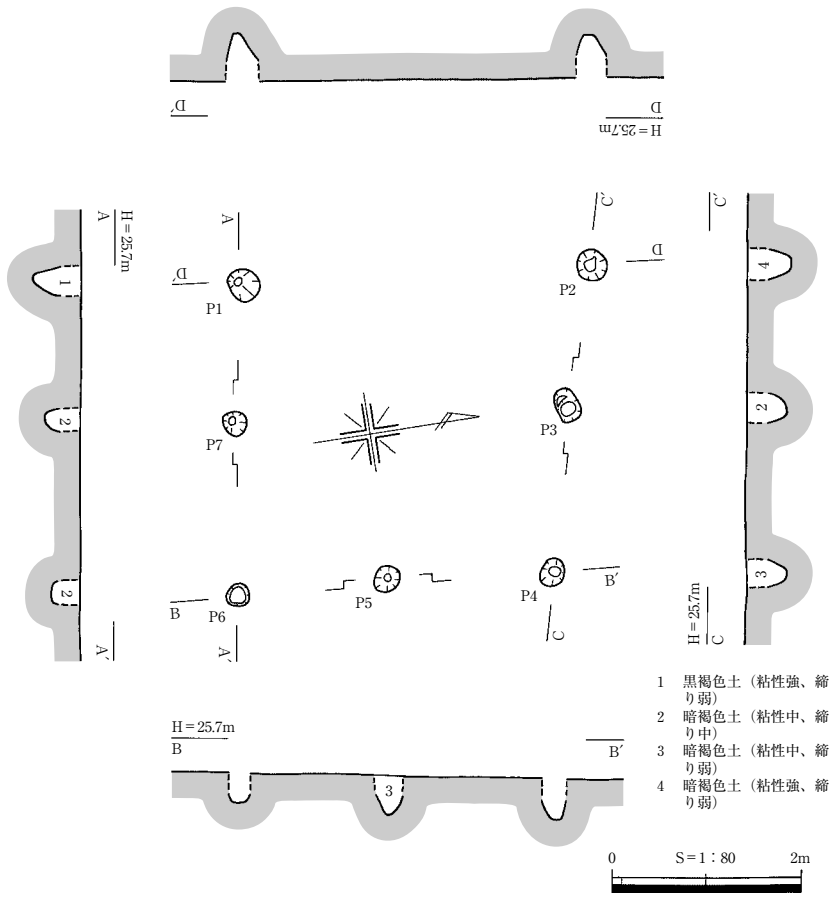
SB4 (第23図、PL. 3)

H39グリッドに位置する。第2遺構面での確認となったが、1区の調査状況から、本来は第1遺構面に属する遺構であったと思われる。東側でSB1と、南西側でSB5と重複する。主軸をN-5°-Eにする桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡であるが、西側の柱穴は検出できなかった。規模は桁行3.4m、梁行3.3mで、桁行の柱穴間は心々で約1.6m、1.8m、梁行の柱穴間は心々で約1.5m、1.8mを測る。柱穴掘りかたの形状は、平面円形とし、断面形は底面を丸くする。柱痕は認められなかった。深さは底面の標高を24.8~25.0mにする。

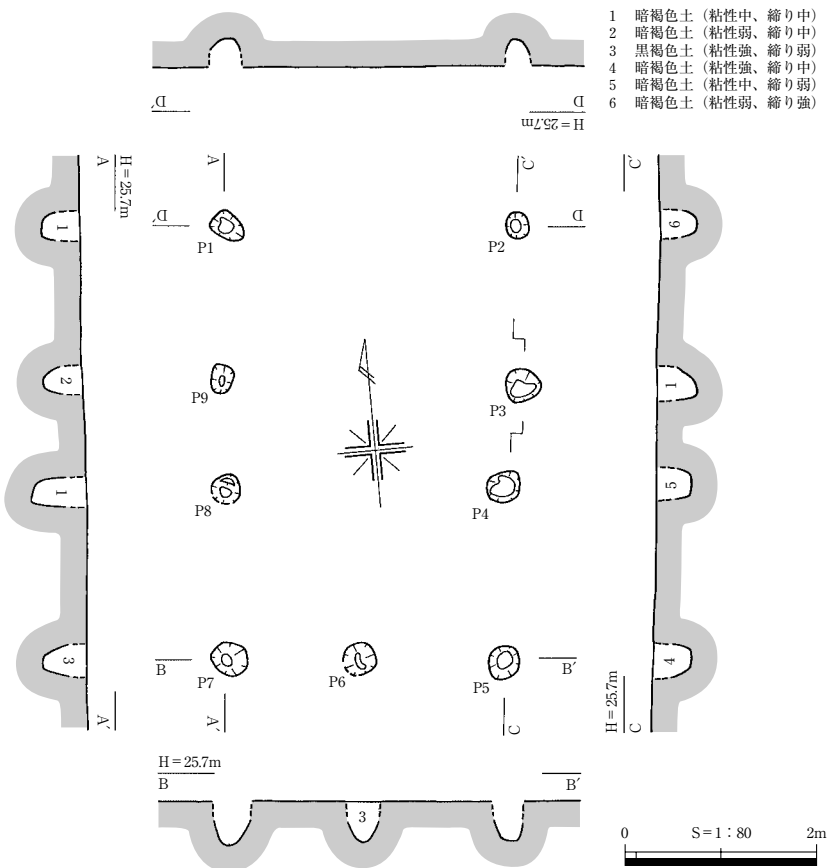
出土遺物は認められなかった。具体的な時期は明らかではないが、1区の調査の状況から考えると飛鳥・奈良時代頃と思われる。

SB5 (第24図、PL. 3)

H39グリッドに位置する掘立柱建物跡である。SB4と北東側で重複する。第2遺構面での確認となったが、1区の調査状況から、SB4と同様、本来は第1遺構面に属する遺構であったと思われる。桁行3間、梁行2間で、主軸をN-6°-Eにする。梁行北側の中央の柱穴は検出できなかった。規模は桁行4.5m、梁行3.0mで、桁行の柱穴間は心々で隅部の柱から中央部の柱にかけては約1.6m、1.8mとし、中央部間は1.1m、1.2mとする。梁行の柱穴間は心々で約1.4m、1.6mを測る。柱穴掘りかたは上部については明らかでないが、形状は平面円形、断面では逆台形状にするものが多い。深さは



第23図 SB4実測図



第24図 SB5実測図

底面の標高を24.8~25.0mにする。柱痕は認められなかった。

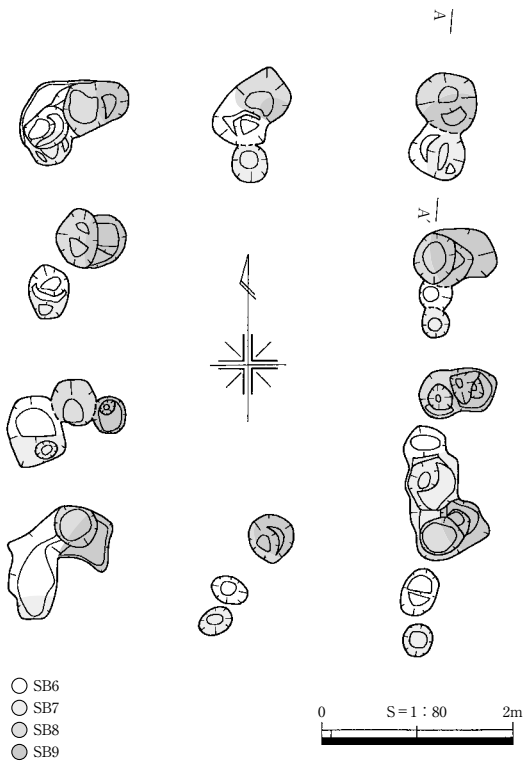
出土遺物はなく、具体的な時期は明らかでないが、1区の遺構の状況から考えると飛鳥・奈良時代頃と思われる。

SB6~9 (第25図、PL. 3)

I39グリッドに位置する掘立柱建物跡である。SB6~9は、ほぼ同規模の桁行3間、梁行2間の建物が、ほぼ同じ位置に、わずかに建物主軸の方位を変えながら建替えられたものである。SB6~9の順に建替えられており、以下この順に従い記述する。

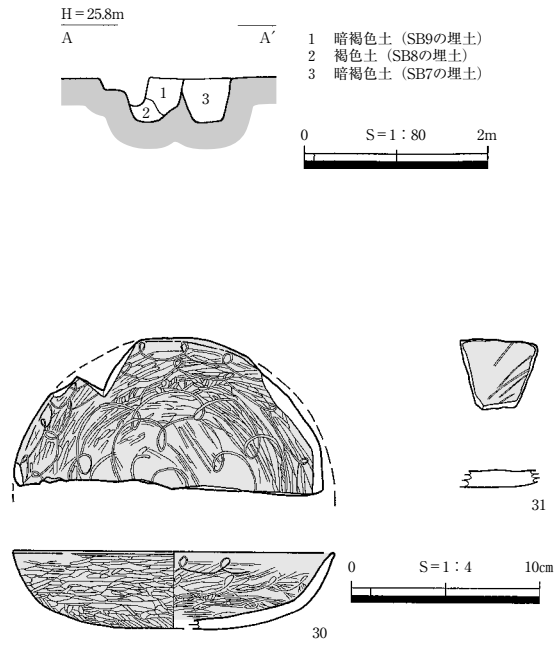
SB6は主軸をN-4°-Eにする。規模は桁行4.7m、梁行4.3mで、桁行の柱穴間は心々で1.5~1.7mとし、梁行の柱穴間は心々で2.0~2.2mを測る。

柱穴の掘りかた規模は、28~60cmとし、平面円形にするものが多い。深さは底面の標高を24.8~25.2mとするなど高低差が認められる。柱痕は認められなかった。また、土層断面等では切り合い関係を明確にできるものはわずかであったが、P6がSB7P6、SB9P6に、P7がSB7P7、SB8P7、SB9P7に掘り込まれている状況が確認された。

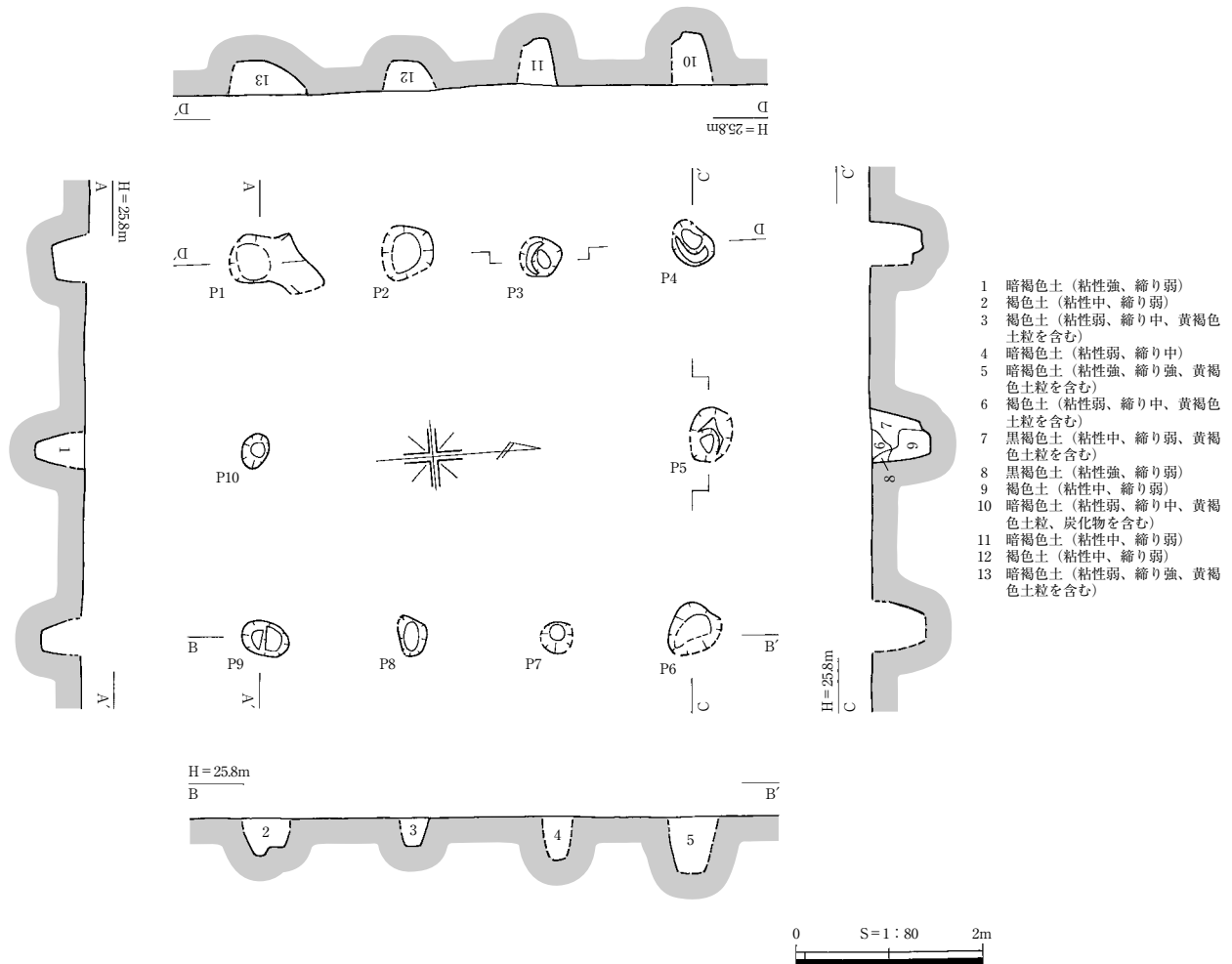


- SB6
- SB7
- SB8
- SB9

第25図 SB6~9 平面図

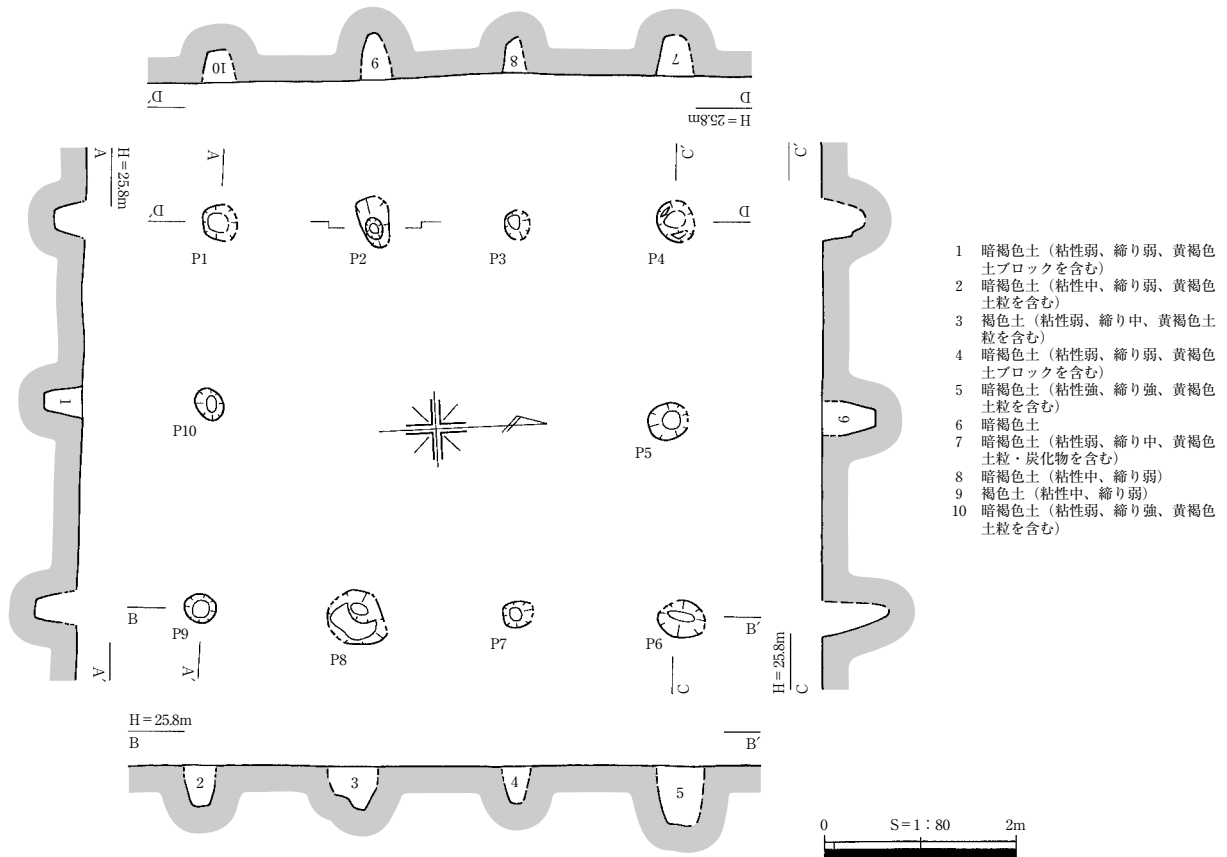


第26図 SB6~9 出土土器



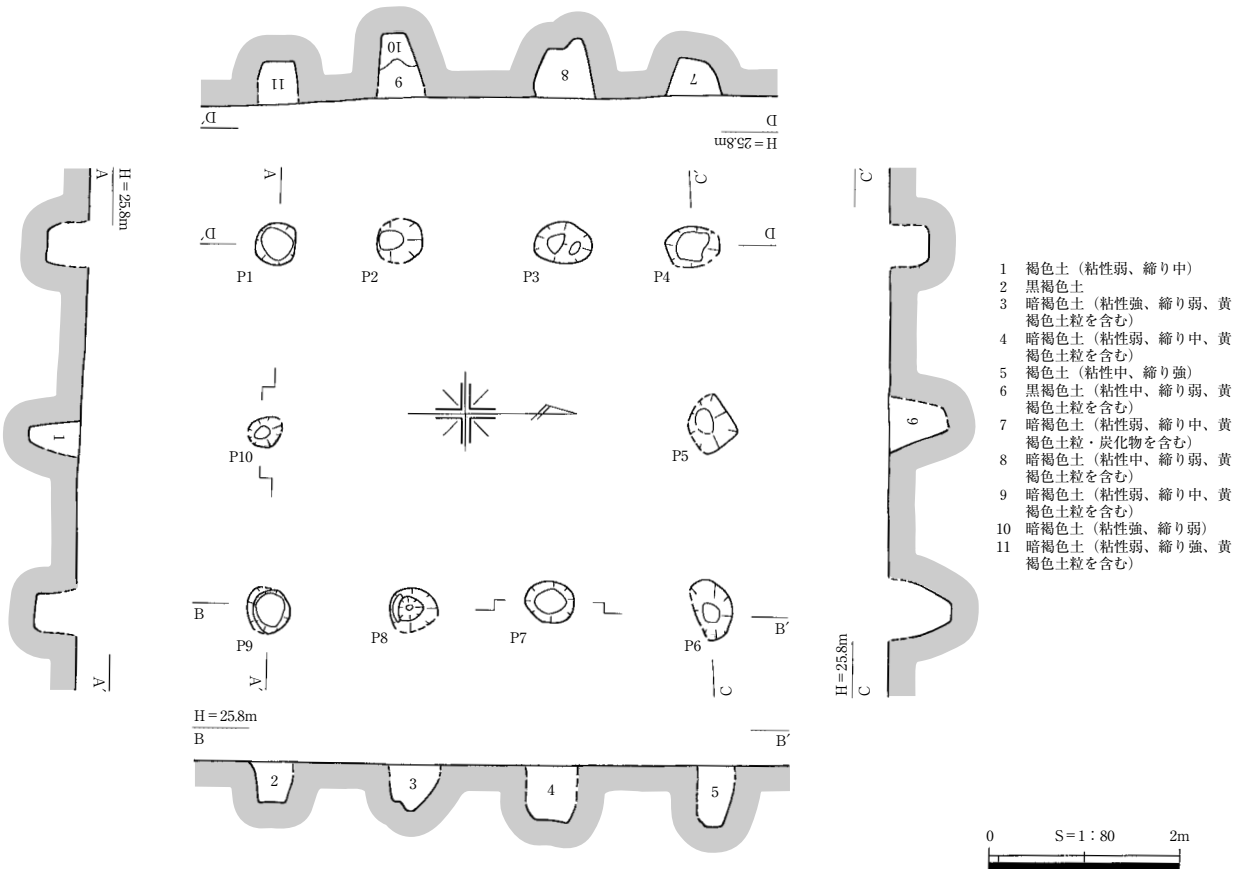
- 1 暗褐色土 (粘性強、縮り弱)
- 2 褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 3 褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒を含む)
- 4 暗褐色土 (粘性弱、縮り中)
- 5 暗褐色土 (粘性強、縮り強、黄褐色土粒を含む)
- 6 褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒を含む)
- 7 黒褐色土 (粘性中、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 8 黒褐色土 (粘性強、縮り弱)
- 9 褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 10 暗褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒、炭化物を含む)
- 11 暗褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 12 褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 13 暗褐色土 (粘性弱、縮り強、黄褐色土粒を含む)

第27図 SB6実測図



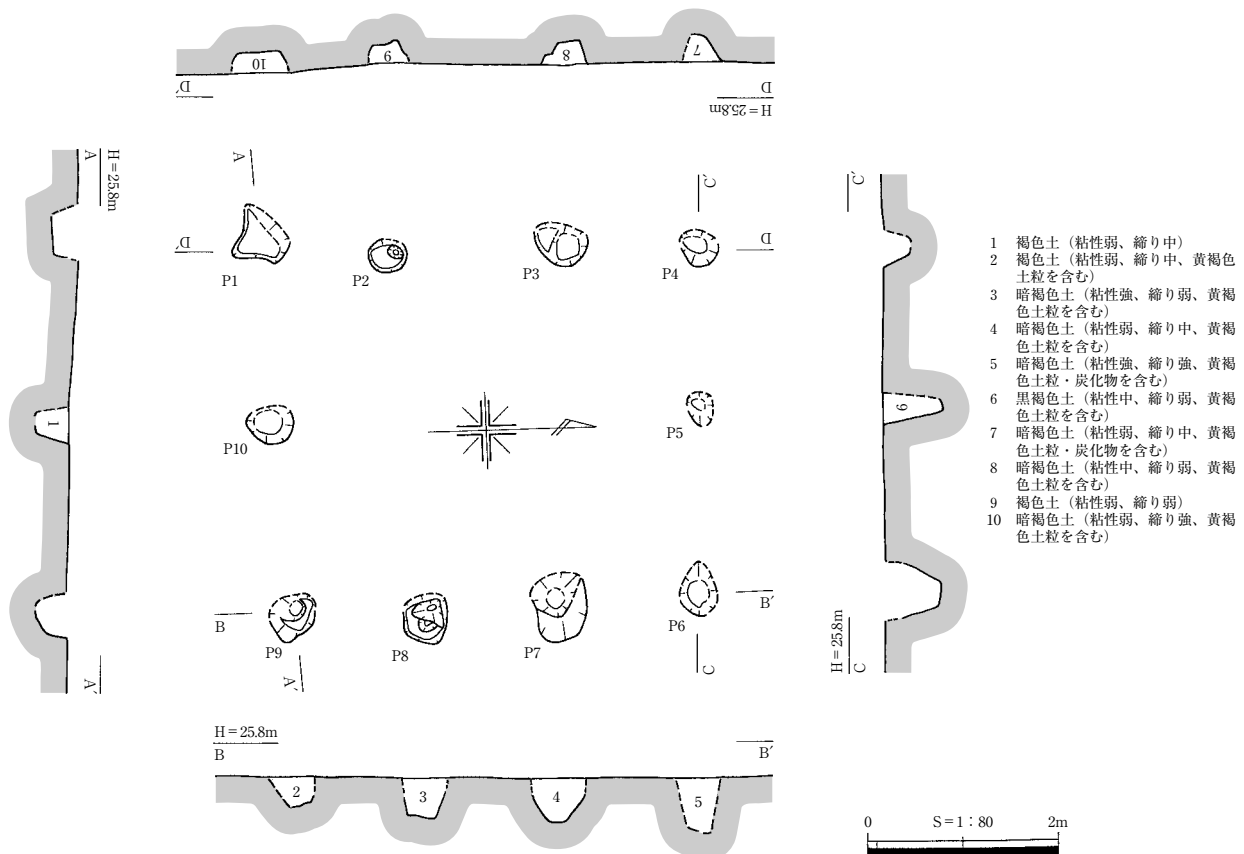
- 1 暗褐色土 (粘性弱、縮り弱、黄褐色土ブロックを含む)
- 2 暗褐色土 (粘性中、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 3 褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒を含む)
- 4 暗褐色土 (粘性弱、縮り弱、黄褐色土ブロックを含む)
- 5 暗褐色土 (粘性強、縮り強、黄褐色土粒を含む)
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒・炭化物を含む)
- 8 暗褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 9 褐色土 (粘性中、縮り弱)
- 10 暗褐色土 (粘性弱、縮り強、黄褐色土粒を含む)

第28図 SB7実測図



- 1 褐色土 (粘性弱、縮り中)
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土 (粘性強、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 4 暗褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒を含む)
- 5 褐色土 (粘性中、縮り強)
- 6 黒褐色土 (粘性中、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 7 暗褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒・炭化物を含む)
- 8 暗褐色土 (粘性中、縮り弱、黄褐色土粒を含む)
- 9 暗褐色土 (粘性弱、縮り中、黄褐色土粒を含む)
- 10 暗褐色土 (粘性強、縮り弱)
- 11 暗褐色土 (粘性弱、縮り強、黄褐色土粒を含む)

第29図 SB8実測図



第30図 SB9実測図

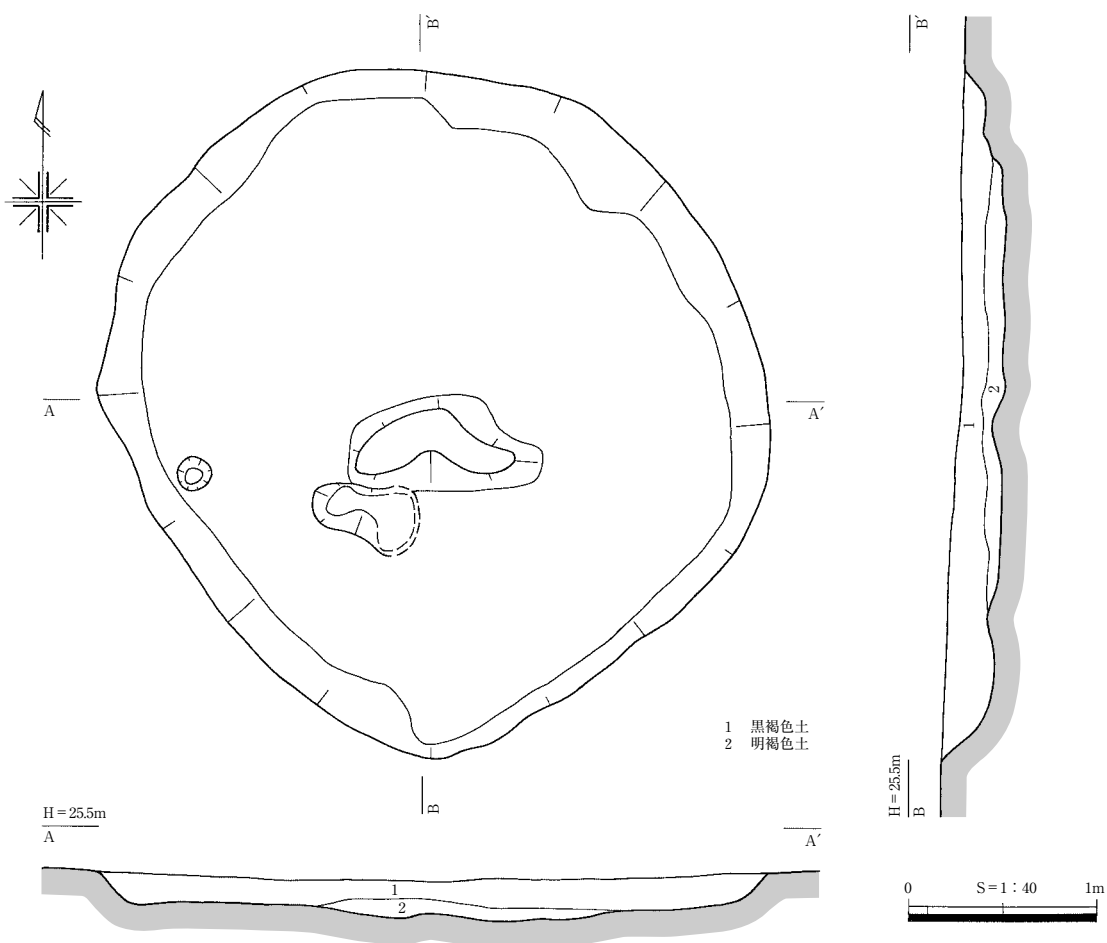
出土遺物はP7から赤彩土師器坏30が確認された。内面及び、外面口縁部はヨコナデ後丁寧なヘラミガキ、外面底部はヘラケズリ後丁寧なヘラミガキを施す。内面には底部から口縁部にかけて5段の螺旋暗文が入られる。本遺構の後にSB7が建替えられることから考えると、建替え時に抜き取った柱穴内に埋め戻された可能性が高い。また、SB8・9に伴う可能性もあるが、P5から外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ後粗雑なヘラミガキを施した土師器坏31も確認された。

SB7も主軸をN-4°-Eにする。規模は桁行5.0m、梁行4.2mで、桁行の柱穴間は心々で1.5~1.7mとし、梁行の柱穴間は心々で2.0~2.1mを測る。柱穴の規模は、27~58cmで、平面円形である。深さは底面の標高が24.9~25.2mまで見られるが、25.0mのものが多い。柱痕は認められなかった。また、P6はSB9P6に掘り込まれている。

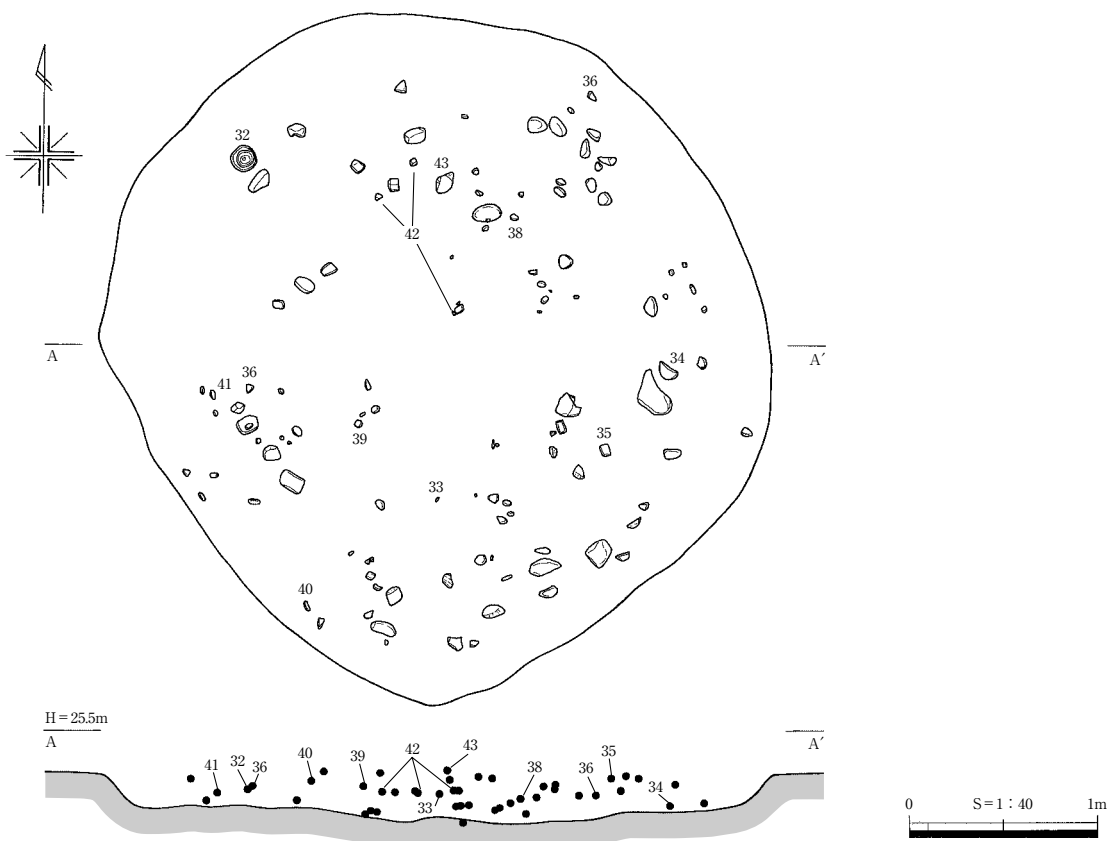
SB8は主軸をN-1°-Eとする。規模は桁行4.7m、梁行3.9mで、桁行の柱穴間は心々で1.3~1.9mとし、梁行の柱穴間は心々で1.8~2.0mを測る。柱穴は平面円形、32~64cmを測る。深さは底面の標高が24.8~25.1mと高低差が認められるが、24.8mのものが多い。柱痕は認められなかった。また、P6ではSB9P6との切り合い関係が確認された。

SB9は主軸をN-2°-Eとする。規模は桁行4.2m、梁行3.8mで、桁行の柱穴間は心々で1.3~1.9mとし、梁行の柱穴間は心々で1.6~2.0mを測るなど均等ではない。柱穴は平面円形、36~57cmを測る。深さは底面の標高が24.8~25.3mと高低差が認められ、北東側のものを深く、南西側のものを浅くする。柱痕は認められなかった。

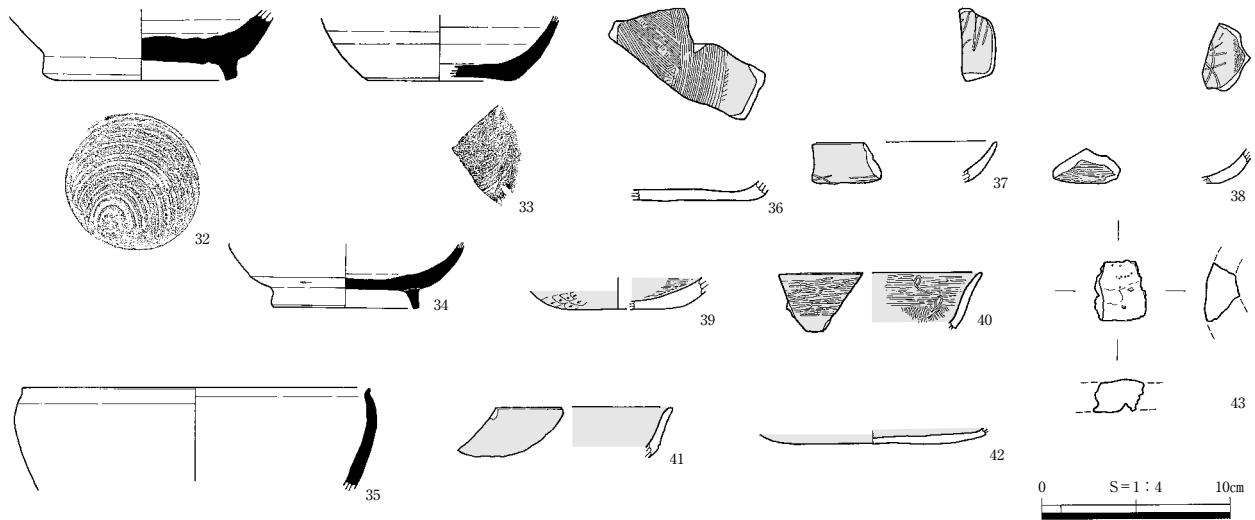
本遺構の時期は、出土遺物からSB6が7世紀末から8世紀初頭頃と考えられる。SB7~9はその後に続くが、9世紀代の遺構は調査区に認められないことから、8世紀代のうちに収まると思われる。



第31図 SK1実測図



第32図 SK1遺物出土状況図



第33図 SK1出土遺物

(4) 土坑

SK1 (第32図、PL. 4)

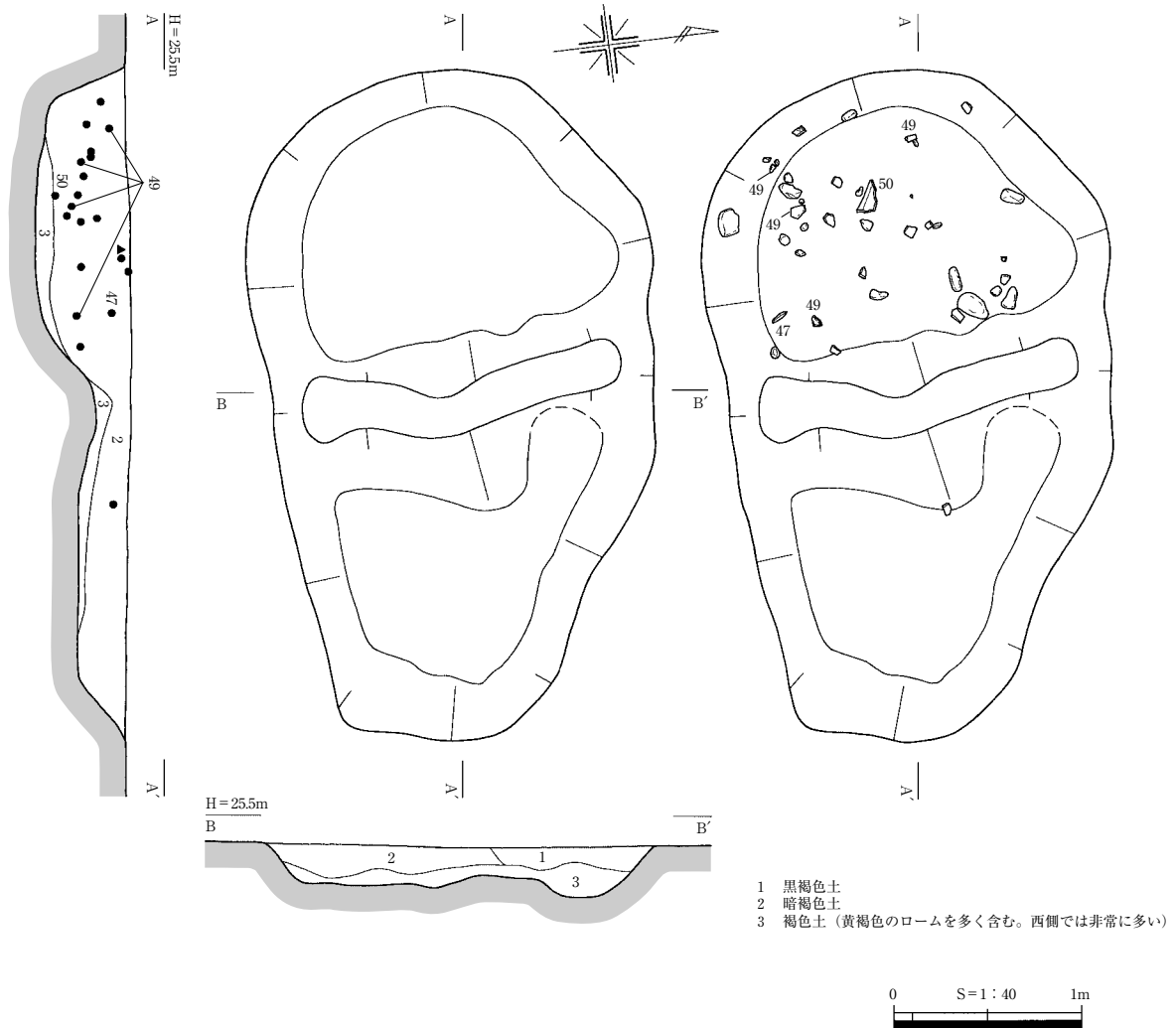
G37グリッド南西隅の位置に、標高約25.3mの高さで検出した、平面形は隅丸方形を呈する土坑である。規模は東西3.55m、南北3.60m、深さは、遺構検出面からおよそ25cmを測る。底面には中央部に若干の高まりが確認されたほか、西側に深さ5cmほどのピット状の窪みを検出した。

本遺構の埋土は、上層に砂質の黒褐色土、下層に明褐色土が堆積するが、上層を中心に土師器、須恵器、自然石などの出土遺物があった。

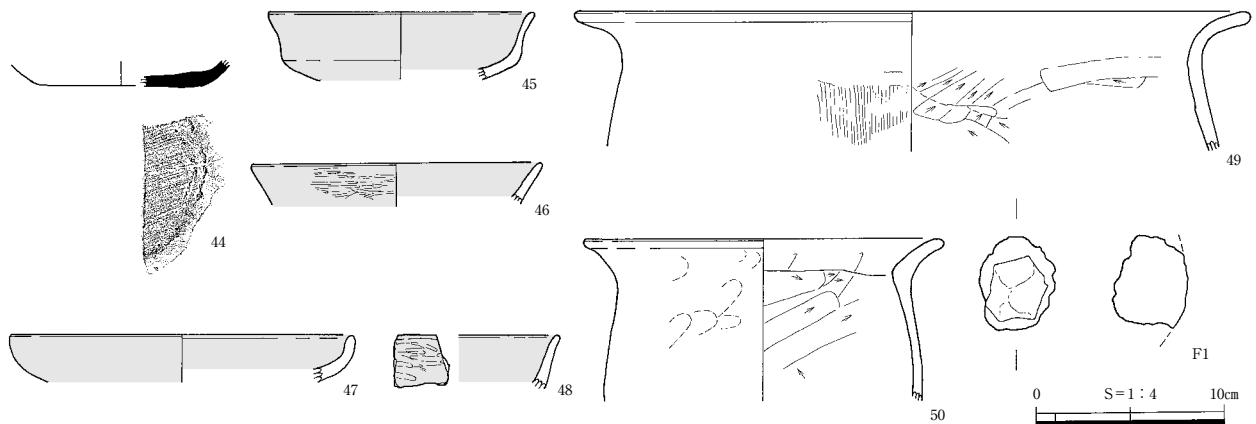
出土遺物32～35は須恵器である。32は台付壺、33は坏、34は高台坏、35は鉢で、32、33は底部外面に回転糸切り痕を残す。36～42は土師器で、36、37は皿、38～41は坏、42は坏もしくは皿である。いずれも内外面に赤彩を施す。36は外面ヘラケズリ後ナデ、内面は口縁部に近い部分はナデが見られるが、底部はハケ目を残す。37は内外面ヨコナデ後、雑なヘラミガキを施す。38は内外面ヨコナデ後、丁寧なヘラミガキを施し、内面には放射状暗文及び、螺旋暗文を入れる。39は外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラミガキ。40は内外面ヨコナデ後、丁寧なヘラミガキを施す。内面には2段の螺旋暗文が確認できる。41、42は口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ後ナデである。43は羽口の破片である。本遺構の時期であるが、出土遺物からは、須恵器では底部に回転糸切り痕が認められることや、土師器では外面調整のヘラミガキを省略するものが多く含まれるなど、8世紀中頃から後半の時期が考えられる。

SK2 (第34図、PL. 4)

H38グリッド北東隅、標高25.3mの高さで確認した。前述のSK1の南側1.5mに位置する。東西3.55m、南北2.00mを測り、平面形は歪な楕円形を呈する。深さは検出面から東側では25cm、西側では50cmと土坑中央部で段差が認められた。埋土は3層に分層でき、下層にはロームと思われる黄褐色土を含んだ褐色土が堆積する。この黄褐色土は堅穴住居跡で確認された焼土面の土と似た土質であったが、土色が焼土面のものは橙味がかっているのに対し、浅黄褐色に近い色を呈したこと、土坑内に炭化物や被熱痕が見られなかったことから、ここではロームとした。特に黄褐色土の混じりは西側で顕著であった。出土遺物は上層の暗褐色土中に見られた。



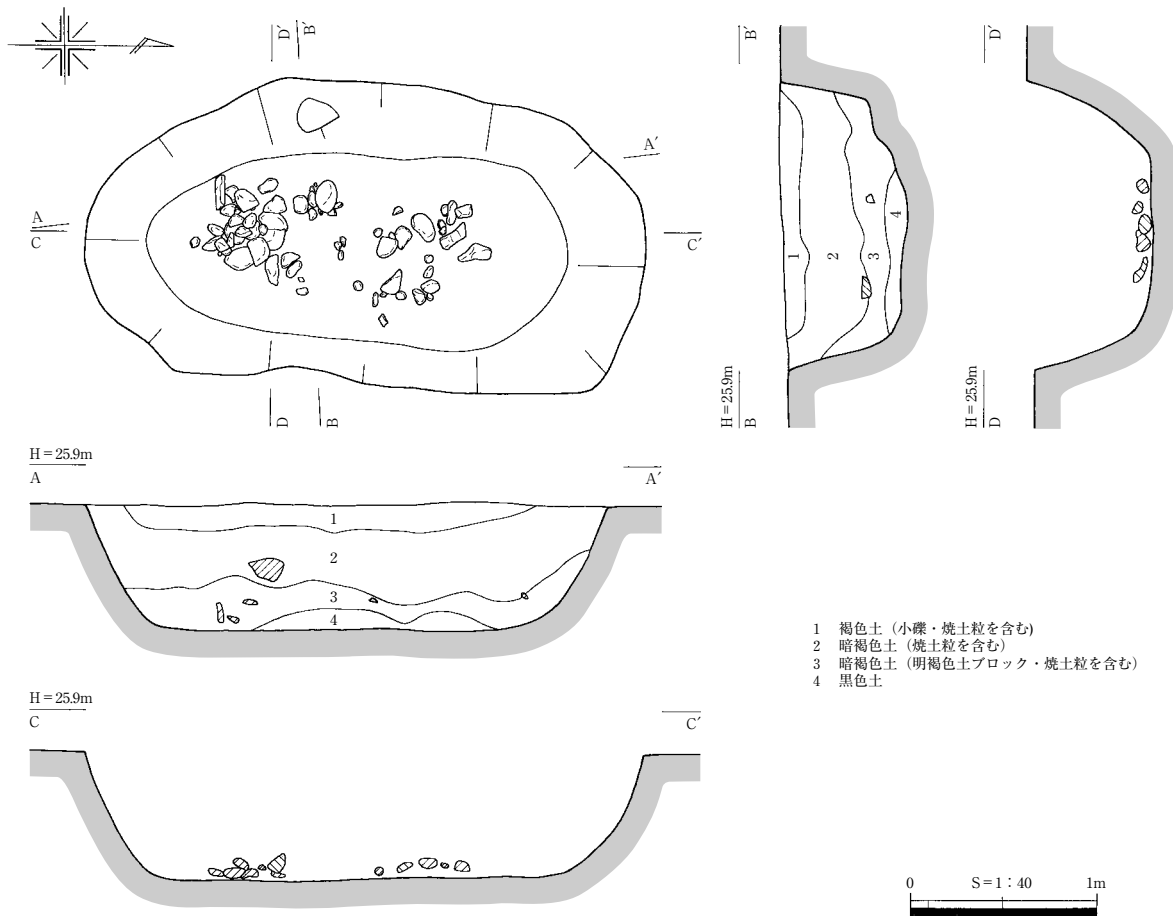
第34図 SK2実測図・遺物出土状況図



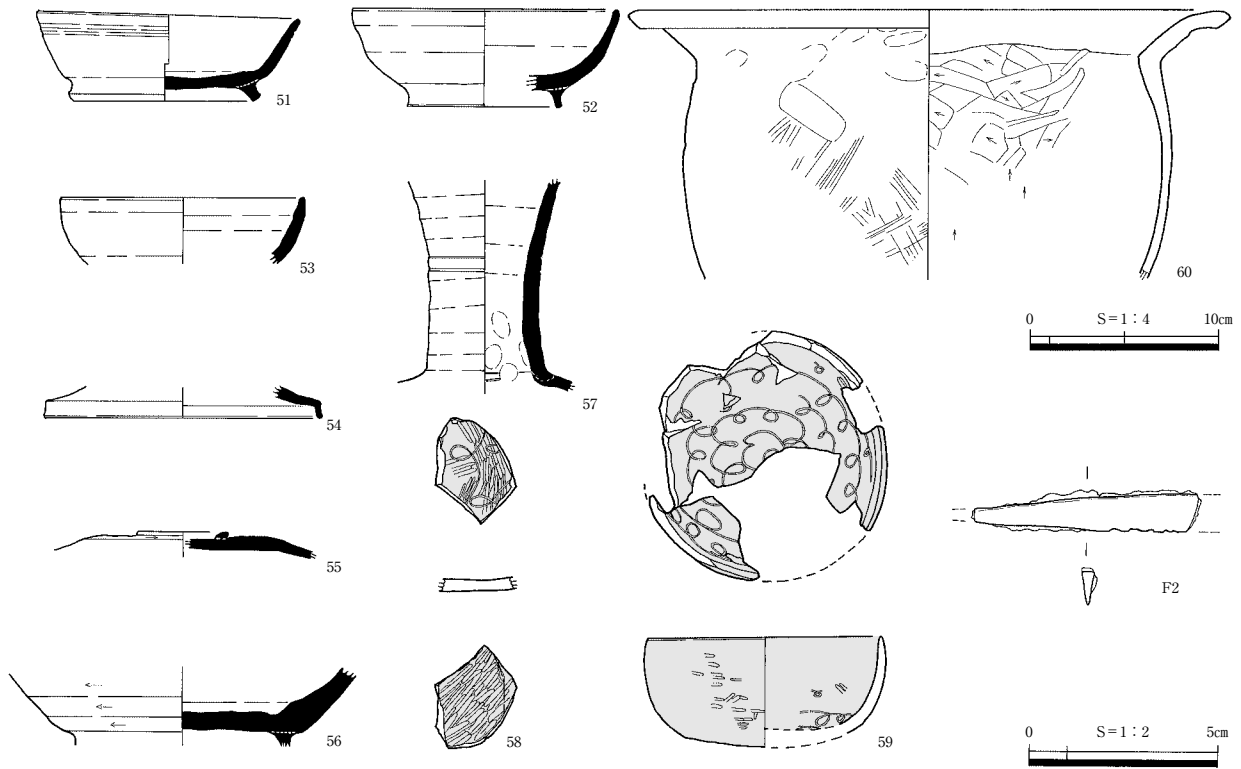
第35図 SK2出土遺物

出土遺物には、44の静止糸切り痕が残る須恵器坏、45・46・48の赤彩土師器坏、47の赤彩土師器皿、49・50の土師器甕がある。土師器坏、皿のうち46・48の外面にはヘラミガキが見られるが、内面調整を含め、ヘラミガキ調整が省略されるようになる。F1は椀形鍛冶滓である。

本遺構の時期は出土遺物から8世紀前半頃が考えられる。



第36図 SK3実測図



第37図 SK3出土遺物



第38図 SK3遺物出土状況図

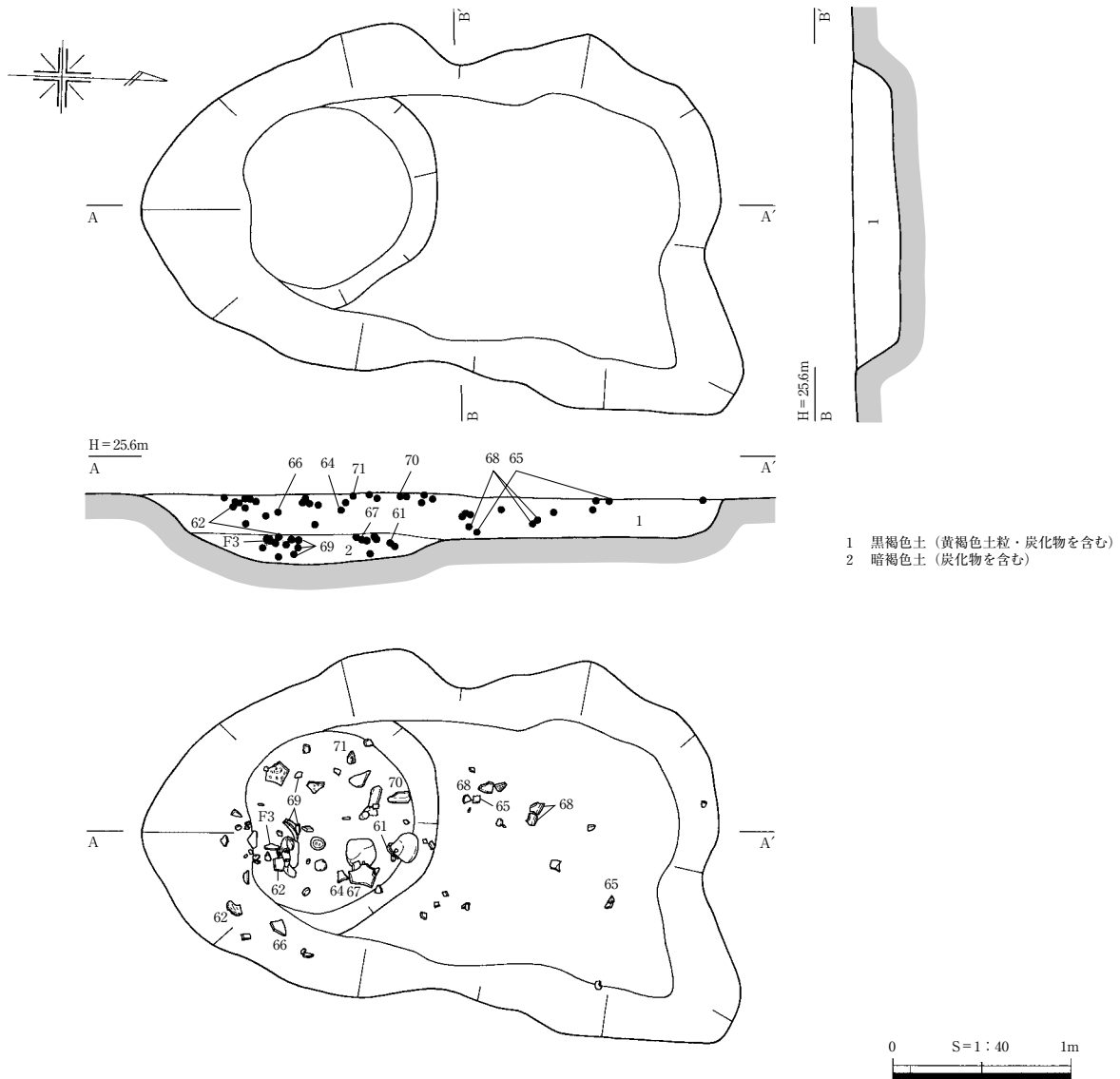
SK3 (第36図、PL. 4)

I39グリッド北側に、標高25.5mの高さで確認した。SI3の東側を掘り込んで存する。平面楕円形を呈する土坑で、規模は東西1.60m、南北2.98m、深さは検出面から70cmを測る。土坑長軸の方位はN-3°-Eとする。

本遺構の底面には東西0.76m、南北1.60mの範囲で、高さをほぼ同じくする礫が敷かれている状況が確認された。敷かれた礫には粗密が認められ、中央部には小さめの礫がわずかに敷かれる程度であるが、礫敷きの状況から本遺構は墓であった可能性が高い。

埋土の状況では、特に棺痕跡等を確認することはできず、埋土堆積の状況は自然堆積のような状況を呈する。しかし、3層中には明褐色土（第2遺構面の土）がブロックで含まれていた。東西壁の立ち上がりもほぼ垂直で、第2遺構面の土が崩壊して堆積した状況ではないことから、土坑を掘削した際の土を土坑埋土にしたと考えられる。また、上層1～3層中にはSI3を壊した際の焼土と思われる黄褐色土の粒が含まれている。

遺物の出土状況は、上層から下層にかけて広い範囲で認められる。これらの出土遺物には混入と思われる遺物も含まれるが、底面の礫直上から出土した高台坏51、体部との接合箇所を打ち欠いた長頸壺頸部57のように本土坑に伴うと思われるものが下層を中心に認められる。



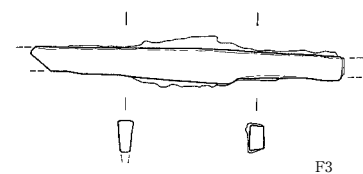
第39図 SK4実測図

出土土器51～57は須恵器、58～60は土師器である。51・52は高台坏で、51の坏底部にはヘラ切り痕が残る。また口縁部外面には2本の沈線が施される。53は坏、54・55は蓋である。54は口縁端部が明瞭に高く作り出されている。55は輪状つまみを持つ。56は台付壺、57は長頸壺である。57は体部との接合箇所を打ち欠いたと思われる。58は赤彩された皿もしくは坏で、外面はヘラケズリ、ナデの後丁寧なヘラミガキを施す。内面はナデ後ヘラミガキ、螺旋暗文を入れる。59は赤彩された鉢で、風化のため調整は不明瞭ではあるが、内外面ナデ後ヘラミガキが施されたと思われる。内面にはその後、5段にわたる螺旋暗文が外から内の順番で施される。60は土師器甕、F2は刀子である。

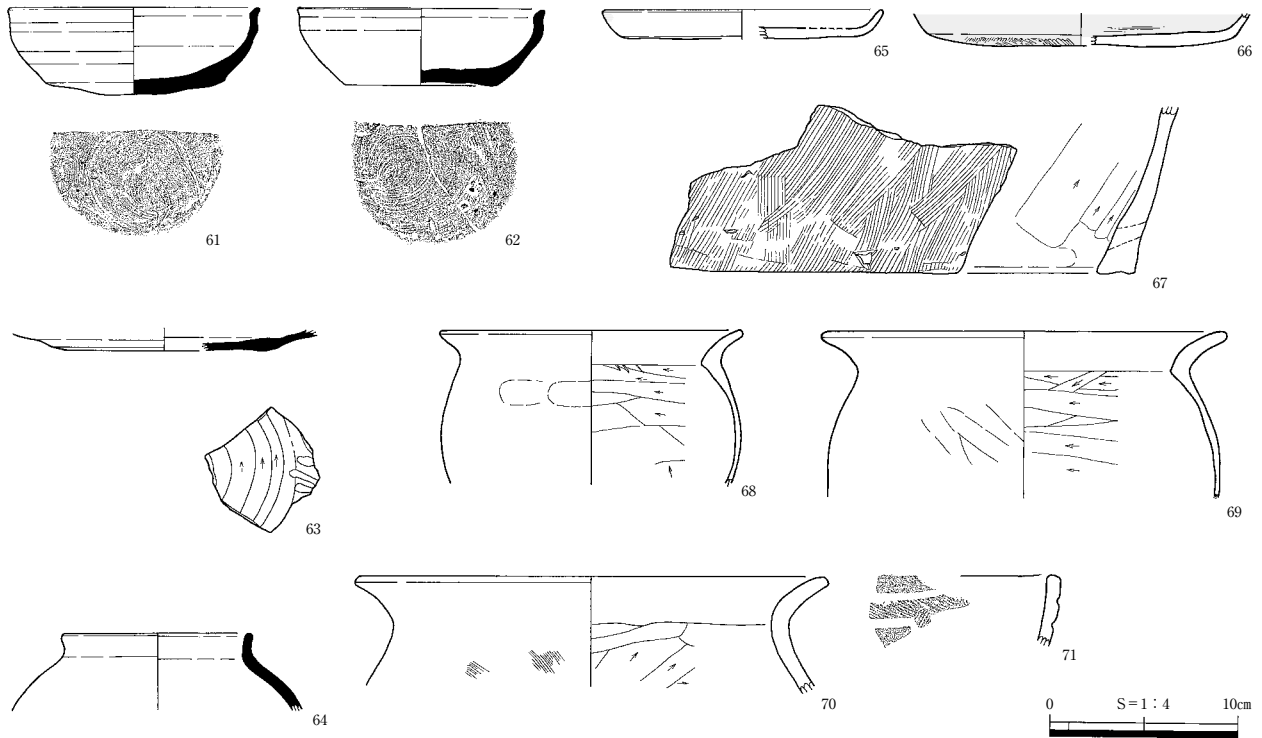
本遺構の時期は、51の底部がヘラ切りによること、高台が坏部の内側に内傾して付くことや、59では内外面ナデ後ヘラミガキが施され、調整に省略が見受けられないことから7世紀末葉頃と思われる。

SK4 (第39図、PL.5)

H39グリッドのほぼ中央に位置し、標高約25.4mの高さで検出した。平面形は歪な楕円形を呈する。規模は東西2.10m、南北3.24m、



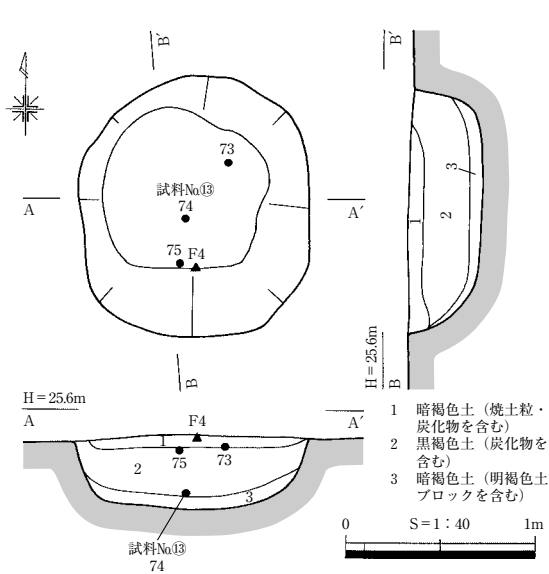
第40図 SK4出土鉄製品



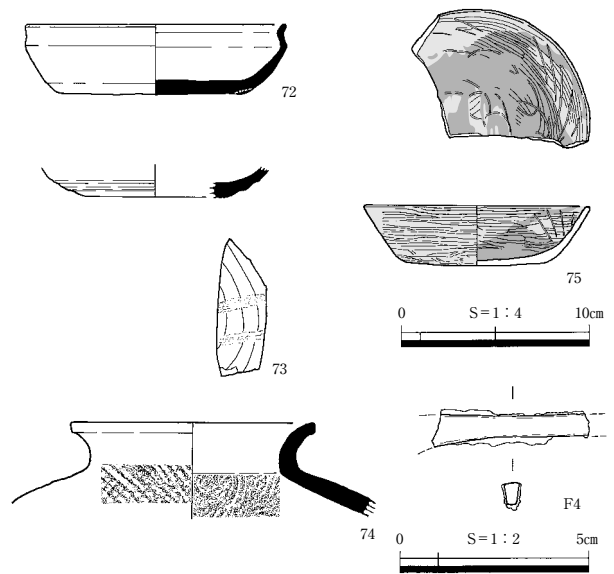
第41図 SK4出土土器

深さは南側の最深部で遺構検出面からおよそ40cmを測る。埋土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、ともにわずかに炭化物を含んでいた。

出土遺物であるが、61~64は須恵器で、61・62の坏底部外面には回転糸切り痕が認められる。口縁部下端は強めのナデにより、括れた形状を呈すが、口唇部の稜はだれている。63は皿で、底部外面は回転ヘラケズリによる調整がみられる。64は短頸壺である。65~70は土師器で、65は皿、66は皿もしくは坏である。ともに赤彩が内外面に施される。65は器面の風化が著しいが、内面及び外面口縁部はナデ、底部外面はヘラケズリ後ナデ、もしくはヘラミガキ調整である。66も内面及び外面口縁部はナデであるが、内面にはハケの痕を残す。底部外面はヘラケズリ後ナデ、ヘラミガキを施す。そのほか67はカマド、68~70は甕、71が縄文土器、F3は刀子である。



第42図 SK5実測図



第43図 SK5出土遺物

本遺構の時期であるが、61・62の須恵器坏に回転糸切り痕が認められることや、65・66の土師器皿等の器面調整のヘラミガキが省略されることなどから8世紀中頃と考えられる。

SK5 (第42図、PL.5)

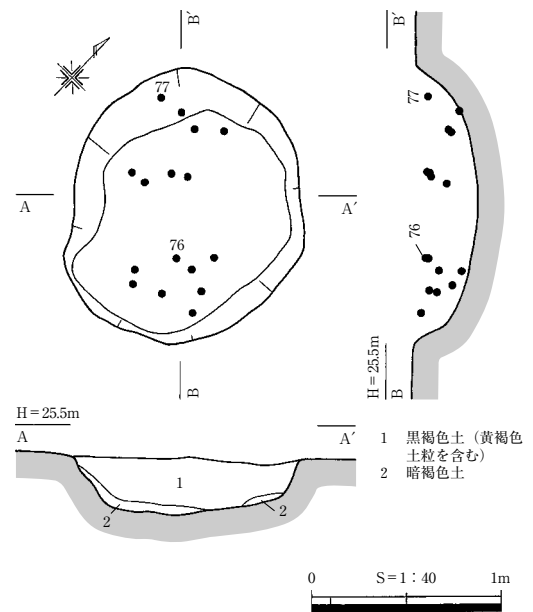
H39グリッド南側、SK3の西側に位置し、SI3を掘り込んで存する。標高25.5mの高さで認められた平面円形の土坑である。規模は東西1.23m、南北1.35m、深さは検出面から40cmを測る。埋土は3層に分層でき、1・2層には炭化物、1層には焼土粒が認められたが、これはSI3から流入したものと思われる。

出土遺物はわずかであった。72の須恵器坏は口縁部下端を強めのナデにより、括れた形状をつくる。器厚がやや薄いため、口縁部の形状はやや鋭い観を受ける。底部外面はヘラ切りによる。73の須恵器坏には墨書の痕跡が認められるが、破片資料であるため、書かれた文字は不明である。底部に静止糸切り痕がわずかに観察されるが、丁寧にナデ消している。74は須恵器横瓶、75は土師器坏で内外面を赤彩し、内面及び外面口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ、底部外面はヘラケズリ後ヘラミガキを施す。内面には底面に螺旋暗文、口縁部に放射状暗文が入れられる。内面底部を中心に漆が付着しており、遺存の状況からパレットとして利用されていたと思われる。

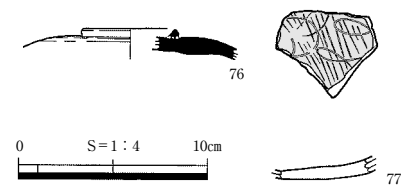
SK5の時期であるが、72・73の須恵器坏の底部調整がヘラ切りや静止糸切り痕を丁寧にナデ消していること、75の土師器坏の器面調整がヘラミガキによって丁寧に施されていることから7世紀末から8世紀初頭頃と思われる。

SK6 (第44図、PL.5)

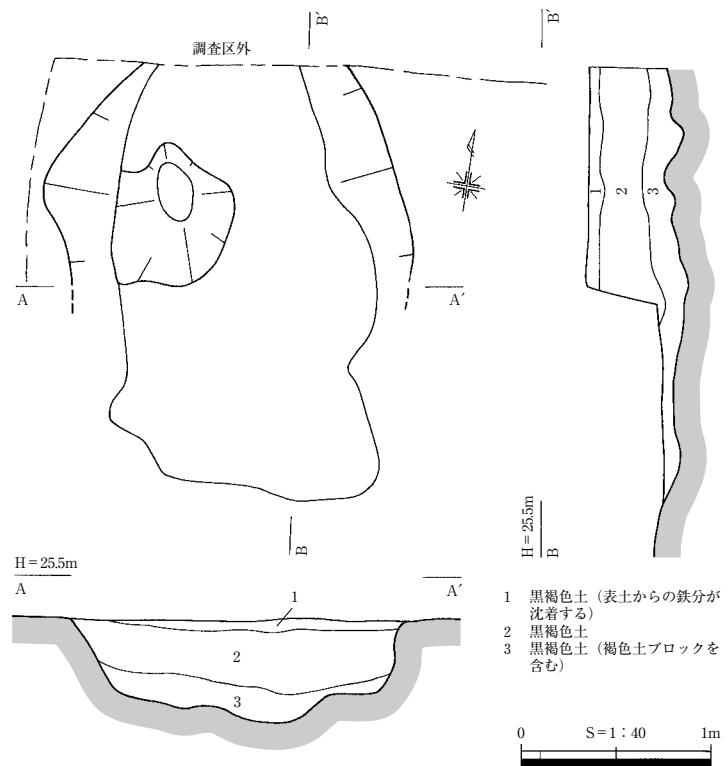
I40グリッド杭の地点に存する。SK6は試掘トレンチで確認されていた平面円形の土坑であるが、その上半部について



第44図 SK6実測図



第45図 SK6出土土器



第46図 SK7実測図



第47図 SK7出土土器

は試掘トレンチによって削平されている。確認できた標高はおよそ25.4mであった。規模は東西1.30m、南北1.40m、深さは検出面から30cmを測る。

埋土は2層に分層でき、上層の黒褐色土には焼土と思われる黄褐色土粒が含まれる。出土遺物は自然石が多いが、わずかに土師器、須恵器の破片が出土する。

76は須恵器坏蓋の天井部の破片で、輪状つまみが付けられている。調整は内面ナデ、外面は回転ヘラケズリによる。77は土師器坏、もしくは皿で、内外面は赤彩される。外面はナデ後ヘラミガキ、内面はナデ後に放射状暗文、螺旋暗文が施される。

本土坑の時期は、77の器面調整ヘラミガキ、暗文の有無などから8世紀前半頃と思われるが、SK6はSK5の西側2.4mに位置し、SK5と形態や規模をほぼ同じくする土坑であることから、出土遺物の時期には若干差が認められたが、関連した遺構の可能性はある。

SK7 (第46図、PL.5)

F38グリッドの西側に位置する。SK7の南側は試掘トレンチで確認されていたが、その上半部は試掘トレンチによって削平される。また、北側は調査区を抜け、その範囲の確認に努めたが調査区外にのびる。また、SK7はSI4を掘り込んでいる。確認できた範囲ではあるが、東西は上端で1.90m、南北は下端で2.25mを測り、平面形が歪な楕円形を呈する土坑である。深さは検出面から約50cmで、土坑内西側はわずかに窪む。

出土遺物はわずかであり、土師器甕口縁部78がある。

本遺構の時期は出土遺物からは不明であるが、SI4を掘り込んでいることから、8世紀前半以降と考えられる。

(5) 溝状遺構

SD1 (第48図、PL.6)

SD1は調査区中央を南北に掘り込んだ溝状遺構である。本遺構は調査区東側の黒褐色土層と西側の礫層の境に位置するが、調査区北側では、その走向を西に向け、礫層を掘り込んでいる。また、J39グリッドの南側、1mほどの範囲では、底面の深さが浅かったためか検出面での状況は途切れるように存する。SD1は、南北側とも調査区外に続き、全長は不明であるが、検出した長さでは、上述の途切れる範囲を含め52mを測る。幅は最大で180cm、深さは約25cmである。埋土は7層に分けられたが、多くは砂礫を含む。

出土遺物には79～89の弥生土器、90の縄文土器が見られる。79～87は甕口縁部の破片で、口縁部外面は、多条平行沈線文、もしくはヨコナデが認められる。79・83・85の肩部には貝殻腹縁による波状文や多条平行沈線文が認められるほか、86、87の頸部には棒状工具による穿孔が見られる。88は高坏で外面には横、縦方向のヘラミガキを施す。89は甕頸部の破片で貼付突帯には刻目が入る。清水編年IV-2様式、弥生時代中期後葉の土器と考えられる。90はL-Rの単節縄文を地文とし、隆帯に刻目を施す。縄文時代中期前葉、船元1様式に近い。

SD1の時期であるが、出土土器79～88は、その特徴から清水編年V-3様式に相当すると考えられる。本遺構の出土遺物の中では最も新しい時期のものである。このことから弥生時代後期後葉の年代が考えられる。

SD2 (第50図、PL. 5)

G40グリッド東側に位置する。幅約20~40cmの溝状遺構で、約3mの長さで認められた。南側1mほどはSI1に上面を削られている。深さは10cmほどで、砂礫を含んだ褐色土を埋土とする。出土遺物は認められなかったが、SI1以前であることや、SD1に平行していることから考えるならば、SD1と同時期の遺構の可能性が高い。

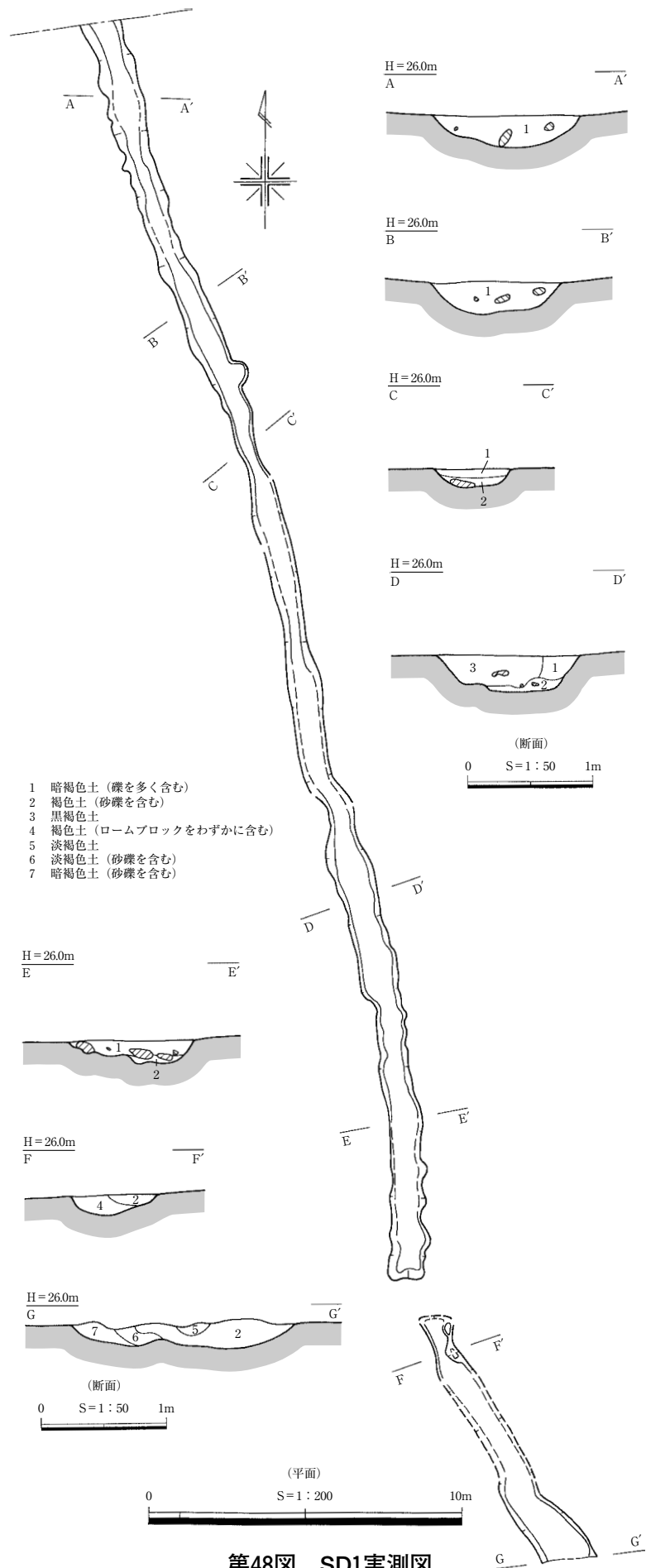
SD3 (第51図、PL. 6)

K38グリッド北側に位置する溝状遺構である。南側は試掘トレンチによって削平されていた。確認できた範囲では幅30~40cm、長さ1.9mを測る。長さについては、本遺構南側に位置する2m幅の試掘トレンチより南側では検出できなかったもので、4m以下のものである。埋土は砂礫を含んだ褐色土で、遺物には口縁部下端を強くナデて括れさせる須恵器坏91が出土している。

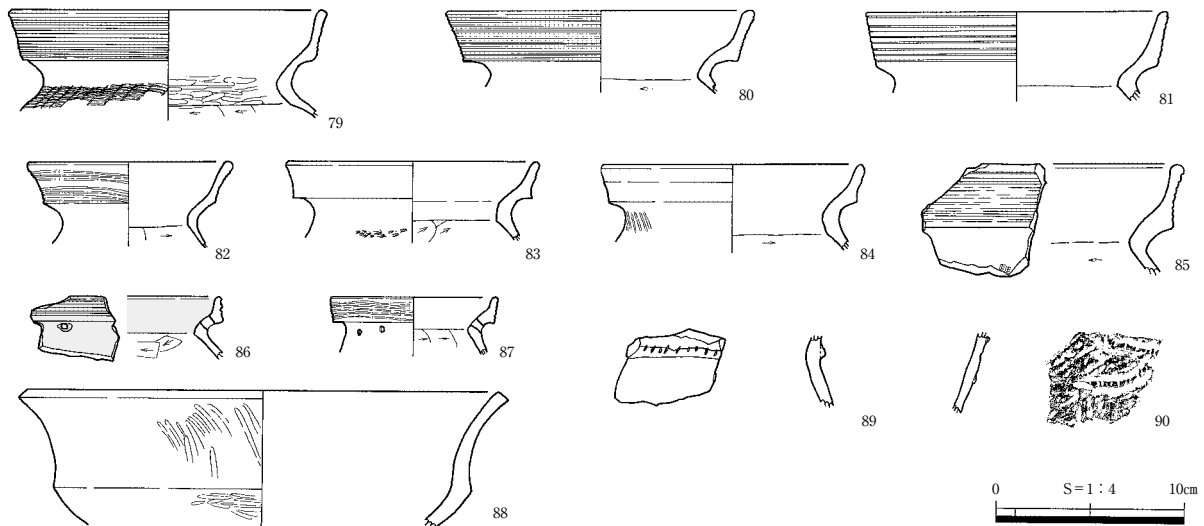
本遺構の時期は、91の口縁部下端の括れが明瞭に認められることから8世紀前半頃のものと考えられる。

SD4 (第52図、PL. 6)

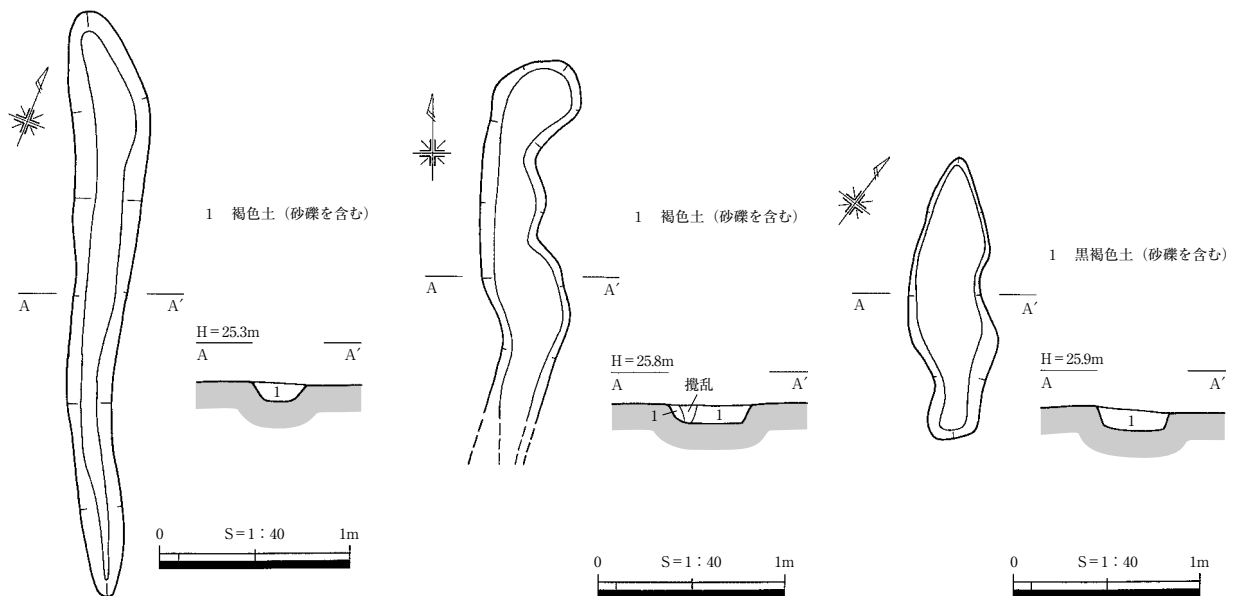
K38グリッド北西隅に位置する幅約40cm、長さ1.5mの溝状遺構である。深さは10cmほどで、埋土は砂礫を含んだ黒褐色土の単層である。出土遺物は認められなかった。時期は不明である。



第48図 SD1実測図



第49図 SD1出土土器



第50図 SD2実測図

第51図 SD3実測図

第52図 SD4実測図

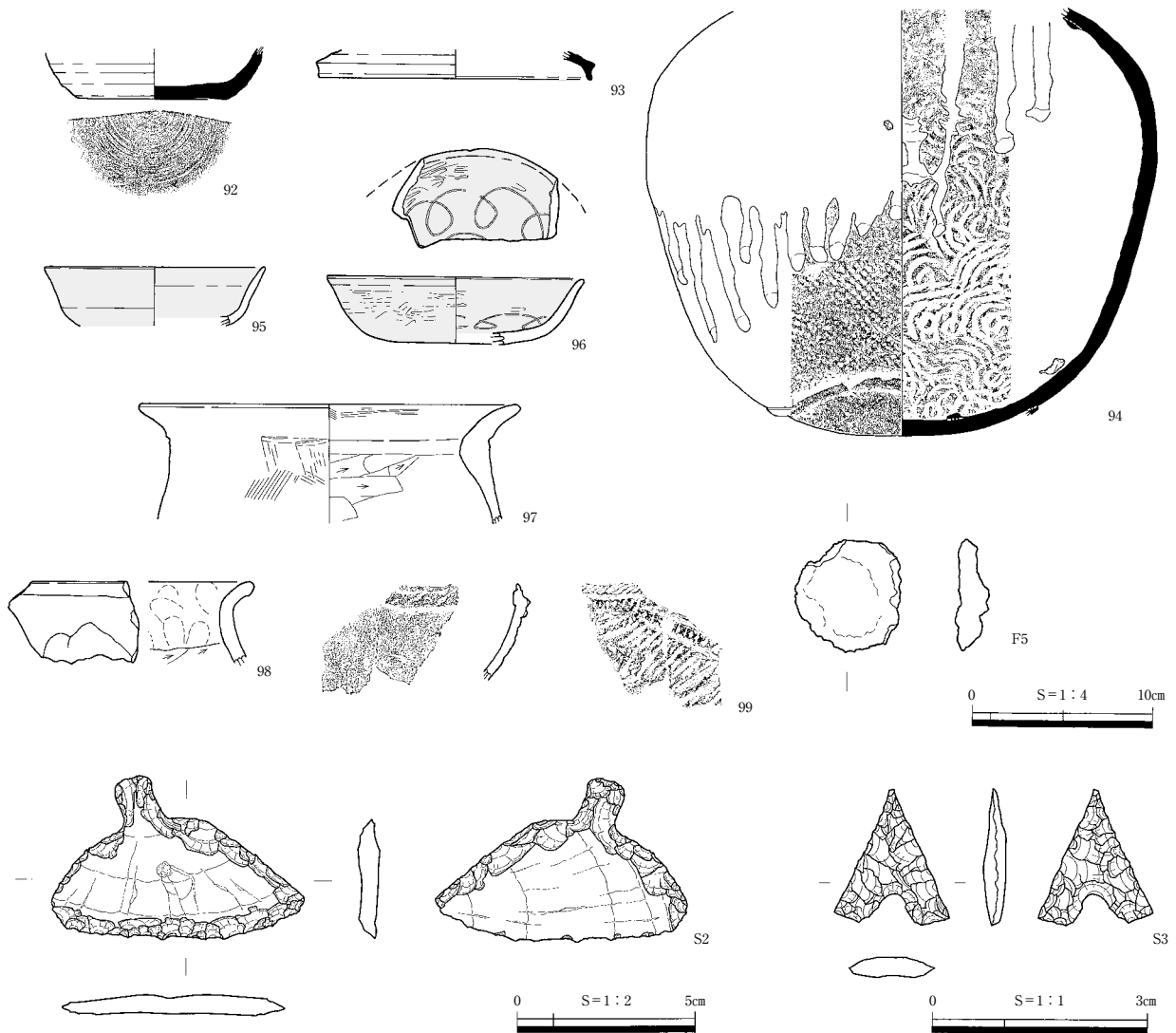
(6) 包含層出土遺物

第1遺構面である黒褐色土層は遺物包含層であるが、古代の土器等の包蔵は黒褐色土層中の浅い部分に限られた。さらに、遺物の包含は、遺構の立地と同様に、調査区西側に形成された礫層の範囲ではほとんど認めることはできず、調査区の東側を中心に確認される。また調査では、遺構検出面である黒褐色土と遺構埋土の判別が困難であったため、包含層遺物として取り上げた遺物の中には検出に至らなかった遺構の遺物も含む可能性がある。

出土土器では、92~94が須恵器、95~98が土師器、99が縄文土器である。92は坏底部の破片で、底部外面には回転糸切りの痕跡を残す。93は蓋の口縁部である。口縁部は高くつくられており、天井部との境は明瞭である。94は肩部があまり張らない甕と思われる。内外面ともに自然釉が広い範囲にかかる。底部外面には、重ね焼きによって貼り付いたか、貼り付きを防ぐために台として用いたか不明であるが、坏口唇部と思われる破片が輪状に認められる。95・96は内外面赤彩された坏で、95



第53図 SD3出土土器



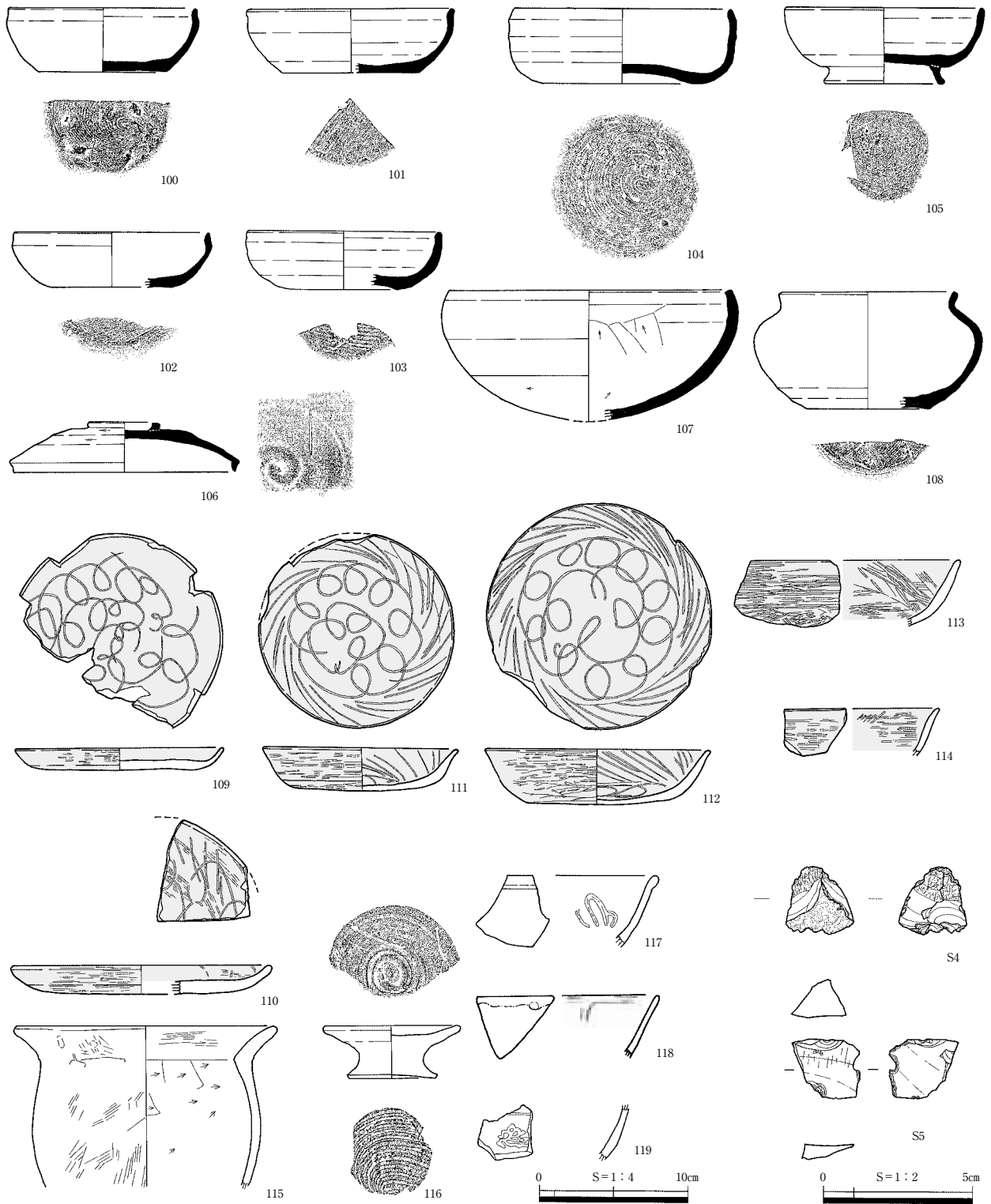
第54図 1区包含層出土遺物

の調整はヨコナデのみでヘラミガキは省略されている。復元径ではあるが、口径は12cmとかなり小ぶりである。96は内外面ヨコナデの後にヘラミガキを施す。内面にはさらに螺旋暗文を入れる。97・98は甕の口縁部から頸部にかけての破片である。99はL-Rの単節縄文を地文とし、外面の隆帯には刻目を施す。内面は口縁部を肥厚させ、Rの無節縄文を付ける。縄文時代中期前葉の船元1様式に近いと思われる。そのほか出土遺物には、F5の椀形鍛冶滓、S2の石匙、S3の石鎌などが認められる。

(7) 表土出土遺物

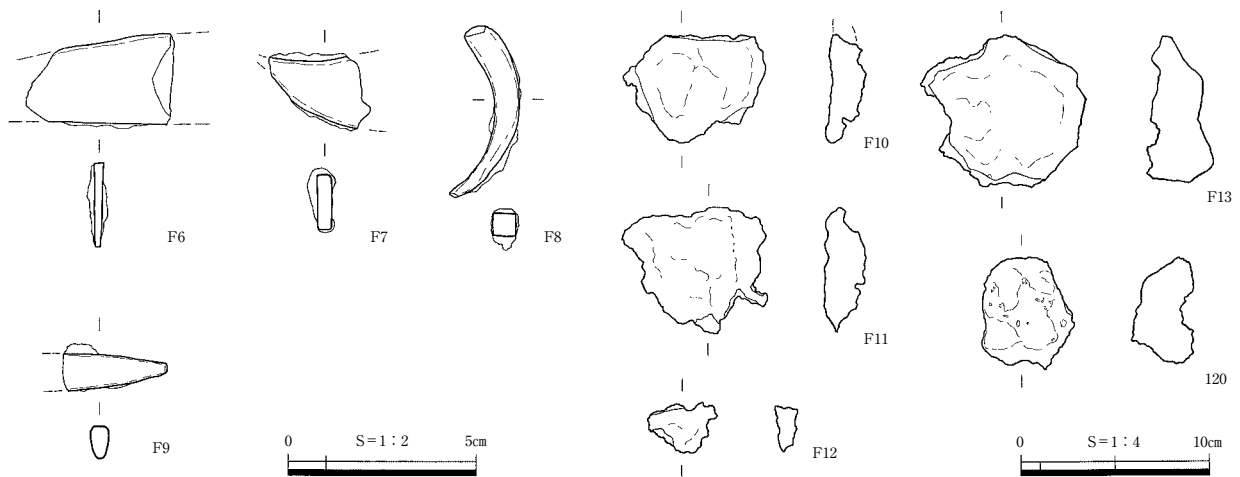
1区の表土の状況は、上層の褐色土と下層の灰褐色土に分けられるが、出土遺物は下層の灰褐色土中で多くが確認された。

出土土器には、100～108の須恵器、109～115の土師器、116の土師質土器、117～119の青磁等が認められる。100～104は坏で、100～102は口縁部下端に強いナデを施し、口縁部を括れさせたものである。体部の整形はロクロナデによる。また、100の底部には回転糸切り痕、101・102には静止糸切り痕が残る。103・104は口縁部の立ち上がりをほぼ垂直にさせるもので、103は体部から口縁部にかけては緩やかに湾曲させる。口縁部の状況は外面をやや強めのナデにより、わずかに括れさせるが、内



第55図 1区表土出土遺物

面側は丸く肥厚させるなど、100～102のような「く」の字状の口縁部の屈曲は見せない。また底部は縁部から中心部に向かって上底状の高まりを呈するが、外面に静止糸切り痕が残ることから乾燥段階でのたわみと思われる。104も底部の状況は103と同様、上底状の底部で、回転糸切り痕が認められる。体部から口縁部にかけての立ち上がりは急で、口縁部は内傾させる。105は高台坏で口縁部の立ち上がりをほぼ垂直にさせるタイプの坏部を持ち、底部外面には回転糸切り痕を残す。106は蓋で、



第56図 1区表土出土鉄関連遺物

天井部には輪状つまみが付く。口縁部は高くつくられており、天井部との境には明瞭な段が認められる。また、天井部内面には「|」状の工具痕が見られ、ヘラ記号の可能性もある。107は鉢、108は短頸壺である。108の底部には静止糸切り痕が見られる。

109・110は内外面赤彩の皿で、ともに体部外面はヨコナデ後ヘラミガキを入れ、内面には螺旋暗文を入れる。110は丁寧につくられており、内面や底部外面はヘラミガキ、内面には放射状暗文を施す。螺旋暗文も109が雑然とするのに比べ、110は精緻である。111～114は内外面に赤彩をする坏で、111・112では調整等をほぼ同じくする。内外面の口縁部はヨコナデにより調整し、底部にはヘラケズリを施す。さらに外面は体部、底部とも丁寧なヘラミガキを入れる。内面では、底部に螺旋暗文、口縁部に放射状暗文が見られるが、111が螺旋暗文を内から入れるのに対し、112は外から入れる。113・114も口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキを施し、113には放射状暗文が入る。115は甕である。

116は柱状高台の皿である。皿の深さは浅い。高台部は外に張り出し、底部外面には回転糸切り痕を残す。高台部の発達はあまり認められず、浅い皿部を持つことなどから12世紀後葉頃のものと考えられる。117～119は碗で、117は口縁部を玉縁状にし、内面には花文と思われる文様が浮彫りされている。118は内面に縦横方向、または鉤状の刻文が見られる。119は内面に花文と思われる象嵌がされた高麗青磁である。

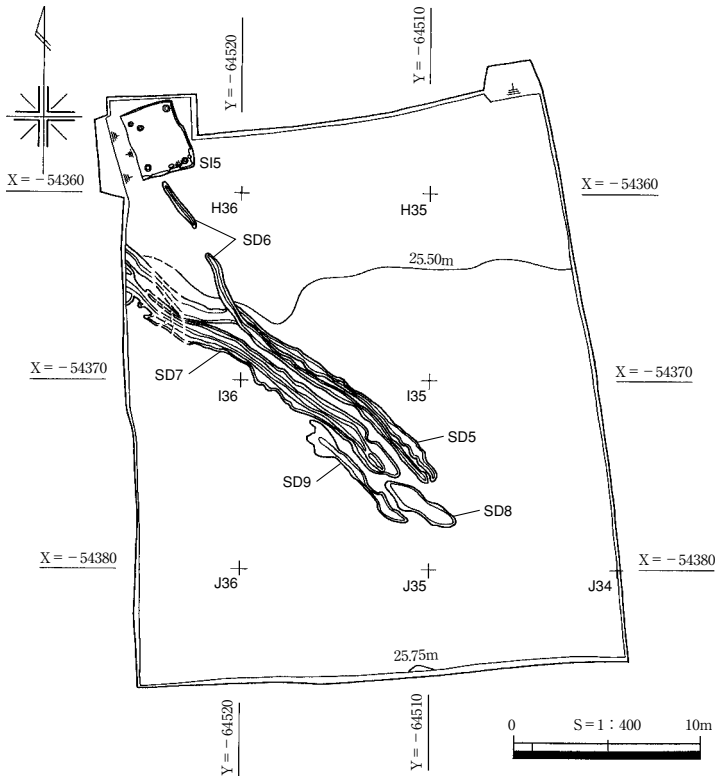
出土石器では、S4の石核や、S5の剥片が見られた。材質はS4が瑪瑙、S5が黒曜石である。

出土鉄製品、及び関連遺物では、F6が長さは破損しているため不明であるが、現況で幅24mm、厚さ3mmの板状の鍛造鉄製品で、長辺の片側には刃部が認められる。鎌と思われる。F7～F9は不明鍛造鉄製品、F10・11・13は椀形鍛冶滓、F12は鍛冶滓、120は羽口の破片である。

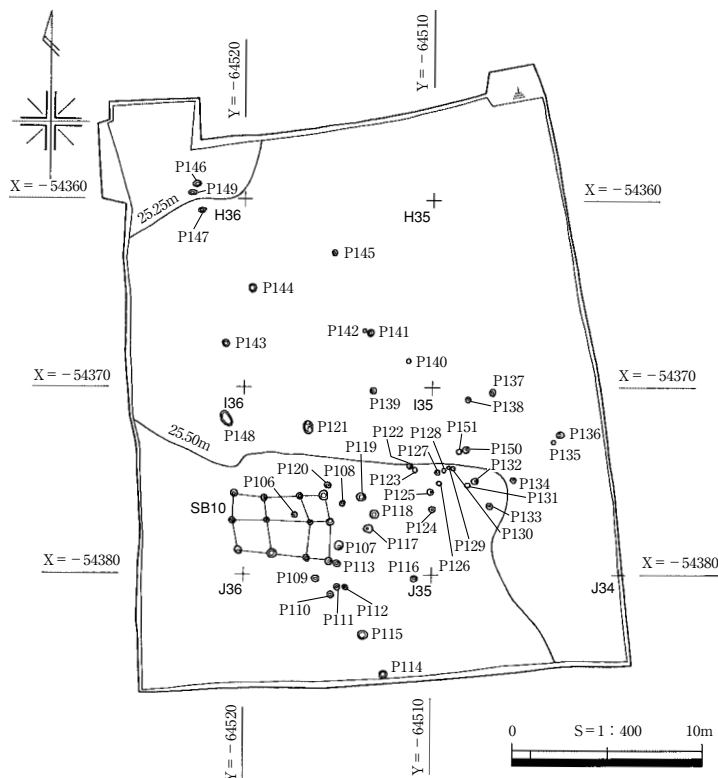
第3節 拡張区の調査

(1) 調査の概要

拡張区は1区の東側に位置する、南北約30m、東西約25mの平面台形状の調査区である。本調査区は1区で認められた遺構及び遺物包含層が調査区外にのびる可能性が予想されたため、新たに設定した調査区である。この拡張区の調査も1区と同様、2面の遺構確認面、及び遺物包含層を対象とした。



第57図 拡張区第1遺構面遺構配置図



第58図 拡張区第2遺構面遺構配置図

拡張区土層堆積は、第3章第1節で触れたように1区と同様で、勝田川の沖積作用によって形成されている。

第1遺構面は表土下およそ45cmの高さで確認された。地形は南から北へ緩やかに傾斜し、標高およそ25.5mの高さに位置する。また、調査区北東側においては表土直下にソフトローム層が認められる状況であり、旧地形が東に向かうに従い、徐々に高くなっている。

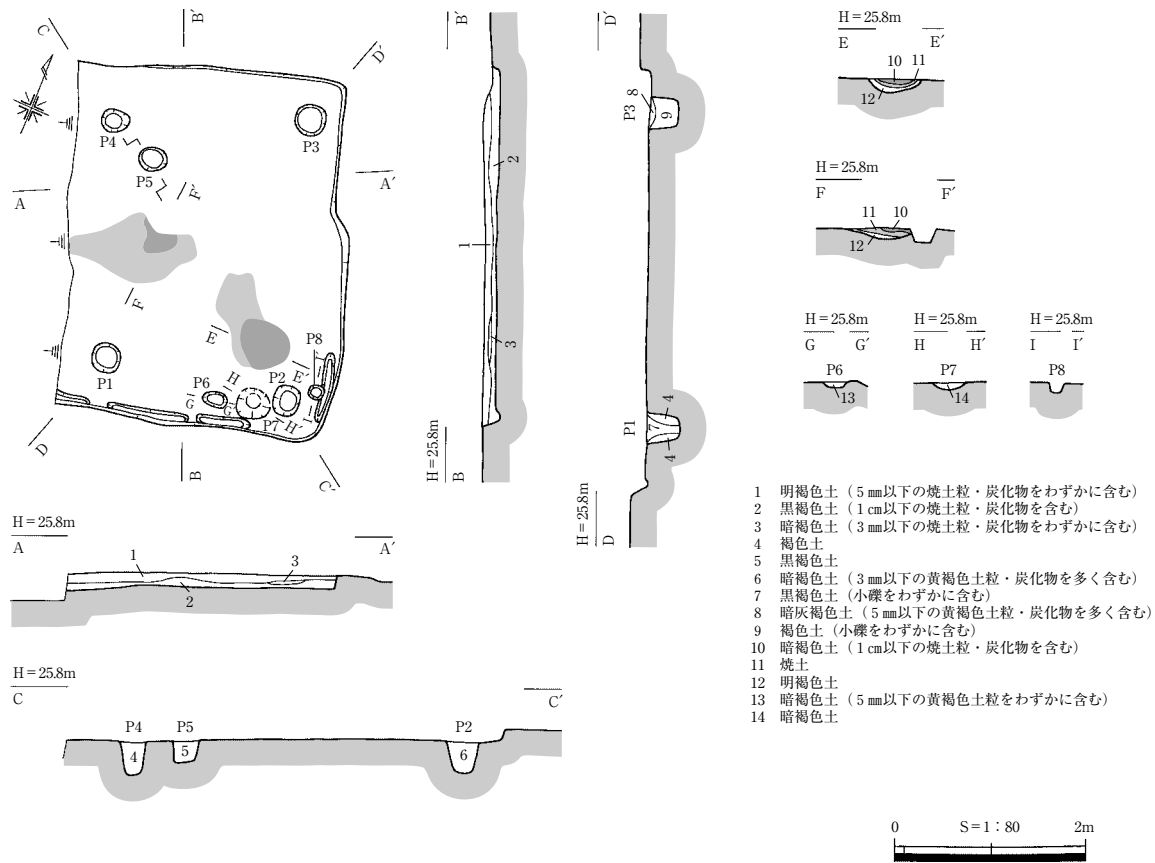
拡張区の第1遺構面で確認された遺構は、竪穴住居跡1棟、溝状遺構5条である。また、第2遺構面での確認である掘立柱建物跡1棟（SB10）は、調査の状況から本来は第1遺構面に帰属する可能性が高い。

確認された遺構では、古墳時代の遺構として、調査区の中央付近から北西に向かつてのびる溝状遺構（SD5～9）がある。これらのSD5～9は一部で切り合いながらほぼ平行して認められる。SD9からは古墳時代前葉頃の土師器が出土する。他のSDでは、SD7からは青磁の破片が1点出土したが、遺構の走向などからは、SD5～9は同時代のものと考えられるため、後世の混入と思われる。奈良時代に属する遺構は、竪穴住居跡1棟（SI5）がある。このSI5埋土中からは硯として転用した須恵器蓋や、刀子、袋状鉄斧などが出土した。

(2) 竪穴住居跡

SI5（第59図、PL.7）

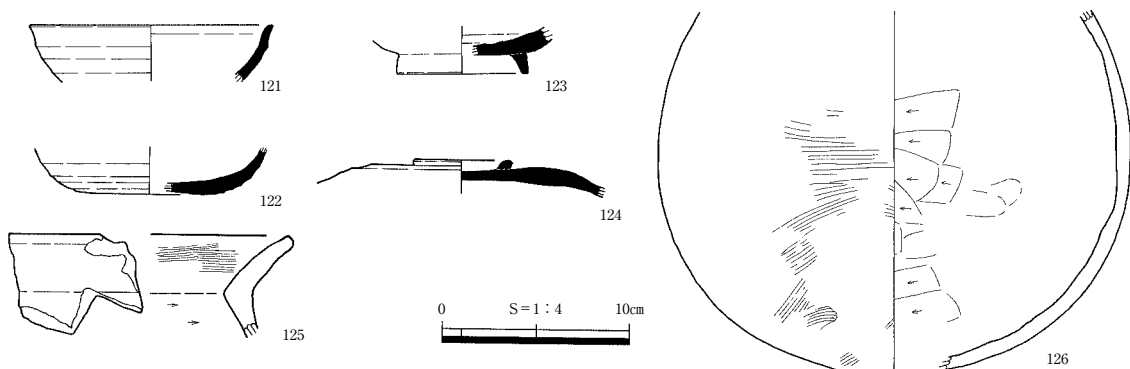
G36グリッドに位置する。本住居跡は調



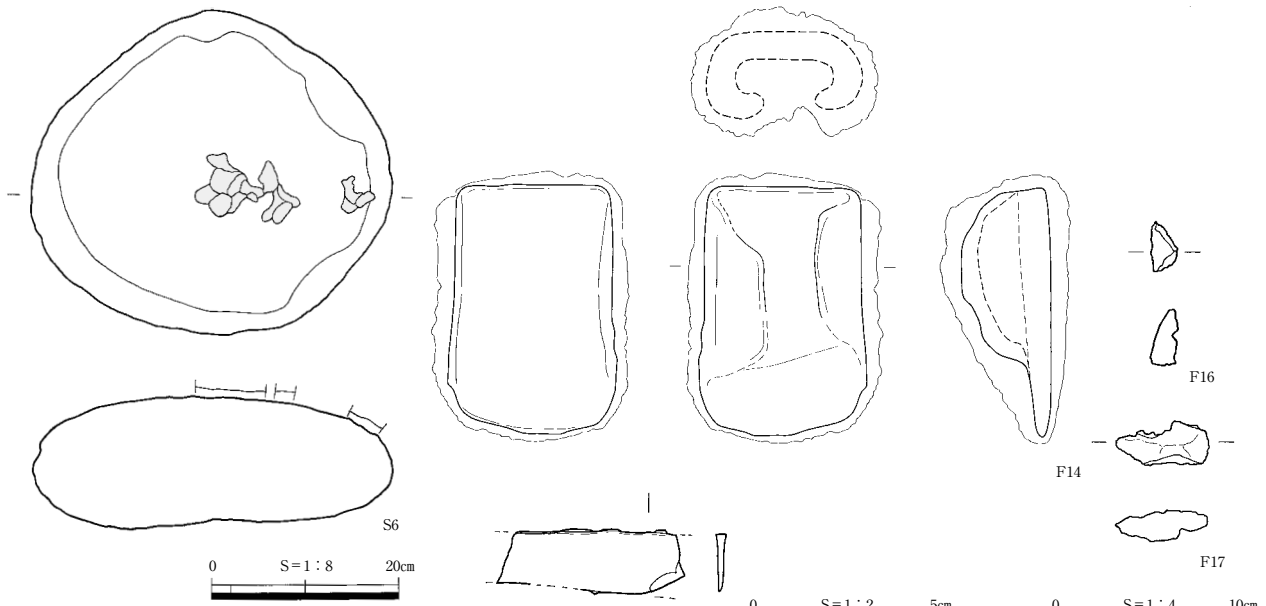
第59図 S15実測図

査区の北西隅にあたり、遺構の大半が調査区外に位置したことから、一部拡張して調査にあたった。また西壁部分は、調査区内に認められた暗渠排水に伴う攪乱溝により破壊されている状況である。

本住居跡の規模は、南北で3.8m、東西では残存する範囲で3.0mを測る。東西規模については西壁部分が遺存しないことから明らかでないが、上述の攪乱溝よりも西側には認められないことから、4.0mを超える大きさにはならない。平面形は方形であったと思われる。検出面から床面までの深さは15cmと浅い。埋土は明褐色土、暗褐色土、黒褐色土に分けられ、いずれの層にも焼土粒と炭化物が含まれる。床面からは焼土面2面、ピット8基、また部分的ではあるが周壁溝が確認された。焼土面は住居のほぼ中央と南東側に位置する。ともに焼土面の一部に若干の窪みが認められ、共通した状況を呈する。確認されたピットのうち支柱穴と考えられるものはP1～4である。東側に位置するP2・3がそれぞれ住居隅に認められることから、西側に位置するP1・4との配置はやや歪になる。



第60図 S15出土土器

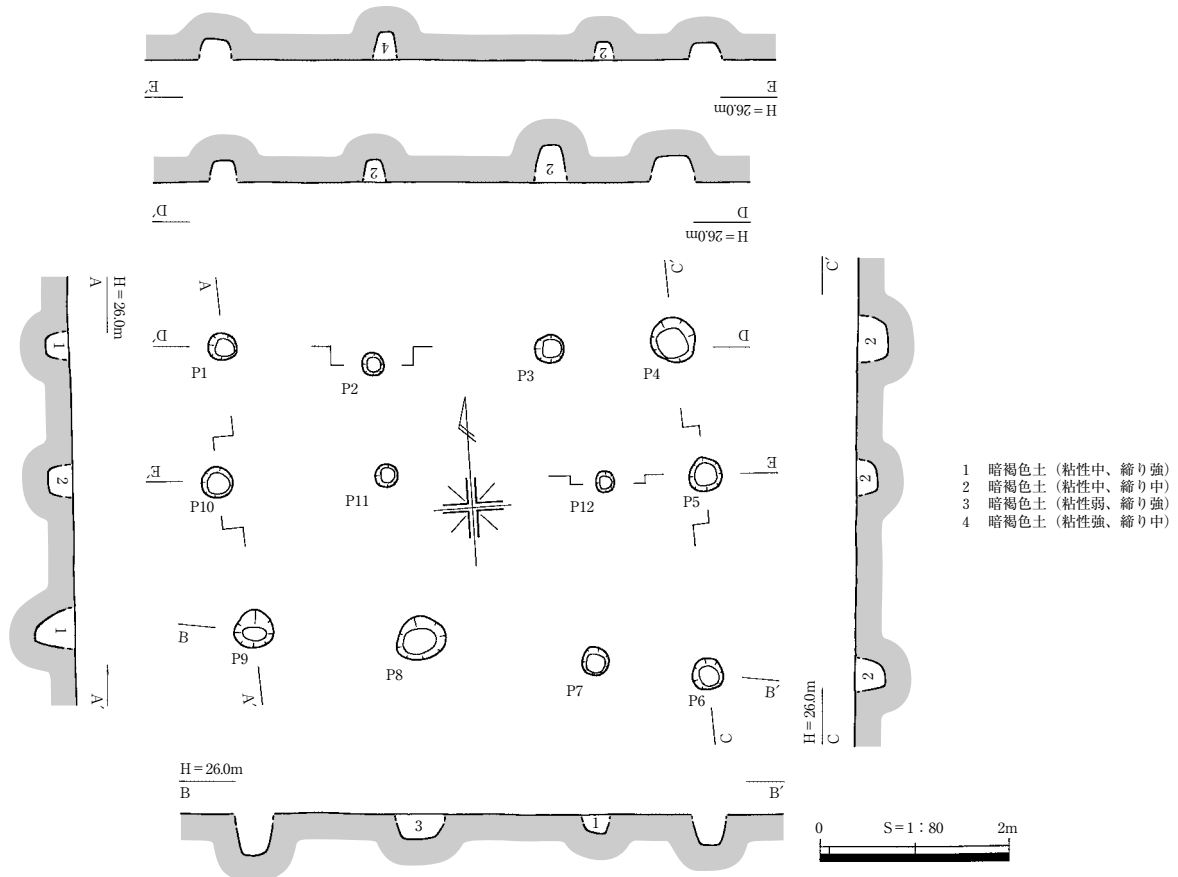


第61図 SI5出土石器

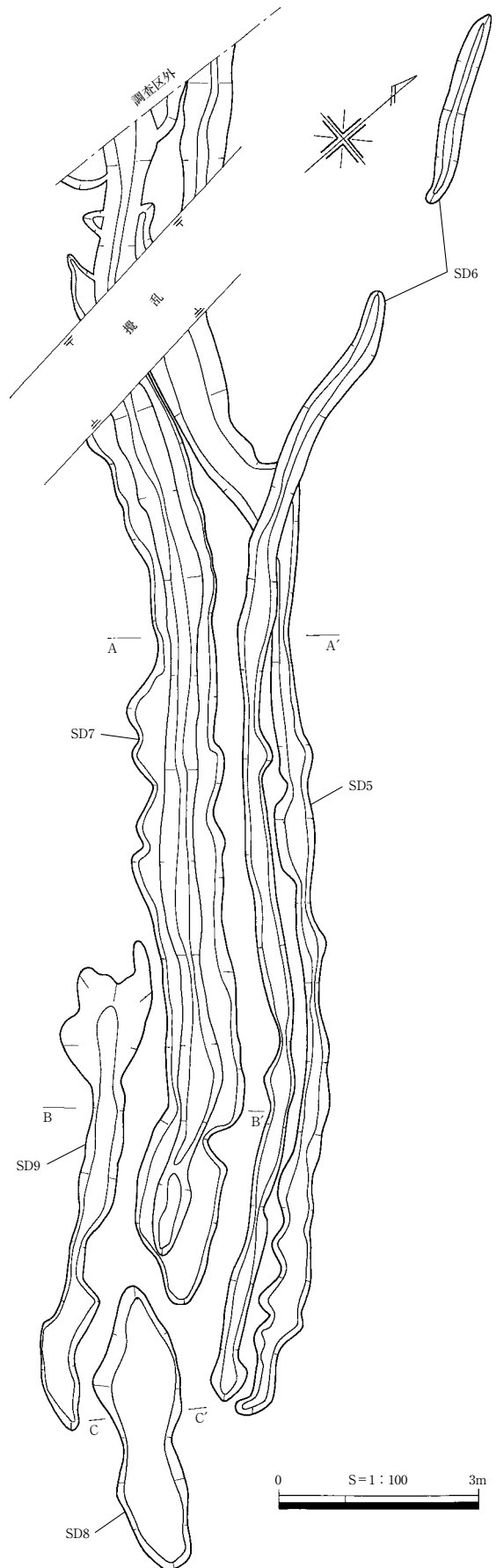
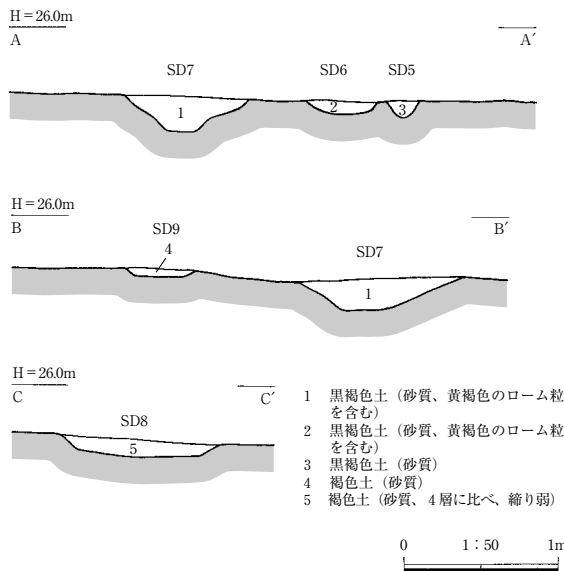
第62図 SI5鉄関連遺物

住居西壁部分が残存しないことから、西側においても住居隅に柱を配置した可能性もあるが、P1埋土では柱痕も認められたことや、P1～4でその深さの標高を揃えていることから、ここではP1～4を支柱穴と判断した。周壁溝は南東隅から南壁にかけて部分的に幅10cm、深さ5cm程度で認められた。

出土遺物では、121～124が須恵器である。121・122は坏で、ともに口縁部下端を強くナデ、口縁部を括れさせるものと思われる。122の底部外面には回転糸切り痕が見られる。123は高台坏で、高台は



第63図 SB10実測図



第64図 SD5～9 実測図

ほぼ垂直に取り付けられる。124は輪状つまみが付けられた蓋である。天井部内面では墨の痕跡を確認することはできなかったが、非常に磨られていることから転用硯と考えられる。125・126は土師器の甕である。S6は台石で、住居東壁寄りの床面直上で出土した。上面中央部分には敲打痕が認められる。また、F14は柄の装着部分を折り返した袋状鉄斧で、研ぎ縮まったためか、袋部から刃部までは短い。F15は刀子、F16・17は椀形鍛冶滓である。

時期は、122の底部回転糸切り痕や124の輪状つまみの蓋の存在から8世紀中頃と思われる。

(3) 掘立柱建物跡

SB10 (第63図、PL. 7)

I35グリッドの南西部に位置する桁行3間、梁行2間の総柱建物跡である。第2遺構面での確認ではあるが、調査の状況から第1遺構面に帰属すると思われる。主軸は平側を正面にしてN-1°-Eとし、規模は桁行4.8m、梁行3.0~3.5mで、桁行の柱穴間は心々で約1.2~1.9m、梁行の柱穴間は心々で約1.4~2.1mを測る。柱穴は直径約20~50cm、底面の標高25.2~25.5mとするなどばらつきが見られ、内部の柱穴は側柱穴に比べその規模を小さくする。出土遺物は認められず、本遺構の具体的な時期は不明であるが、調査の状況から飛鳥・奈良時代頃と思われる。

(4) 溝状遺構

SD5～9 (第64図、PL. 8)

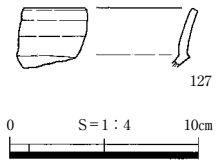
調査区の中央付近より北西側に向かって認められた溝状遺構である。北側の2条では切り合い関係が認められたため、古い時期のものをSD5とし、以下、遺構の名称は北側から順に付した。埋土はいずれも砂質の埋土である。また、SD9からは古墳時代前期前葉の土師器甕127が出土しているが、SD5～9はその走向や位置からほぼ同時期と考えられるため、この頃の遺構であると思われる。

SD5は確認できた範囲で長さ20.5m、幅約60cm、深さ約20cmを測り、北西側は調査区外にのびる。

SD6は長さ21m、幅約50cm、深さ約15cmを測る。北西側では一部途切れる。またSD5の埋土を掘り込んでいる。このSD6のみ、SD5と切り合う付近から方向をやや北向きに変える。

SD7・8はその方向が一致し、続いた位置にあることから、本来は一連の遺構であったと思われる。SD7は長さ18m、幅約1.3m、深さ約40cm、SD8は長さ4.3m、幅約1.3m、深さ約25cmを測る。

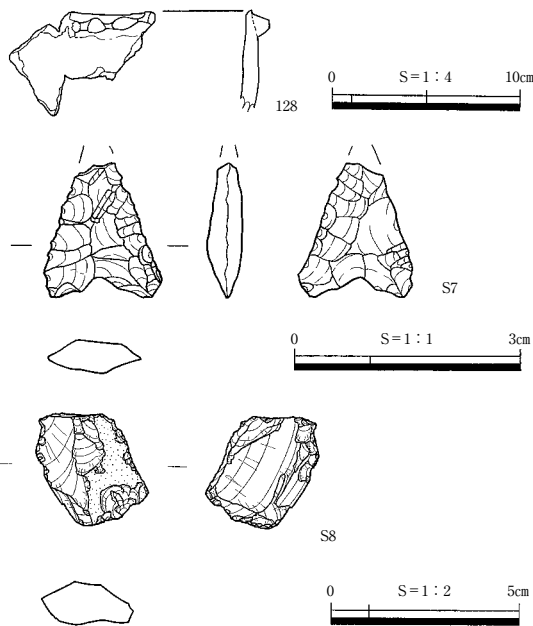
SD9は長さ7.3m、幅は最大で1.2m、深さは最深部で35cmを測る。



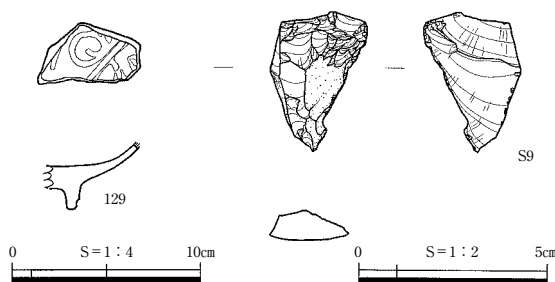
第65図 SD9出土土器

(5) 遺構外出土遺物

黒褐色土である包含層の遺物の出土状況は、1区と同様であり、古代の土器を中心としたものであった。いずれも細片であり、図化はできなかつたが、128の刻目突帯を口縁部に貼り付けた縄文時代晩期の土器や、黒曜石の石鏃S7、石核S8などが出土し、表土からは内面に唐草文が陰刻される青磁129の破片が認められた。



第66図 拡張区包含層出土遺物



第67図 拡張区表土出土遺物

表3 拡張区第2遺構面ピット表 (計測単位はcm)

Pit 番号	長径	短径	深さ	埋土 色調	Pit 番号	長径	短径	深さ	埋土 色調
106	31	27	38	暗褐色	129	21	16	12	暗褐色
107	48	43	28	暗褐色	130	30	25	19	暗褐色
108	25	25	10	暗褐色	131	23	20	23	暗褐色
109	38	30	27	暗褐色	132	35	31	27	暗褐色
110	28	28	7	暗褐色	133	30	27	32	暗褐色
111	27	25	11	暗褐色	134	27	27	17	黒褐色
112	27	23	15	暗褐色	135	25	22	27	黒褐色
113	34	31	9	暗褐色	136	45	29	29	黒褐色
114	43	36	31	暗褐色	137	28	28	20	暗褐色
115	47	40	8	暗褐色	138	27	27	25	暗褐色
116	33	27	11	暗褐色	139	21	20	12	暗褐色
117	45	45	21	暗褐色	140	32	31	33	暗褐色
118	41	40	22	暗褐色	141	34	31	19	暗褐色
119	43	43	12	暗褐色	142	21	18	15	暗褐色
120	24	22	8	暗褐色	143	38	32	12	暗褐色
121	70	52	29	暗褐色	144	43	42	6	暗褐色
122	30	25	25	暗褐色	145	30	25	24	暗褐色
123	30	30	27	暗褐色	146	42	34	8	黒褐色
124	27	26	21	暗褐色	147	34	27	12	褐色
125	32	30	30	暗褐色	148	85	46	7	暗褐色
126	28	25	25	暗褐色	149	43	24	10	不明
127	31	30	32	黒褐色	150	40	37	34	黒褐色
128	35	24	13	暗褐色	151	35	28	30	黒褐色

第4節 2区の調査

(1) 調査の概要

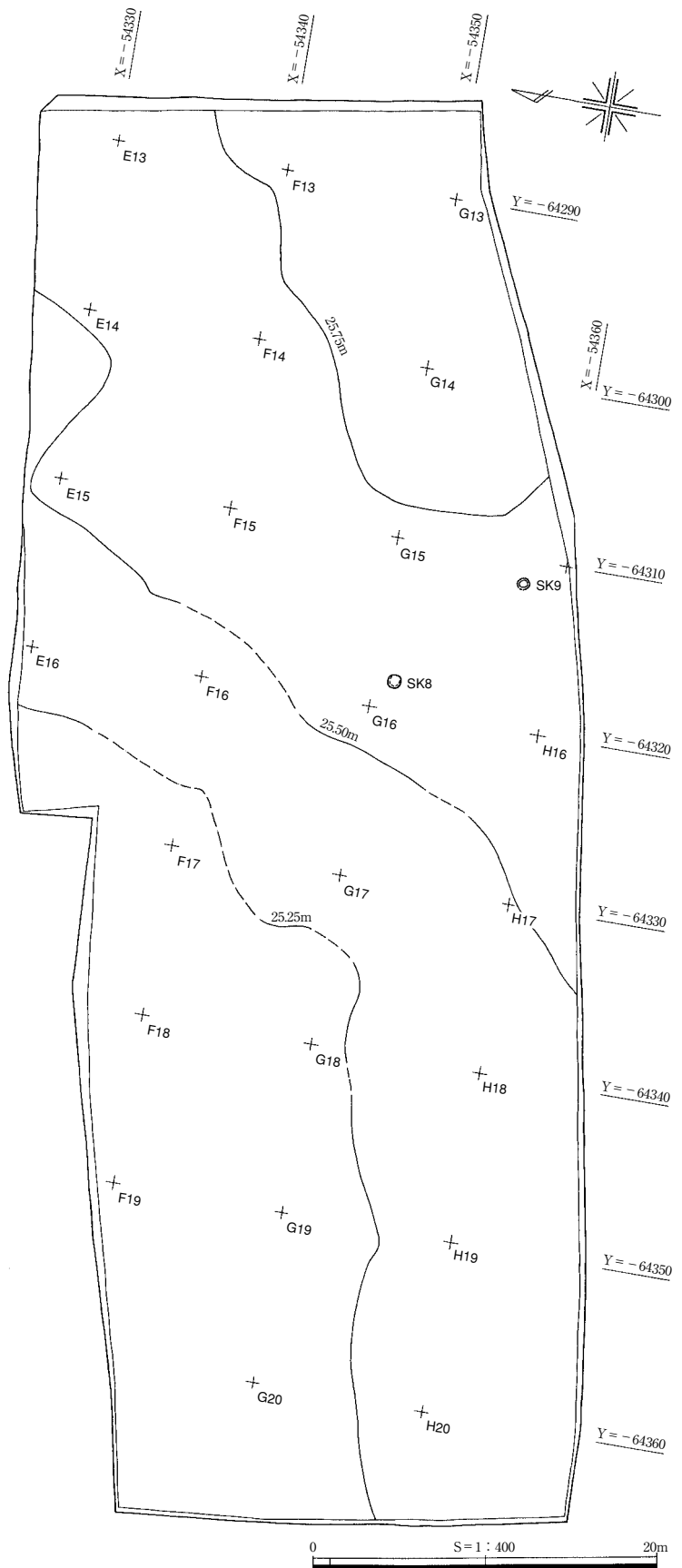
2区は東西83m、南北33mの東西に長い調査区である。遺構確認面としたソフトローム層上面の標高は約25~26mを測り、南東から北西にかけて緩やかに傾斜している。

調査は試掘調査の結果から、ソフトローム層上面を遺構確認面として行ったが、調査区堆積土の状況は本章第1節で述べたように3区と同様である(第5図)。このことから遺構検出面は、次節で述べるように弥生時代後期後葉以降の時期のものに関しては表土下21cmに位置する黒褐色土下層であったと思われる。調査区壁断面による確認を含め、調査では弥生時代後期後葉以降の遺構は認められなかったが、遺構検出作業前に行った表土剥ぎによって削平してしまった可能性もある。

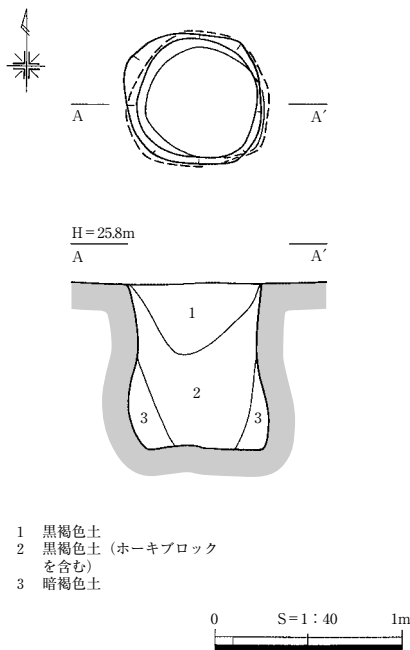
上記のような調査の状況ではあったが、遺構検出作業の結果、15グリッド杭ライン付近で、南北方向にのびる近年の耕作に関わる溝が確認され、この溝より西側では梨栽培等による攪乱を受けている状況であった。

また、14グリッド杭ラインより東側では拳大から人頭大の円礫群が点在している状況であった。調査では、ソフトローム層中以下に礫層が認められたことから、ソフトローム層堆積以前の氾濫原であったことが明らかとなり、円礫群は風倒木により下層の礫が持ち上がった状況であることが確認された。

確認された遺構であるが、土坑2基を検出した。いずれも落とし穴である。また、ピットは調査を行ったものは、

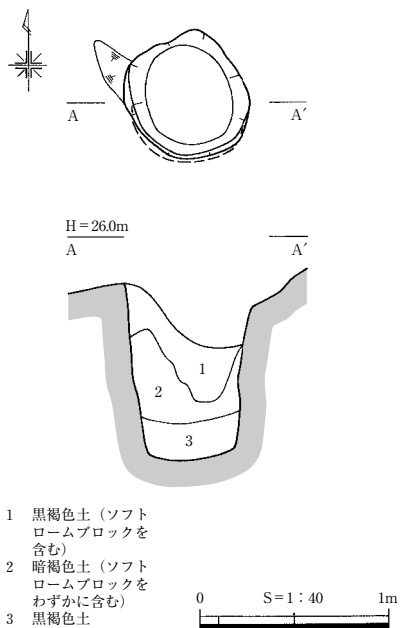


第68図 2区遺構配置図



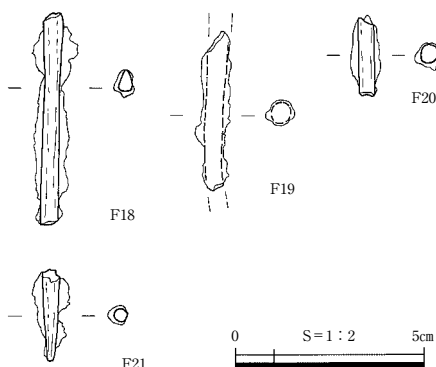
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 (ホーキブロックを含む)
- 3 暗褐色土

第69図 SK8実測図



- 1 黒褐色土 (ソフトロームブロックを含む)
- 2 暗褐色土 (ソフトロームブロックをわずかに含む)
- 3 黒褐色土

第70図 SK9実測図



第71図 2区表土出土鉄製品

植物による攪乱であったため、すべての調査は行わなかった。

(2) 土坑

SK8 (第69図、PL. 8)

G15グリッドの北西側、標高25.6mの平坦面で検出した。規模は東西73cm、南北68cm、検出面からの深さは88cmを測り、平面円形を呈する。

本遺構が位置する2区の土層堆積は、遺構確認面としたソフトローム層以下では、ホーキ層、始良Tn火山灰(AT)層、白色粘質土層、大山倉吉軽石層と続くが、本土坑は大山倉吉軽石層を底面とする。埋土は、黒褐色土を主体とする。土坑中位から下の壁際には暗褐色土の堆積が認められるが、暗褐色土が認められる標高24.7~25.2mの高さは、上記の白色粘質土層と一致するため、白色粘質土層が埋土の黒褐色土により変色した可能性もある。

本土坑は、底面ピットは存在しないが、掘りかたなどからみて落とし穴であったと考えられる。遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK9 (第70図、PL. 8)

G15グリッドの南東側、標高25.8mに位置する。本遺構は梨栽培による耕作土除去後に検出した。

平面は円形で、規模は東西68cm、南北67cm、検出面からの深さは93cmを測る。

SK9が位置する地山の土層堆積の状況は、SK8と同様であり、底面の層位も大山倉吉軽石層とする。埋土には黒褐色土、暗褐色土が見られ、上層にはソフトロームのブロックが混入する。

本土坑は、底面ピットは存在しないが、掘りかたの形状や深さからみて落とし穴であったと考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(3) 表土出土遺物

2区では攪乱土中からではあるが、F18~21の鉄製品が認められた。いずれも鍛造品である。また、わずかではあるが陶磁器の細片なども出土している。

第5節 3区の調査

(1) 調査の概要

3区は本遺跡内で東に位置する。東西95m、南北約40mの東西に長い調査区である。遺構確認面とした漸移層及び、ソフトローム層上面の標高は25.4～26.4mを測る。南から北に向かって緩やかに傾斜した地形である。

調査は、漸移層及び、ソフトローム層上面を遺構確認面として行ったが、本章第1節で触れたように、調査区壁で遺構の土層断面が確認できた遺構に関しては、表土下19cmに位置する黒褐色土下層から掘り込んでいる。本調査区でこの黒褐色土下層を確認面とする最も古い時期の遺構は、調査区西側に位置する弥生時代後期後葉の溝状遺構（SD12）であり、このことから弥生時代後期後葉以降の遺構に関しては、この黒褐色土下層が遺構確認面である。

また、3グリッド杭ラインより東側では重機での表土剥ぎがソフトローム層上面まで及んでおらず、黒褐色土下層が遺存する状況であった。遺構検出を行ったところ、溝状遺構2条（SD10・11）が検出された。この調査区東側では、黒褐色土上層の明確な堆積は認められない。

調査の結果、確認できた遺構は掘立柱建物跡4棟、土坑8基、溝状遺構6条で、遺構の多くは調査区西側に集中している。遺構外を含め遺物の出土量が少なかったことから、多くの遺構の時期等を具体的にすることはできなかった。出土遺物を伴う遺構は近世のSK15、SD14と弥生時代後期後葉の溝状遺構（SD12）のみである。また、遺構外出土土器は中世以降のものと思われる。

遺構の切り合い関係では、SD12は落し穴と考えられる土坑1基（SK17）を削平しており、SB11～14はSD12の埋土を掘り込んで建てられていることが明らかとなった。

また、7グリッド杭ラインより東側では、ソフトローム層中及び、その上面で拳大～人頭大の円礫が広範囲にわたって認められた。2区と同様にソフトローム層が形成される以前の勝田川の氾濫原であったと思われる。

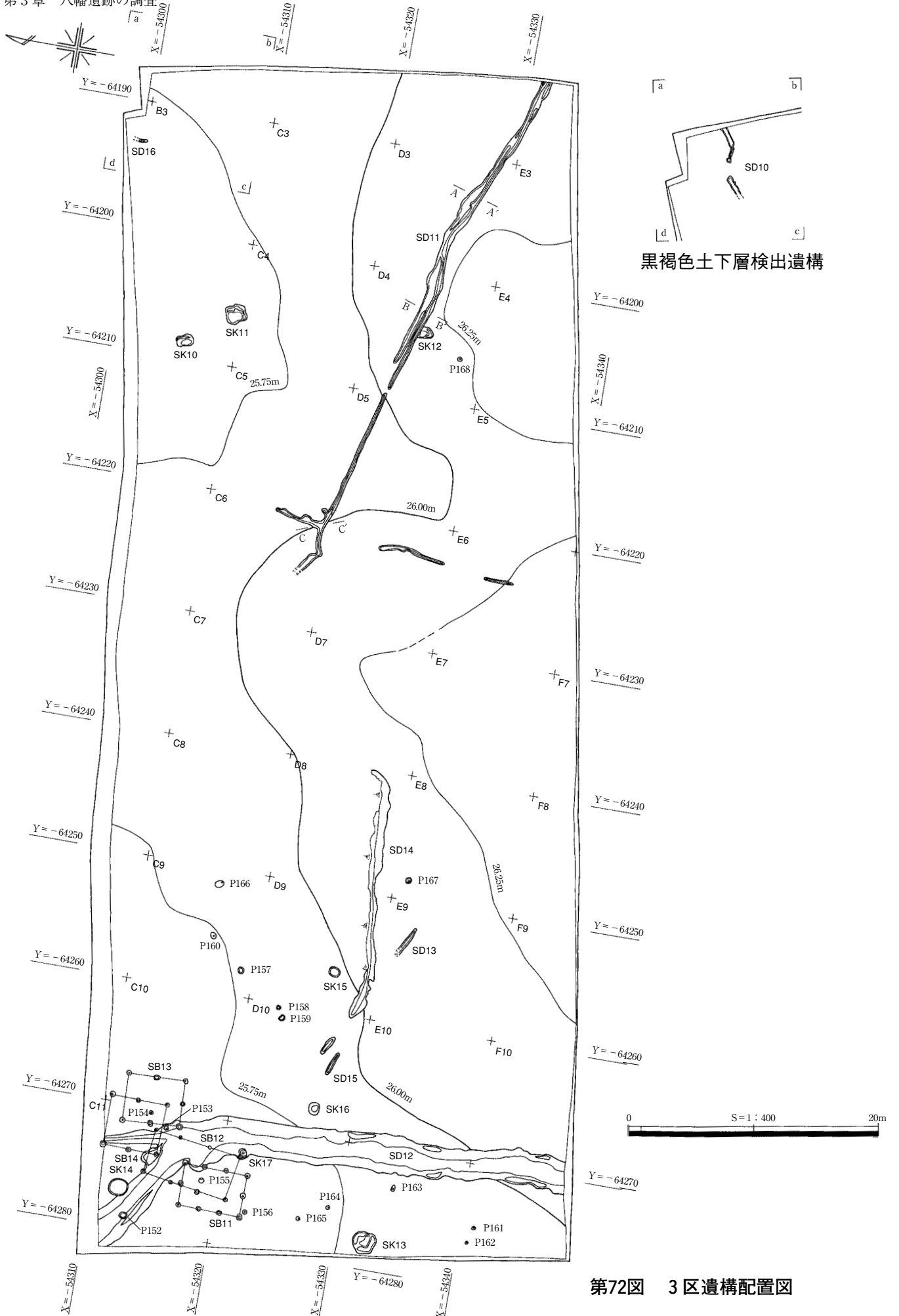
(2) 掘立柱建物跡

SB11（第73図、PL.9）

C11グリッドの南側、標高約25.6mに位置する桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN-3°-Eで、建物規模は桁行約5m、梁行約3.5mを測る。柱穴間距離は心々で、桁行・梁行間ともに約1.7mである。柱穴は平面円形ないし楕円形を呈しており、直径31～46cm、ピット底面の標高は25.2～25.4mである。このうち、P3・4・6・7・8・10では柱痕跡が確認でき、その太さは約15cmであった。

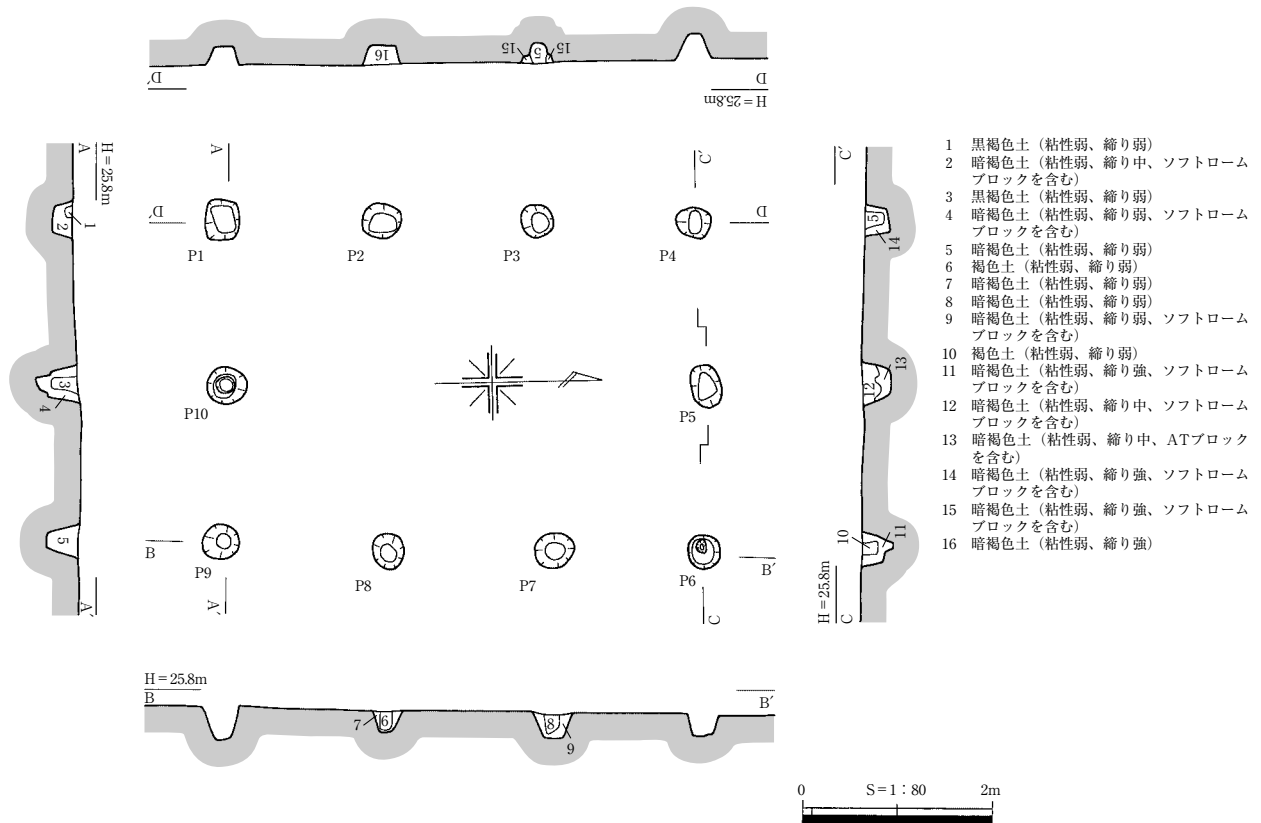
本遺構から出土遺物は認められなかった。このため遺構の具体的な時期を推察することはできなかった。しかし、本遺構はSD12と切り合い関係にあり、P6・7がSD12の埋土を掘り込んでいることから、SD12より新しい。またSB12とは重複関係にあるが、柱穴等の切り合いが認められないため、新旧関係は不明である。

以上のことから、本遺構の時期はSD12が埋没した弥生時代後期後葉以降である。また、本調査区では調査中において古墳時代・古代の遺物が認められなかったことを考えると中世以降のものである可能性が高い。

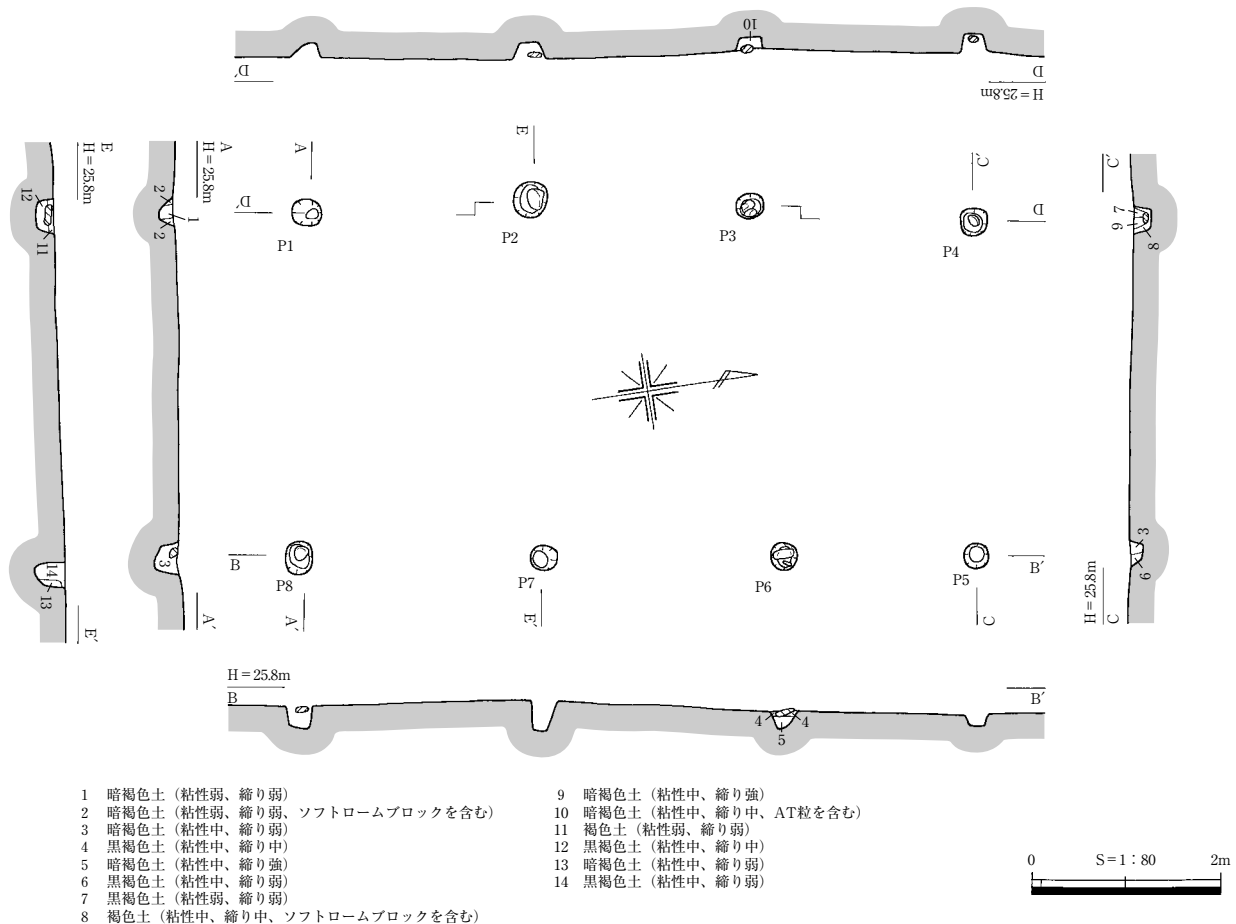


黒褐色土下層検出遺構

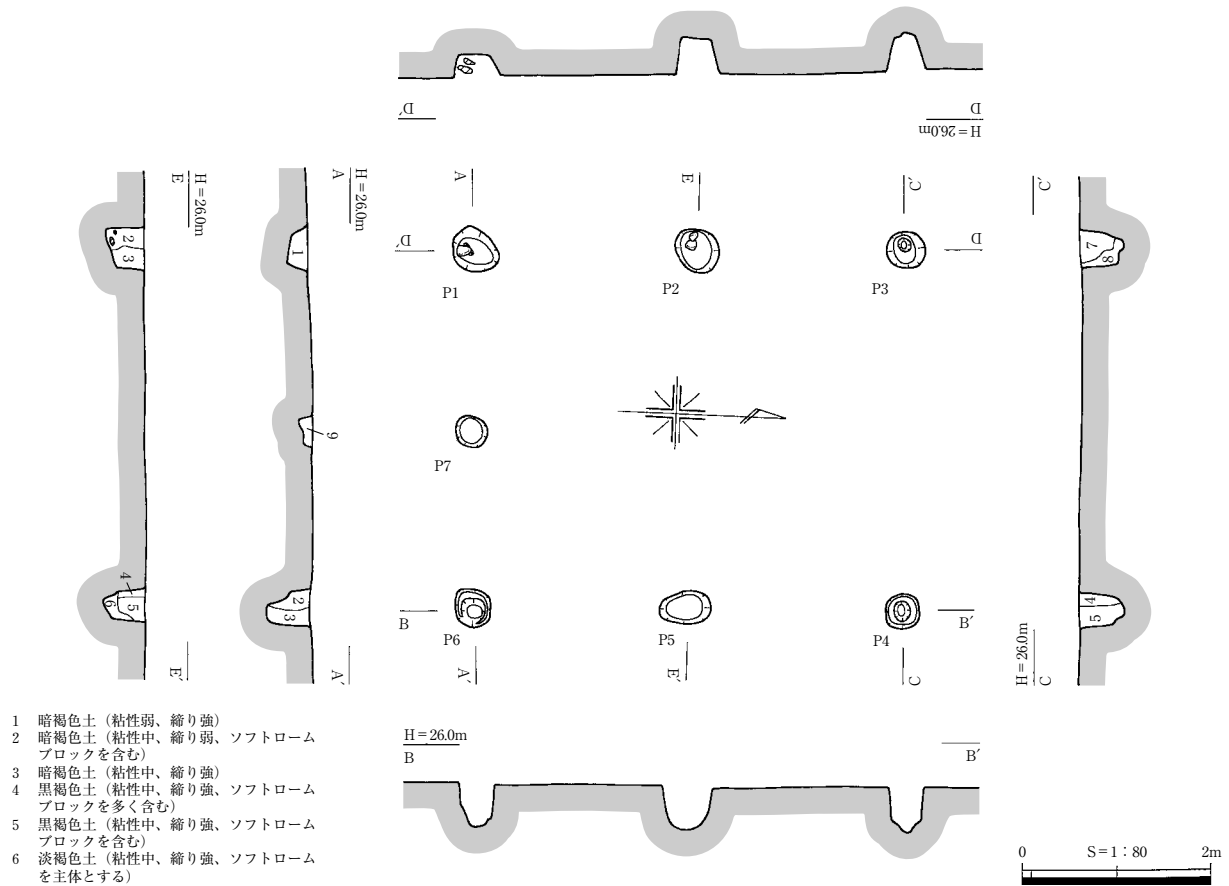
第72図 3区遺構配置図



第73図 SB11実測図

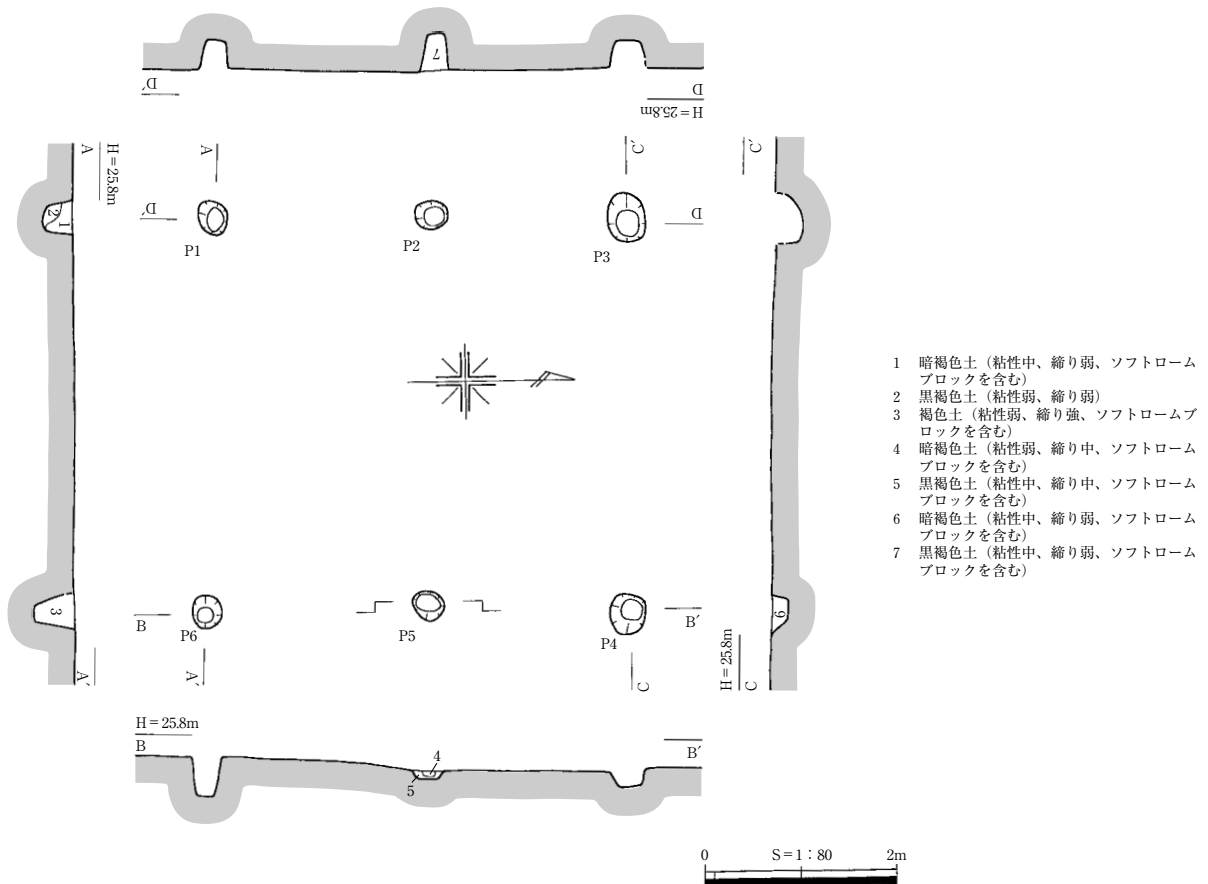


第74図 SB12実測図



- 1 暗褐色土 (粘性弱、締り強)
- 2 暗褐色土 (粘性中、締り弱、ソフトロームブロックを含む)
- 3 暗褐色土 (粘性中、締り強)
- 4 黒褐色土 (粘性中、締り強、ソフトロームブロックを多く含む)
- 5 黒褐色土 (粘性中、締り強、ソフトロームブロックを含む)
- 6 淡褐色土 (粘性中、締り強、ソフトロームを主体とする)
- 7 暗褐色土 (粘性弱、締り弱、ソフトロームブロックを含む)
- 8 黒褐色土 (粘性中、締り中)
- 9 暗褐色土 (粘性弱、締り中、木の根攪乱の可能性あり)

第75図 SB13実測図



- 1 暗褐色土 (粘性中、締り弱、ソフトロームブロックを含む)
- 2 黒褐色土 (粘性弱、締り弱)
- 3 褐色土 (粘性弱、締り強、ソフトロームブロックを含む)
- 4 暗褐色土 (粘性弱、締り中、ソフトロームブロックを含む)
- 5 黒褐色土 (粘性中、締り中、ソフトロームブロックを含む)
- 6 暗褐色土 (粘性中、締り弱、ソフトロームブロックを含む)
- 7 黒褐色土 (粘性中、締り弱、ソフトロームブロックを含む)

第76図 SB14実測図

SB12 (第74図、PL. 10)

C11グリッドの南側に位置する桁行3間、梁行1間の掘立柱建物跡である。主軸はN-8°-Eで、確認面の標高は約25.6mである。建物規模は桁行約7m、梁行約3.6mを測る。桁行の柱間距離は心々で約2.0~2.6mの間にある。柱穴は平面円形を呈しており、直径26~36cm、ピット底面の標高は約25.4mである。このうち、P1・4・5では柱痕跡が確認でき、柱材の太さは10~20cmであったと思われる。また、P2・3・4・6・8の埋土中からは直径10~20cmの扁平な円礫が出土している。P4の柱痕がこの礫の直上に位置していることからみて、この礫は礎盤石であった可能性が考えられる。

出土遺物は認められないが、本遺構はP4~8がSD12の埋土を掘り込んでいることから、弥生時代後期後葉以降の遺構である。SB11と同様、調査の状況から中世以降の遺構の可能性が高い。また、新旧関係は不明であるが、SB11・14と重複する。

SB13 (第75図、PL. 10)

C10グリッド西側、標高約25.6mに位置する桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡であるが、北側においては調査区外にのびる可能性もある。主軸はN-2°-Wで、建物規模は桁行約4.6m、梁行約3.9mを測る。柱間の心々距離は桁行間が約2.3m、梁行間が約1.9mである。柱穴は平面円形ないし楕円形を呈しており、直径は38~48cmである。ピット底面の標高はP7が25.5mとするほかは約25.2mである。このうち、P1・3・7以外では柱痕跡が確認できた。その太さは約20cmである。P7については、他のピットより掘り込みが浅いことや、北側の梁行では対応する柱穴が確認できなかったことから、本掘立柱建物跡と関わりがない可能性も考えられる。

また、P1・2の埋土中からは直径10~15cmの扁平な礫が出土している。この礫の検出高はP1が25.6m、P2が25.2mと高さの違いが見られる。P5の6層は堅く締め、根石代わりに詰められた土と思われることから、これらの礫は根石の可能性が考えられる。

出土遺物は認められないが、本遺構はP1がSD12の埋土を掘り込んでいることから、弥生時代後期後葉以降の遺構である。SB11・12と同様、調査の状況から中世以降の遺構の可能性が高い。また、新旧関係は不明であるが、SB14と重複するほか、SB12とも建物主軸や近接した位置関係から同時併存の可能性は低い。

SB14 (第76図、PL. 10)

C11グリッドの北東側、標高約25.6mに位置する桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡であるが、北側においては調査区外にのびる可能性もある。主軸はN-2°-Eをとり、建物規模は桁行約4.5m、梁行約4.2mを測る。桁行の柱穴間距離は心々で約2.3mである。柱穴は平面楕円形を呈しており、直径30~52cm、底面の標高は約25.2mである。このうち、P5では柱痕跡を確認した。柱材の太さは約15cmである。

本遺構から出土遺物は認められなかったが、本遺構のP1・3がSD12の埋土を掘り込んでいることから、弥生時代後期後葉以降の遺構である。SB11・12・13と同様、調査の状況から中世以降の遺構の可能性が高い。また、SB12・13とは重複しているが、新旧関係は不明である。

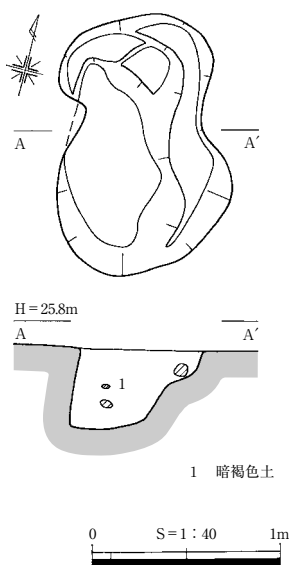
(3) 土坑

SK10 (第77図、PL. 11)

B4グリッド西側に位置する。検出面は標高25.6mである。平面形は中央のくびれた楕円形で、長径140cm、短径90cmの規模である。深さは42cmを測る。埋土は暗褐色土単層で、底面は礫混じりのソフトローム層である。出土遺物は認められず時期は不明であるが、遺構の土層断面を見ると、地山の礫が浮き上がり隙間に暗褐色土の堆積が見られる状況から、風倒木痕の可能性が高い。

SK11 (第78図、PL. 11)

B4グリッド、SK10の南東側4.5mに位置する。検出面は標高25.6mで、平面は不整な円形である。規模は東西160cm、南北170cm、深さは検出面から30cmを測る。底面は皿状を呈す。埋土は暗褐色土を主体とし、埋土中には1.5cm大の礫が混じる。出土遺物は認められなかったが、埋土中の礫の状況から、風倒木痕の可能性が高い。



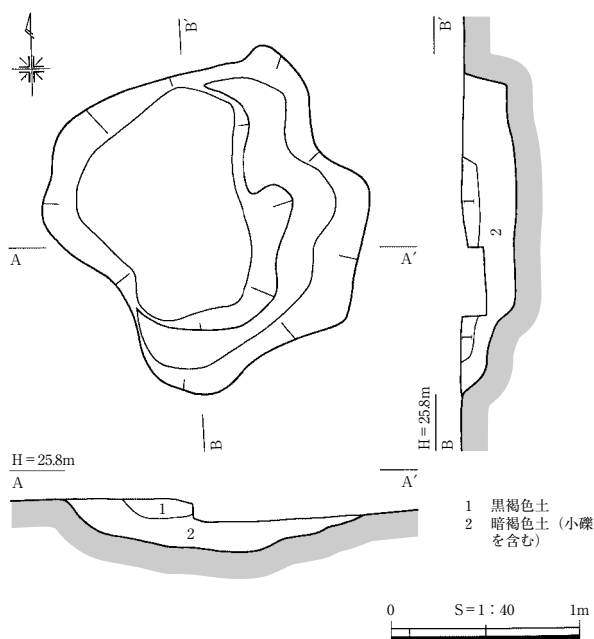
第77図 SK10実測図

SK12 (第79図、PL. 11)

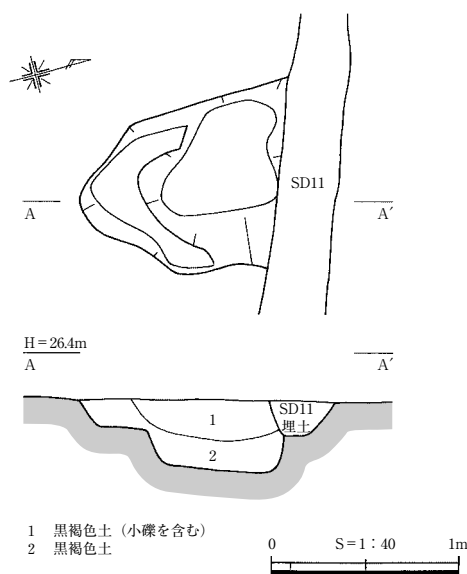
D4グリッドに位置し、北側をSD11に掘り込まれている。検出面は標高26.2mである。残存部の規模は長径130cm、短径85cmを測り、深さは検出面から38cmである。埋土は黒褐色土を主体とする。遺物は確認できていない。底面の礫の状況から風倒木痕の可能性が考えられる。

SK13 (第80図、PL. 11)

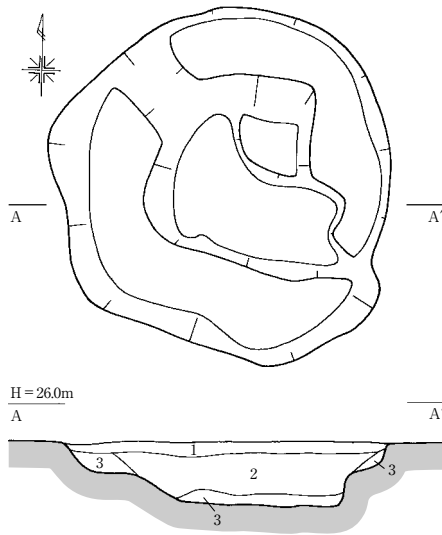
E11グリッドに位置し、検出面の標高は25.8mである。平面楕円形を呈し、規模は東西170cm、南北187cmを測る。深さは35cmである。埋土は褐色土を主体とする。出土遺物はなく、時期等は不明である。



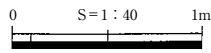
第78図 SK11実測図



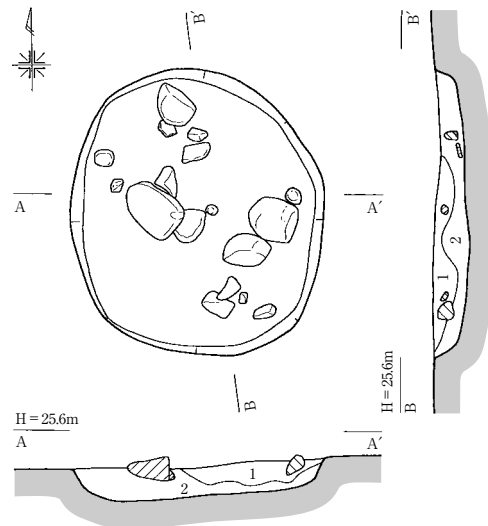
第79図 SK12実測図



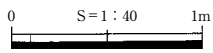
- 1 黒褐色土
- 2 褐色土
- 3 褐色土 (ソフトロームブロックを含む)



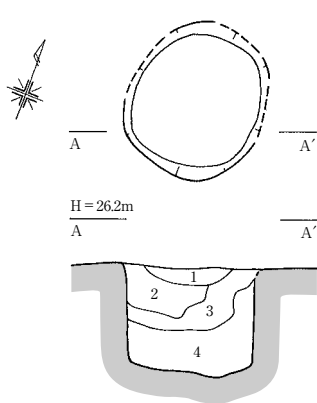
第80図 SK13実測図



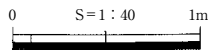
- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 (ソフトロームブロックを含む)



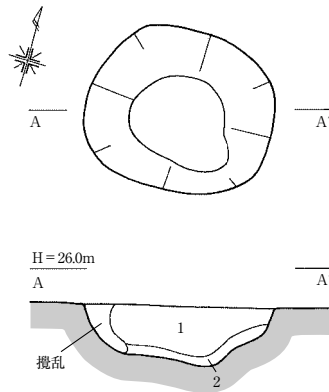
第81図 SK14実測図



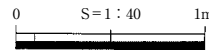
- 1 黒褐色土 (2 cm程のソフトロームブロックを多く含む)
- 2 黒褐色土 (3 cm程のソフトロームブロックを含む)
- 3 黒褐色土 (1 cm程のソフトロームブロックを多く含む)
- 4 黒褐色土 (2~4 cm程のソフトロームブロックをわずかに含む)



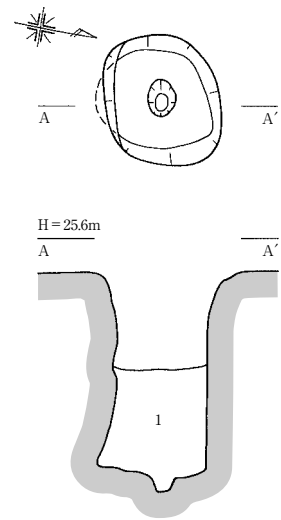
第82図 SK15実測図



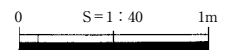
- 1 褐色土 (ソフトロームブロックを含む)
- 2 淡褐色土 (ソフトロームブロックを含む)



第83図 SK16実測図



- 1 黒褐色土



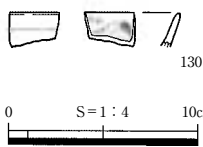
第84図 SK17実測図

SK14 (第81図、PL. 11)

C11グリッド北西に位置し、検出面は標高25.4mである。南西側でSD12の埋土を掘り込んでいる。平面形は楕円形を呈し、規模は東西135cm、南北150cmを測る。深さは17cmである。埋土中には5~30cm大の礫を17点検出したが、遺構を構築するものではない。出土遺物は認められないが、切り合い関係のあるSD12の年代から、本土坑は弥生時代後期後葉以降と考えられる。

SK15 (第82図、PL. 11)

D9グリッド南西、標高25.9mに位置する。平面形は南北に長い楕円形で、長径85cm、短径72cmを測る。深さは57cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、ソフトロームブロックが混じる。埋土中から



18世紀頃と思われる肥前系の磁器130が出土した。

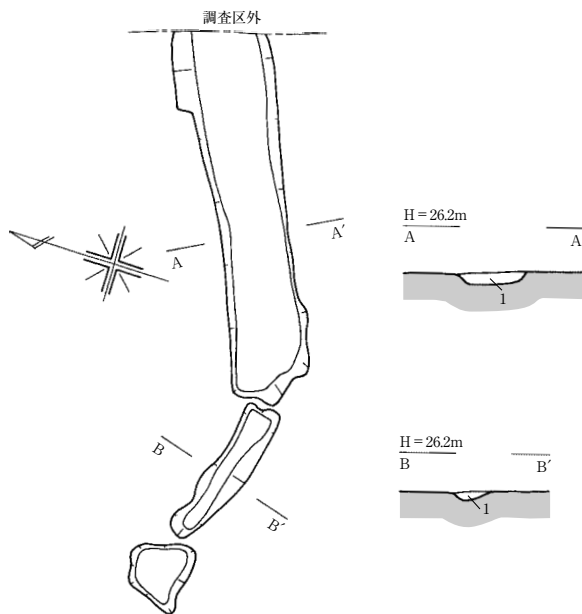
第85図 SK15 出土磁器

SK16 (第83図、PL. 12)

D10グリッド、標高25.8mに位置する。平面円形を呈し、規模は東西98cm、南北85cm、深さ32cmを測る。埋土は、2cm大のソフトロームブロックを含む褐色土を主体とする。埋土中には遺物はみられない。北西隅に木の根の痕跡が認められることから、本土坑は根攪乱の可能性が考えられる。

SK17 (第84図、PL. 12)

D11グリッドに位置し、SD12の埋土除去後に検出した。検出面の標高は25.4mで、平面形は直径61cmの円形を呈し、検出面からの深さは110cmを測る。底面には長径20cm、短径15cm、深さ9cmのピットを検出した。埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物はなく時期は不明であるが、形態から落とし穴と考えられる。



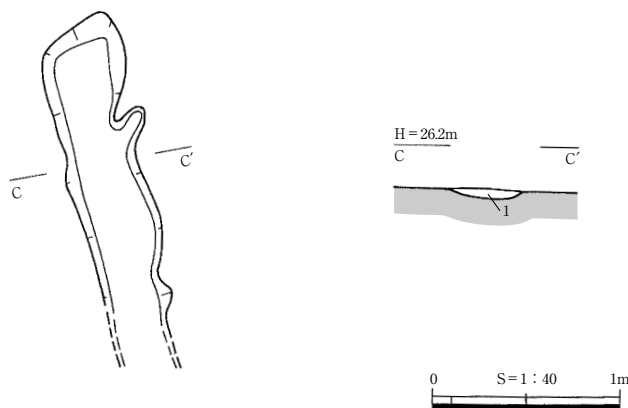
(4) 溝状遺構

SD10 (第86図、PL. 12)

調査区北東隅のB2・3グリッドに位置する。本遺構は黒褐色土下層上面、標高約26.0mで検出した。遺存状況は良くなく、溝の最深部分が途切れながら残存する。北東から南西方向に蛇行し、北東側は調査区外にのびる。また、南西側は表土剥ぎにより遺存はしていないが、続いていたと思われる。

現況では、長さは約6m、幅は15~50cmを測る。溝底面の標高は25.9mである。埋土は黄褐色土の単層である。遺物は1点出土したが、細片のため時期は不明である。(阪上)

1 褐色土 (砂礫を含む)

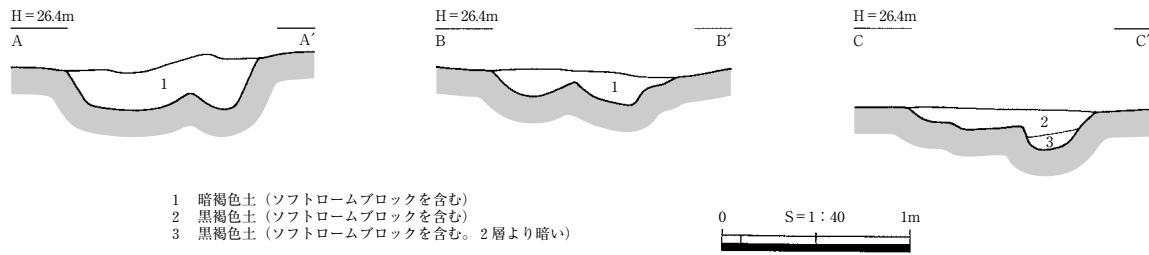


第86図 SD10実測図

SD11 (第72・87図、PL. 12)

調査区南東隅から西方向にかけて、標高26.1~26.2mの高さで検出した。本遺構の大半はソフトローム層上面での確認であったが、調査区南東隅の一部や調査区壁では、黒褐色土下層が本来の遺構検出面であることが確認できた。

調査区南東隅からC6グリッドまで西方向に直線的にのびている。D4グリッドまでは2条の溝が接して平行する状態を呈する。ま



第87図 SD11土層断面図

た、D6グリッド杭付近で南北方向にのびる溝と直交しているが、切り合い関係は認められず、同様の埋土であったことから一連の遺構であると考えられた。

本遺構の東側は調査区外へ続いている。西側では幅1.8mほどの浅い攪乱溝によって削平を受けている状態であったが、この攪乱溝よりも先では認められないことから、本遺構はC6グリッド付近を西端としたか、底面をソフトローム層よりも高くしたと考えられる。現況の長さは東西方向が45m、南北方向が約20mで、幅は最大で1.5mである。黒褐色土下層が残存している部分での検出面からの深さは30cmで、断面形はW字状を呈する。遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。(阪上)

SD12 (第88図、PL. 13)

SD12は調査区西側で南北方向に認められた溝状遺構である。本遺構の検出は標高25.4~26.1mで、南から北に向かってなだらかに傾斜している。遺構確認面はソフトローム層上面としたが、調査区壁での確認では黒褐色土下層が本来の確認面である。

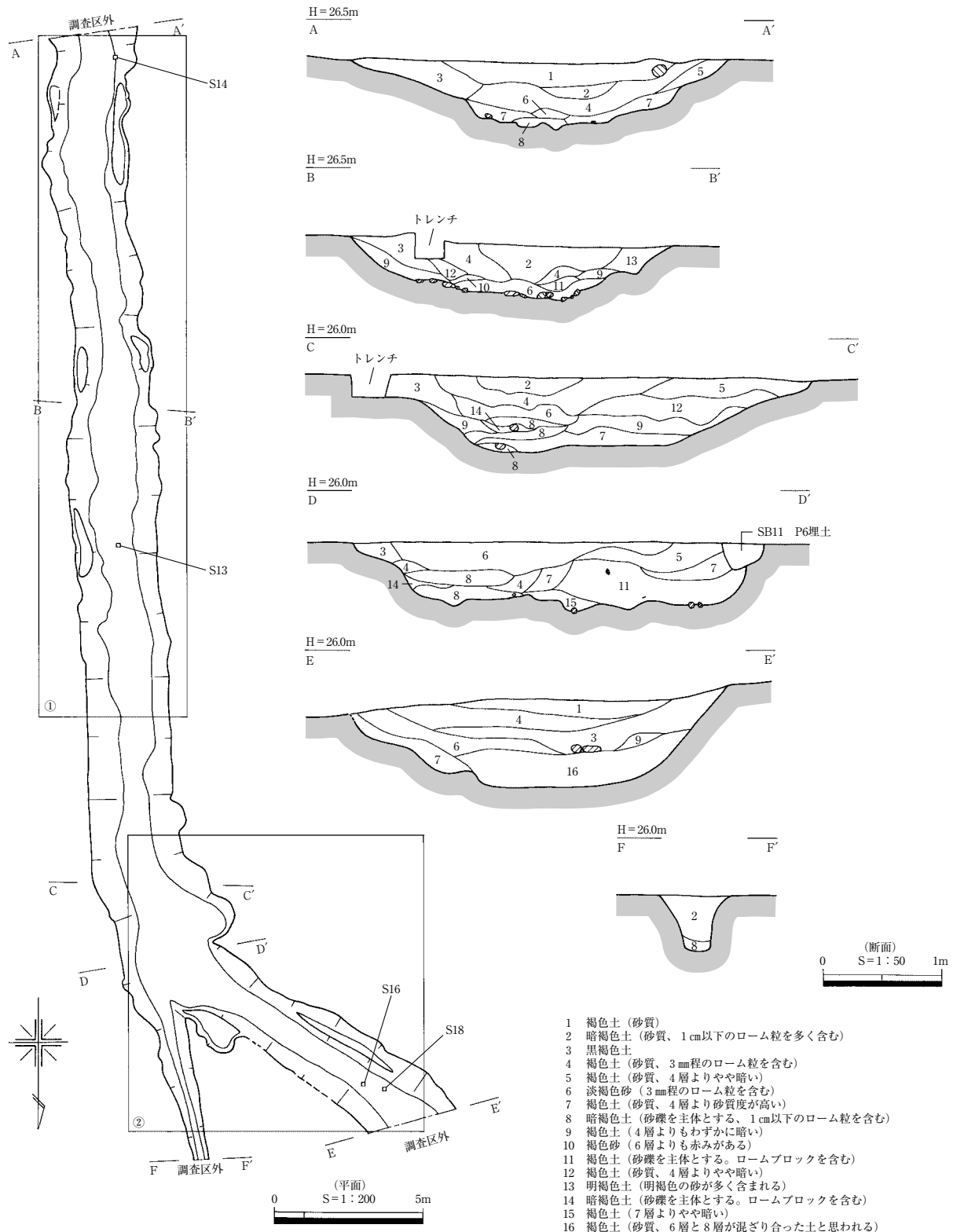
本遺構は南側、北側ともに調査区外にのび、北側ではC11グリッド付近で北方向と北西方向に分岐する。遺構検出の段階で、この分岐する地点(D-D')では、淡褐色土の埋土(6層)が北西方向に続いていたことから、北西方向のものが新しく観察された。しかし、土層断面からは、北方向の溝埋土(8層)と分岐点付近の土層断面中位にある埋土も共通する。このことから本遺構の埋没過程は当初の認識と異なり、北西方向にのびる溝が古く、その後、北方向にのびる溝が掘り込まれる。そして、先述したように、分岐地点と北西方向の溝で共通する埋土が認められることを考慮すると、北方向にのびる溝が機能していた段階でも北西方向の溝は完全に埋没はしていなかった可能性が高い。

また、上述した8層は砂礫層である。同層中でも、下が大きめの礫、上は小さめの礫と細分は可能であり、上下の堆積においては接するものでも分層することができた(C-C'、D-D')。この埋土は他の埋土とは土質が異なり、遺構底面に堆積する状況が確認された。このことから土層断面中位に位置する8層は、溝の底面が位置を変えていった状況を示すと思われる。そして、後述する本遺構の出土遺物は、この層を中心に認められる。土器においてはすべて器面が摩滅していることから、本遺構には水が流れていたと考えられる。

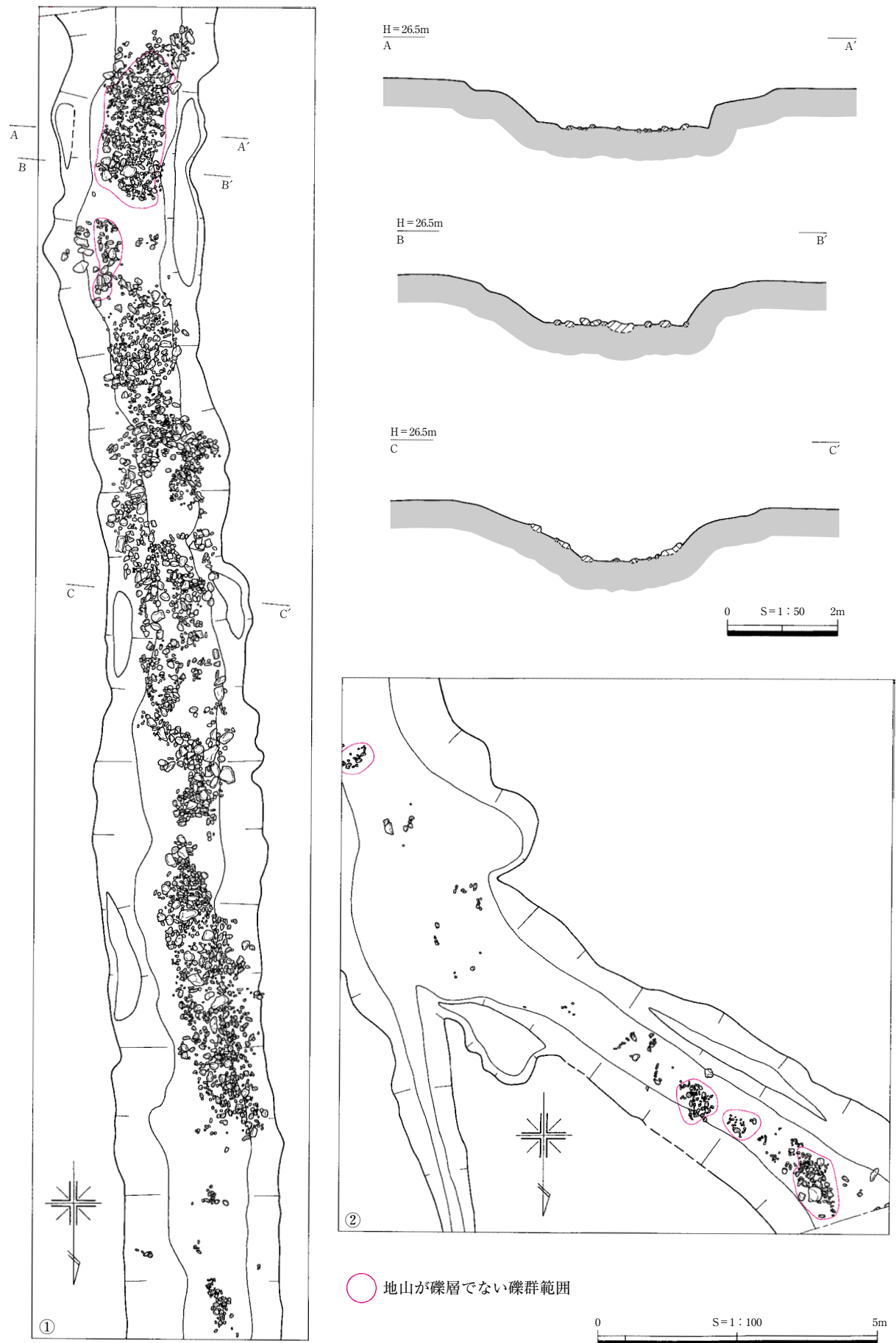
そのほか、本遺構の底面には夥しい数の円礫が、D11グリッドよりも南側を中心として敷き詰められたように認められた。この円礫の多くは地山中に認められる礫層に続くことから、かつての氾濫原であった部分にSD12が掘り込まれたことによる。しかし、人為的なものか、本遺構を流れていた水的作用によるものかは明らかにできなかったが、部分的に地山中に礫層が見当たらないところにも円礫は確認された。

出土遺物であるが、本遺構では上記の8層からの出土を中心とする。土器では131~138の弥生土器

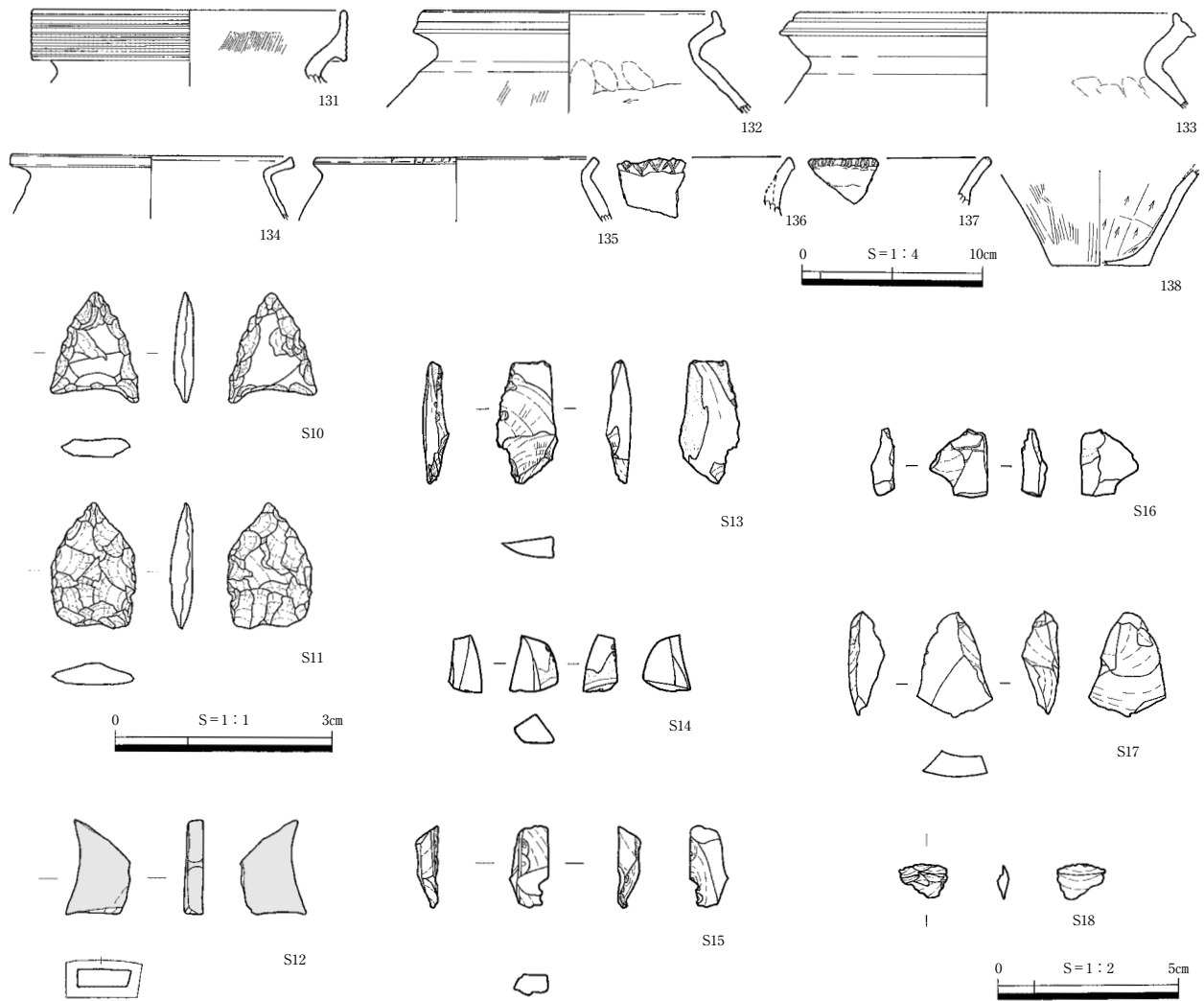
が認められる。138は甕底部の破片で外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリが認められ、清水編年Ⅲ～Ⅳ期（中期中葉～後葉）に、134～137は甕口縁部の破片で、135～137は口縁部に刻み目が施される。Ⅱ～Ⅲ期（中期前葉～中葉）に相当すると思われる。132・133は口縁部に沈線を入れた甕の破片で、内面頸部までヘラケズリを施すことからV-1期（後期前葉）、131は口縁部に多条平行沈線文を施したV-3期（後期後葉）の甕である。また土器以外では、S10・11がサヌカイト製の石鏃、下面以外を



第88図 SD12実測図



第89図 SD12底面礫出土状況図



第90図 SD12出土遺物

研磨した板状の粘板岩もしくは脈石S12、S13~18の碧玉もしくは緑色凝灰岩が認められた。S15には玉製作の施溝分割の痕跡が認められる。

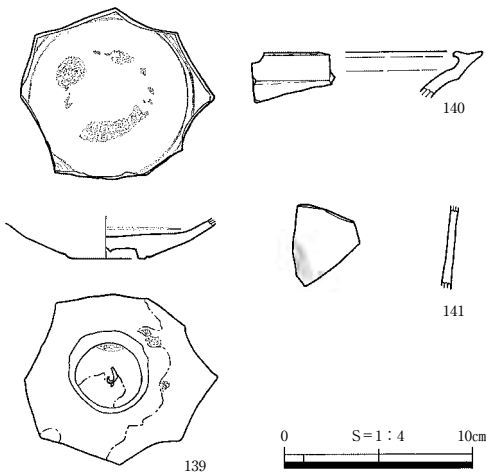
本遺構の時期であるが、出土遺物には時期幅が広く認められたが、弥生時代後期後葉のものを下限とすることから、そのころの年代の可能性が高いと思われる。(野口)

SD13 (第94図、PL. 13)

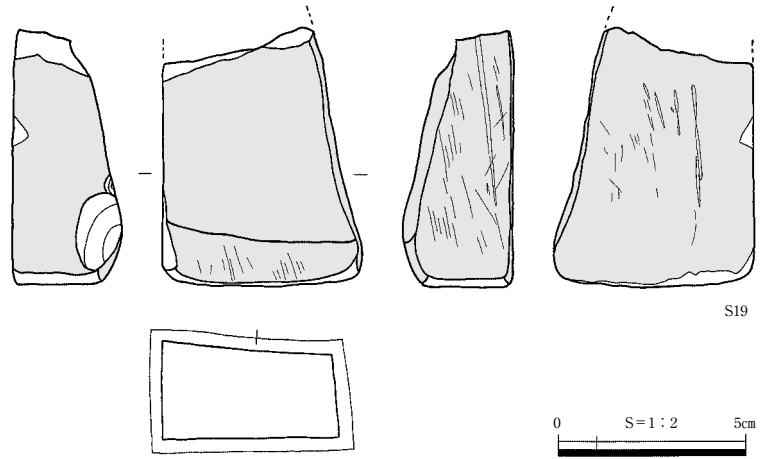
E9グリッド、標高26.2mに位置する。本遺構はソフトローム層上面で検出した。北西—南東方向に主軸をとる。北西端を掘りすぎてしまったため全長は不明であるが、復元長は約2.8mで直線的にのびている。幅は25~40cm、検出面からの深さは約10cmで、断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。(阪上)

SD14 (第93図、PL. 13)

D8~D10グリッド、標高25.8m、東西方向にのびる溝状遺構である。ソフトローム層上面で検出した。現状では2つに途切れているが、走向や埋土からみて一連の遺構であると思われる。本遺構の北側部分は攪乱によって壊されている。確認できた範囲で長さ24m、幅1.1m、深さは約15cmである。出土遺物には139~141の近世の陶磁器がみられ、本遺構の時期もそのころと思われる。(阪上)



第91図 SD14出土遺物



第92図 3区表土出土石器

SD15 (第95図、PL. 13)

D10グリッド、標高25.9mに位置する。本遺構はソフトローム層上面で検出した。規模は全長約2m、幅25～30cm、検出面からの深さは10cm、断面形はU字形を呈する。北西から南東方向に主軸をとり、埋土は黒褐色土の単層であったが、SD13とほぼ一直線上に位置していること、SD13と同じ埋土であることから、一連のものであると考えられる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。(阪上)

SD16 (第96図)

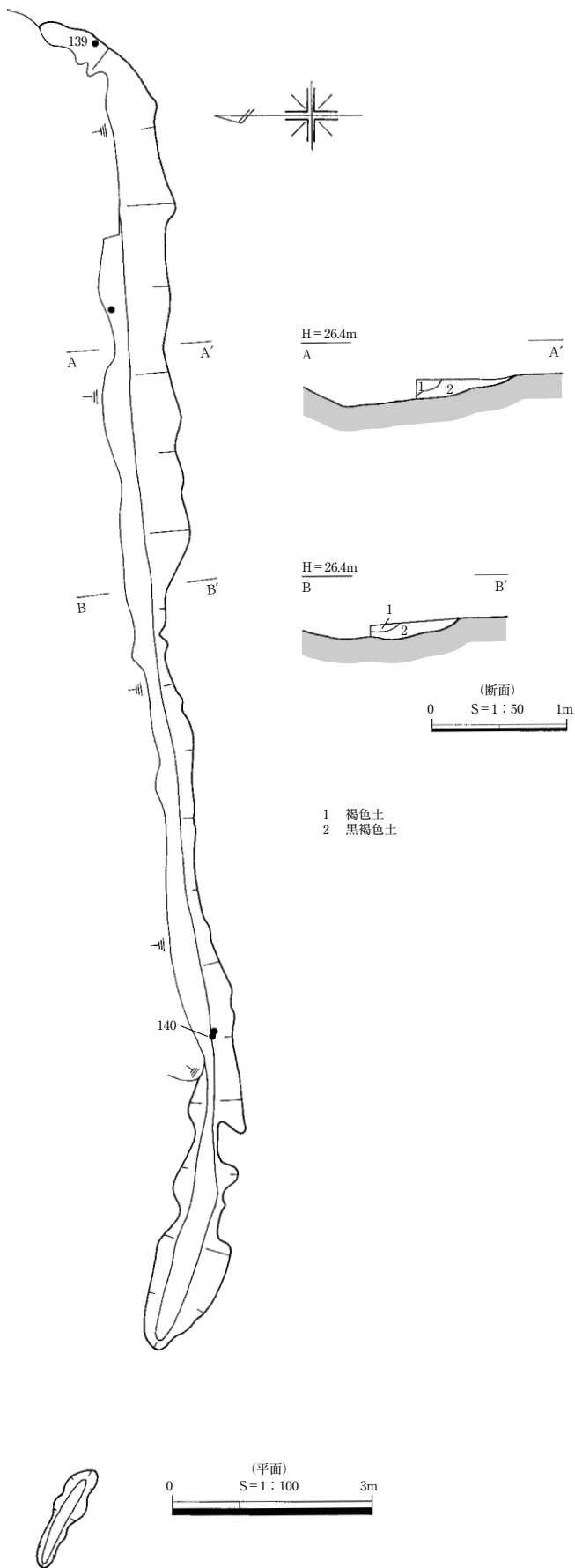
A3グリッド、標高25.6mの平坦面に位置する。本遺構はソフトローム層上面で検出した。南北方向に主軸をとり、北側は調査区外にのびると思われるが、風倒木痕により攪乱を受けている。検出できた長さは約75cm、幅20cm、検出面からの深さは5cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。(阪上)

(5) 表土出土遺物

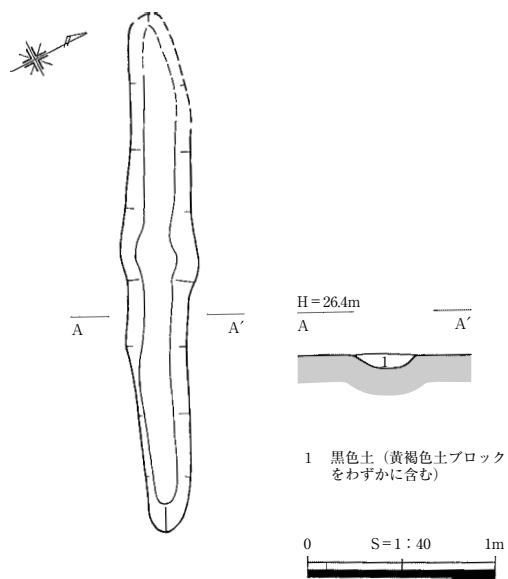
3区の遺構外出土遺物はわずかであった。また、細片であったため、図化したものは表土出土の砥石1点のみである。石英安山岩製で上端部は欠損している。砥面は表裏側面の4面に認められるが、左側面部の擦痕は不明瞭である。(阪上)

表4 3区ピット表 (計測単位はcm)

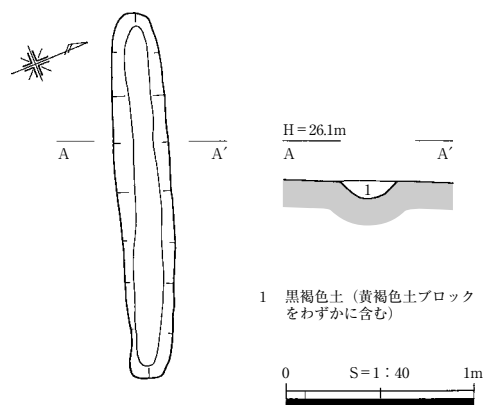
Pit番号	長径	短径	深さ	埋土色調	備考
152	58	51	46	暗褐色・褐色	2層
153	53	20	13	黒褐色	
154	32	27	16	暗褐色	
155	41	40	19	暗褐色	
156	36	34	23	黒褐色	
157	50	44	13	黒褐色	
158	39	37	7	黒褐色	
159	50	35	5	黒褐色	
160	51	45	23	黒褐色	
161	25	24	12	黒色	
162	25	20	23	黒褐色	
163	49	30	42	黒色	
164	30	28	35	黒色	
165	30	28	28	黒褐色・暗黄褐色	2層
166	70	50	47	黒褐色	
167	42	38	18	黒褐色	
168	37	33	18	黒褐色	



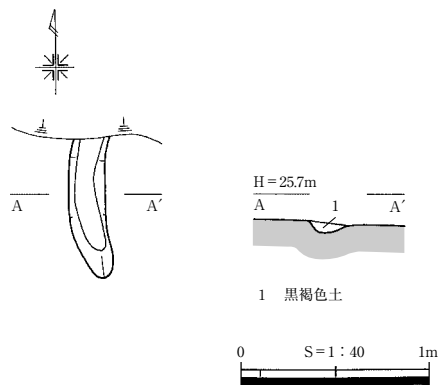
第93図 SD14実測図



第94図 SD13実測図



第95図 SD15実測図



第96図 SD16実測図

第4章 自然科学分析の成果

第1節 八幡遺跡出土玉材の産地分析

京都大学原子炉実験所 藁科哲男

(有)遺物分析研究所

はじめに

今回分析を行なった玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウなどが推測される。一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。これら玉材については岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどくらいであり、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。また原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地原石が使用されているかという産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となるのである。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということ进行调查するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）や碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説であったが、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2,3)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究としては蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用することで産地分析をより正確に行った例⁴⁾が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動距離、活動範囲は、石器が生活必需品であるので、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではなく、勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして精神的な面に重要な作用を与えられと考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれないし、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏ではないかと考えられる。このように玉類の産地分析では、石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は、鳥取県東伯郡琴浦町に位置する八幡遺跡出土の玉材6個で、これら玉材の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する、人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析は

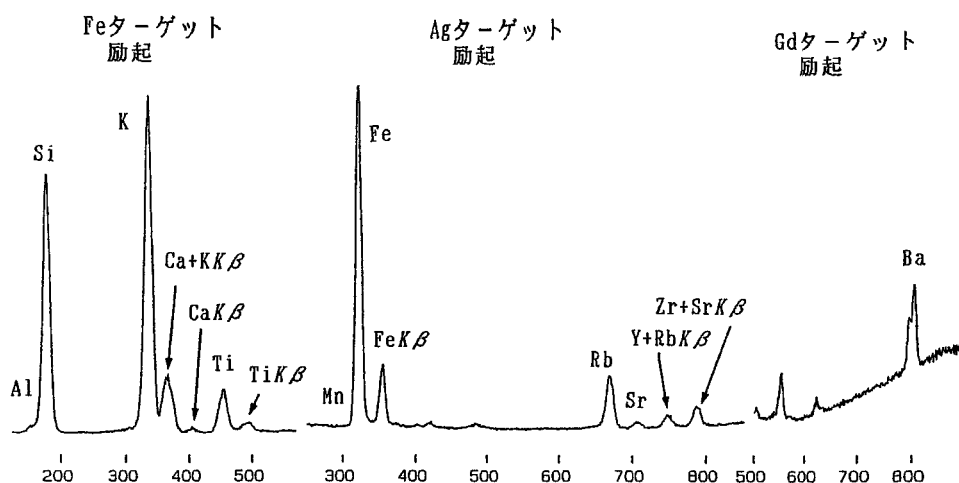
できない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。よって石器の原材産地分析で成功している⁴⁾非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を取り、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した⁵⁾。

碧玉原石の蛍光X線分析

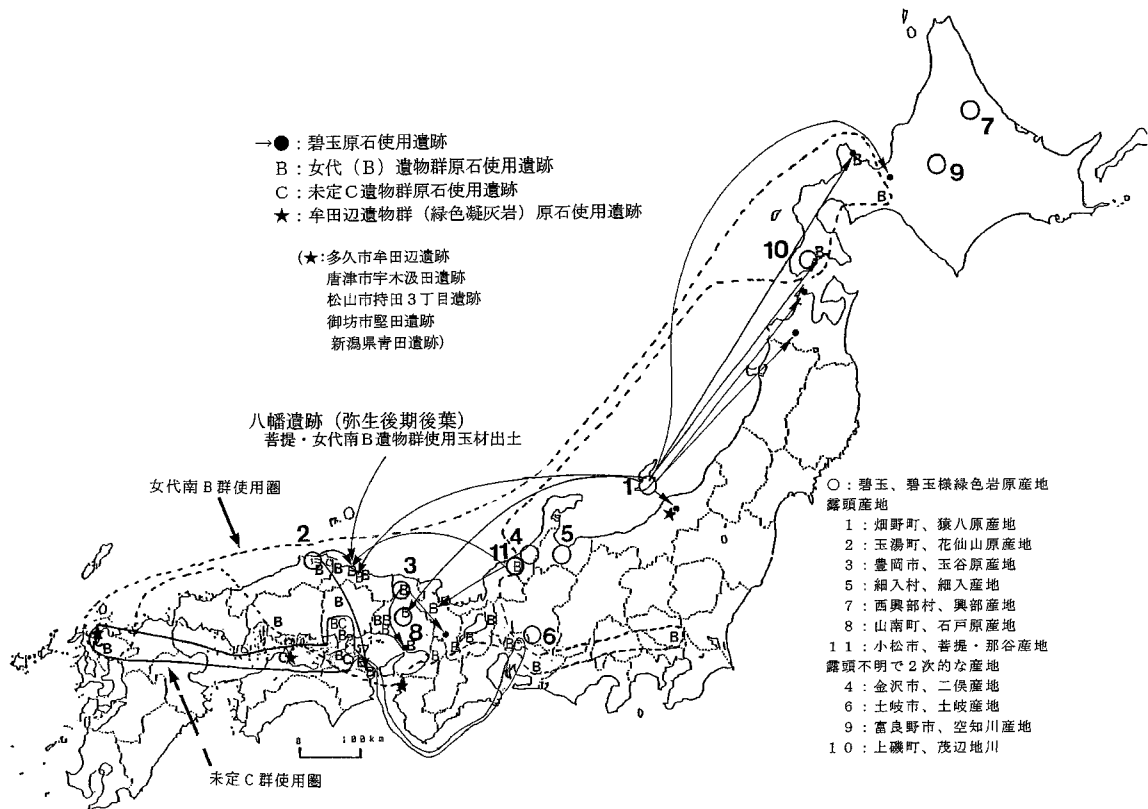
碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を第97図に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの第97図で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いている。



第97図 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第98図に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所か見られるが、今回分析した原石は猿八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石などであり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーン



第98図 弥生(続縄文)時代の碧玉製、緑色凝灰岩製玉類の原材使用分布圏及び碧玉・碧玉様岩の原産地

タフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても分析した組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。横屋堀地区から産出する原石は、濃緑色から緑色の緻密で剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、他に硬度が低そうなグリーンタフのような原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のものが分析されているのがわかる。これら花仙山周辺の面白谷、瑪瑙公園、くらさこ地区などから原石を採取し組成の似た原石でくらさこ群、面白谷瑪瑙群、また、花仙山凝灰岩群などを作った。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より緻密で優れた感じのものもみられる。このような良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分

析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。ここの河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーントフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。また元素組成は他の産地の組成と異なっており区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーントフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が分析した8個は2.25～2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、⑦北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県氷上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6～2.5が5個、2.5～2.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質の碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の河原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。⑪石川県小松市菩提、那谷に緑色凝灰岩の露頭があり、その中に緻密な碧玉が包含されている。産出量は少ないが良質の碧玉が菩提川、宇田川から採取される。この河床から採取された碧玉の中に、女代南B遺物群に一致する組成の碧玉が含まれる。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値を求めて母集団を作り表6に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが、比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索するという目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B（女代B）群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木汲田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定C（未定(C)）群をそれぞれ原石群と同じように使用する。また、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚(1)、(2)の遺物群、多摩ニュータウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡などから出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、現在遺物群は合計92個になり、これら遺物群を表7に示した。この他、鳥取県の福部村多鯰池、鳥取市防

己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重(2.35)が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

八幡遺跡出土の玉材と国内産碧玉原材との比較

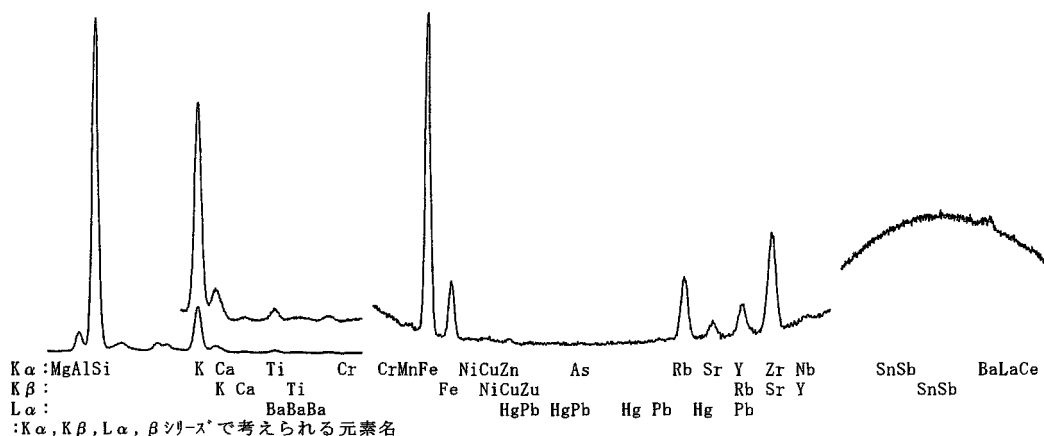
遺跡から出土した玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行う。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

表7 八幡遺跡出土玉材の分析結果

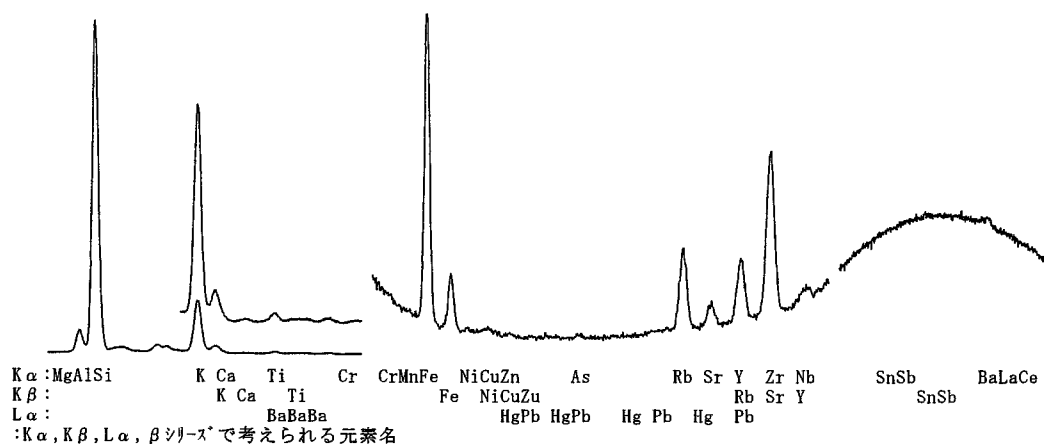
掲載 No	分析 No	元 素 比							
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
S14	94476	0.042	3.386	0.019	0.125	0.164	0.206	2.996	0.613
S13	94477	0.047	3.998	0.012	0.094	0.322	0.277	1.729	0.475
S16	94478	0.041	3.193	0.003	0.104	0.221	0.254	2.057	0.519
S17	94479	0.041	3.419	0.007	0.116	0.331	0.293	1.464	0.426
S18	94480	0.043	3.776	0.004	0.107	0.234	0.223	2.437	0.540
S15	94481	0.044	3.523	0.025	0.127	0.225	0.237	2.363	0.555
JG-1 ^{a)}		0.067	3.392	0.774	0.237	0.111	0.263	3.795	0.998

掲 載 No	分 析 No	元 素 比					重 量 (gr)	比 重
		Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr		
S14	94476	0.141	0.151	0.013	0.018	0.006	1.65963	2.553
S13	94477	0.122	0.215	0.017	0.027	0.020	3.11297	2.535
S16	94478	0.098	0.137	0.026	0.021	0.027	1.23769	2.495
S17	94479	0.150	0.126	0.029	0.034	0.019	3.38653	2.519
S18	94480	0.084	0.090	0.019	0.023	0.018	0.32439	2.526
S15	94481	0.539	0.133	0.020	0.026	0.023	1.44275	2.474
JG-1 ^{a)}		1.345	0.281	0.024	0.024	0.079		

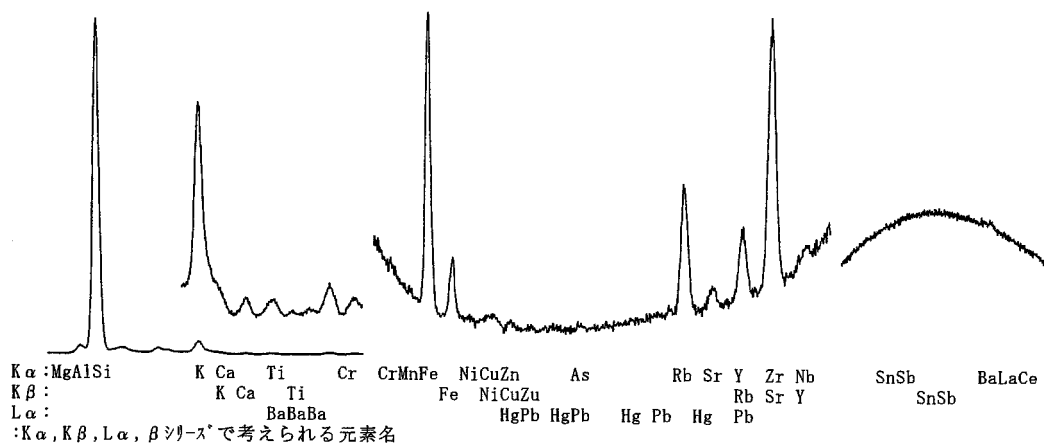
a) : 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192.



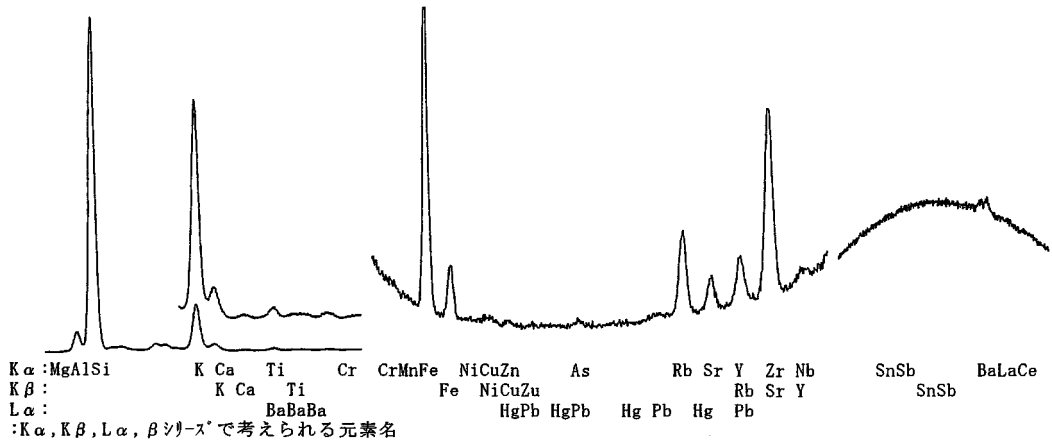
第99図—(1) 八幡遺跡出土玉材S14 (94476) の蛍光X線スペクトル



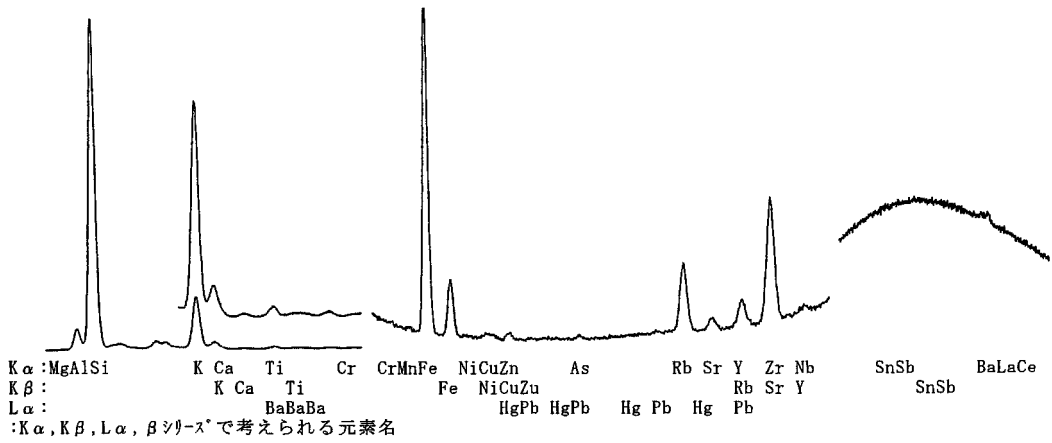
第99図—(2) 八幡遺跡出土玉材S13 (94477) の蛍光X線スペクトル



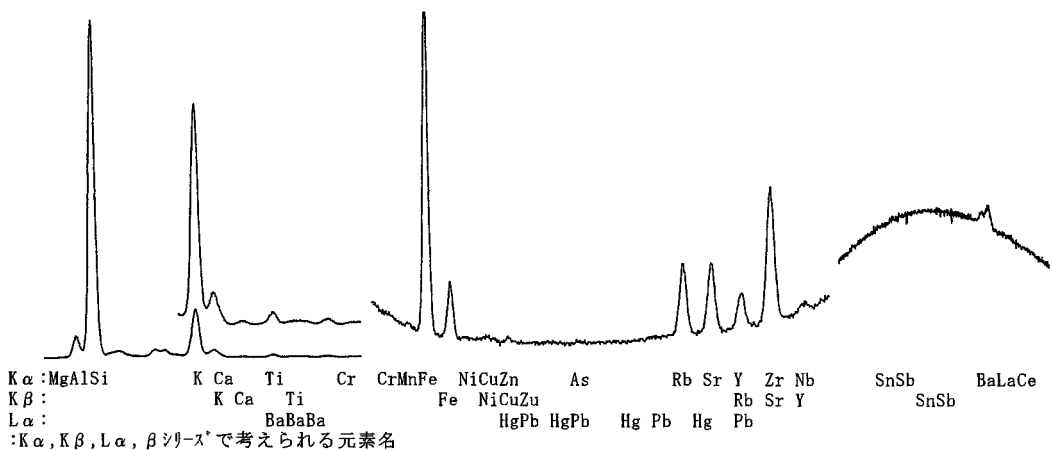
第99図—(3) 八幡遺跡出土玉材S16 (94478) の蛍光X線スペクトル



第99図—(4) 八幡遺跡出土玉材S17 (94479) の蛍光X線スペクトル



第99図—(5) 八幡遺跡出土玉材S18 (94480) の蛍光X線スペクトル



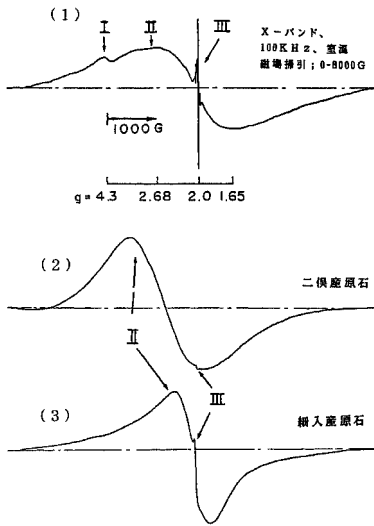
第99図—(6) 八幡遺跡出土玉材S15 (94481) の蛍光X線スペクトル

蛍光X線法による産地分析

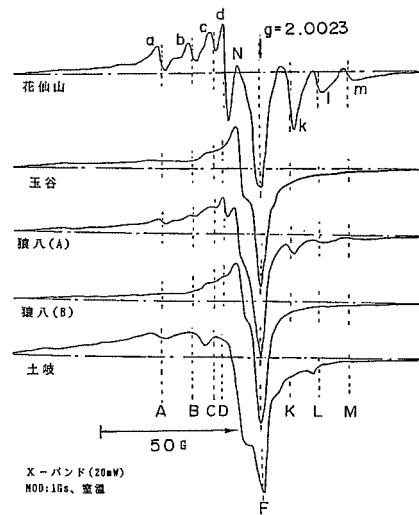
これら玉材の蛍光X線分析のスペクトルを第99図—(1)~(6)に示し、比重および管玉の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めた結果を表7に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb、Sr、Y、Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。また、緑色凝灰岩（グリーンタフ）製は比重が2.4に達しない玉材が多い。分析した玉材の比重は、2.55~2.45で碧玉製と推測される。これら遺物の元素組成比の結果を碧玉原石群（表6）の結果と比較してみる。分析個数が少なく統計処理ができる群が作れなかった原産地については、原石の元素組成比を、遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT2乗検定⁶⁾により同定を行い、それぞれの原石群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{4,5)}。産地の同定結果は1個の管玉に対して、119個の推定確率結果が得られている。119個の結果の中で、高確率で同定された原石群（必要条件を満たした）の産地に管玉の原材産地を同定するが、原理原則は、同じ組成の碧玉が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある玉類の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されていると言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。』、十分条件の低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち菩提、那谷産原石と判定された遺物に対して、花仙山産原石とか玉谷産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を表8に記入した。原石群を作った原石試料は直径2cm以上で精度良く分析される。遺物は、大きさ、形がさまざまにこれらの影響により分析値が少しは変化していることを推測し、判定の信頼限界を0.1%に設定した。判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。蛍光X線分析の判定で、女代南B群、菩提、那谷原石と同定（表8）された玉材を、より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して総合的に産地分析を行った。

表8 八幡遺跡出土玉材の原材産地分析結果

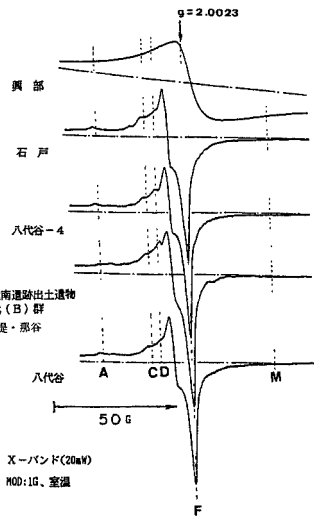
掲載No	分析No	調査区遺構名	ホテリングT2乗検定（確率）	ESR形	総合判定
S14	94476	3区SD12	女代南B遺物群（80%）、菩提—1（33%）、面白谷瑪瑙群（0.3%）	女代B形	菩提・女代南B遺物群
S13	94477	3区SD12	女代南B遺物群（9%）	Fe大	
S16	94478	3区SD12	女代南B遺物群（30%）、菩提—1（25%）	女代B形	菩提・女代南B遺物群
S17	94479	3区SD12	菩提—1（20%）、女代南B遺物群（80%）	女代B形	菩提・女代南B遺物群
S18	94480	3区SD12	女代南B遺物群（11%）、菩提—1（4%）	女代B形	菩提・女代南B遺物群
S15	94481	3区SD12		女代B形崩れ	



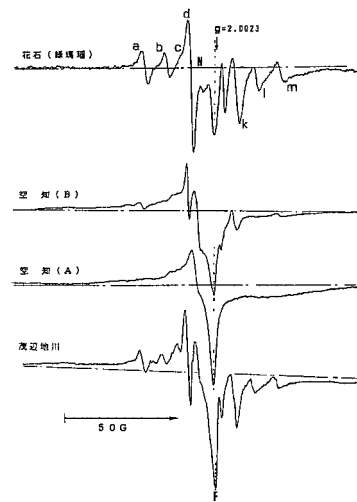
第100図 碧玉原石のESRスペクトル
(花仙山、玉谷、猿八、土岐)



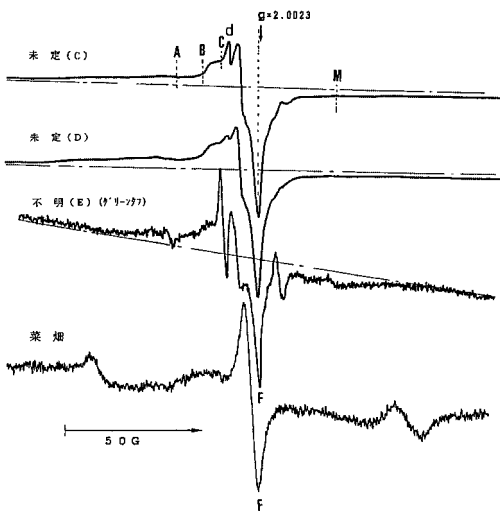
第101図—(1) 碧玉原石の信号(Ⅲ)
のESRスペクトル



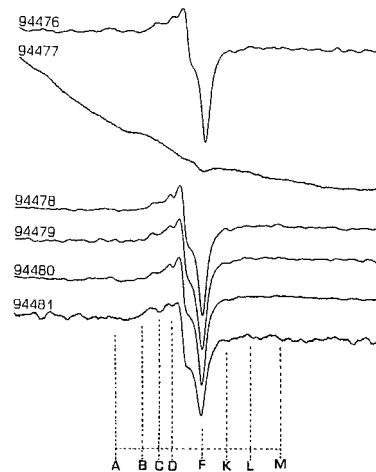
第101図—(2) 碧玉原石の信号(Ⅲ)
のESRスペクトル



第101図—(3) 碧玉原石の信号(Ⅲ)
のESRスペクトル



第101図—(4) 碧玉原石の信号(Ⅲ)
のESRスペクトル



第102図 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESR
スペクトル

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さいものは胡麻粒大で分析ができる場合がある。第100図—(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、 g 値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、 g 値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。第100図—(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、第100図—(2)、第100図—(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号(II)が信号(III)より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第101図—(1)に花仙山、猿八、玉谷、土岐、第101図—(2)に興部、石戸、八代谷—4、女代B遺物群(菩提、那谷原石と一致)、八代谷、第101図—(3)に富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号(III)のスペクトルを示す。第101図—(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。ESR分析では玉材と管玉のESR信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石だったり、産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、その産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した玉材のESR信号(III)の結果を第102図に示す。S14、S16~18は不純物結晶によるノイズ状の小信号が見られるが、信号IIIは女代南Bとか菩提・那谷原石形である。また、S13は鉄の信号IIが大きく信号IIIは不明である。S15にも女代南B形らしき信号は含まれているが、他の信号と合成され崩れている。これら一致したESR信号形を表8に示し、より正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合は、遺物が過大でESR分析ができず蛍光X線の元素分析のみで判定した原石・遺物群産地よりも正確に、その原石・遺物群と同じものが使用されているとして総合判定原石産地の欄に結果(表8)を記した。

結 論

S14、S16~18の玉材は、蛍光X線分析とESR分析の両結果が女代南B遺物群菩提に一致し、女代南B遺物群で菩提・那谷産地の原石が使用されていると判定した。S13は蛍光X線分析では女代南B群に一致するが、ESR分析で信号IIIの形が女代南B形と判定できなかった、またS15はESR信号は女代南B形崩れで、蛍光X線分析の結果は、表5、6の何処の原石・遺物群にも信頼限界の0.1%を越えて一致しなかった。

八幡遺跡で多用されている女代南B群は弥生時代を中心に使用された原石で、豊岡市の女代南遺跡の中期の玉作り過程の石片、滋賀県の筑摩佃、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には玉谷産と共に使用されていた。京都府の日吉ヶ丘遺跡で使用され、余部遺跡で剥片には玉谷産原石が使用されている。関東地方では埼玉県蓮田市宿下遺跡、東海地方では、清洲町朝日遺跡、新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、畿内地域では東大阪市の、鬼虎川、巨摩、亀井、久宝寺北、久宝寺南遺跡で、また中国地方では、佐用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生前期末~中期初頭の玉材、岡山市の百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上

村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出土の管玉、東広島市の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群Ⅱ、2号墳、3世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、また宇木汲田遺跡の管玉に使用されていた。また、統縄文時代には北海道の上磯町茂別遺跡、余市大川遺跡、千歳市キウス遺跡にまで伝播し、女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。一方、未だ畿内では使用が確認されていない管玉として、南溝手遺跡の中期前葉の管玉片には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った原石群の未定C群の原石が使用され、この未定C群は坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ里遺跡の南西サブトレンチ出土の管玉に使用されている。また、猿八産原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の統縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出土の統縄文（後北C1式）の管玉に、七飯町の大中山13遺跡（統縄文）出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。西日本では、鳥取県の長瀬高浜遺跡では女代南B群と同時に猿八産碧玉が使用されているにすぎない。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。未定C群は、最近の予備的な実験で朝日遺跡で使用されている可能性が推測されたことから、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通して伊予、備前、讃岐へ流入し現在の東進の限界になっている。朝日遺跡での使用が確実になれば、播磨、摂津、大和、近江を飛び越え、尾張の朝日遺跡に伝播したことが明らかになり東進の限界が一気に300km延びる可能性がでてくる（第98図）。花仙山産原石は弥生後期に笠見第3遺跡で使用されているが、大半は、北陸産と推測している女代南B遺物群が搬入されている。これは遺跡から近い産地が多用されるとは限らないことを示し、先史の交易を推測する貴重な例と思われる。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団（原石群）を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B遺物群を作る遺物の一部は菩提・那谷産地に一致するが、全ての組成の遺物が菩提・那谷地区に存在するか調査を深めていく必要がある。また、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、これら不明遺物群の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析することが重要で、是非とも各地の遺跡の詳細な碧玉製遺物の科学的調査が必要であるが、現在調査が殆ど進んでいないのが現状で、国庫補助での発掘調査には必ず科学的調査も加えるべきだと思う。今回行った産地分析は完全な非破壊で、玉類、碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われまます。

参考文献

- 1) 茅原一也 (1964)、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ヶ原、新潟県糸魚川

市教育委員会：63-73

- 2) 藁科哲男・東村武信 (1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6 : 1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』、14 : 95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16 : 59-89
- 5) Tetsuo Warashina (1992), Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19: 357-373
- 6) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9 : 77-90

第2節 八幡遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. 分析の目的

八幡遺跡では、奈良時代の集落が確認されている。この胎土分析では、奈良時代の遺構から出土した土器を理化学的な手法（蛍光X線分析法、実体顕微鏡による胎土分析）を用いて分析し、以下の点について調べた。

- (1) 土師器の坏には技法的（螺旋暗文）な検討で畿内系と考えられる土器が出土している。また土師器鉢も技法的には畿内系と考えられるが、胎土の肉眼観察では、坏とは異なり在地産と考えられることから、胎土分析により在地産と想定される土師器甕との比較検討を行ない、畿内産か在地産か検討した。
- (2) 須恵器（坏・壺・甕・横瓶）に関しても在地産と考えられることから、生産地である関金町の鳥越山窯跡群との比較を行った。

2. 分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

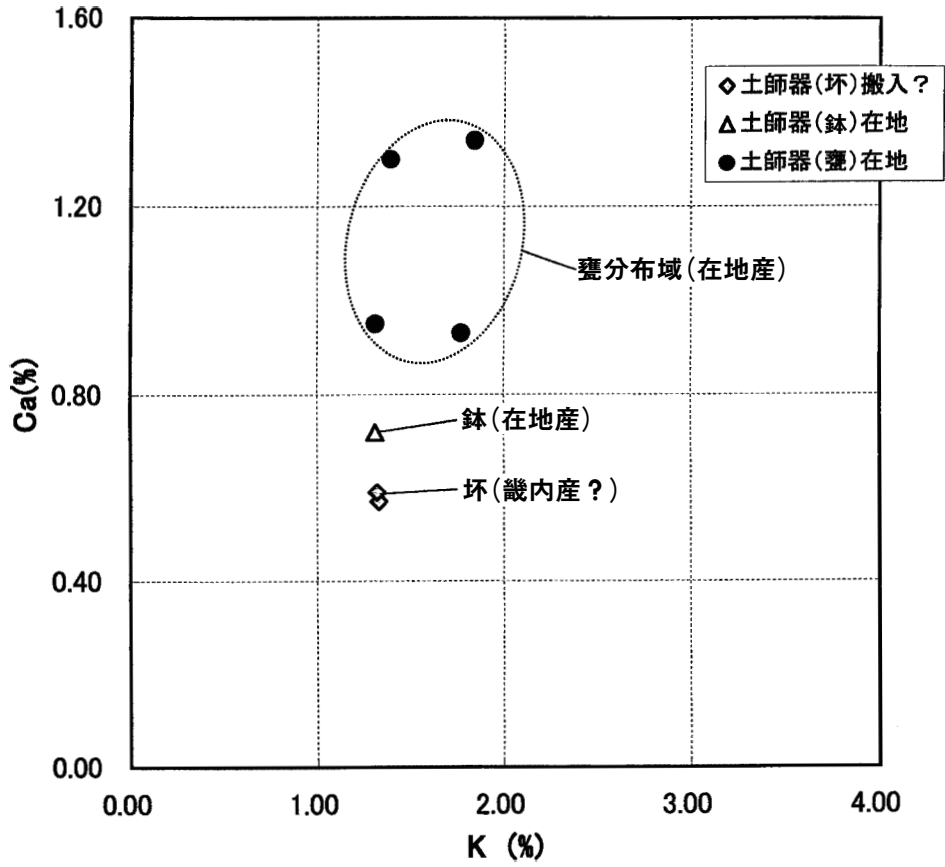
分析した土器は、表9に示した土師器（坏・鉢・甕）7点、須恵器（高台坏・壺・甕・横瓶）8点の合計15点である。

3. 蛍光X線分析法による分析結果

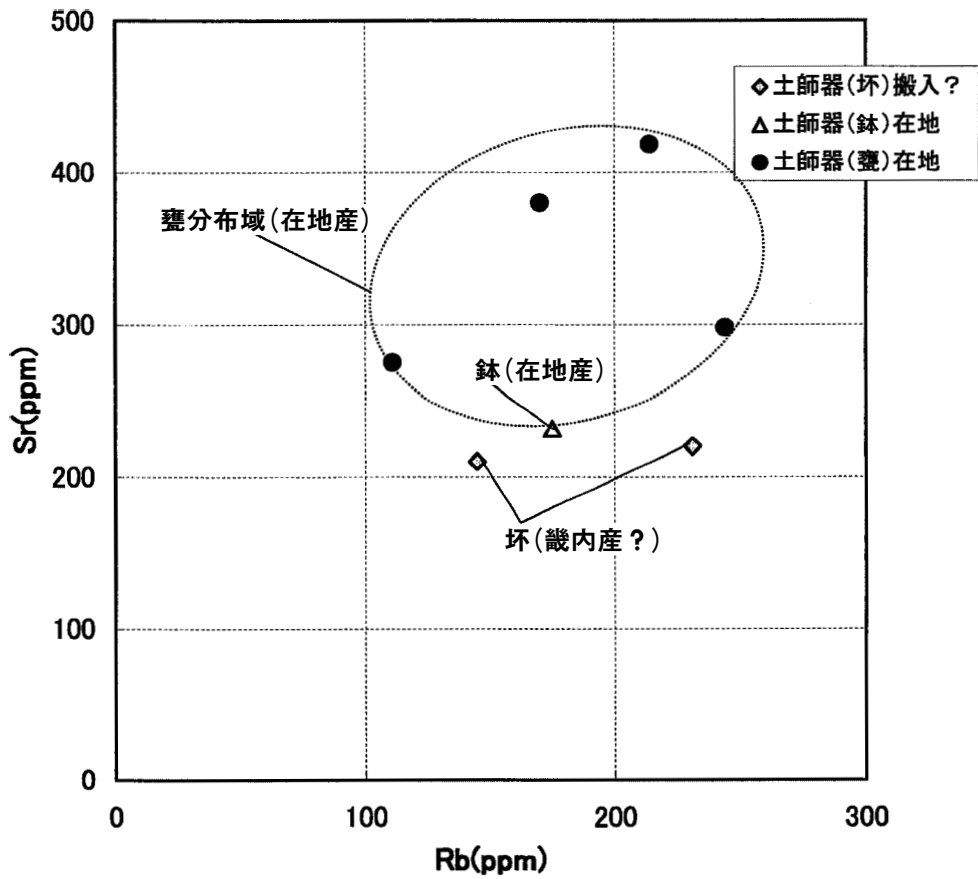
第103図K-Ca、第104図Sr-Rbの散布図では、土師器の坏と鉢・甕のあいだで胎土に違いがあるか検討した。その結果、土師器の坏・鉢と甕の二つの胎土にわかれた。したがって、坏と鉢は胎土的に類似していた。また甕は、広く散漫な分布でまとまった。

第105図K-Ca、第106図Sr-Rbの散布図では、須恵器の産地推定を行った。比較した生産地は鳥越山窯跡群のみである。すると、すべて鳥越山の分布域に入る結果となった。

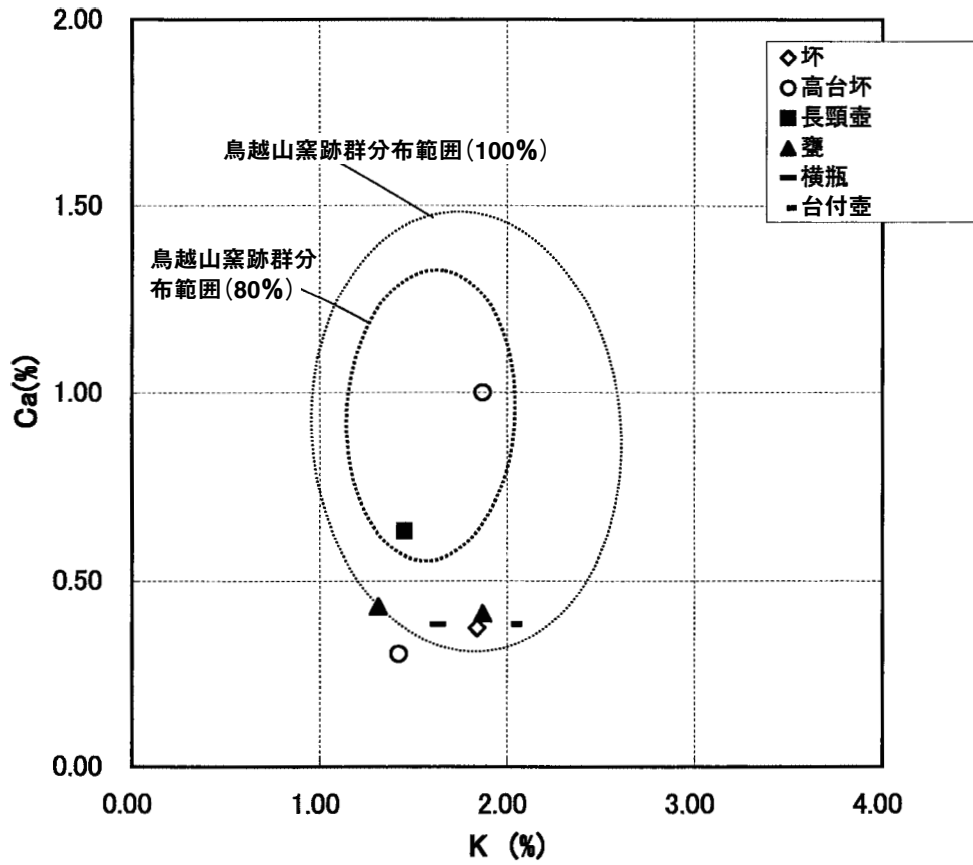
なお、生産地である鳥越山の分布範囲であるが、内円と外円の両方を描いている。内円には分析点数が53点のうち41点が分布している範囲である。



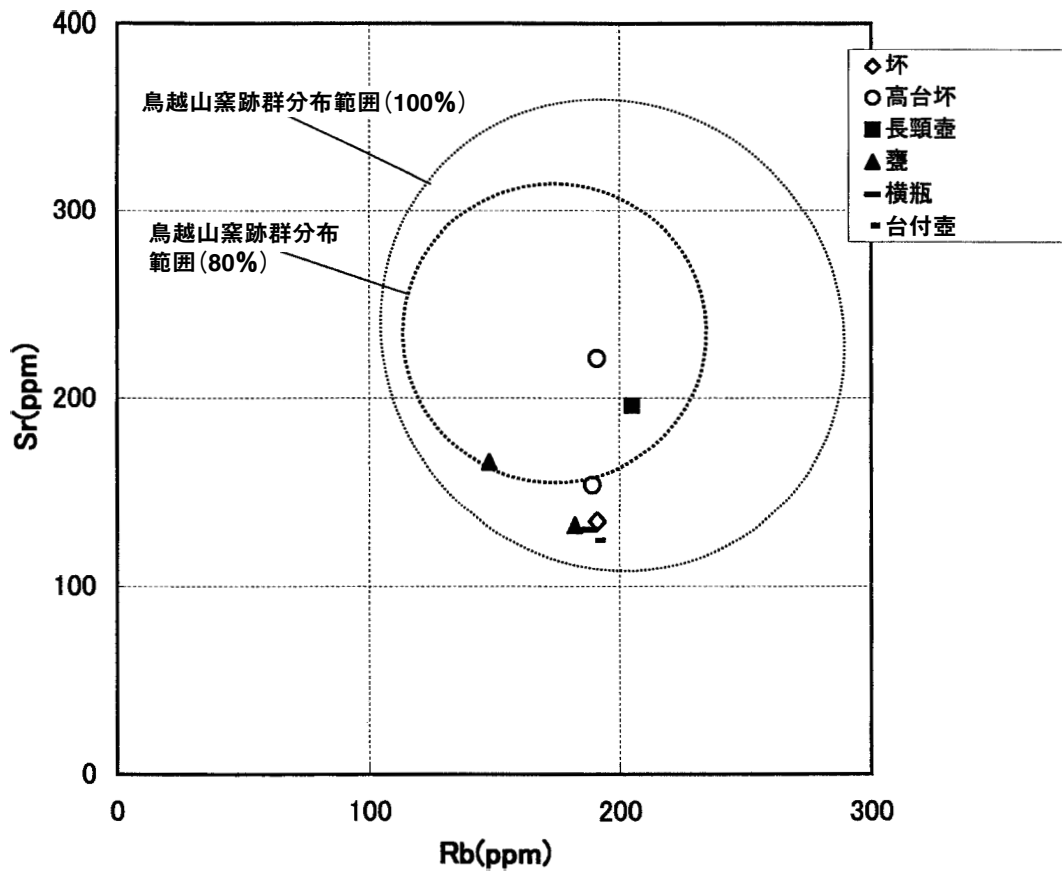
第103図 器種別による土師器の胎土比較 (K-Ca)



第104図 器種別による土師器の胎土比較 (Rb-Sr)



第105図 須恵器の産地推定 (K-Ca)



第106図 須恵器の産地推定 (Rb-Sr)

4. 実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。また、岩石、鉱物の含有量は相対的な観察で多量・普通・少量・希にの4段階で分類したため定量性には欠けるが一応の目安とした。

観察した土器は土師器で、甕（1・2・5・6）の胎土中には2mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石、黒雲母、が含まれていた。含有量は石英が多量に含まれ、長石は少量である。そして、角閃石は土器により含有量が異なるが、少量含まれていた。また、大山起源の安山岩岩片も含まれていた。

坏、鉢類にも2mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石、黒雲母が含まれていた。含有量は石英が甕に比べ非常に少なく、長石は少量である。角閃石、黒雲母も少量～希に含まれ、精製された粘土を使用しているようである。

5. まとめ

八幡遺跡出土土器の胎土分析（蛍光X線分析、実体顕微鏡観察）を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

- (1) 土師器の坏（畿内系）と鉢・甕（在地産）のあいだで胎土に差があるかどうかでは、蛍光X線分析では坏・鉢と甕で胎土に違いがあった。また、砂粒観察でも甕には、石英が多量に含まれ、長石・角閃石も少量含まれ、大山起源の安山岩も含まれていたことから在地の粘土で製作されていると推定される。そして、坏・鉢類は基本的な砂粒構成は同じであるが、甕に比べ石英の量が非常に少ないことなどから、粘土を水簸するなど加工を加えことが推定される。その結果が胎土差としてあらわれたのかもしれない。試料の蓄積が必要である。
- (2) 須恵器の産地推定では、現在までに蓄積しているこの時期の生産地試料が鳥越山窯跡群に限られているが、この窯跡との比較を行ったところ、すべて鳥越山に推定された。しかし、鳥取県内には、ほかの生産地もあり、それらの試料も蓄積し検討する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。また、窯跡の分析試料では関金町教育委員会にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

表9 八幡遺跡出土土器分析値一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm

掲載No	試料No	試料	調査区・地区名	遺構名	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	備考
11	①	土師器甕	1区	SI3	63.27	0.95	21.28	5.95	0.25	2.34	0.93	2.99	1.77	0.08	244	298	280	
60	②	土師器甕	1区	SK3	62.09	0.95	22.80	3.42	0.04	2.69	0.95	5.52	1.31	0.05	111	275	271	
58	③	土師器皿	1区	SK3	65.10	1.09	22.50	4.44	0.05	2.08	0.57	2.48	1.33	0.12	145	210	306	赤彩暗文あり
59	④	土師器鉢	1区	SK3	64.26	1.07	22.12	5.45	0.07	1.92	0.72	2.67	1.31	0.18	175	232	347	赤彩暗文あり
3	⑤	土師器甕	1区H40	SI1北西区	61.59	1.06	21.84	7.61	0.08	2.09	1.30	2.74	1.39	0.05	170	380	343	
97	⑥	土師器甕	1区G37包含層		64.91	0.98	21.44	5.15	0.06	1.99	1.34	1.97	1.84	0.08	214	419	286	
30	⑦	土師器坏	1区	SB6~9	65.62	1.04	22.17	4.42	0.04	2.03	0.59	2.48	1.32	0.05	231	220	325	赤彩暗文あり
17	⑧	須恵器甕	1区	SI4	73.01	0.93	15.47	2.92	0.03	1.88	0.41	3.13	1.87	0.14	182	132	398	
52	⑨	須恵器高台坏	1区	SK3	66.92	1.35	17.76	7.06	0.10	1.89	0.30	2.92	1.42	0.07	189	154	508	
57	⑩	須恵器長頸壺	1区	SK3	64.32	1.00	21.60	5.42	0.05	2.11	0.63	3.16	1.45	0.01	205	196	358	
51	⑪	須恵器高台坏	1区	SK3	65.59	0.89	20.24	4.97	0.08	2.01	1.00	3.05	1.87	0.07	191	221	393	
56	⑫	須恵器付台	1区	SK3	69.71	1.02	17.58	4.29	0.05	1.88	0.38	2.69	2.03	0.09	199	124	389	
74	⑬	須恵器横瓶	1区	SK5	70.81	1.16	16.69	4.00	0.05	1.97	0.38	3.02	1.63	0.14	188	130	443	
72	⑭	須恵器坏	1区	SK5北東区	71.24	0.87	17.60	3.13	0.03	1.87	0.37	2.68	1.84	0.11	191	134	325	
94	⑮	須恵器甕	1区I39包含層		68.31	1.01	18.95	4.72	0.05	1.92	0.43	2.91	1.31	0.09	148	166	353	

第5章 ま と め

八幡遺跡の調査では、1区及び拡張区で飛鳥・奈良時代を中心とする遺構を検出し、さらに2区・3区では縄文時代と思われる落し穴から近世の土坑まで幅広い時期の遺構を確認するに至った。また、遺構以外では、1区及び拡張区からは飛鳥・奈良時代の土器を中心とする出土遺物が見られた。ここでは八幡遺跡で検出した遺構・遺物について若干の検討を行い、まとめとしたい。

第1節 飛鳥・奈良時代の土器について

1区及び拡張区では、遺構、包含層、表土中から飛鳥・奈良時代の供膳具類を中心とする赤彩土師器、須恵器が出土した。本調査では確認した遺構の時期を出土土器から推察したことから、本節では竪穴住居跡や土坑などの遺構出土の赤彩土師器、須恵器を対象として、おもに年代的検討を行う。

鳥取県中部は、古代から中世にかけて伯耆国と呼ばれた国の東側を占める（以下、東伯耆）。この東伯耆における飛鳥・奈良時代の遺跡は、官衙及びその関連遺跡や寺院跡などを中心に多くの調査例をみるが、該期の土器に関する検討はわずかであり、伯耆国庁出土の土師器によって8世紀後半以降の編年が提示される（巽他 1979、巽 1983）ほかは、倉吉市福田寺遺跡（森下 1998）出土土師器を8世紀前半に位置付ける検討が行われている程度である。

伯耆国庁編年によれば、8世紀後半から10世紀代の土師器には大きく3段階の変遷が認められる。第1段階（8世紀後半）は、底部調整にヘラケズリを用いたロクロ技術採用以前の土師器であるが、器面に施されるヘラミガキや暗文の有無により、細分の余地があるとする。第2段階（8世紀末から9世紀後半）は底部ヘラ切りのロクロ土師器、第3段階（10世紀後半代）は底部糸切りのロクロ土師器とする。また、福田寺遺跡出土土師器の検討では、回転台による成形ではなく、底部ヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施すことなどから、伯耆国庁第1段階に相当するとしながらも、口縁部外面にヘラミガキを施し、内面に暗文を施す例が多いことや、坏C^(註1)の存在から、伯耆国庁第1段階よりも古い要素が認められるとし、伯耆国庁第1段階以前（8世紀前半）に比定する。

しかし、後述する本遺跡出土土師器の時期に限っても、伯耆国庁編年では、第1段階の年代比定に明確な根拠が示されておらず、また細分された場合、それが時期差を反映するものか同時期の土器製作における製作手法の差であるのかなど問題が残る。福田寺遺跡出土土師器の検討では、器種分類や年代観など畿内産土師器^(註2)の基準に従っているが、東伯耆の土師器を畿内産土師器の器種分類や編年に対応させるには、東伯耆の土師器が畿内産土師器であるのか、または畿内産土師器が恒常的に東伯耆の土師器生産体制に影響を与えていたことを明らかにすることが必要となる^(註3)。

上記した該期の土師器の年代比定に関する問題に対し、以下八幡遺跡の土師器、須恵器の分類から、これらがどのような相伴関係にあるのか検討し、年代の変遷を明らかにしたい^(註4)。なお、須恵器編年においては年代比定や一括資料の捉え方に若干の相違があるものの、周辺地域を含め、その成果に妥当性が認められるため、ここではその成果を利用する（足立・丹羽野 1984、角田 2003、坪井・町田 1970、萩本・佐古 1984）^(註5)。

土師器 器面に施された最終調整の種類や暗文の有無等により分類を行った。器種には坏、皿、鉢などが認められるが、器種により調整等が限定されるものではなく、以下に分けられる。

1. 内外面ヘラミガキ後に内面暗文を施すもの（SB6、SK1、SK3、SK5出土）
2. 外面ヘラミガキ、内面ナデ後暗文、内面ヘラミガキが省略されるもの（SI4、SK1、SK6出土）
3. 内外面ヘラミガキだがやや雑になる。暗文は省略される。（SB1、SB6・8・9、SK1出土）
4. 内面ナデ、外面ヘラミガキで、内面ヘラミガキ、暗文が省略されるもの。内面にハケ調整が見られるものもある。（SB2、SK2、SK4出土）
5. 内外面ナデにより、ヘラミガキ、暗文が省略されるもの。内面にハケ調整が見られるものもある

る。(SB2、SB3、SK1、SK2、SK4出土)

須恵器 坏の調整は、口縁部などおもにロクロナデによるが、底部外面に残る切り離しの方法に着目した場合、以下に分けられる^(註6)。

1. ヘラ切り (SK3、SK5出土)
2. 静止糸切り (SI4、SK2、SK5出土)
3. 回転糸切り (SI5、SK1、SK4出土)

以上のことから、表10・11に示す土師器と須恵器の共伴・併行関係が窺われる^(註7)。

表10 土師器・須恵器分類表 (ヘラミガキの欄△は調整が雑なもの)

遺構名	土 師 器								須 恵 器			土師器分類	須恵器分類
	内 面				外 面		底 部 外 面		底 部 外 面				
	ヘラミガキ	暗文	ナデ	ハケ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラケズリ後 ヘラミガキ	ヘラケズリ 後ナデ	ヘラ切り	静止 糸切り	回転 糸切り		
SK3	○	○					○		○			1	1
SK3	○	○			○							1	
SK5	○	○			○		○		○	○		1	1・2
SB6	○	○			○		○					1	
SI4		○	○		○		○			○		2	2
SK6		○	○		○							2	
SB1	○				△	○		○				3	
SB6・8・9	△		○				○					3	
SK2			○		○					○		4	2
SB2			○		△	○						4	
SK4			△	○		○	○				○	4	3
SK2			○			○		○				5	
SK4			○			○		○				5	
SB2			△	○				○				5	
SB3			○			○		○				5	

そして既存の須恵器編年を参考にするならば、上記の須恵器分類は年代の変遷によることが明らかにされていることから、土師器分類1～5は内外面ヘラミガキ内面暗文から内面ヘラミガキ、暗文、外面ヘラミガキと徐々にその調整を省略していく方向が窺える^(註8)。

この土師器分類1～5の実年代であるが、土師器1が認められるSK3では、出土須恵器に、高台坏51、輪状つまみを持つ蓋55、かえりを持たない蓋54などが見られる。高台坏51は、高台が取り付く位置が坏部の内部にあること、底部切り離しヘラ切りであること、蓋54のかえりの消失などから出雲国庁2形式の年代に位置づけられる。この出雲国庁2形式は出土木簡から690から710年の年代に比定される。次に同じく土師器1を出土するSK5からは、底部ヘラ切りによる須恵器坏のほか、静止糸切りによる須恵器坏が認められる。また土師器2を出土するSI4や土師器4・5が認められるSK2からも静止糸切りによる須恵器坏が出土している。この静止糸切りは、出雲国庁の調査によると、出雲国庁3形式(8世紀前半)に認められ、出雲国庁4形式(8世紀後半)からは回転糸切りのみになることが推定されることから、土師器1の存続する時期や土師器2の出現時期、土師器4から5への変化は8世紀前半に位置づけられる。そして土師器5は、出土するSB3では、須恵器坏底部の資料を欠くが、口縁部下端に括れ部を持つ須恵器坏の括れがほとんど認められなくなる形態から出雲国庁4形式に位置づけられる。

このことを整理すると、7世紀末から8世紀初頭は土師器1のみ認められるが、8世紀前半代は土師器1・2・4・5が見られることから、この間に土師器1から5までの変化があったと考えられ

表11 土師器・須恵器分類の併行関係

土師器分類	1	2	3	4	5
須恵器分類	1	2		3	

る。そして土師器5は8世紀後半も認められることが確認された。

以上述べてきたように東伯耆の飛鳥・奈良時代の土器編年は、既存の須恵器編年を参考にする限り、土師器はヘラミガキ調整、暗文の省略といった変化が追えた。そしてこの調整の省略は、須恵器編年の年代観を参考にするならば、8世紀前半代のことである。また該期の畿内産土師器との関連ではヘラミガキの省略されるようになる傾向など共通性が見受けられる。(野口)

註

1. 坏Cは、「小さな平底、あるいは丸底と斜め上にひろく口縁部をそなえ、口縁部端面が内傾することを特徴」(奈良国立文化財研究所 1976)とする。畿内では飛鳥Iから平城宮III(7世紀初頭から8世紀中頃)まで認められるが、平城宮IV(8世紀後半)以降の器種としての認定は研究者間で見解が異なる(小森 1992)。
2. ここでは便宜的に畿内で生産、使用された土師器を「畿内産土師器」、畿外で畿内産土師器を模して生産された土師器を「畿内系土師器」と呼称する。
3. 現在確認されている東伯耆の該期の土師器は赤彩が施されるのに対し、畿内産土師器は赤彩をしない。また、福田寺遺跡で坏Aに分類される底部平底の坏は、畿内産土師器坏Aの多くが口縁部を折り返すことによって肥厚させているのに対し、口縁部の肥厚は見られず、畿内産土師器の分類でいう坏Cの形態をとる。このことから東伯耆の土師器は、暗文など畿内産土師器の影響を受けた畿内系土師器と判断される。
4. 八幡遺跡の出土土器は土師器・須恵器とも供膳具類を中心としたことから、本節では供膳具類に限り検討を行った。該期の畿内産土師器では、同じ形式の土器でも法量に分化が認められるが、八幡遺跡出土土器の場合、出土土器の多くは破片資料であり、法量の計測の多くは復元によることから、形態や法量による分類は行わなかった。また今回は土師器、須恵器の出土量に関する検討も行わなかったが、報告書未掲載のものについて、底部資料から比率を出した結果、55:45と土師器が若干上回ることが明らかとなった。
5. 輪状つまみが付く蓋や口縁部下端を括れさせる坏など、山陰独特の器形が認められるものの、畿内の須恵器様式とほぼ同様の器種構成をとり、その変遷も畿内のものと併行すると考えられる。山陰独特の器形では、口縁部が括れる須恵器坏は、8世紀前半頃までは括れが明瞭に認められるが、8世紀後半以降は不明瞭になることや、輪状つまみの蓋は7世紀後葉頃から8世紀前半まで認められることが指摘されている。また山陰地方では、他地域に先駆け、須恵器底部切り離しに糸切りを用いた方法が遅くとも8世紀前半には認められることも明らかになっている。
6. これらのなかにはヘラ切り、静止糸切り、回転糸切りの後、ナデによる調整が施されるものも含まれるが、細片のため、その精緻、粗雑等に一定の分類基準を設けられなかったことから、ここでは最終調整のナデは除外する。
7. 回転糸切りの須恵器坏を出土するSK1には土師器分類1・2・3・5が伴う。本節の検討が妥当であれば、分類は時期差を表すと考えられることから、SK1出土遺物の一括性は低い。しかし、出雲国庁の調査では、須恵器坏底部切り離しに静止糸切りのほか回転糸切りも8世紀前半に認められていることや、考古資料の型式変化は、古い型式から新しい型式へ突然に変わるものではなく、その変化は漸次的であり、場合によって古い型式が新しい型式よりも存続することなどを考慮すると、SK1の土器の出土状況も土師器分類と須恵器分類の同時性の実態を表している可能性はあるが、表の構成上煩雑になるため、ここでは検討から除外する。SK1の土器出土状況が土師器分類と須恵器分類の同時性を表している場合、須恵器2の存続期間には須恵器3も併存したこととなる。また、SI5についても土師器の様相がはっきりとしないため除外したほか、分類の結果、同じ項目に該当したものは、まとめて記載した。
8. 土師器2、3の前後関係は3に伴出する須恵器の様相が不明なため捉え難いが、土師器3のヘラミガキが粗雑になること、底部外面の調整はナデによることなど、後出性が認められることから、便宜的に2、3の順に位置づけた。

参考文献

- 足立克己・丹羽野裕 1984「第6章まとめ(3)遺物」『高広遺跡発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
 角田徳幸 2003「第5章まとめ第3節奈良・平安時代の施設群」『史跡出雲国府跡—1—』鳥根県教育委員会
 小森俊寛 1992「概説」『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会
 巽淳一郎他 1979『伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)』倉吉市教育委員会
 巽淳一郎 1983「古代窯業生産の展開—西日本を中心に—」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
 坪井清足・町田章 1970「奈良時代の遺物」『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会
 奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』
 萩本勝・佐古和枝 1984「須恵器について」『陰田』建設省・米子市教育委員会
 森下哲哉 1998『福田寺遺跡発掘調査報告書(2次調査)』倉吉市教育委員会

第2節 飛鳥・奈良時代の遺構について

本節では、前節で検討した土器の年代的変遷や遺構の切り合い関係から、八幡遺跡で確認された該期の遺構の変遷を明らかにし、若干の検討を行いたい。

八幡遺跡1区及び拡張区では、飛鳥・奈良時代の遺構として、その可能性があるものを含めると竪穴住居跡5棟、掘立柱建物跡10棟(建替えたものも含む)、土坑7基、溝状遺構1条が認められる(表12)^(註1)。これによると該期の遺構は、7世紀後半以前に位置付けられる竪穴住居跡(SI3)から始まる。このSI3は、7世紀末の土壌SK3と切り合い関係にあることから、7世紀末から8世紀初頭に構築される掘立柱建物を中心とする遺構群とは時期的にやや隔絶した状況にある。この掘立柱建物を中心とする遺構群は、出土遺物からはSB6が古相を示し、SB1、SB2・3の順に新しい様相を呈す。しかし、SB6は同位置で3度にわたる建替えが認められることから、SB7～9へ長期間存続したと思

表12 飛鳥・奈良時代遺構変遷表 (SB1・10は平側を正面として建物方位を計測)

時期	7世紀後半以前	7世紀末から8世紀初頭	8世紀前半				8世紀後半	建物方位
須恵器分類		1	2			3		
土師器分類		1	2	3	4	5		
SI1			○					
SI2								
SI3	○							
SI4			○					
SI5						○		
SB1				○			N-2°-E	
SB2						○	N-6°-E	
SB3						○	N-2°-W	
SB4							N-5°-E	
SB5							N-6°-E	
SB6		○					N-4°-E	
SB7							N-4°-E	
SB8							N-1°-E	
SB9							N-2°-E	
SB10							N-1°-E	
SK1						○		
SK2					○			
SK3		○						
SK4						○		
SK5		○						
SK6			○					
SK7					○			
SD3			○					

われる。

このSB6～9はいつ頃まで営まれたか不明であるが、3度の建替えがあったことから八幡遺跡における飛鳥・奈良時代の中心となる建物であったといえ、このSB6～9を中心に、8世紀代を通して建物等が拡充されていく様相が窺える。前半には倉庫と考えられる総柱建物跡SB1、後半にはSB2・3が「コ」の字状の配列を呈し、加わったと思われる。また、確認された竪穴住居跡SI4・5も8世紀前半代に位置付けられるが、掘立柱建物群の外側に配置された状況にある。そして土坑等の遺構も上記の遺構が拡充される期間内に収まって認められる^(註2)。

以上のように八幡遺跡の飛鳥・奈良時代の遺構の変遷は考えられたが、本遺跡からは出土遺構は異なるものの、墨書土器、転用硯などが出土したほか、倉庫と考えられる総柱建物跡が確認されるな

ど一般の集落遺跡の様相とは差異が認められる。近年、該期の調査例では、このような官衙とは異なるが一般の集落とも様相を異にし、官衙と関連づけられる遺跡に対し、「官衙関連遺跡」として評価が与えられている(山中他 2004)。八幡遺跡の場合、調査区際に竪穴住居跡が見られるなど、確認した遺構のみで完結したとは思われないため、他の官衙関連遺跡とは一概に比較はできないが、倉庫と考えられる総柱建物跡に複数棟による計画的配置を見ないものの、総柱建物跡の面積は30m²を測るなど、規模の点では従来の調査で正倉とされる遺構と同規模の大きさである^(註3)。また、墨書土器、転用硯などが出土していることから、事務処理等の行政機能を有していた可能性も考えられる。

これらのことから、八幡遺跡の飛鳥・奈良時代の遺構は、具体的な性格は不明なものの官衙関連遺跡として捉えることができる。(野口)

註

1. 表12に示した遺構の年代は、出土土器の検討や、遺構の切り合い関係による。しかし、土器の型式変化は、特殊な場合を除いて、古い型式から新しい型式へと徐々に、共存しながら変化することが一般的である。また、第5章第1節で行った土器の検討も型式変化の傾向であり、古い土師器型式と新しい土師器型式を伴出するSK1の出土状況が当時の土器流通の実態を表す可能性がある。このことから古い型式を出土する遺構、新しい型式を出土する遺構でも竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの場合は共存した可能性はある。また、SI2やSB4・5・10については帰属時期が明らかでないため文章中の検討では除外した。
2. これらの遺構は建物方位でみた場合、方位北に対し若干東に振れるものが多いことは明らかであるが、表12のように差はわずかであり、どの遺構同士が同じ時期に建てられたかは具体的にはできなかった。3度の建替えが認められたSB6～9では、若干東に振った状態から真北への変遷が窺えるが、この変遷が各遺構の開始時期に敷衍できるとすると、出土遺物からの窺える本節の変遷とは異なる結果となる。
3. 地方豪族の居宅や集落の倉の面積は5～20m²、正倉の倉は25m²以上、平均50m²に集中する傾向が指摘される。また、桁行3間×梁行3間も正倉の倉に多い規模とされる(山中他 2004)。

参考文献

山中敏史他 2004『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』奈良文化財研究所

第3節 SD12出土玉関連遺物について

弥生時代後期後葉の溝状遺構（SD12）からは、玉関連遺物である碧玉が6点出土している。しかし、伴出した土器には弥生時代中期～後期までの広い時期幅があり、これら6点の帰属時期については特定できなかった。そこで本節では、玉関連遺物の製作技法を明らかにした上で、鳥取県における弥生時代の製作技法の様相から時期決定を試みようと思う。

出土した6点中1点（S15）には、左側面に打撃を加え平坦面を形成した後、その面に施溝し分割が行われた状況が窺える。この技法は弥生時代の管玉製作にみられる施溝分割技法であることから、S15は角柱状素材を作り出す段階の管玉未製品であると考えられる。その他のものについては、玉製作に直接結びつく痕跡は認められなかったが、石材は玉製作に用いられる女代南B遺物群である^(註1)ことから、玉関連遺物として扱った。これらは石核と思われるものや、比較的大きな剥離面と自然面が認められるため原石から素材を取り出す際の荒割段階での剥片と判断されるものであるが、製作技法が特定できないことから、ここでは触れないでおくこととする。

弥生時代の管玉製作技法については、大賀克彦氏により分類が行われている（大賀 2001）。これによると、施溝分割技法は2技法に分けられる。1つは管玉1個体分の厚さの板状素材を作り出した後、管玉1個体分の幅に相当するように表裏面に施溝し分割を行う方法で、もう1つは施溝分割により立方体もしくは直方体の素材の二等分を繰り返して、管玉1個体分の大きさの角柱状素材を作り出す方法であり、施溝は打撃面にのみ施されることを特徴とする。この分類によれば、S15は打撃面にのみ施溝が行われていることから、後者の技法に該当すると考えられる。

鳥取県における弥生時代の管玉製作技法の様相を概観すると、前期中葉の長瀬高浜技法^(註2)を初現とする。中期では、上記の2通りの施溝分割技法が並存して認められる。そして、後期においては施溝分割技法も用いられるが、打撃分割技法^(註3)が主体となる傾向が窺える。

石材については、上記の女代南B遺物群は軟質の碧玉原石であり、弥生時代中期～古墳時代前期まで継続して使用されたことが指摘されている（米田 2000）。鳥取県中・西部の玉生産遺跡においては、女代南B遺物群の石材が弥生時代中期に使用されることが確認されているが、弥生時代後期には花仙山（鳥根県玉湯町）産の碧玉へ使用石材が転換することが指摘されている（増田 2004）^(註4)。

以上のことから勘案すると、八幡遺跡SD12出土の玉関連遺物の時期は、施溝分割技法が中期に盛行することや、後期には技法や石材に変化がみられ始めることから、弥生時代中期に帰属する可能性が高いと考えられる。また、該期の玉製作に関わる遺構が確認されなかったことや、玉関連遺物が少ないことから、本遺跡は玉製作との関連性が低いと思われるが、玉関連遺物が出土するSD12が調査区外へ続くことを考慮すれば、周辺に玉作関連遺跡が存在する可能性が考えられる。（阪上・濱本）

註

1 第4章第1節参照。

2 打撃分割によって適当な大きさの素材を作り出す。管玉1個体分の大きさより長い場合のみ、穿孔に先立って輪切り状に粗雑な溝を付け切断する（大賀 2001）。この場合の施溝は素材分割のためのものとは異なるため、施溝分割技法として扱わないでおく。

3 鉄製工具を使用した比較的不規則な打撃分割で管玉素材を作り出す（大賀 2001）。

4 硬質の花仙山産碧玉は、古墳時代前期から本格的に使用され始める（米田 2000）とされているが、近年の調査では、弥生時代後期前葉の鳥取県琴浦町笠見第3遺跡（牧本他 2004）と弥生時代後期後葉の同町久蔵峰北遺跡（小山他 2004）の堅穴住居跡での使用が報告され、石材の使用年代が遡ることが確認されている。

参考文献

大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号 日本考古学会

小山浩和他 2004『久蔵峰北遺跡・甕谷遺跡・岩本遺跡』鳥取県教育文化財団

牧本哲雄他 2004『笠見第3遺跡（本文編）』鳥取県教育文化財団

増田浩太 2004「鳥取県の玉作関連遺跡」『古代出雲における玉作の研究Ⅰ—中国地方の玉作関連遺跡集成—』鳥根県古代文化センター

米田克彦 2000「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代吉備』第22集 古代吉備研究会

表13 土器観察表

No	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	SI1 P7	第9図 PL.14	須恵器 坏	器高3.1△	外面口縁部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
2	SI1 埋土中	第9図 PL.14	須恵器 坏	器高2.9△	外面口縁部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
3	SI1 北西区	第9図 PL.14	土師器 甕	口径28.9※ 器高5.0△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面にぶい 橙色	
4	SI1 貼床除去後	第9図 PL.14	土師器 甕	器高2.0△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面褐色	内面スス付着
5	SI2 焼土中	第12図 PL.14	須恵器 甕	器高4.3△	外面胴部タタキ後粗雑なナデ。 内面胴部当て具痕(青海波文)あり。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
6	SI2 焼土中	第12図 PL.14	須恵器 甕	器高5.5△	外面胴部タタキ後粗雑なナデ。 内面胴部当て具痕(青海波文)あり。	密(2mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
7	SI2 焼土中	第12図 PL.14	土師器 甕	器高6.2△	外面胴部ハケ・ヘラミガキ。 内面胴部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面橙色	外面スス付着
8	SI3 埋土中	第14図 PL.15	須恵器 坏	器高3.3△	外面口縁部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
9	SI3 検出面	第14図 PL.15	須恵器 甕	—	外面頸部ヨコナデ後波状文。 内面頸部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
10	SI3 埋土中	第14図 PL.15	弥生土器 甕	器高4.8△	外面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ハケ後ナ デ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	やや良	内面にぶい褐 色 外面黄褐色	
11	SI3 埋土上層	第14図 PL.15	土師器 甕	口径28.2※ 器高5.6△	外面口縁部ヨコナデ・ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面明赤褐 色～黒褐色	
12	SI3 埋土上層	第14図 PL.15	土師器 カマド	器高10.8△	外面体部ナデ。底部ヘラケズリ後ナ デ。 内面体部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内面黄褐色 外面にぶい黄 褐色	
13	SI4 埋土上層	第16図 PL.15	須恵器 坏	器高2.8△	外面口縁部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面赤褐色	焼成は土師質
14	SI4 東区	第16図 PL.15	須恵器 坏	器高4.0△	外面底部ロクロナデ。底面静止糸切り後ナ デ。 内面底部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
15	SI4 埋土上層	第16図 PL.15	須恵器 坏	器高4.1△	外面底部ロクロナデ。底面静止糸切り後ナ デ。 内面底部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
16	SI4 埋土上層	第16図 PL.15	須恵器 蓋	器高1.8△	外面口縁部ロクロナデ。天井部ヘラケズリ。 内面口縁部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
17	SI4 床面付近	第16図 PL.15	須恵器 甕	口径15.0※ 器高3.9△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。肩部タタキ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面灰白色	
18	SI4 埋土上層	第16図 PL.15	土師器 坏	口径12.8※ 器高3.9△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	やや密(1mm以下 の砂粒を含む)	良	内外面灰白色	
19	SI4 床面付近	第16図 PL.15	土師器 坏	器高3.1△	外面口縁部ヨコナデ・ヘラケズリ後ヘラミ ガキ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ・螺旋暗 文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面赤褐色	内外面赤色塗 彩
20	SI4 床面付近	第16図 PL.16	土師器 甕	口径23.0※ 器高7.5△	外面口縁部ヨコナデ。頸部ハケ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面橙色	外面スス痕あ り
21	SI4 床面付近	第16図 PL.15	土師器 甕	口径23.0※ 器高8.0△	外面口縁部ヨコナデ。頸部ハケ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ハケ・ヘラケ ズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面橙色	
22	SB1 P14	第18図 PL.16	須恵器 坏	口径12.2※ 器高3.7△	外面口縁部ロクロナデ後ナ デ。 内面口縁部ロクロナデ・沈線。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
23	SB1 P15	第18図 PL.16	須恵器 碗	器高3.25△	外面口縁部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
24	SB1 P7	第18図 PL.16	土師器 坏	器高2.6△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘ ラケズリ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面にぶい 黄褐色	内外面赤色塗 彩・黒斑あり
25	SB2 P10	第19図 PL.16	土師器 坏	器高0.9△	外面底部ナデ。 内面底部ハケ後ナ デ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面赤色塗 彩	

八幡遺跡遺物観察表

No	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
26	SB2 P4	第19図 PL.16	土師器 皿	器高2.1△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 橙色	内外面赤色塗 彩 内面黒斑あり
27	SB3 P9	第21図 PL.16	土師器 杯	口径16.4※ 器高4.3△	外面口縁部・底部ヨコナデ・沈線。 内面口縁部・底部ヨコナデ・沈線。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 橙色	
28	SB3 P11	第21図 PL.16	土師器 杯	口径15.4※ 器高3.7△	外面口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 黄橙色	内外面赤色塗 彩 外面黒斑あり
29	SB3 P8	第21図 PL.16	須恵器 杯	器高2.3△	外面ロクロナデ。 内面ロクロナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 暗青灰 色	
30	SB6~9 P7	第26図 PL.16	土師器 杯	口径16.8※ 器高4.0△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘ ラケズリ後ヘラミガキ。 内面口縁部・底部ヨコナデ・ヘラミガキ後 螺旋暗文。	密(2mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 赤褐色	内外面赤色塗 彩
31	SB6・8・9 P5	第26図 PL.16	土師器 杯	—	外面底部ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内面底部ナデ後ヘラミガキ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 赤褐色	内外面赤色塗 彩
32	SK1 埋土下層	第33図 PL.18	須恵器 台付壺	底径9.2※ 器高3.7△	外面底部・台部ロクロナデ。底面回転糸切 り。 内面底部ロクロナデ。	密(2mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 灰色	
33	SK1 埋土下層	第33図 PL.18	須恵器 杯	底径7.8※ 器高2.4△	外面底部ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面底部ロクロナデ後不定方向のナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 灰色	
34	SK1 床面付近	第33図 PL.18	須恵器 高台杯	底径7.2※ 器高3.4△	外面底部・台部ロクロナデ。底面回転ヘ ラケズリ。 内面底部ロクロナデ後不定方向のナデ。	密(3mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 灰色	
35	SK1 埋土上層	第33図 PL.18	須恵器 鉢	口径18.4※ 器高5.1△	外面口縁部・体部ロクロナデ。 内面口縁部・体部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内面 灰色 外面 赤灰色	
36	SK1 埋土下層	第33図 PL.17	土師器 皿	器高1.0△	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部ナデ・ハケ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 黄橙色	内外面赤色塗 彩
37	SK1 南東区	第33図 PL.17	土師器 皿	器高2.2△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 黄橙色	内外面赤色塗 彩
38	SK1 埋土下層	第33図 PL.17	土師器 杯	器高1.8△	外面底部ヨコナデ後ヘラミガキ。 内面底部ヨコナデ後ヘラミガキ・放射状暗 文・螺旋暗文。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 黄橙色	内外面赤色塗 彩
39	SK1 埋土上層	第33図 PL.17	土師器 杯	底径7.0※ 器高1.7△	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部ヘラミガキ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外に ぶい 黄 褐色	内外面赤色塗 彩
40	SK1 埋土上層	第33図 PL.17	土師器 杯	器高3.0△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ・螺旋暗 文。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 赤褐色	内外面赤色塗 彩 外面スス付着
41	SK1 埋土下層	第33図 PL.17	土師器 杯	器高2.7△	外面口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(2mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 黄褐色	内外面赤色塗 彩
42	SK1 埋土上層	第33図 PL.17	土師器 杯	底径9.0※ 器高0.8△	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内面 橙色 外面に ぶい 赤 褐色	内外面赤色塗 彩 外面スス付着
44	SK2 南西区	第35図 PL.18	須恵器 杯	底径8.8※ 器高1.4△	外面底部ロクロナデ。底面静止糸切り。 内面底部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 灰色	
45	SK2 南西区	第35図 PL.18	土師器 杯	口径14.0※ 器高3.6△	外面口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 浅黄橙 色	内外面赤色塗 彩
46	SK2 北東区	第35図 PL.18	土師器 杯	口径15.6※ 器高2.05△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面 浅黄橙 色	内外面赤色塗 彩
47	SK2 埋土上層	第35図 PL.18	土師器 皿	口径18.0※ 器高2.5△	外面口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外に ぶい 黄 褐色	内外面赤色塗 彩(塗りは剥 げている)
48	SK2 南西区	第35図 PL.18	土師器 杯	器高2.8△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 橙 色	内外面赤色塗 彩
49	SK2 埋土下層	第35図 PL.18	土師器 甕	口径35.6※ 器高7.4△	外面口縁部ナデ。頸部タテハケ後ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 黄 褐色	内外面スス付 着
50	SK2 床面付近	第35図 PL.18	土師器 甕	口径18.4※ 器高8.5△	外面口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	密(5mm以下の砂粒を含む)	良	内外面に ぶい 褐 色	内外面スス付 着

No	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
51	SK3 床面付近	第37図 PL.19	須恵器 高台坏	口径13.8△ 器高4.75△ 高台径9.45△	外面口縁部ロクロナデ・2条の沈線。底部 回転ヘラ切り後ナデ。 内面口縁部ロクロナデ。底部ロクロナデ後 不定方向のナデ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面灰色	
52	SK3 埋土下層	第37図 PL.19	須恵器 高台坏	口径14.1※ 器高5.2△ 底径8.2※	外面口縁部・台部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密 (3mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面灰色	
53	SK3 埋土上層	第37図 PL.19	須恵器 坏	口径12.8※ 器高3.5△	外面口縁部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
54	SK3 北西区	第37図 PL.19	須恵器 蓋	口径14.4※ 器高1.65△	外面ロクロナデ。 内面ロクロナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
55	SK3 埋土下層	第37図 PL.19	須恵器 蓋	つまみ径4.8※ 器高1.45△	外面口縁部ロクロナデ。天井部回転ヘラケ ズリ後ナデ。 内面ヨコナデ後不定方向のナデ・ヘラミガ キ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
56	SK3 埋土下層	第37図 PL.19	須恵器 台付壺	器高4.2△	外面左方向の回転ヘラケズリ・ヨコナデ。 底部ヨコナデ・ナデ。 内面ヨコナデ後不定方向のナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内面灰色 外面灰色～暗 灰色	
57	SK3 埋土上層	第37図 PL.19	須恵器 長頸壺	器高10.1△	外面頸部ロクロナデ・2条の沈線。 内面頸部ロクロナデ・ナデ・指頭圧痕。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
58	SK3 埋土上層	第37図 PL.19	土師器 皿	—	外面ヘラケズリ・ナデ後ヘラミガキ。 内面ナデ後ヘラミガキ・螺旋暗文。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面明赤褐 色	内外面赤色塗 彩
59	SK3 埋土下層	第37図 PL.19	土師器 鉢	口径12.3※ 器高5.9△	外面口縁部・底部ナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部・底部ナデ後ヘラミガキ・螺旋 暗文。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面赤褐色	内外面赤色塗 彩
60	SK3 埋土上層	第37図 PL.19	土師器 甕	口径30.3※ 器高14.1△	外面口縁部ヨコナデ。胴部ハケ後ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後ナ デ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面にぶい 黄橙色	外面スス付着
61	SK4 埋土下層	第41図 PL.21	須恵器 坏	口径12.8※ 器高4.65△ 底径9.1△	外面口縁部ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面口縁部ロクロナデ。底部ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
62	SK4 埋土上層	第41図 PL.21	須恵器 坏	口径13.0※ 器高4.1△ 底径8.0※	外面口縁部ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面口縁部ロクロナデ。底部ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
63	SK4 北西区	第41図 PL.20	須恵器 皿	器高1.1△ 底径10.8※	外面底部ロクロナデ。底面回転ヘラケズ リ。 内面底部ロクロナデ・ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内面灰黄色 外面にぶい赤 褐色	
64	SK4 埋土上層	第41図 PL.20	須恵器 短頸壺	口径10.0※ 器高4.0△	外面口縁部・肩部ロクロナデ。 内面口縁部・肩部ロクロナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
65	SK4 床面付近	第41図 PL.20	土師器 皿	口径14.8※ 器高1.5△ 底径13.0※	外面口縁部ヨコナデ。底面ヘラケズリ後ナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面にぶい 赤褐色	内外面に赤色 塗彩痕あり
66	SK4 埋土上層	第41図 PL.20	土師器 皿	口径16.4※ 器高1.8△	外面口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ後ナ デ・ヘラミガキ。 内面口縁部ハケ後ナデ。底部ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面明赤褐 色	底部にハケの 痕跡が残る。
67	SK4 埋土下層	第41図 PL.20	土師器 カマド	器高8.8△	外面底部ハケ。底面ヘラケズリ後ナデ。 内面底部ヘラケズリ・ヨコナデ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面橙色	
68	SK4 埋土下層	第41図 PL.20	土師器 甕	口径15.8※ 器高8.0△	外面口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面褐色	内外面スス付 着
69	SK4 埋土下層	第41図 PL.20	土師器 甕	口径21.2※ 器高8.7△	外面口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	密 (5mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面褐色	内外面スス付 着
70	SK4 埋土上層	第41図 PL.20	土師器 甕	口径24.8※ 器高5.8△	外面口縁部ヨコナデ。胴部ハケ後ナデ。 外面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面褐色	内外面スス付 着
71	SK4 埋土上層	第41図 PL.20	縄文土器	器高3.8△	外面沈線。縄文。 内面ナデ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面黒褐色	
72	SK5 北東区	第43図 PL.21	須恵器 坏	口径13.7※ 器高3.7△	外面口縁部ロクロナデ。底面ヘラ切り。 内面口縁部・底部ロクロナデ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面青灰色	
73	SK5 埋土上層	第43図 PL.21	須恵器 坏	器高1.45△ 底径7.2※	外面底部ロクロナデ後ナデ。底面静止糸切 り後ナデ。 内面底部ロクロナデ後ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	墨書土器
74	SK5 埋土下層	第43図 PL.22	須恵器 横瓶	口径12.8※ 器高5.0△	外面口縁部ロクロナデ。肩部タタキ。 内面口縁部ロクロナデ。肩部青海波文。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	

八幡遺跡遺物観察表

No	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
75	SK5 埋土上層	第43図 PL.21	土師器 坏	口径11.8※ 器高3.2△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ・放射状 暗文。底部ナデ後螺旋暗文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面明赤褐 色	内外面赤色塗 彩 内面漆付着
76	SK6 埋土上層	第45図 PL.22	須恵器 蓋	つまみ径 5.0※ 器高1.6△	外面天井部回転ヘラケズリ。つまみ部クロ ロナデ 内面天井部ナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面青灰色	
77	SK6 埋土上層	第45図 PL.22	土師器 坏	器高1.2△	外面ナデ後ヘラミガキ。 内面ナデ後放射状・螺旋暗文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面橙色	内外面赤色塗 彩
78	SK7 埋土中層	第47図 PL.22	土師器 甕	口径24.4※ 器高4.0△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	密(3mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面橙色	
79	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	口径24.0※ 器高5.6△	外面口縁部多条平行沈線文。頸部ナデ。肩 部波状文。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。肩部ヘ ラケズリ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内面浅黄橙色 外面にぶい黄 橙色	外面スス付着
80	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	口径16.2※ 器高4.3△	外面口縁部多条平行沈線文。頸部ヨコナ デ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面にぶい 橙色	
81	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	口径15.2※ 器高4.7△	外面口縁部多条平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ後ナ デ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面浅黄橙 色	
82	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	口径10.2※ 器高4.3△	外面口縁部多条平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面にぶい 黄色	外面スス付着
83	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	口径12.6※ 器高4.2△	外面口縁部ヨコナデ。頸部貝殻腹縁文。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面浅黄色	外面スス付着
84	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	口径13.8※ 器高4.4△	外面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面にぶい 黄橙色	内面黒斑あり
85	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	器高5.9△	外面口縁部多条平行沈線文後ナデ消し。頸 部ナデ。肩部貝殻腹縁文。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面にぶい 黄橙色	
86	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	器高3.4△	外面口縁部3条の平行沈線文。頸部ナデ・穿 孔あり。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面淡黄色	内外面赤色塗 彩
87	SD1 埋土中	第49図 PL.22	弥生土器 甕	口径8.4※ 器高3.1△	外面口縁部多条平行沈線文。頸部ナデ・穿 孔あり。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内面にぶい黄 橙色 外面にぶい橙 色	
88	SD1 埋土上層	第49図 PL.22	弥生土器 高坏	口径25.0※ 器高7.2△	外面口縁部・体部ナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部・体部ナデ。	密(3mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面浅黄橙 色	
89	SD1 埋土上層	第49図 PL.22	弥生土器 甕	器高3.6△	外面頸部ヨコナデ・ナデ。貼付突帯刻目。 内面頸部ナデ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面浅黄色	
90	SD1 埋土中	第49図 PL.22	縄文土器 鉢	器高4.1△	外面口縁部L-R単節縄文。貼付隆帯刻目。 内面口縁部ナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰黄褐 色	
91	SD3 埋土中	第53図 PL.23	須恵器 坏	器高2.9△	外面クロロナデ。 内面クロロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
92	I38 包含層	第54図 PL.23	須恵器 坏	底径8.3※ 器高2.8△	外面底部クロロナデ。底面回転糸切り。 内面底部クロロナデ・ナデ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内面にぶい褐 色 外面青灰〜に ぶい褐色	
93	F38 包含層	第54図 PL.23	須恵器 蓋	底径15.2※ 器高1.6△	外面クロロナデ。 内面クロロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面青灰色	
94	I39 包含層	第54図 PL.23	須恵器 甕	器高23.7△ 胴部最大径 28.4※	外面胴部・底部タタキ。 内面当て具痕(青海波文)。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内面暗灰色 外面灰〜暗灰 色	
95	H39 包含層	第54図 PL.23	土師器 坏	口径12.0※ 器高3.3△	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面橙色	内外面赤色塗 彩
96	H38 包含層	第54図 PL.23	土師器 坏	口径14.0※ 器高3.7△	外面口縁部・底部ナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部螺 旋暗文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面赤褐色	内外面黒斑あ り
97	G37 包含層	第54図 PL.23	土師器 甕	口径21.1※ 器高6.4△	外面口縁部ヨコナデ。頸部ハケ後ナデ。 内面口縁部ハケ後ヨコナデ・ナデ。頸部ヘ ラケズリ。	やや密(4mm以下 の砂礫を含む)	良	内外面橙色	内面スス付着

No	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
98	G39 包含層	第54図 PL.23	土師器 甕	口径20.9※ 器高4.6△	外面口縁部・頸部ヨコナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面におい 黄橙色	
99	I39 包含層	第54図 PL.23	縄文土器	器高5.3△	外面口縁部L-R単節縄文。貼付隆帯刻目。 内面口縁部R無節縄文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面橙色	外面スス付着
100	G38 表土	第55図 PL.24	須恵器 坏	口径12.6※ 器高4.3△	外面口縁部ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面口縁部ロクロナデ。底部ナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
101	H38 表土	第55図 PL.25	須恵器 坏	口径13.6※ 器高4.3△	外面口縁部ロクロナデ。底面静止糸切り。 内面口縁部ロクロナデ。底部ナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
102	G38 表土	第55図 PL.25	須恵器 坏	口径12.8※ 器高3.7△	外面口縁部ロクロナデ。底面静止糸切り。 内面口縁部ロクロナデ。底部ナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
103	G38 表土	第55図 PL.23	須恵器 坏	口径12.7※ 器高3.9△	外面口縁部ロクロナデ。底面静止糸切り。 内面口縁部ロクロナデ。底部ナデ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面灰赤色	
104	G40 表土	第55図 PL.24	須恵器 坏	口径14.5※ 器高5.0△	外面ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面ロクロナデ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面灰色	
105	K41 表土	第55図 PL.25	須恵器 高台坏	口径13.1※ 器高5.1△	外面口縁部・台部ロクロナデ。底面回転糸 切り。 内面口縁部ロクロナデ。底部ナデ。	密(1mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面灰色	
106	H39 表土	第55図 PL.24	須恵器 蓋	口径14.8※ 器高3.4△	外面口縁部ロクロナデ。天井部ヘラケズ リ。つまみ部ナデ。 内面口縁部ロクロナデ、天井部ロクロナデ 後不定方向のナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	ヘラ記号あり
107	H38 表土	第55図 PL.24	須恵器 鉢	口径18.8※ 器高8.7△	外面口縁部ロクロナデ。底部ヘラケズリ。 内面口縁部ロクロナデ。体部ロクロナデ後 ヘラケズリ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	やや良	内外面灰白色	
108	I39 表土	第55図 PL.24	須恵器 短頸壺	口径11.5※ 器高7.8△	外面口縁部ロクロナデ。底部ヘラケズリ。 底面静止糸切り。 内面ロクロナデ。	密(5mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面灰色	
109	I38、39 表土	第55図 PL.24	土師器 皿	口径13.7※ 器高1.5△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘ ラケズリ後ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。底部螺旋暗文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面におい 橙色	内外面赤色塗 彩
110	G38 表土	第55図 PL.25	土師器 皿	口径17.1△ 器高1.9△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘ ラケズリ・ナデ後ヘラミガキ。 内面ヨコナデ後ヘラミガキ・放射・螺旋暗 文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面浅黄橙 色	内外面赤色塗 彩
111	I39 表土	第55図 PL.25	土師器 坏	口径12.9△ 器高3.2△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘ ラケズリ・ナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ・放射状暗文。底部ヨ コナデ・螺旋暗文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面浅黄橙 色	内外面赤色塗 彩
112	I38、I39 表土	第55図 PL.25	土師器 坏	口径15.0△ 器高3.7△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘ ラケズリ・ナデ後ヘラミガキ。 内面口縁部ヨコナデ・放射状暗文。底部ヨ コナデ・螺旋暗文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面浅黄橙 色	内外面赤色塗 彩
113	F38 表土	第55図 PL.25	土師器 坏	器高4.4△	外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。底部ヘ ラケズリ後ヘラミガキ。 内面ヨコナデ後ヘラミガキ・放射状暗文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面赤褐色	内外面赤色塗 彩
114	F37 表土	第55図 PL.25	土師器 坏	器高3.1△	外面ヨコナデ後ヘラミガキ。 内面ヨコナデ後ヘラミガキ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外におい黄 橙色	内外面赤色塗 彩
115	I39 表土	第55図 PL.25	土師器 甕	口径17.2※ 器高10.8△	外面口縁部・胴部ハケ後ナデ。 内面口縁部ハケ後ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面におい 黄橙色	
116	1区 表土	第55図 PL.25	柱状 高台皿	口径8.9※ 器高3.5△ 底径5.7※	外面ヨコナデ。底面回転糸切り。 内面ヨコナデ。	密(2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面浅黄橙 色	
117	1区 表土	第55図 PL.25	青磁 碗	器高4.8△	内面花文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	施釉(明オリ ブ灰色)露胎 (灰白色)	
118	1区 表土	第55図 PL.25	青磁 碗	器高4.2△	内面縦横方向、鈎状刻文。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	施釉(オリ ブ灰色)露胎 (灰白色)	
119	1区 表土	第55図 PL.25	青磁 碗	器高3.4△	内面花文象嵌。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	施釉(灰オリ ブ色)	高麗青磁
121	S15 埋土上層	第60図 PL.26	須恵器 坏	口径12.8△ 器高3.1※	外面口縁部ロクロナデ。 内面口縁部ロクロナデ。	密(1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	

八幡遺跡遺物観察表

No	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
122	SI5 埋土上層	第60図 PL.26	須恵器 坏	器高2.5△ 底径8.0△	外面底部ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面底部ヨコナデ後ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
123	SI5 埋土下層	第60図 PL.26	須恵器 高台坏	器高2.4△ 底径6.8※	外面底部回転ヘラケズリ。台部ロクロナデ。 内面ロクロナデ後ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	
124	SI5 埋土上層	第60図 PL.26	須恵器 蓋	蓋径5.0※ 器高1.8△	外面回転ヘラケズリ。つまみ部ロクロナデ。 内面ロクロナデ後不定方向のナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面灰色	転用硯
125	SI5 埋土下層	第60図 PL.26	土師器 甕	器高5.4△	外面口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。 内面口縁部ハケ後ナデ。頸部ヘラケズリ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面橙色	内面スス付着
126	SI5 埋土上層	第60図 PL.26	土師器 甕	胴部最大径 25.0※ 器高19.0△	外面胴部ハケ後ナデ。 内面胴部ヘラケズリ後ナデ。	やや粗 (4mm以下 の砂礫含む)	良	内外面灰黄褐色	外面スス付着
127	SD9 埋土中	第65図 PL.27	土師器 甕	器高3.2△	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面にぶい 黄橙色	外面スス付着
128	H35 包含層	第66図 PL.27	縄文土器 深鉢	器高5.0△	外面口縁部ナデ。貼付突帯部刻目。 内面口縁部ナデ。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内外面にぶい 黄橙色	
129	拡張区 表土	第67図 PL.27	青磁 碗	器高3.6△	内面唐草文。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	施釉 (オリ ーブ灰) 露胎 (灰白色)	
130	SK15 埋土中	第85図 PL.28	磁器 碗	器高1.65△	外面— 内面—	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	施釉 (白~紺) 露胎 (白)	肥前系
131	SD12 埋土中	第90図 PL.27	弥生土器 甕	口径17.6※ 器高3.9△	外面口縁部多条平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ後ヘラミガキ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面にぶい 黄橙色	
132	SD12 6層	第90図 PL.27	弥生土器 甕	口径16.1※ 器高5.7△	外面口縁部ナデ。1条の沈線。頸部ハケ。 内面口縁部ナデ。頸部ヘラケズリ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面にぶい 赤褐色	
133	SD12 6層	第90図 PL.27	弥生土器 甕	口径20.8※ 器高5.2△	外面口縁部ナデ・2条の沈線。頸部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ後ナ デ。	密 (3mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面橙色	
134	SD12 8層	第90図 PL.27	弥生土器 甕	口径15.6※ 器高3.4△	外面口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面黄橙色	
135	SD12 埋土中	第90図 PL.27	弥生土器 甕	口径15.6※ 器高3.5△	外面口縁部ナデ・刻目。 内面口縁部ナデ。	密 (4mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面橙色	
136	SD12 埋土中	第90図 PL.27	弥生土器 甕	器高3.2△	外面口縁部ナデ・刻目。 内面口縁部ナデ。	密 (3mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面黄橙色	外傾接合
137	SD12 埋土中	第90図 PL.27	弥生土器 甕	器高2.6△	外面口縁部ナデ・刻目。 内面口縁部ナデ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面橙色	
138	SD12 6層	第90図 PL.27	弥生土器 甕	底径5.5※ 器高5.2△	外面ヘラミガキ。 内面ヘラケズリ。	密 (2mm以下の砂 礫を含む)	良	内外面にぶい 黄橙色	外面スス痕あり
139	SD14 埋土上層	第91図 PL.28	磁器 皿	器高2.15△	外面ロクロナデ。台部ケズリ出し高台。 内面施釉。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内面露胎 (オ リーブ黄色) 外面施釉 (灰 黄色)	内外面に砂目 痕あり
140	SD14 埋土上層	第91図 PL.28	陶器 鉢	器高2.4△	外面口縁部施釉。露胎。 内面口縁部施釉。露胎。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	施釉 (暗赤褐 色) 露胎 (に ぶい赤褐色)	
141	SD14 埋土中	第91図 PL.28	陶器 植木鉢	器高4.4△	外面施釉。 内面露胎。	密 (1mm以下の砂 粒を含む)	良	内面露胎 (オ リーブ褐色) 外面施釉 (灰 黄色)	

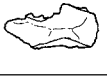



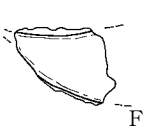

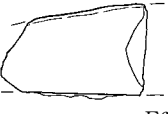







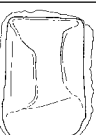
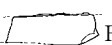


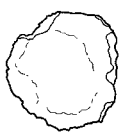



表14 石器・石製品観察表

No	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種 類	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備 考
S1	SI1 床面直上	第10図 PL.26	砥 石	角閃石黒雲母 安山岩	44.7	16.6	10.3	13,000	表裏・左側面に 砥面あり
S2	1区 包含層	第54図 PL.30	石 匙	サヌカイト	4.6	7.1	0.7	19.1	
S3	1区 包含層	第54図 PL.30	石 鎌	黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.5	凹基無茎鎌
S4	1区H38 表土	第55図 PL.30	石 核	瑪 瑙	2.3	2.3	1.3	5.4	
S5	1区J40 表土	第55図 PL.30	剥 片	黒曜石	2.0	2.2	0.5	2.8	
S6	SI5 床面直上	第61図 PL.26	台 石	角閃石黒雲母 安山岩	34.8	38.4	13.8	22,000	表面中央部に敲 打痕あり
S7	拡張区 包含層	第66図 PL.30	石 鎌	黒曜石	1.8	1.5	0.5	0.8	凹基無茎鎌
S8	拡張区I36 包含層	PL.30	石 核	黒曜石	3.0	3.0	1.7	10.4	
S9	拡張区 表土	第67図 PL.30	剥 片	黒曜石	3.8	2.7	0.9	5.5	
S10	SD12 8層	第90図 PL.30	石 鎌 (部分磨製)	サヌカイト	1.6	1.3	0.3	0.4	凹基無茎鎌
S11	SD12 16層	第90図 PL.30	石 鎌	サヌカイト	1.8	1.2	0.3	0.6	凸基I式無茎鎌
S12	SD12 8層	第90図 PL.30	未 製 品	粘板岩もしくは 脈石	2.5	1.5	0.5	3.6	
S13	SD12 8層	第90図 PL.29	剥 片	碧 玉	3.4	1.7	0.7	3.7	分析No94477
S14	SD12 8層	第90図 PL.29	石 核	碧 玉	1.6	1.3	0.8	1.8	分析No94476
S15	SD12 8層	第90図 PL.29	玉未製品	碧 玉	2.3	1.1	0.6	1.5	施溝分割の痕跡 あり 分析No94481
S16	SD12 16層	第90図 PL.29	剥 片	碧 玉	2.0	1.7	0.7	1.4	分析No94478
S17	SD12 11層	第90図 PL.29	剥 片	碧 玉	2.9	2.1	1.0	3.9	分析No94479
S18	SD12 16層	第90図 PL.29	剥 片	碧 玉	1.0	1.3	0.3	0.3	分析No94480
S19	3区C3 表土	第92図 PL.30	砥 石	石英安山岩	6.8	5.3	3.0	139	表裏・両側面に 砥面あり

表15 鉄関連遺物観察表

掲載No	遺物名	地区名	遺構名	計測値(mm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
				長さ	幅	厚さ				
F1	椀形鍛冶滓	1区	SK2北西区	40.0	49.0	40.0	91.5	4	なし	
F2	鉄製品(鍛造品)	1区	SK3南東区	61.0	10.0	3.5	4.3	2	錆化(△)	刀子
F3	鉄製品(鍛造品)	1区	SK4	83.0	9.0	4.0	14.2	3	錆化(△)	刀子
F4	不明鉄製品(鍛造品)	1区	SK5	41.0	8.5	4.0	0.3	2	錆化(△)	
F5	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区G38	包含層	59.0	63.0	18.0	92.0	4	H(○)	
F6	鉄製品(鍛造品)	1区H39	表土	39.5	24.0	3.0	8.0	2	錆化(△)	鎌
F7	不明鉄製品(鍛造品)	1区H39	表土	24.0	4.0	20.0	5.0	1	錆化(△)	
F8	不明鉄製品(鍛造品)	1区H39	表土	45.0	8.0	8.0	5.2	1	錆化(△)	
F9	不明鉄製品(鍛造品)	1区F38	表土	28.0	9.0	5.5	3.7	4	錆化(△)	
F10	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区H39	表土	74.5	56.0	18.0	88.0	3	錆化(△)	
F11	椀形鍛冶滓(小)	1区I38	表土	76.0	67.0	21.0	124.0	3	なし	
F12	鍛冶滓	1区F38	表土	36.0	25.0	12.0	10.6	2	なし	
F13	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	1区I38	表土	82.0	77.0	34.0	284.0	6	錆化(△)	
F14	鉄製品(鍛造品)	拡張区	SI5	66.5	42.0	24.0	125.0	4	錆化(△)	袋状鉄斧
F15	鉄製品(鍛造品)	拡張区	SI5北西区	50.0	21.5	2.5	3.5	3	錆化(△)	刀子
F16	椀形鍛冶滓	拡張区	SI5北東区	14.5	21.0	29.0	14.4	1	なし	
F17	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	拡張区	SI5南西区	50.0	23.0	17.0	21.0	1	錆化(△)	
F18	不明鉄製品(鍛造品)	2区G16	表土	56.0	5.0	6.0	5.0	2	錆化(△)	
F19	不明鉄製品(鍛造品)	2区G20	表土	42.0	5.5	5.5	3.3	2	錆化(△)	
F20	不明鉄製品(鍛造品)	2区G19	表土	22.0	5.0	5.0	2.4	2	H(○)	
F21	不明鉄製品(鍛造品)	2区F19	表土	24.0	3.5	3.5	1.9	2	錆化(△)	
43	羽口(鍛冶)	1区	SK1	22.0	32.0	17.0	15.2	1	なし	
120	羽口(鍛冶)	1区G38	表土	56.0	32.0	48.0	59.5	1	なし	

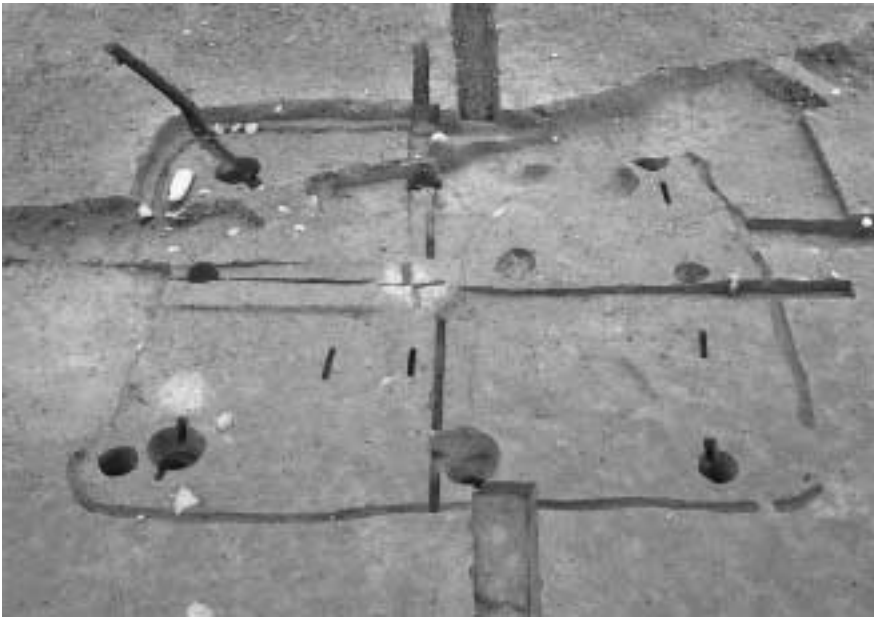
磁着度は「標準磁石(TOKINフェライト磁石SR-3)」を用いて資料との反応を1~8までの数字で表現したもので、数値が大きいかほど磁着度が高いことを示す。メタル度は小型金属探知機(KDS METALCHECKER MR-50)によって判定された金属鉄の残留度を示すもので、基準感度は次の通りである。
H(○)：Hは最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。
M(◎)：Mは標準感度で一般的な大きさや金属鉄が残留することを示す。
L(●)：Lは低感度でやや大きな金属鉄が残留することを示す。
特L(☆)：特Lは低感度でL以上の大きな金属鉄が残留することを示す。
錆化(△)：かつて金属鉄が内包されていたが、すでに錆化してしまったものを示す。
椀形鍛冶滓の大きさは外形を想定した場合の大きさを示す。表記の仕方は次の通りである。
極小：125g未満 小：125~250g 中：251~500g 大：501~1kg 特大：1kg超

拡張区 SI5	1区 SK2	1区グリッド		2区グリッド	
椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	椀形鍛冶滓(中)	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	鉄製品(鍛造品)	鉄製品(鍛造品)
錆化(△)	なし	錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)
 F17	 F1	 F13	 F10	 F7	 F18
椀形鍛冶滓	1区 SK3				
なし	鉄製品(鍛造品)	椀形鍛冶滓(小)	鍛冶滓	 F6	 F21
 F16	錆化(△)				
鉄製品(鍛造品)	 F2	なし	なし	 F9	 F19
錆化(△)	1区 SK4	 F11	 F12		
 F14	鉄製品(鍛造品)			椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	羽口(鍛冶)
 F15	 F3	H(○)	なし	 F8	H(○)
1区 SK1	1区 SK5	 F5	 120		
羽口(鍛冶)	鉄製品(鍛造品)			 F4	
なし	錆化(△)				
 43					

*縮尺はF6~9、F18~21は1/2、それ以外は1/4

第107図 鉄関連遺物構成図

圖 版



1区SI1完掘状況（東から）



1区SI2完掘状況（北から）



1区SI3完掘状況（西から）

PL. 2 八幡遺跡



1区SI4完掘状況(南から)



1区SB1完掘状況(北から)



1区SB2完掘状況(西から)



1区SB 3 完掘状況(北から)



1区SB 4・5
完掘状況(北から)



1区SB 6～9
完掘状況(南から)

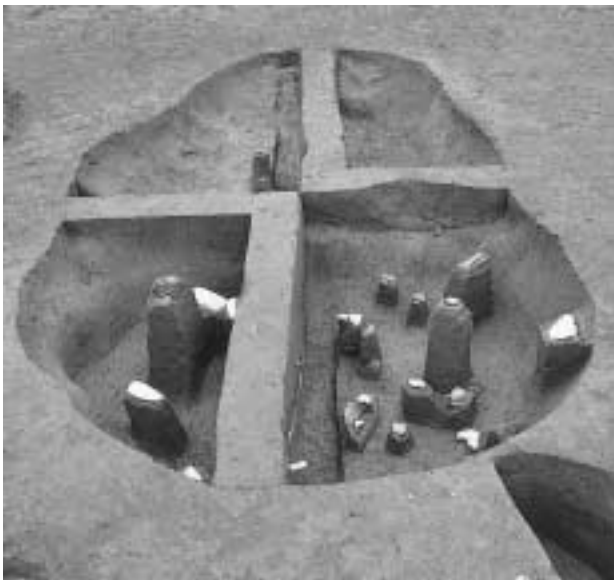
PL. 4 八幡遺跡



1区SK1 遺物出土状況 (東から)



1区SK1 完掘状況 (西から)



1区SK2 遺物出土状況 (西から)



1区SK2 完掘状況 (西から)



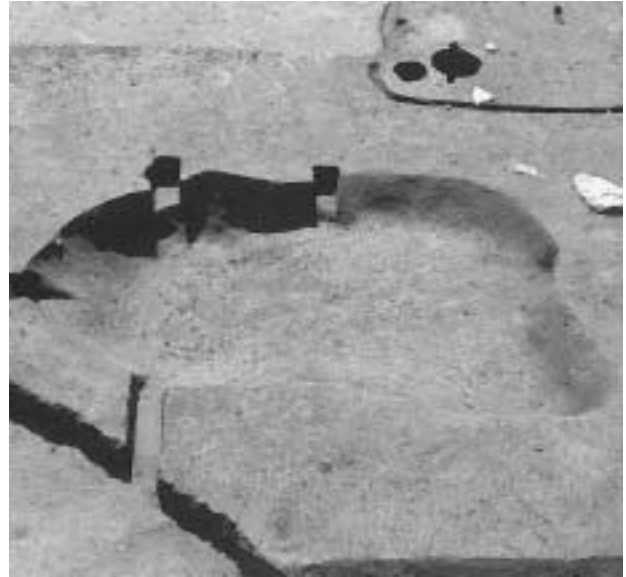
1区SK3 遺物出土状況 (北東から)



1区SK3 礫除去後 (東から)



1区SK 4 遺物出土状況（東から）



1区SK 4 完掘状況（東から）



1区SK 5 完掘状況（北から）



1区SK 6 完掘状況（北から）



1区SK 7 完掘状況（南から）



1区SD 2 完掘状況（南から）

PL. 6 八幡遺跡



1区SD1 完掘状況（南から）



1区SD3 完掘状況（北から）



1区SD4 完掘状況（北から）



拡張区SI 5 遺物出土状況
(南から)



拡張区SI 5 完掘状況
(南から)



拡張区SB10完掘状況
(南から)

PL. 8 八幡遺跡



拡張区SD 5～9 完掘状況
(南東から)



2区SK 8 完掘状況
(南から)



2区SK 9 完掘状況
(南西から)



3区西側完掘状況（北西から）



3区SB11完掘状況（東から）

PL. 10 八幡遺跡



3区SB12完掘状況(東から)



3区SB13完掘状況(東から)



3区SB14完掘状況(東から)



3区SK10完掘状況（南から）



3区SK11完掘状況（南西から）



3区SK12完掘状況（南東から）



3区SK13完掘状況（南から）



3区SK14完掘状況（東から）

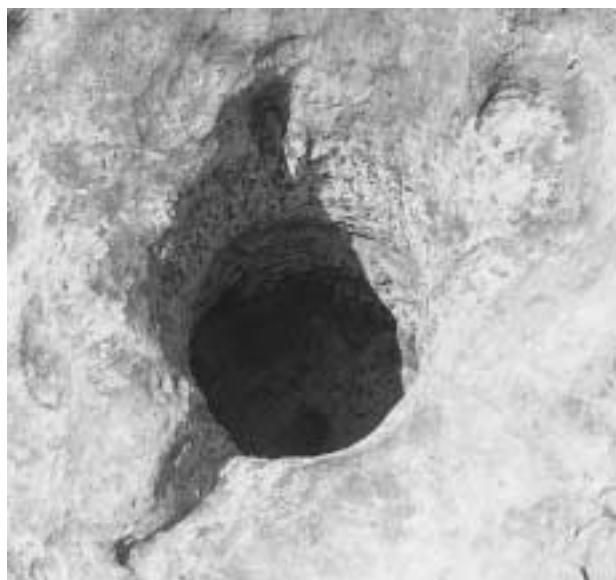


3区SK15完掘状況（南から）

PL. 12 八幡遺跡



3区SK16完掘状況（南から）



3区SK17完掘状況（東から）



3区SD10東側検出状況（西から）



3区SD10完掘状況（西から）



3区SD11検出状況（北西から）



3区SD11完掘状況（北西から）



3区SD12土層断面
(北から)

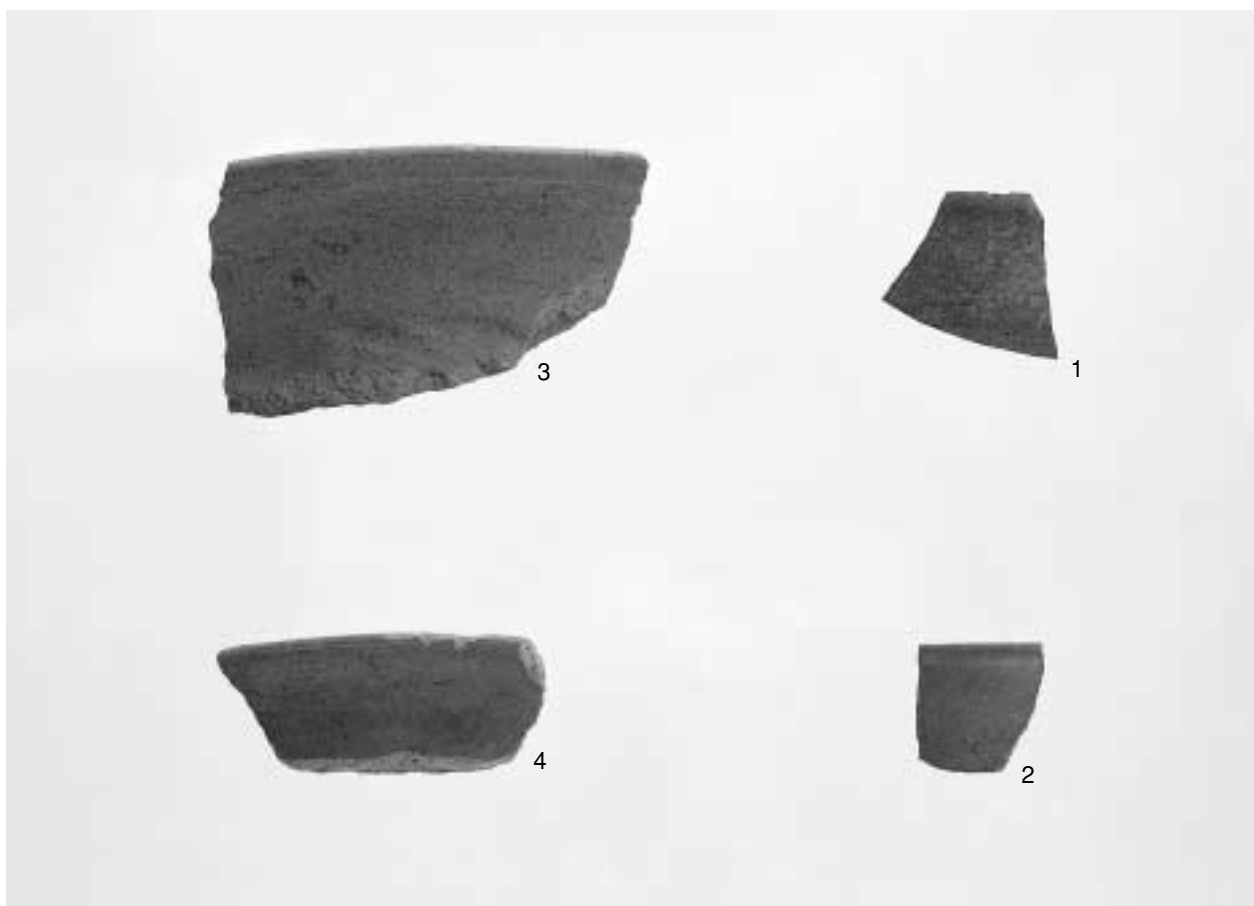


3区SD12南側完掘状況
(北から)

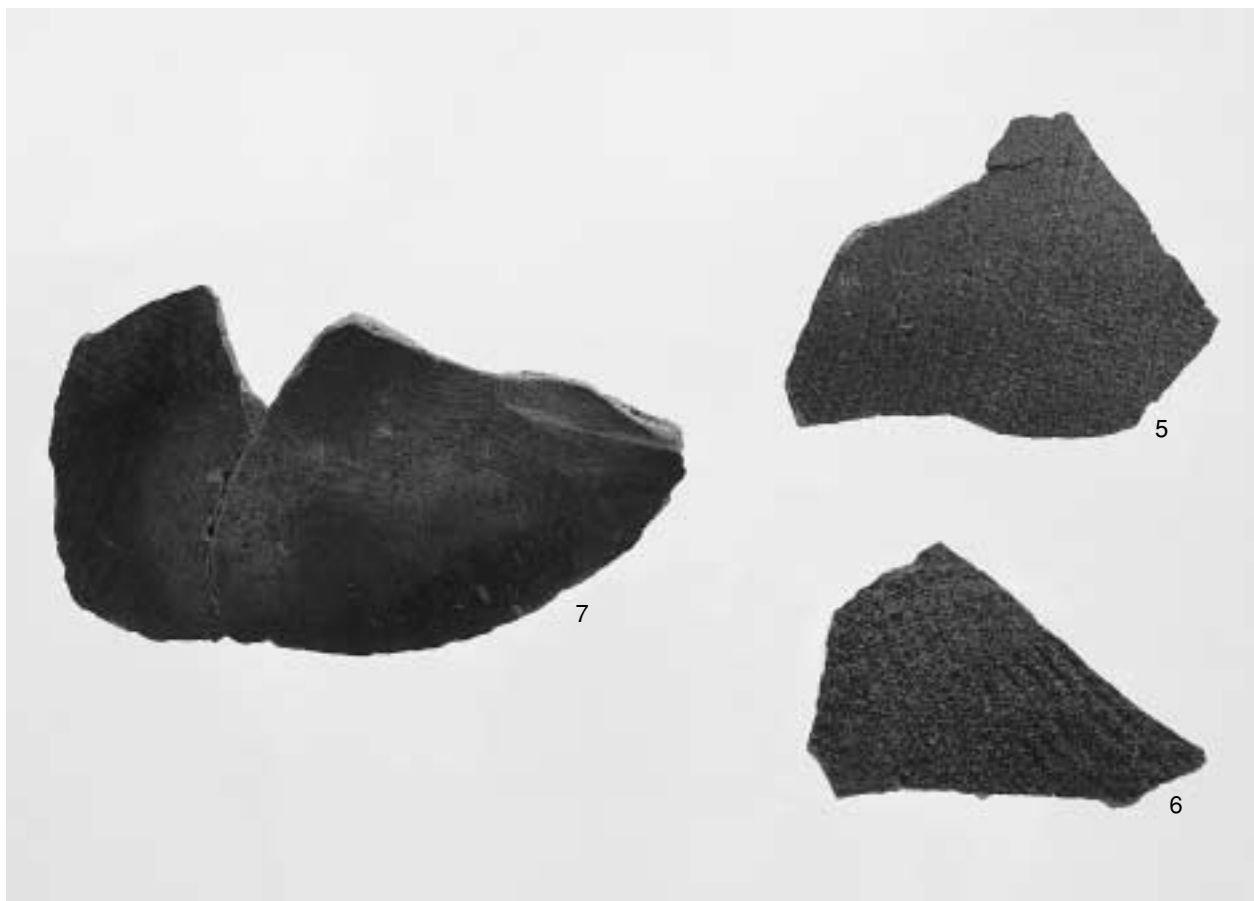


3区SD13~15完掘状況
(西から)

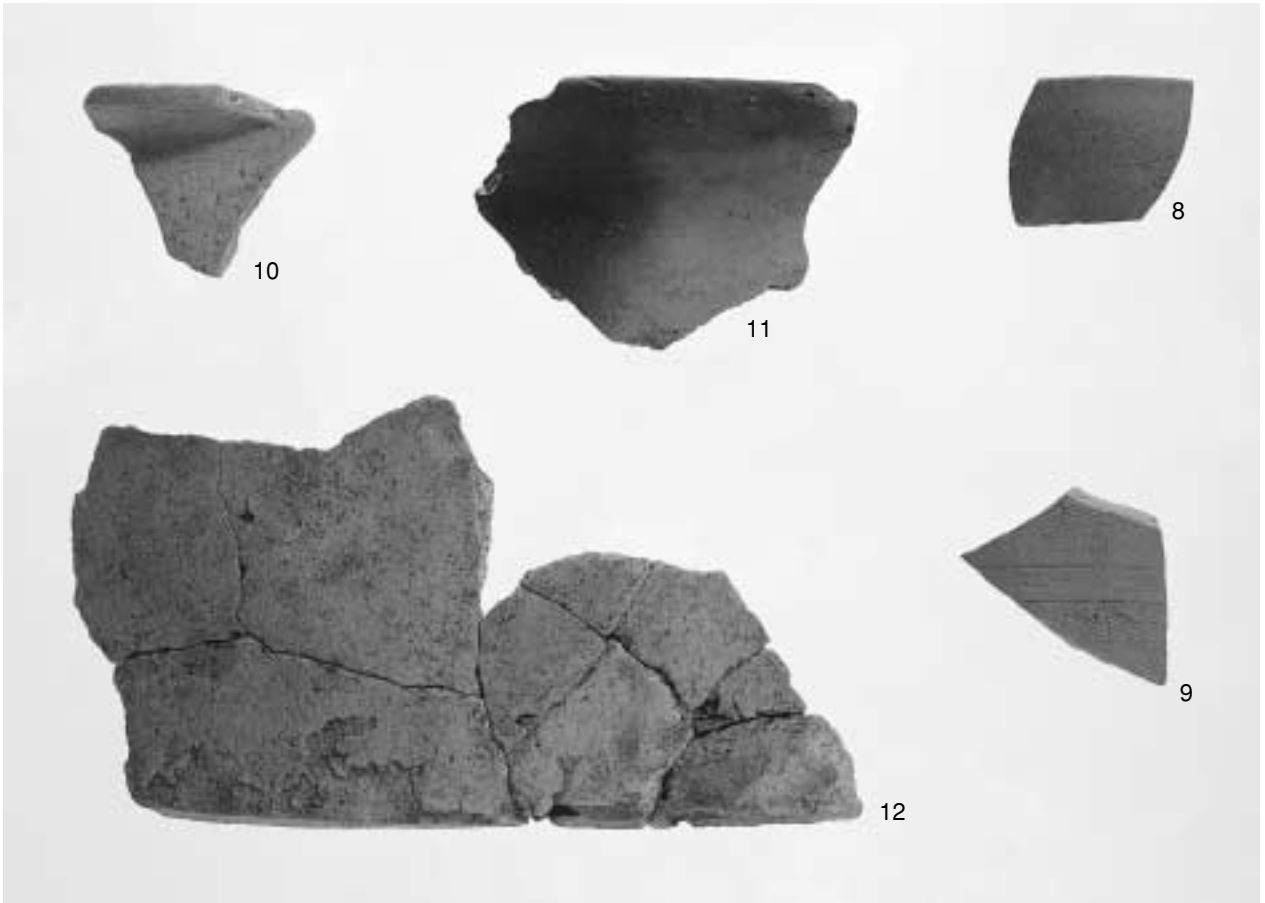
PL. 14 八幡遺跡



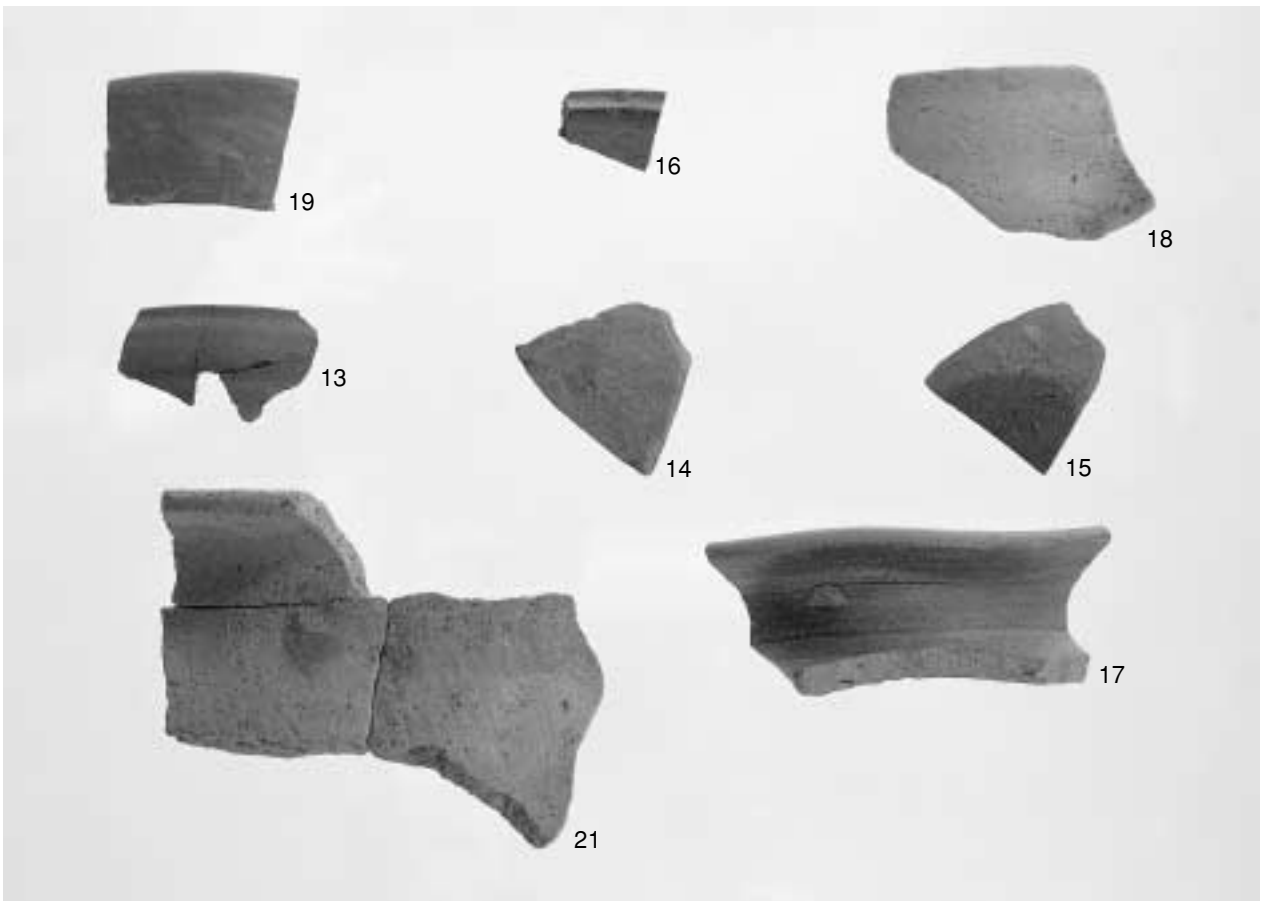
1区SI1出土土器



1区SI2出土土器



1区SI3出土土器



1区SI4出土土器

PL. 16 八幡遺跡



1区SI 4 出土土器

20



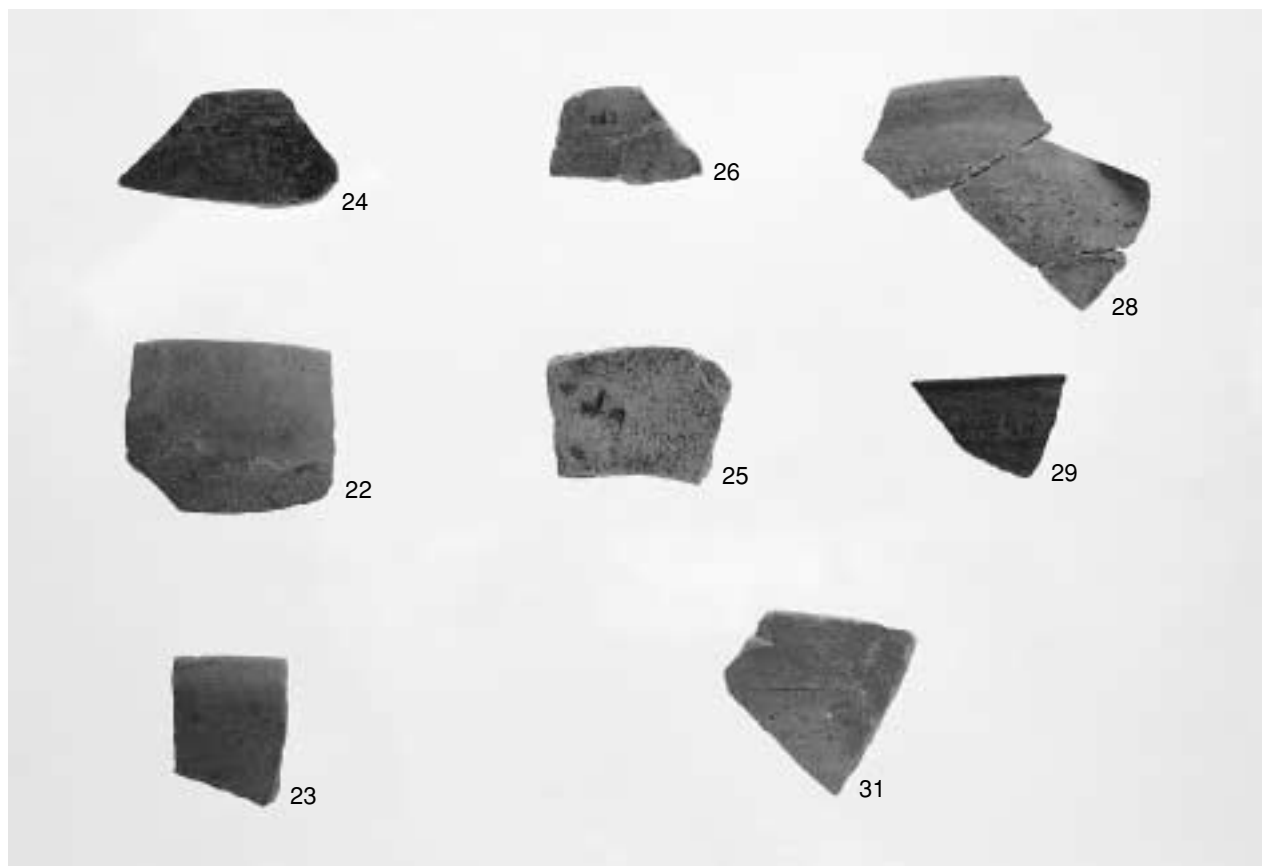
27

1区SB 3 出土土器

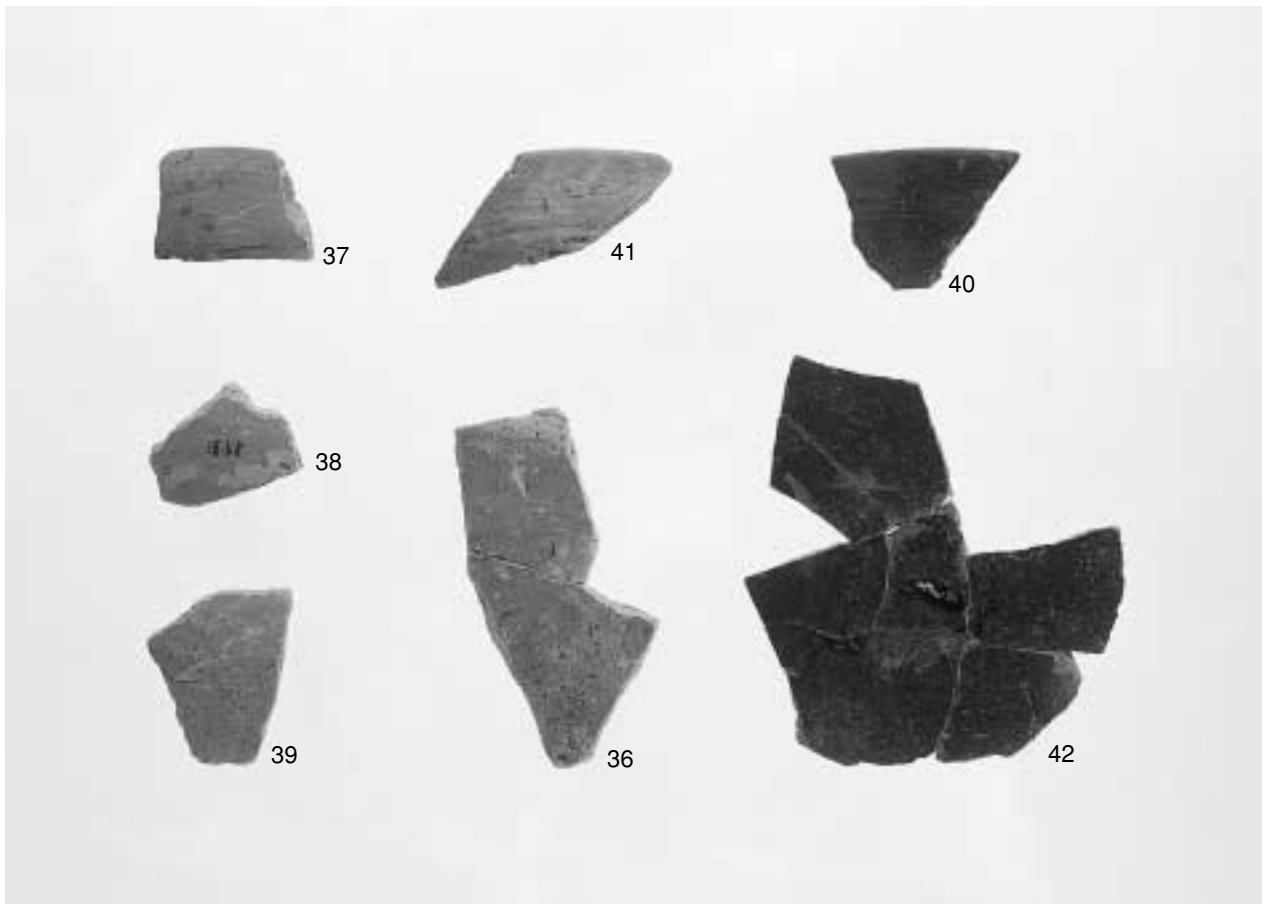


30

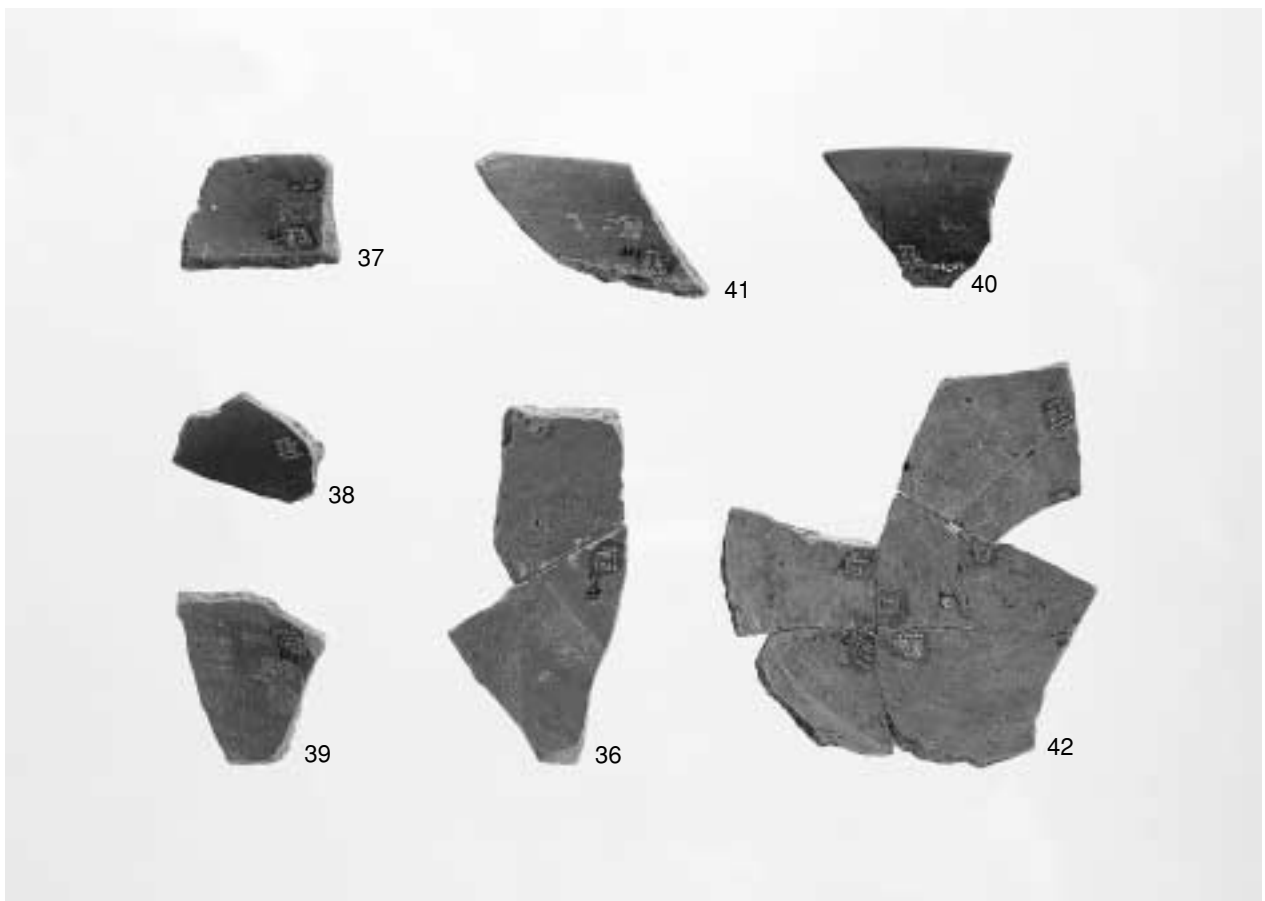
1区SB 6 出土土器



1区SB 1 ~ 3、6・8・9 出土土器



1区SK1出土土師器（外面）

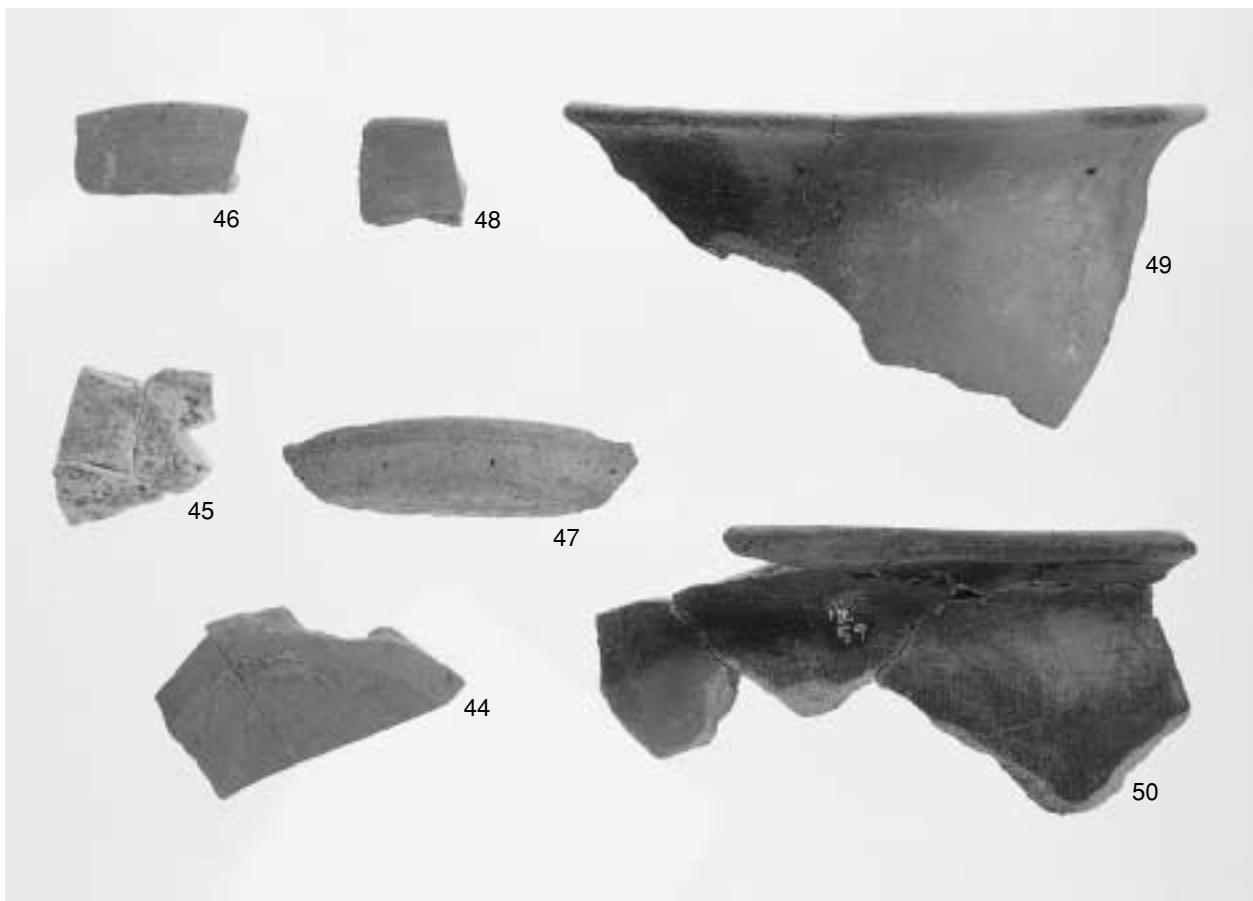


1区SK1出土土師器（内面）

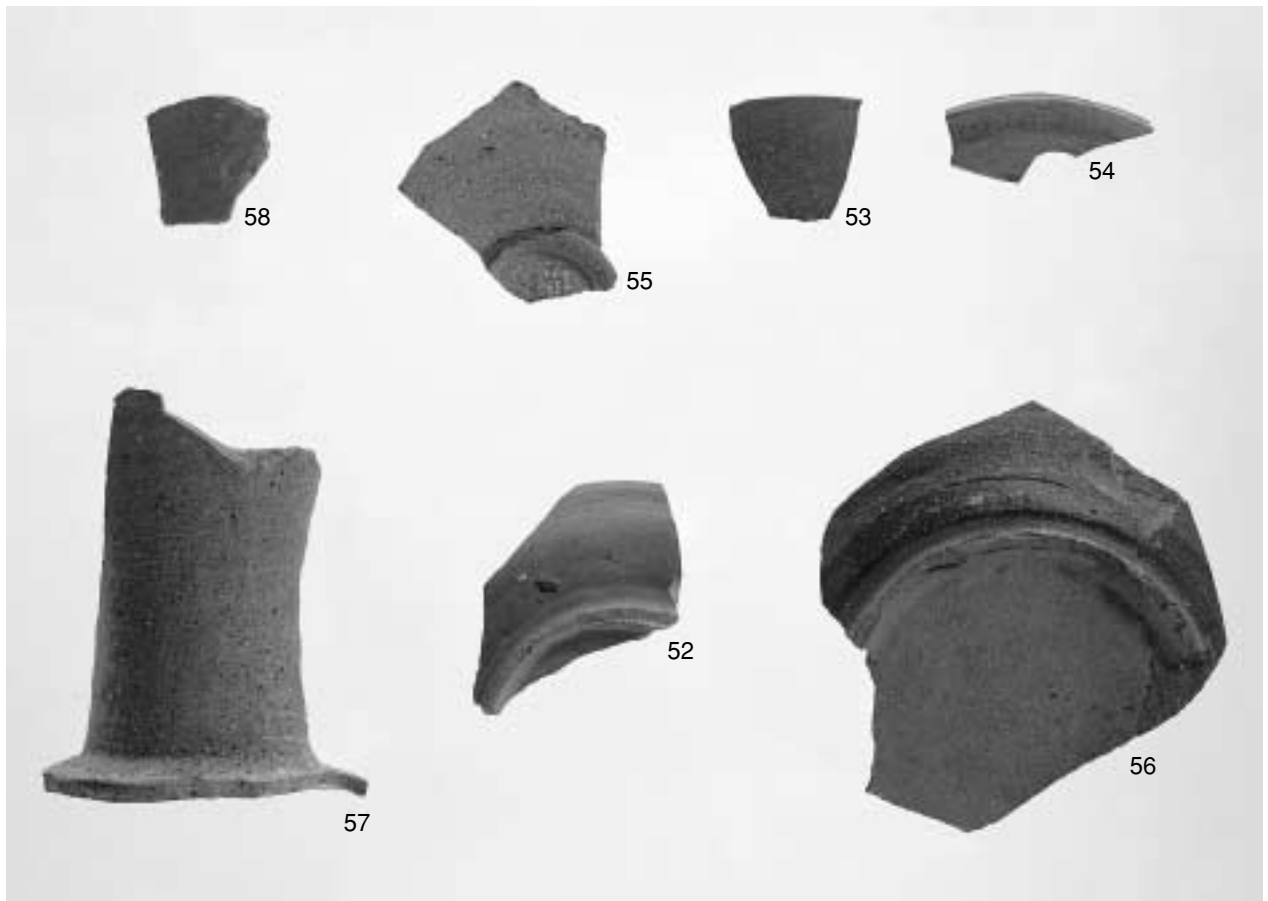
PL. 18 八幡遺跡



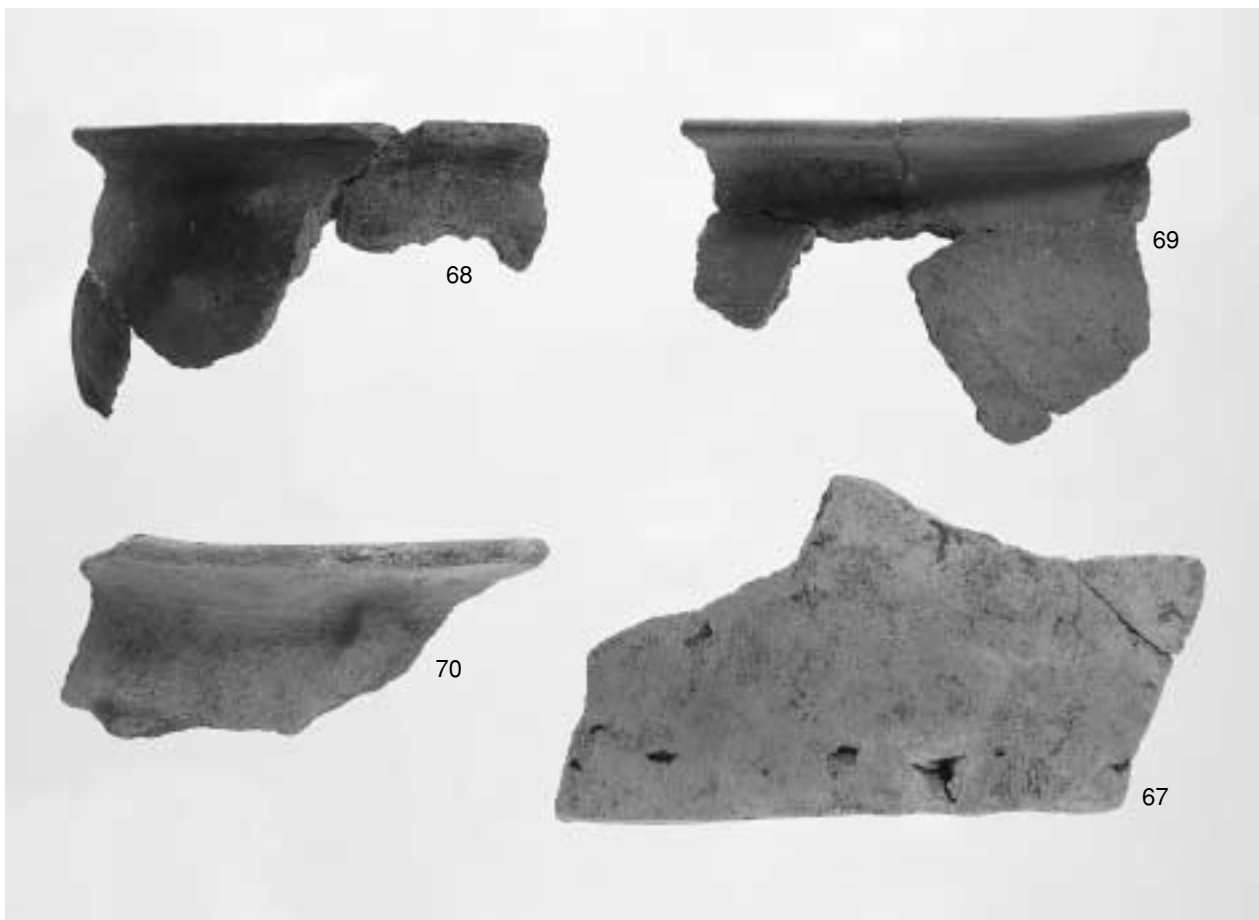
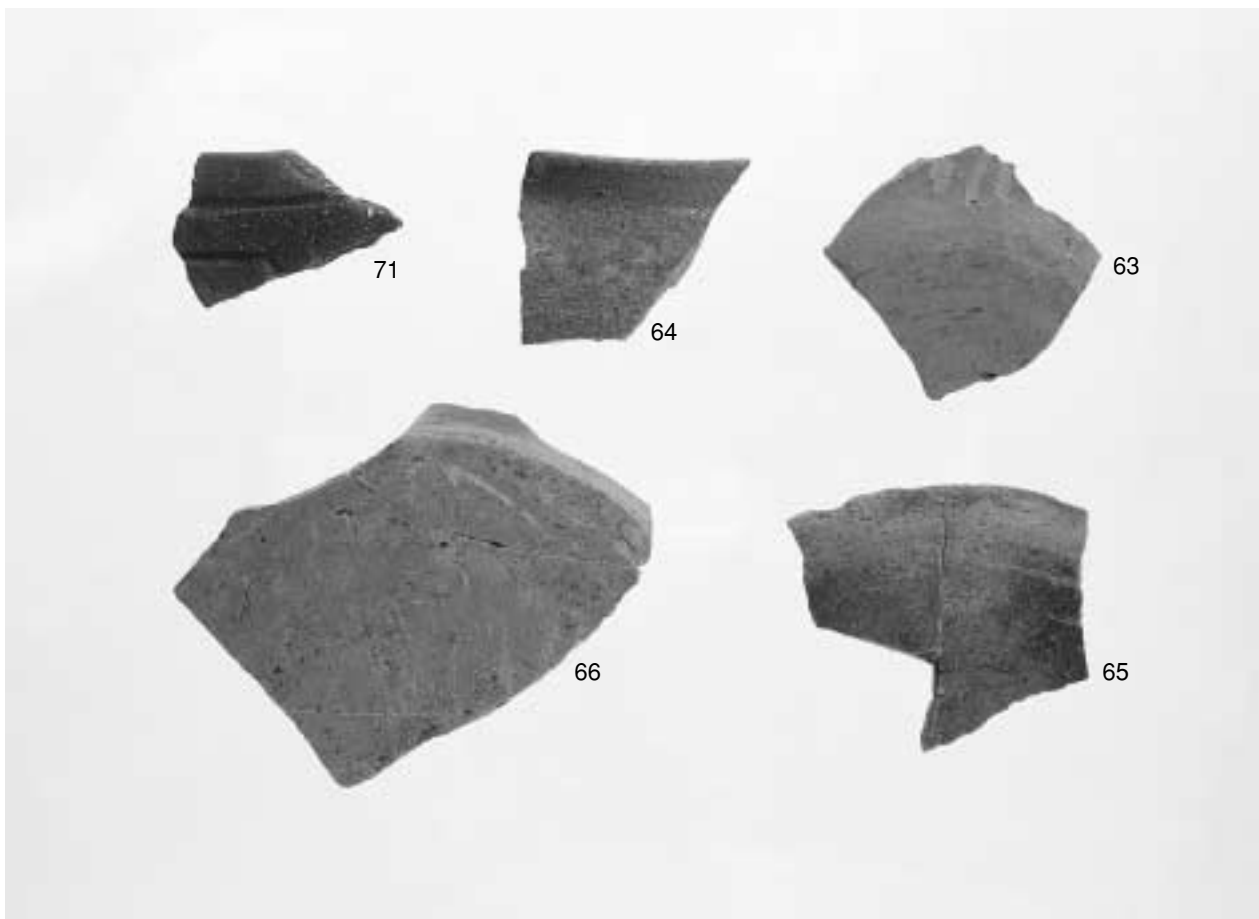
1区SK1 出土須恵器



1区SK2 出土土器



1区SK3出土土器



1区SK4出土土器



1区SK4出土土器



1区SK5出土土器

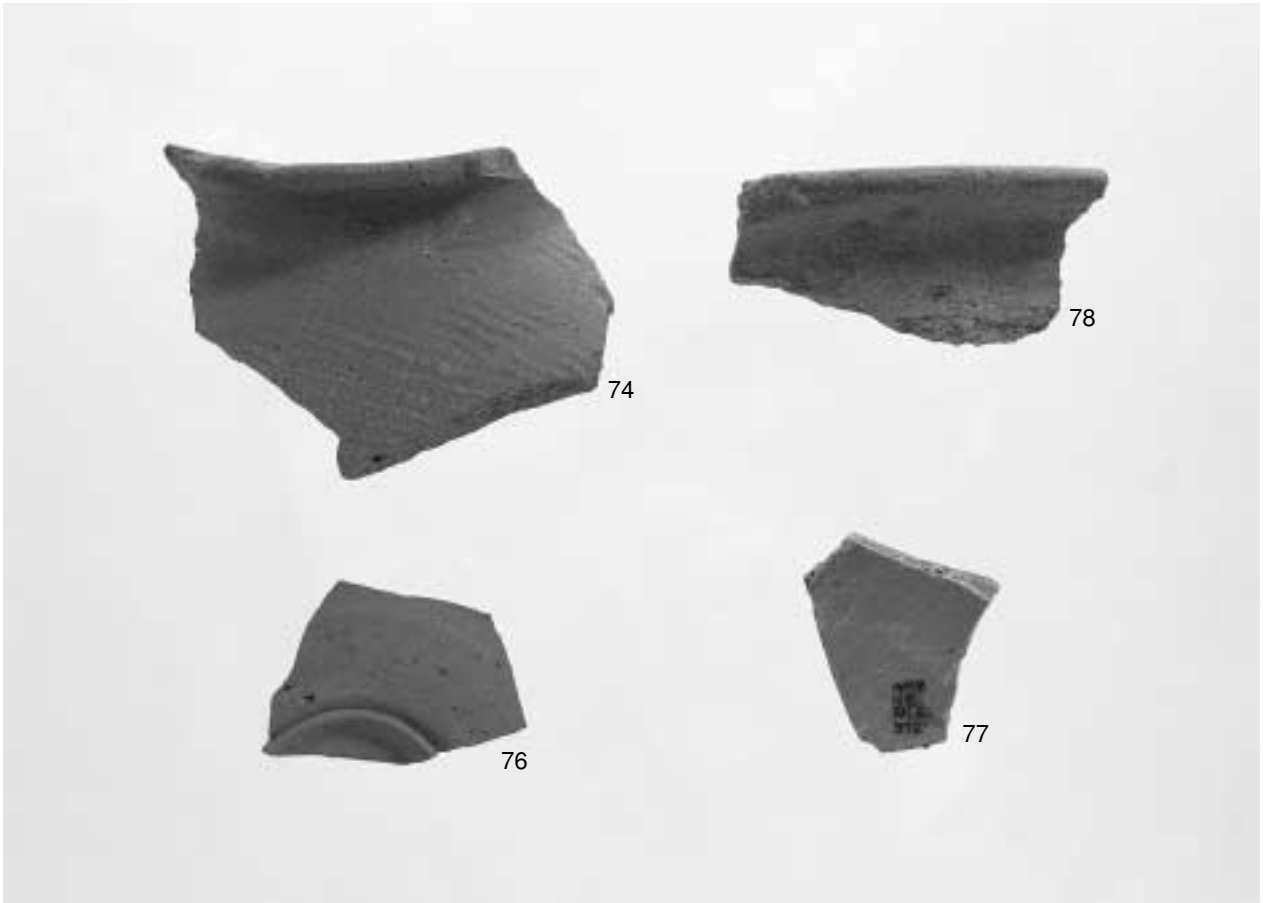


1区SK5墨書土器

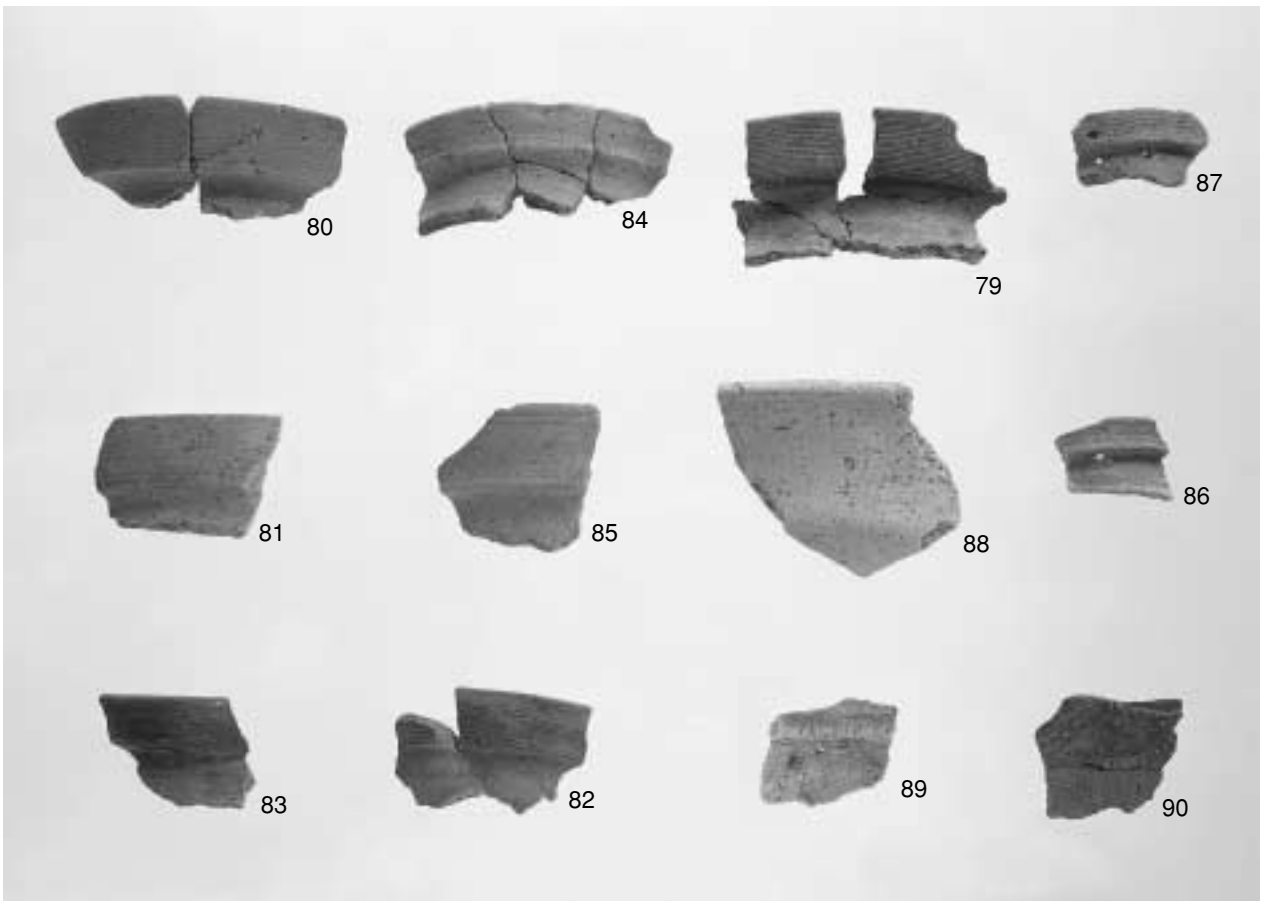


1区SK5漆付着土器

PL. 22 八幡遺跡



1区SK5~7出土土器



1区SD1出土土器



94

1区包含層出土土器



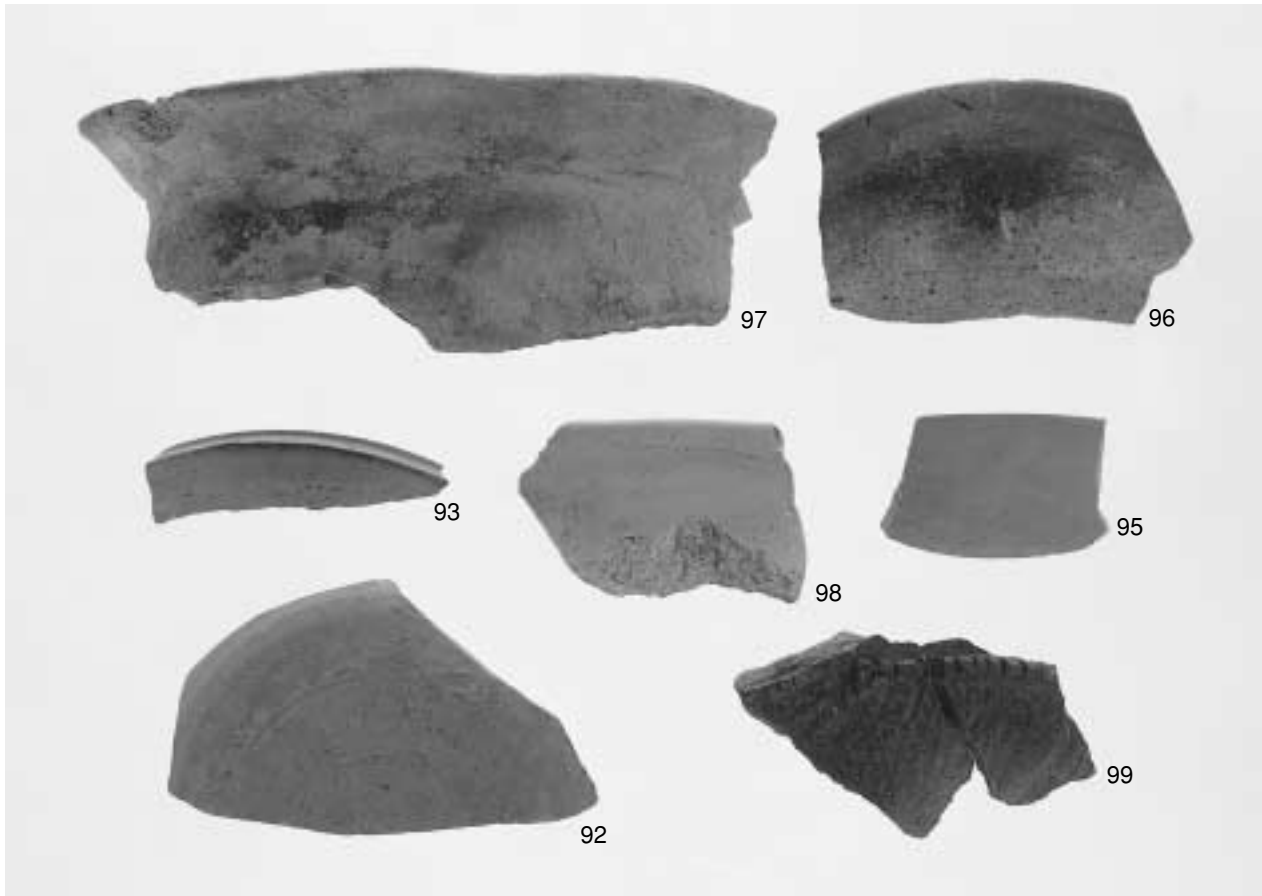
91

1区SD 3 出土土器



102

1区表土出土土器



97

96

93

95

98

99

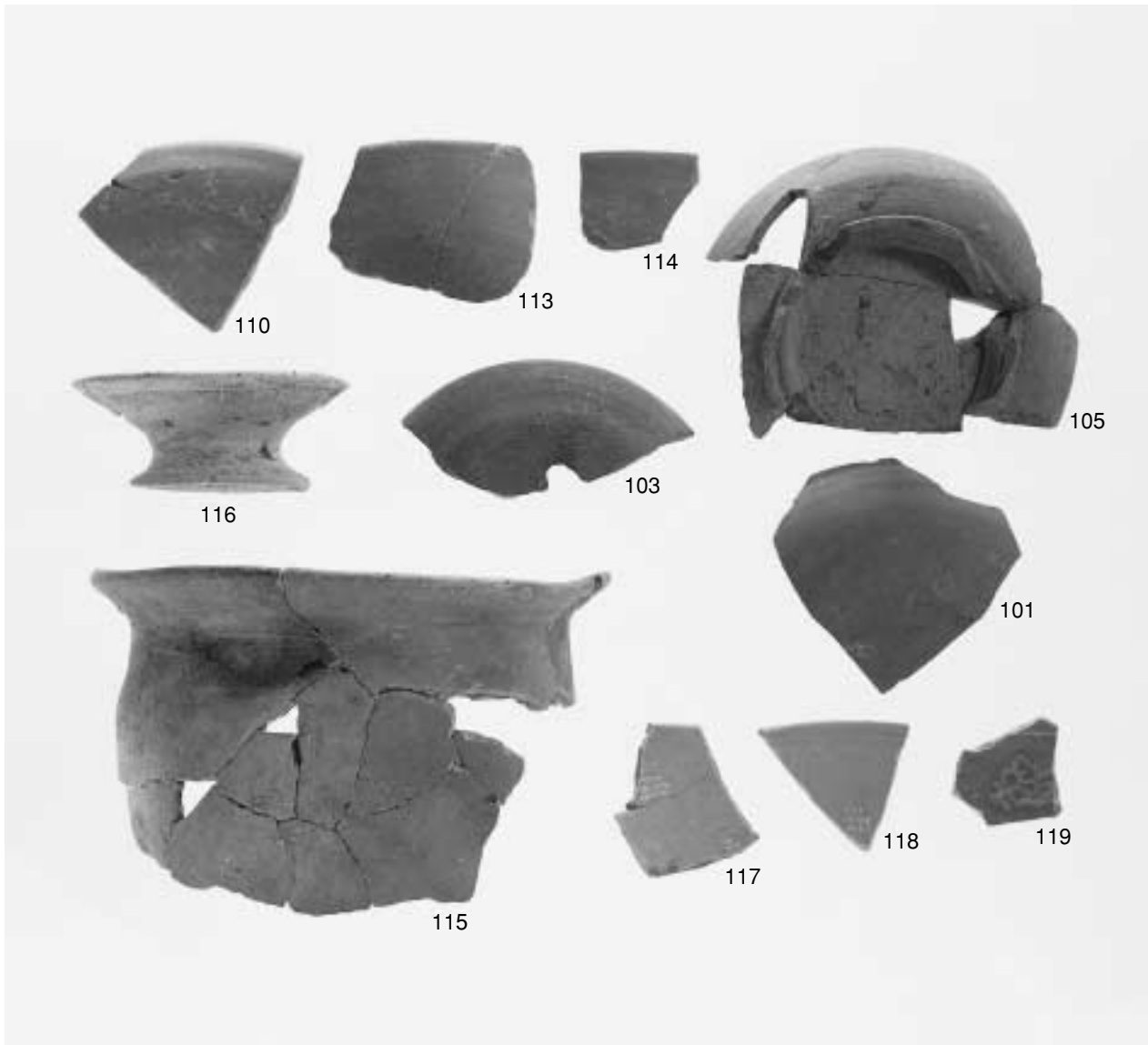
92

1区包含層出土土器

PL. 24 八幡遺跡



1区表土出土土器



1区表土出土土器

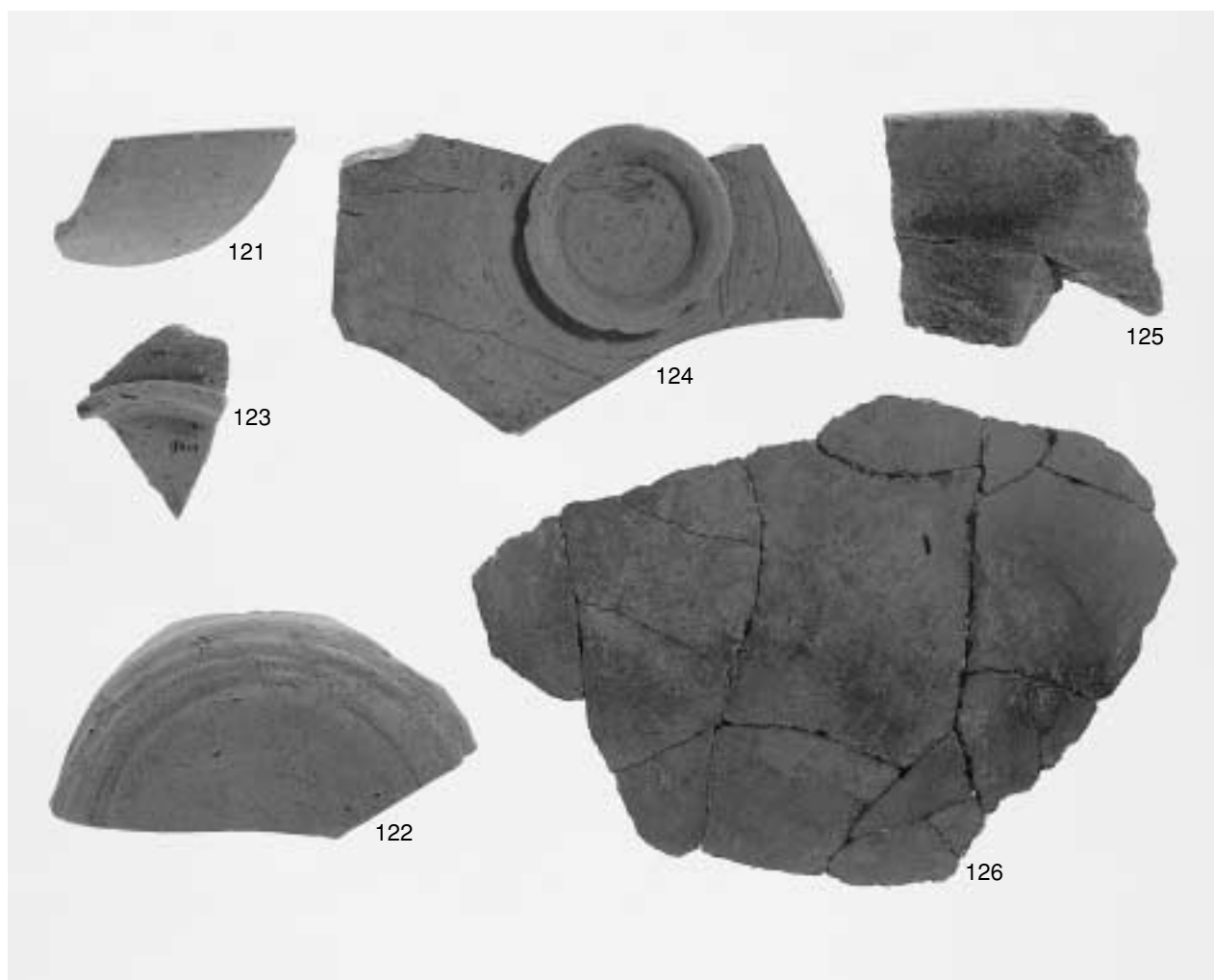
PL. 26 八幡遺跡



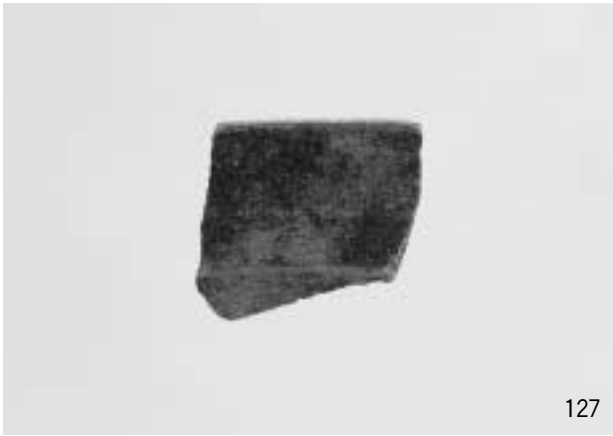
1区SI1出土砥石



拡張区SI5出土台石

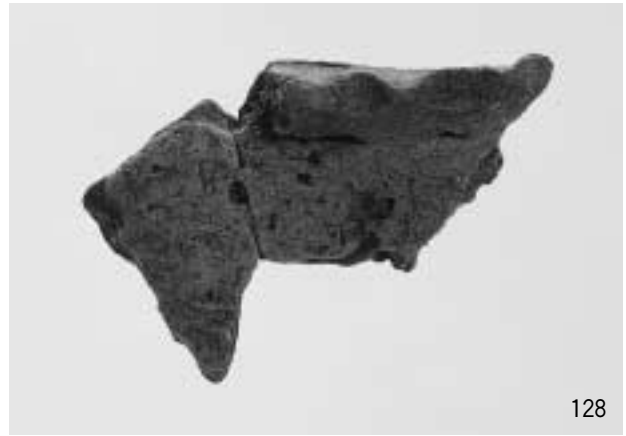


拡張区SI5出土土器



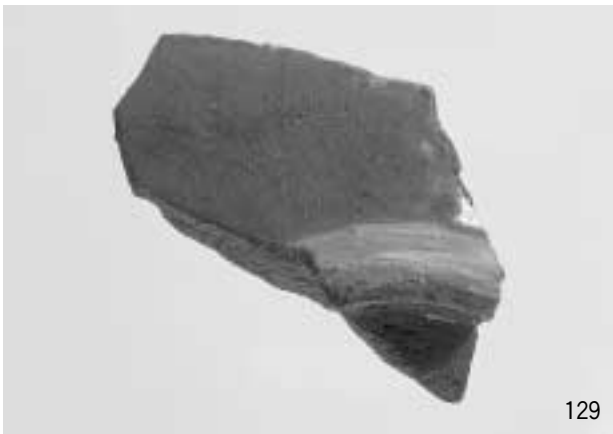
127

拡張区SD 9 出土土器



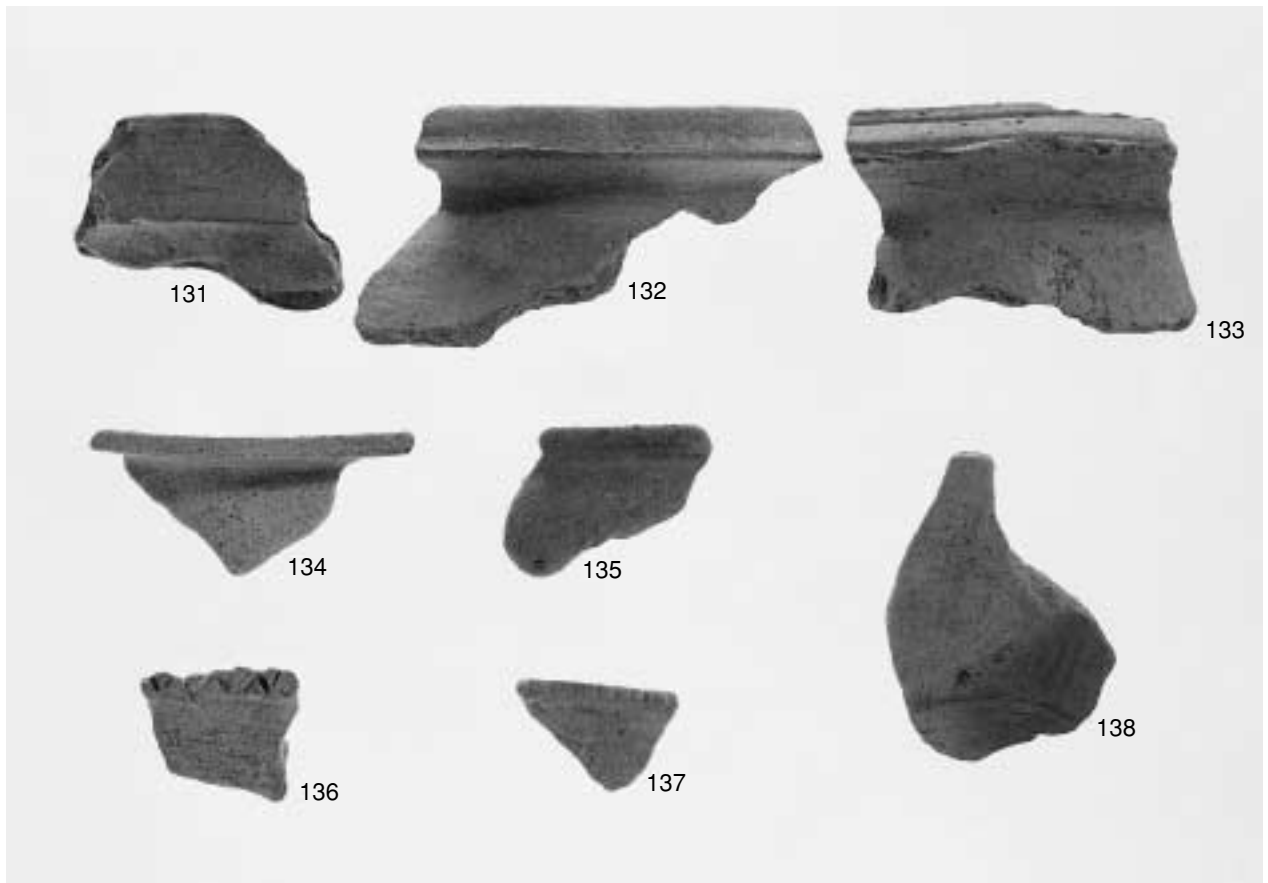
128

拡張区包含層出土土器



129

拡張区表土出土土器



131

132

133

134

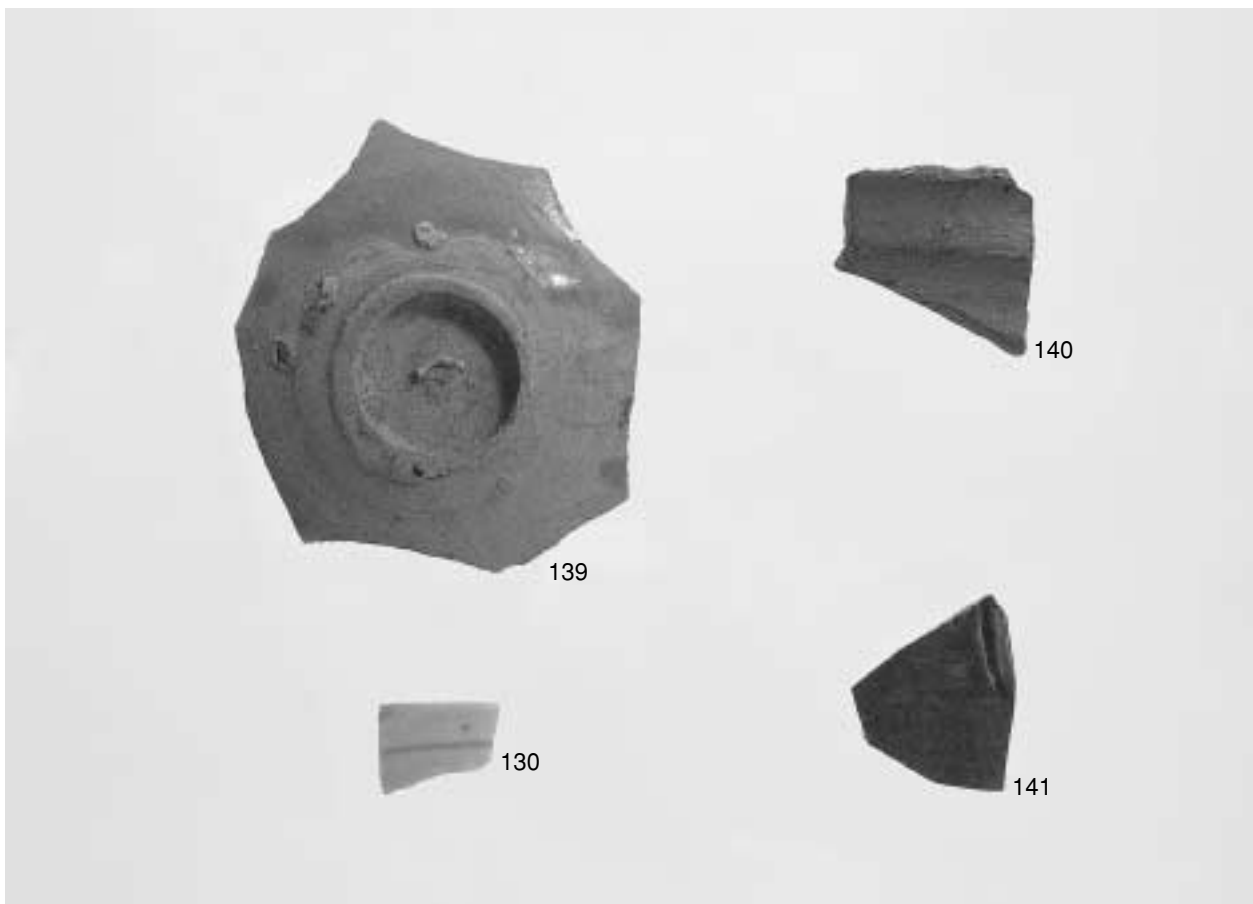
135

138

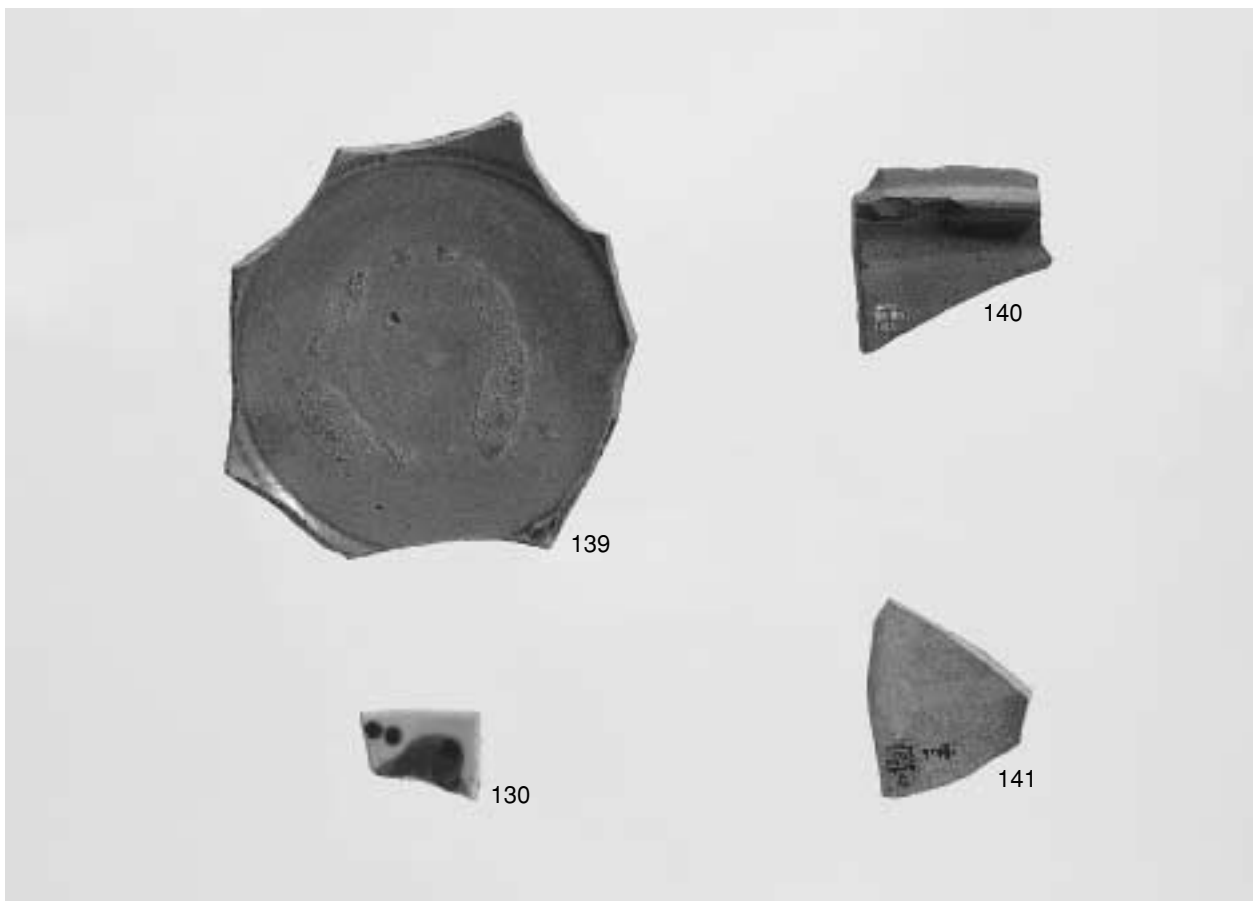
136

137

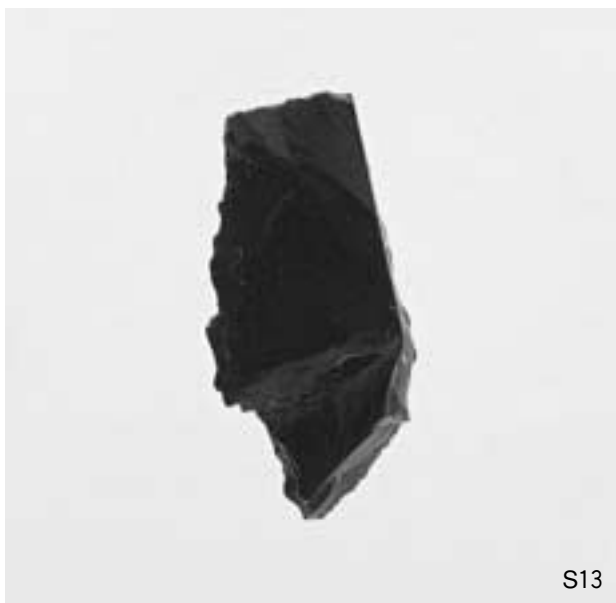
3区SD12出土土器



3区SK15・SD14出土遺物（外面）

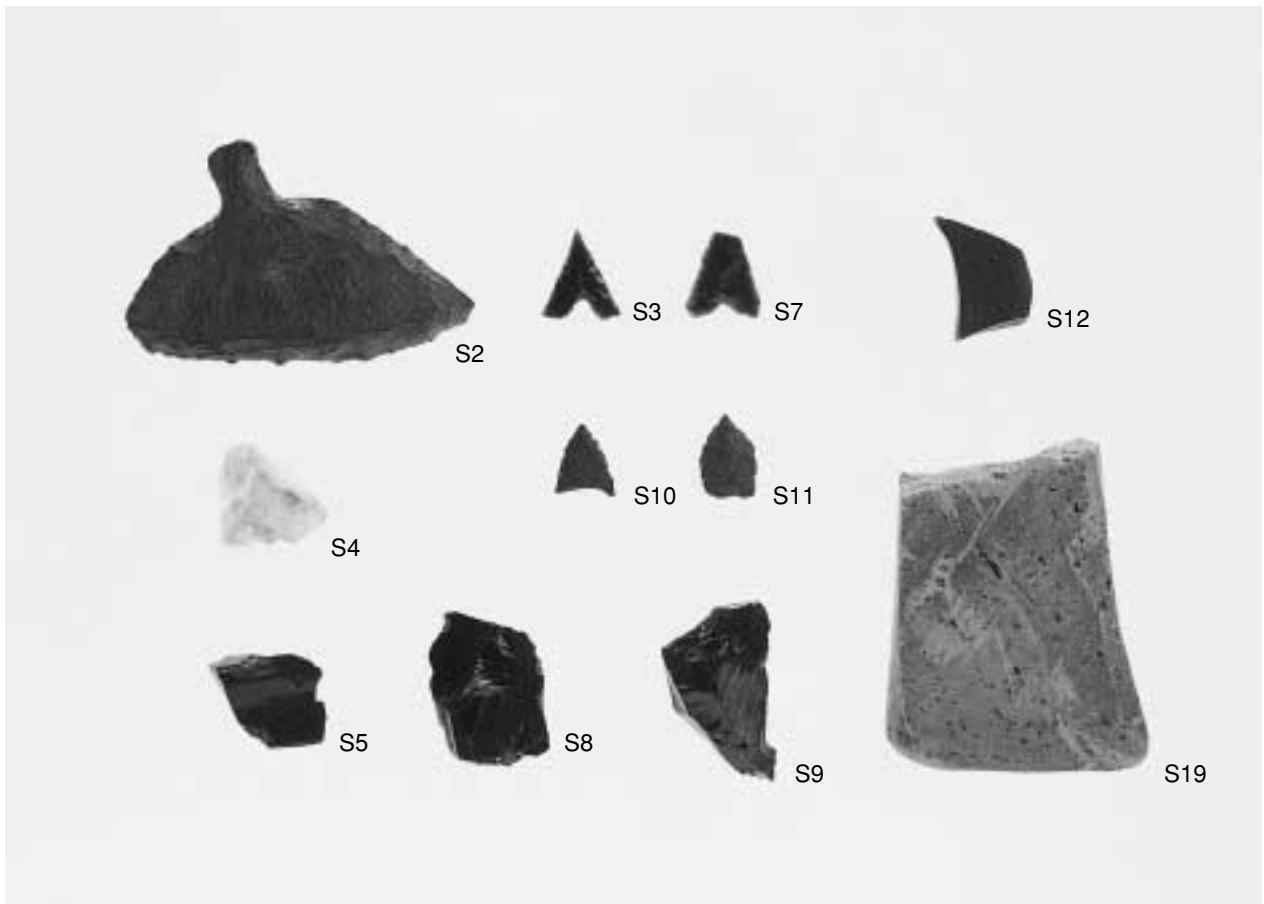


3区SK15・SD14出土遺物（内面）

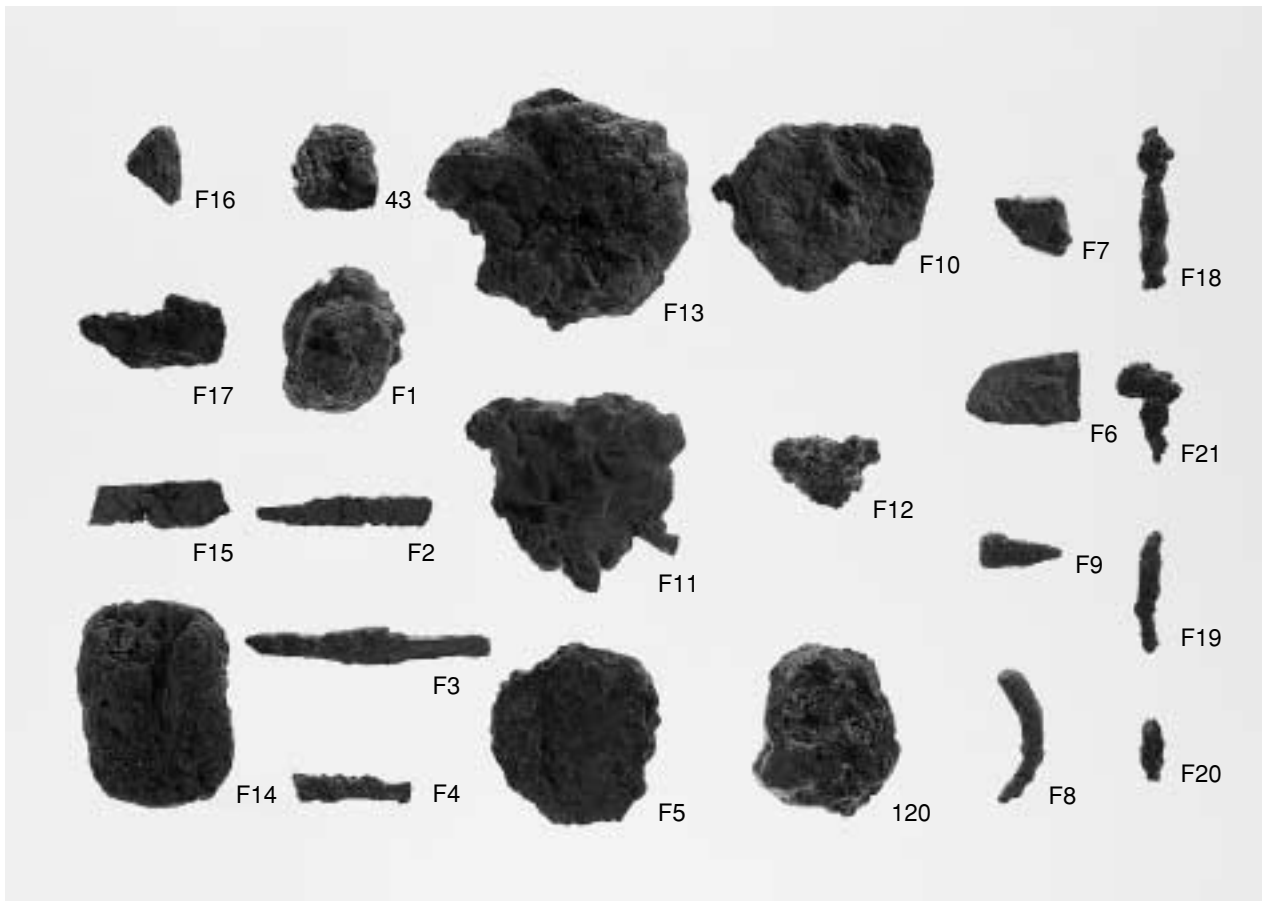


3区SD12出土碧玉

PL. 30 八幡遺跡



石器・石製品



鉄関連遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	やわたいせき							
書名	八幡遺跡							
副書名	一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XI							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	99							
編著者名	野口良也、濱本利幸、阪上志緒里							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やわたいせき 八幡遺跡	とっとりけんとうほくぐんこと 鳥取県東伯郡琴 浦町大字八幡 あざはちまんうしろぐち 字八幡ノ後口 ほか 1230-1他、 あざにしなかだ 字西仲田1217- ほか 1他、 あざおおかみうえ 字大神ノ上1202 ほか -1他、 あざきよもとだ 字清元田1149	31371	140	35°30'28"	133°37'18"	20030304 ～ 20040817	11,929m ²	一般国道9号 （東伯中山道 路）の改築
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
八幡遺跡	その他	弥生	溝状遺構	弥生土器・玉未製品				
	集落	飛鳥・奈良	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土壙 土坑	土師器・須恵器				

鳥取県教育文化財団調査報告書99

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

鳥取県東伯郡琴浦町

八 幡 遺 跡

発 行 2005年3月14日

編 集 財団法人 鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印 刷 勝美印刷株式会社